

# 京都府遺跡調査概報

第 63 冊

平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)

1 9 9 5

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。発掘調査については、『京都府遺跡調査報告書』・『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』などの各種刊行物によってその成果を公表するとともに、毎年、展覧会や埋蔵文化財セミナーを開催し、各遺跡の調査内容や出土遺物などを広く府民に紹介し、普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成5年度に実施した発掘調査のうち、京都府住宅供給公社の依頼を受けて行った、平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された京都府住宅供給公社をはじめ、京都府教育委員会、京都市埋蔵文化財調査センター、(財)京都市埋蔵文化財研究所などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理事長 福山敏男

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
平安京跡左京一条二坊十四町 (左獄・囚獄司)	京都市上京区西洞院通下 立売上ル西大路町149-1	平4.12.8～ 平5.2.19 平5.4.19～ 12.22	京都府住宅供 給公社	小池 寛

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

## 目 次

平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)発掘調査概要-----	1
1. はじめに-----	1
2. 位置と環境-----	3
3. 調査概要-----	5
4. 小結-----	97

## 挿 図 目 次

### 平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)

第1図	調査地位置図	-----	1
第2図	トレンチ配置図	-----	2
第3図	地区設定図	-----	4
第4図	南トレンチ土層断面実測図	-----	6
第5図	南トレンチ下層遺構平面実測図	-----	7
第6図	土坑170実測図	-----	9
第7図	井戸231実測図	-----	10
第8図	出土遺物実測図(1) (平安時代) 土坑170	-----	11
第9図	出土遺物実測図(2) (平安時代) 土坑170	-----	12
第10図	出土遺物実測図(3) (平安時代) 土坑170	-----	13
第11図	出土遺物実測図(4) (平安時代) 井戸231	-----	14
第12図	出土遺物実測図(5) (平安時代) 井戸231	-----	15
第13図	出土遺物実測図(6) (平安時代) 井戸231	-----	16
第14図	出土遺物実測図(7) (平安時代) 井戸231	-----	17
第15図	出土遺物実測図(8) (平安時代) 井戸231検出面直下	-----	18
第16図	出土遺物実測図(9) (平安時代) 井戸231掘形	-----	19
第17図	出土遺物実測図(10) (平安時代)	-----	20
第18図	出土遺物実測図(11) (平安時代) 土坑219	-----	21
第19図	出土遺物実測図(12) (平安時代)	-----	22
第20図	地区設定図	-----	23
第21図	出土遺物実測図(13) (平安時代) A区	-----	24
第22図	出土遺物実測図(14) (平安時代) A区	-----	25
第23図	出土遺物実測図(15) (平安時代) A区	-----	26
第24図	出土遺物実測図(16) (平安時代) A区	-----	27
第25図	出土遺物実測図(17) (平安時代) A区	-----	28
第26図	出土遺物実測図(18) (平安時代) B区	-----	31

第27図	出土遺物実測図(19) (平安時代)	33
第28図	出土遺物実測図(20) (平安時代)	34
第29図	出土遺物実測図(21) (平安時代) E区	36
第30図	出土遺物実測図(22) (平安時代) F区	37
第31図	出土瓦拓影(1) (平安時代)	39
第32図	出土瓦拓影(2) (平安時代)	40
第33図	出土瓦・鴟尾拓影 (平安時代)	41
第34図	出土瓦拓影(3) (平安時代)	42
第35図	出土銭貨・鉄製品実測図 (平安時代)	43
第36図	南トレンチ上層遺構平面実測図	45
第37図	土坑8実測図	47
第38図	出土遺物実測図(23) (安土・桃山時代) 土坑8	49
第39図	出土遺物実測図(24) (安土・桃山時代) 土坑8	50
第40図	出土遺物実測図(25) (安土・桃山時代) 土坑8	51
第41図	出土遺物実測図(26) (安土・桃山時代) 土坑8	52
第42図	出土遺物実測図(27) (安土・桃山時代) 土坑8	53
第43図	出土遺物実測図(28) (安土・桃山時代) 土坑8	54
第44図	出土遺物実測図(29) (安土・桃山時代) 土坑8	55
第45図	出土遺物実測図(30) (安土・桃山時代) 土坑8	56
第46図	出土遺物実測図(31) (安土・桃山時代) 土坑8	57
第47図	土坑42実測図	58
第48図	出土遺物実測図(32) (安土・桃山時代) 土坑42	59
第49図	出土遺物実測図(33) (安土・桃山時代) 土坑42	60
第50図	出土遺物実測図(34) (安土・桃山時代) 土坑42	61
第51図	出土遺物実測図(35) (安土・桃山時代) 土坑42	62
第52図	出土遺物実測図(36) (安土・桃山時代) 土坑42	63
第53図	出土遺物実測図(37) (安土・桃山時代) 土坑42	64
第54図	出土遺物実測図(38) (安土・桃山～江戸時代) 土坑42	65
第55図	出土遺物実測図(39) (安土・桃山時代) 土坑49	66
第56図	出土瓦拓影(4) (中世～安土・桃山時代)	68
第57図	出土瓦拓影(5) (安土・桃山時代)	69
第58図	出土瓦拓影及び実測図(安土・桃山時代)	70

第59図	男子像実測図	71
第60図	出土銭貨拓影	72
第61図	土坑75実測図	73
第62図	出土遺物実測図(40)	74
第63図	出土遺物実測図(41) (安土・桃山～江戸時代)	75
第64図	出土遺物実測図(42) (古墳～江戸時代)	76
第65図	井戸105塙拓影	77
第66図	北トレンチ西壁断面実測図	78
第67図	北トレンチ遺構平面実測図	79
第68図	漆喰遺構310実測図	82
第69図	土坑312実測図	83
第70図	井戸313実測図	84
第71図	柱穴333実測図	85
第72図	井戸338実測図	86
第73図	井戸339実測図	87
第74図	石室343実測図	88
第75図	土塀基礎布掘り360・361実測図	89
第76図	井戸374実測図	90
第77図	方形石組み土坑379実測図	91
第78図	溝400・415実測図	92
第79図	溝411実測図	93
第80図	出土遺物実測図(43) (江戸時代)	94
第81図	出土遺物実測図(44) (江戸時代)	95
第82図	出土遺物実測図(45) (江戸時代)	96
第83図	出土遺物実測図(46) (安土・桃山～江戸時代)	97
第84図	出土遺物実測図(47) (江戸時代)	98
第85図	出土遺物実測図(48) (江戸時代)	99
第86図	出土凝灰岩実測図	100
第87図	出土遺物実測図(49) (江戸時代)	101
第88図	検出遺構と町境界	104

## 付 表 目 次

### 平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)

付表 1	土坑170出土土器破片計数表-----	13
付表 2	井戸231出土土器破片計数表-----	18
付表 3	A区出土土器破片計数表-----	29
付表 4	B区出土土器破片計数表-----	32
付表 5	C区出土土器破片計数表-----	32
付表 6	D区出土土器破片計数表-----	35
付表 7	E・F区出土土器破片計数表-----	38
付表 8	出土土器・木器観察表-----	107

## 図 版 目 次

### 平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)

- 図版第1 (1)トレンチ空中写真(上方が西)  
(2)南トレンチ空中写真(安土・桃山時代)
- 図版第2 (1)南トレンチ全景(安土・桃山時代)(南から)  
(2)南トレンチ全景(安土・桃山時代)(北から)
- 図版第3 (1)南トレンチ全景(平安時代)(北西から)  
(2)南トレンチ全景(平安時代)(北東から)
- 図版第4 (1)井戸231遺物出土状況(西から) (2)井戸231遺物出土状況(西から)
- 図版第5 (1)井戸231遺物出土状況(西から) (2)井戸231遺物出土状況(西から)
- 図版第6 (1)井戸231遺物出土状況(西から) (2)井戸231完掘状況(西から)
- 図版第7 (1)土坑8完掘状況(西から) (2)土坑8完掘状況(北西から)
- 図版第8 (1)土坑8土層堆積状況(東南から) (2)土坑8漆器・椀出土状況
- 図版第9 (1)土坑108瓦出土状況(東から) (2)土坑108瓦出土状況(北から)
- 図版第10 (1)土坑39・ピット120間根石坑検出状況(北から)  
(2)ピット128完掘状況(西から)
- 図版第11 (1)南トレンチ完掘状況(北西から)  
(2)南トレンチ柱穴列検出状況(西から)
- 図版第12 (1)塙組井戸105完掘状況(西から)  
(2)安土・桃山時代遺構検出状況及び作業風景
- 図版第13 (1)北トレンチ空中写真(上方が西)  
(2)溝361・400・411・415完掘状況(上方が南)
- 図版第14 (1)漆喰遺構310北半検出状況(東から)  
(2)漆喰遺構310北半埋土堆積状況(東から)
- 図版第15 (1)漆喰遺構310完掘状況(南から) (2)漆喰遺構310完掘状況(北から)
- 図版第16 (1)柱穴333根石検出状況(北から) (2)柱穴333根石検出状況(西から)
- 図版第17 (1)井戸338・339、方形石組土坑379検出状況(東南から)  
(2)井戸338・339、方形石組土坑、土塙基礎361検出状況(北から)

- 図版第18 (1)井戸339完掘状況(西から) (2)井戸339断ち割り状況(東南から)
- 図版第19 (1)石室343完掘状況(東から) (2)石室343下段完掘状況(東から)
- 図版第20 (1)北トレンチ全景(北から)  
(2)土塀基礎360根石・土層堆積状況(北から)
- 図版第21 (1)土塀基礎360・361完掘状況(南から)  
(2)土塀基礎360・361根石検出状況
- 図版第22 (1)石室343・土塀基礎361完掘状況(北から)  
(2)土塀基礎360・361完掘状況(南から)
- 図版第23 (1)石室343・土塀基礎など空中写真 (2)井戸313完掘状況(東から)
- 図版第24 (1)井戸374完掘状況(北から) (2)井戸380検出状況(西から)
- 図版第25 (1)溝400・415検出状況(西から) (2)溝400・415完掘状況(西から)
- 図版第26 (1)溝400・411・415完掘状況(西から)  
(2)溝400・415、土塀基礎361屈曲部状況(北から)
- 図版第27 出土遺物(1)
- 図版第28 出土遺物(2)
- 図版第29 出土遺物(3)
- 図版第30 出土遺物(4)
- 図版第31 出土遺物(5)
- 図版第32 出土遺物(6)
- 図版第33 出土遺物(7)
- 図版第34 出土遺物(8)
- 図版第35 出土遺物(9)
- 図版第36 出土遺物(10)
- 図版第37 出土遺物(11)
- 図版第38 出土遺物(12)
- 図版第39 出土遺物(13)
- 図版第40 出土遺物(14)
- 図版第41 出土遺物(15)
- 図版第42 出土遺物(16)
- 図版第43 出土遺物(17)
- 図版第44 出土遺物(18)
- 図版第45 出土遺物(19)

図版第46 出土遺物(20)

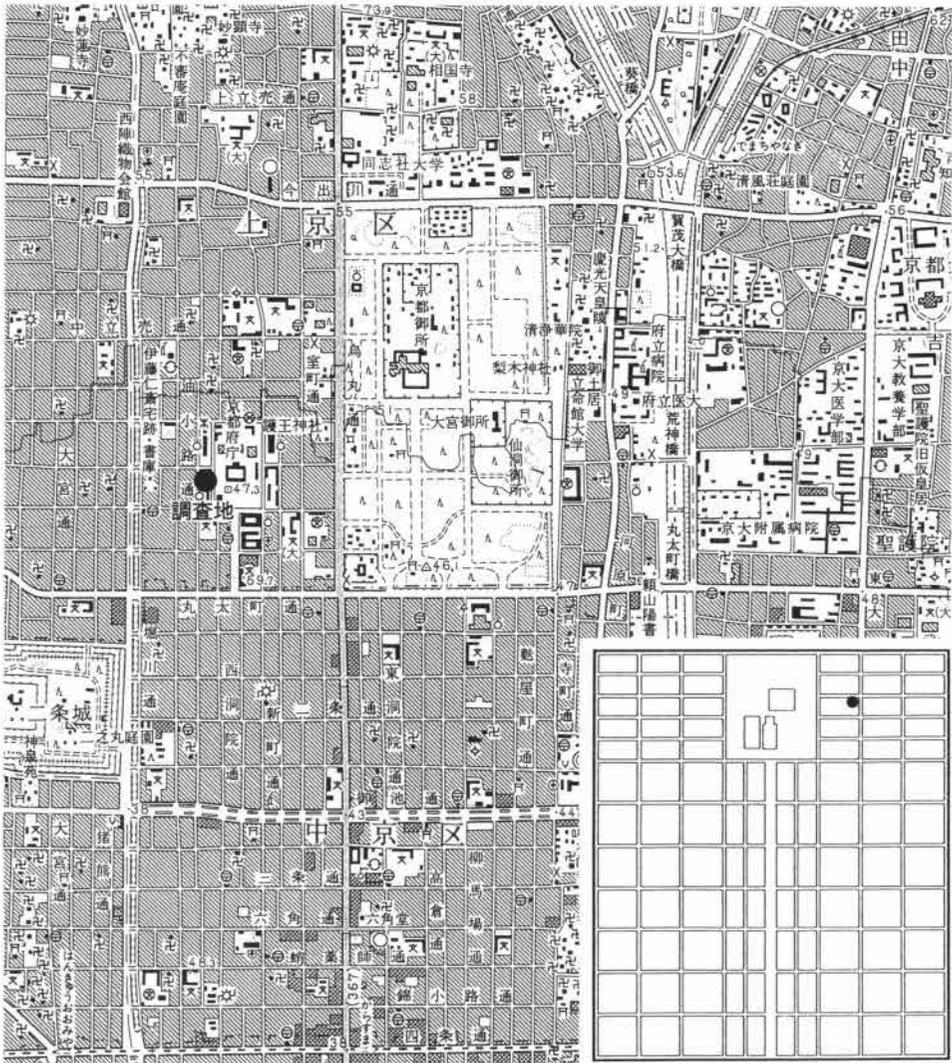
図版第47 出土遺物(21)

図版第48 出土遺物(22)

# 平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司) 発掘調査概要

## 1. はじめに

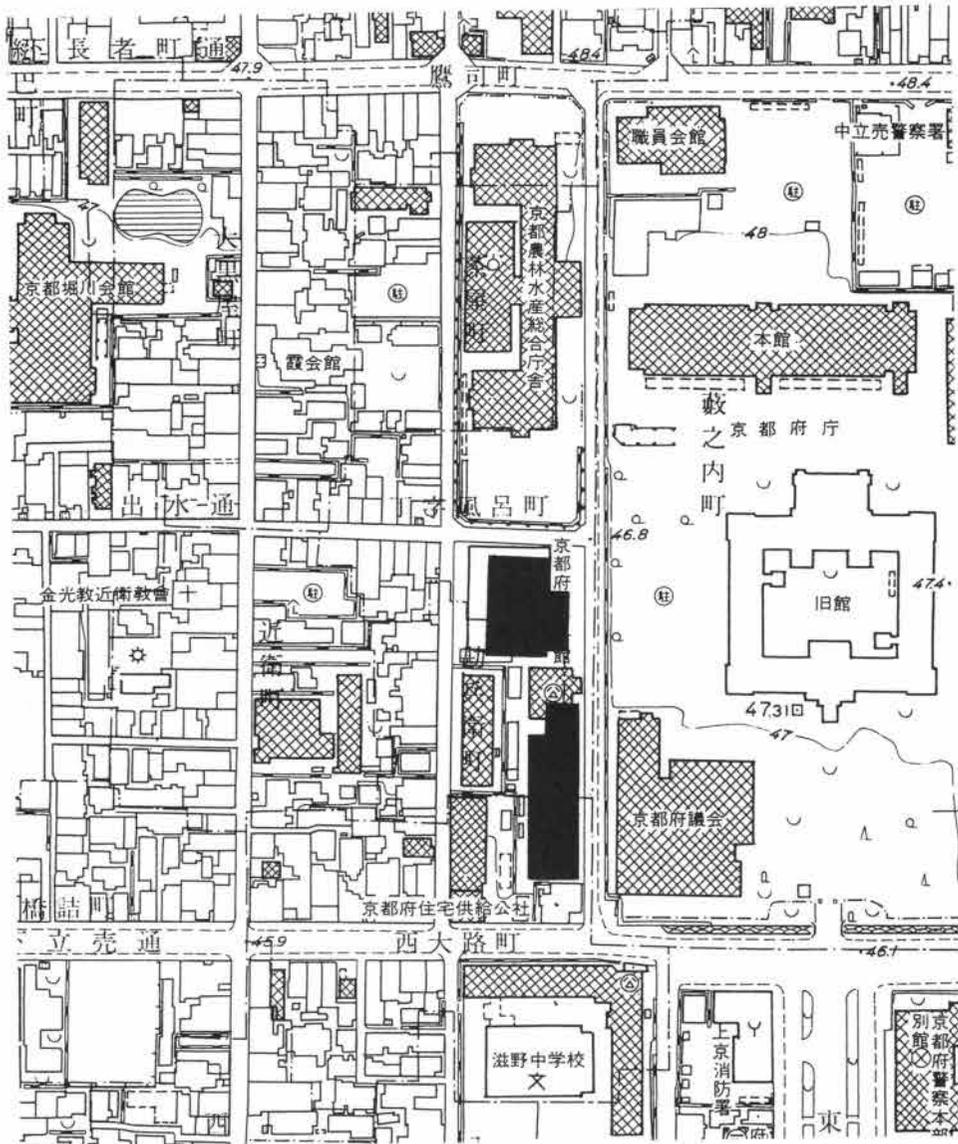
平安京跡左京一条二坊十四町の発掘調査は、京都府庁西側施設整備事業に伴って、京都



第1図 調査地位置図(1/25,000)

府住宅供給公社の依頼を受けて実施した。当該調査地は、京都市上京区西洞院通下立売上ル西大路町149の1に所在し、京都府庁の西隣接地に位置している(第1図)。

発掘調査は、平成4年12月8日から平成5年2月19日の期間に第1次調査を行った。また、平成5年4月19日から同年12月22日の間に行った第2次調査は、南トレンチを継続して掘り下げ、完掘するとともに、新たに設定した北トレンチの表土掘削と遺構検出及び掘り込み作業を行った。第2次調査・南トレンチは、平成5年4月19日から同年9月8日の期間、調査を行い、平成5年9月8日に約60名の参加者を得て現地説明会を実施した。ま



第2図 トレンチ配置図(1/2,500)

た、北トレンチは、平成5年9月9日から同年12月22日の期間、調査を行い、平成5年11月26日に約30名の参加者を得て、現地説明会を実施した。これらの現地調査を終了後、平成6年4月1日から平成7年3月31日の期間、遺物洗浄、出土地注記、接合・復原、実測・トレースなどの遺物整理と遺構実測図などの調整を行った。なお、調査地の基準点測量は、(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

発掘調査は、第1次調査を調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員三好博喜・八木政明が担当し、第2次調査は、同係長奥村清一郎、同調査員小池 寛が担当した。また、平成6年度の整理作業は、小池が担当し、本概要の執筆・編集は、小池が行った。現地調査には、厳冬・酷暑の中、多くの方々の参加を得た。また、実測・復原・平安時代出土土器の統計処理などの整理作業は、小池を中心に行ったが、遺構・遺物のトレースは、主に小池・小滝初代が担当し、観察表は、小滝初代・森川敦子が作成した。なお、遺物写真撮影は、当調査研究センター調査員田中 彰が担当した。

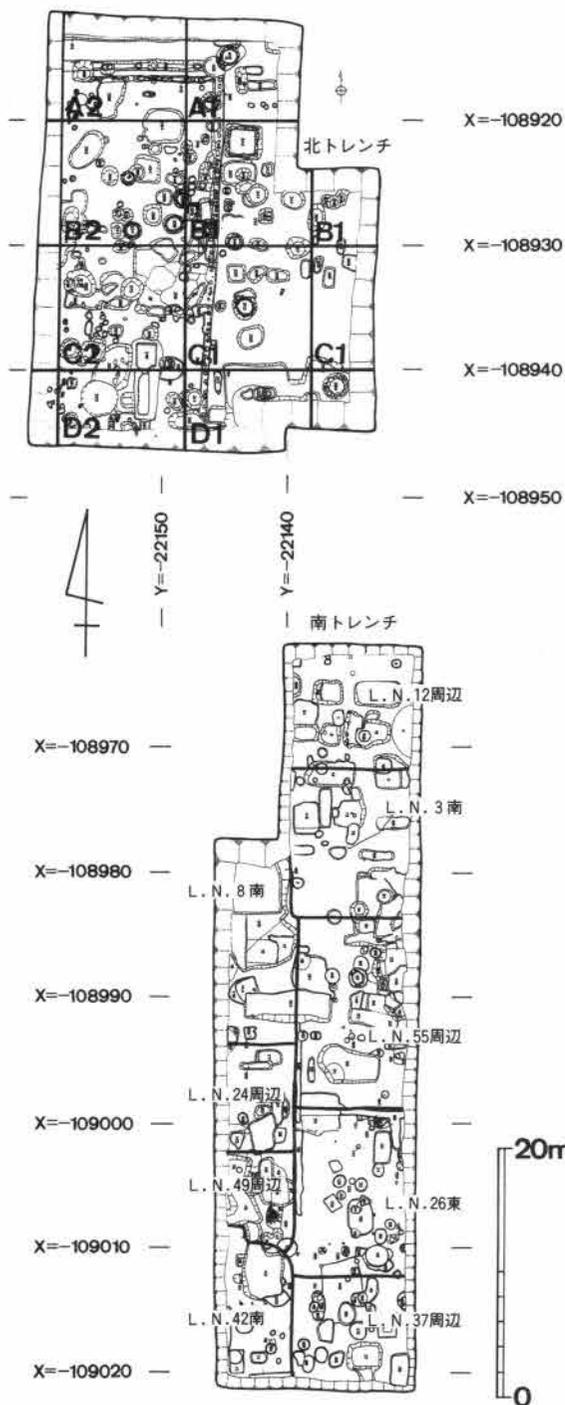
当該遺跡の調査に係わる経費は、全額、京都府住宅供給公社が負担した。

## 2. 位置と環境

当該地は、平安京の条坊では、左京一条二坊十四町の東端に位置し、南トレンチには、近衛大路(現・出水通)の南側溝が推定されている(第2図)。また、当該地東方には、近世に敷設された西洞院通が隣接しており、平安時代の西洞院通とトレンチ東端の距離は、約31mを測る。周辺地域における平安時代の考古学的調査は、京都府庁舎建設時の調査で、11～12世紀に比定できる西洞院通側溝が確認されている。しかし、建物跡などは検出されておらず、実態は必ずしも明確ではない。

左京一条二坊十四町には、『大内裏圖考證』では、東獄・囚獄司が推定されており、今回の南北トレンチで関連する施設の検出が予想されていたところである。事実報告で後述するように9世紀前半～後半を中心とする遺構・遺物を検出し、これらが東獄・囚獄司と関連する可能性が指摘できる。

一方、安土・桃山時代には、北トレンチから近衛大路を挟んだ北隣接地に京の豪商で著名な茶屋四郎次郎邸が所在し、周辺一帯に関連する施設が存在したことが推定されている。この推定地を(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施しており、当該時期の陶磁器類の出土が確認されている。今回の南トレンチでは、土坑8から同時期の陶磁器類が出土している。この土坑は、一辺4m以上を測る方形を呈しており、一般的な町家の規模から考えると、かなり広範囲の敷地を有した邸宅の存在を示唆している。また、中国製男子像1040(俑)や華南三彩盤996の出土は、それらの広域な邸宅の性格を考える上で重要である。



第3図 地区設定図

なお、府庁舎建設時の調査では、西洞院大路を検出しており、近世の町制を把握する上で重要な発見である。

江戸時代には、当該地を中心とする範囲に「宝林寺」が所在していたことが、寛保元年の古地図により知られている。また、北トレンチで検出した土堀基礎布掘り360・361は、寺域を画する施設であった可能性がある。一方、江戸時代後半には、毛利藩邸が所在したことがわかっており、後述するように何らかの関連を示唆する遺構・遺物の検出が見られた。

以上の歴史的環境の中で各検出遺構を理解しなければいけないが、南北トレンチが位置する地形は、北トレンチ北端の地山の標高は45mを測り、南トレンチ南端での地山の標高は43.5mを測る。その高差は1.5mである。基本的にはゆるやかに南方へ傾斜する地形を呈しているが、南トレンチX--108,990mライン付近で階段状の段差(傾斜変換線)があり、南方へ急激に傾斜している。後述する平安時代の遺物包含層は、傾斜変換線以南に堆積していることが理解できた。一般的に京都市内の

地形は、従前から階段状に傾斜することが知られているが、この傾斜変換線を検出できたことは、周辺の地理的環境を考える上で、貴重な発見である。

### 3. 調査概要

#### 南トレンチ

南トレンチは、南北が $X=-109,022\text{m}$ から $X=-108,964\text{m}$ で、その距離は58mを測り、東西は、 $Y=-22,146\text{m}$ から $Y=-22,130\text{m}$ で、16mを測る。遺構面までの深さが2mを越えるところもあり、 $900\text{m}^2$ の面積を測る。

#### (1)基本層序

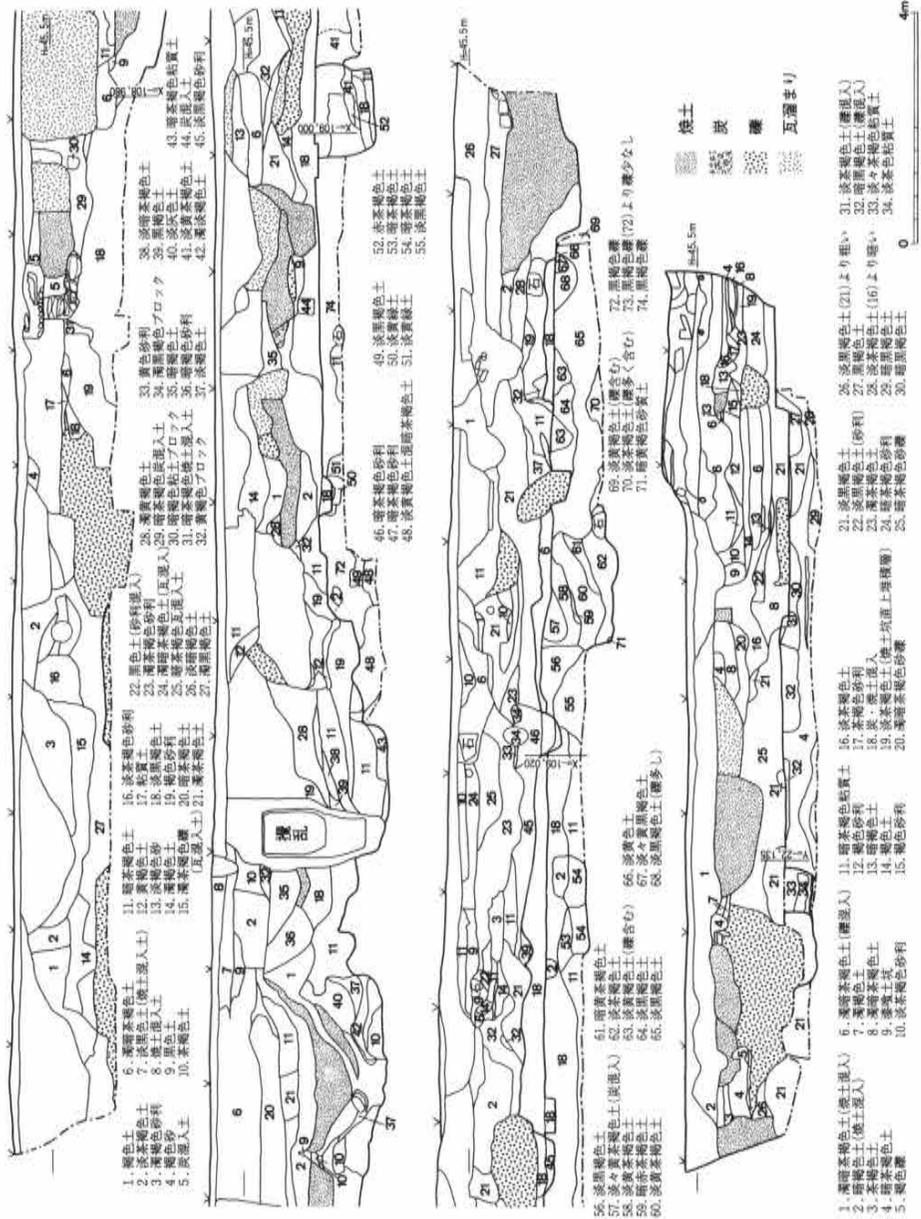
南トレンチの基本層序は極めて複雑であり、トレンチ北端と南端では、近世以後の堆積状況が著しく異なっている。トレンチ南壁では、40~50cmの盛り土が堆積しており、その下層に焼土層・炭層・礫砂・瓦を埋土の主体とする土坑が広い範囲で見られる。各土坑は、切り合い関係があり、一時期に掘り込まれたものではないことが確認できるが、土坑内出土遺物から、幕末に掘り込まれたと考えてよい状況にある。一方、その幕末の土坑群が掘り込まれた第25層(暗茶褐色砂礫土)は、南壁断面中央部に80mの厚さで、5m以上の範囲内に堆積しており、江戸時代全般の基層となっている。第25層内からは、後述する安土・桃山時代の土坑出土陶磁器類と同時期の陶磁器類を含んでおり、その堆積時期を安土・桃山時代末期を前後する時期に比定できる。なお、南壁西方の堆積状況は、約20cmの厚みで第6層(暗茶褐色土)・第12層(褐色砂利)・第14層(褐色土)・第21層(淡黒褐色土)が互層に堆積しており、幾多に及ぶ整地が行われたことを示唆している。一方、表土下2mでは、暗茶褐色土を主体とする平安時代の遺物包含層を検出しており、基本的に40cm程度の厚みを測り、ほぼ水平に堆積している。

南トレンチ東壁は、南北が約60mと長く、堆積状況が各所で異なっている。北端から12mの範囲では、遺物を含まない淡黄褐色礫の地山を地表下1.6mで確認しており、地山を基層として、焼土・炭・礫・瓦を主体とする土坑が掘り込まれている。これらは、トレンチ南壁で検出した幕末の土坑群と同一の性格を有していると考えられる。江戸時代に比定できる堆積層は、幾多の土坑群が複雑に掘り込まれており、同時期の整地層も検出している。

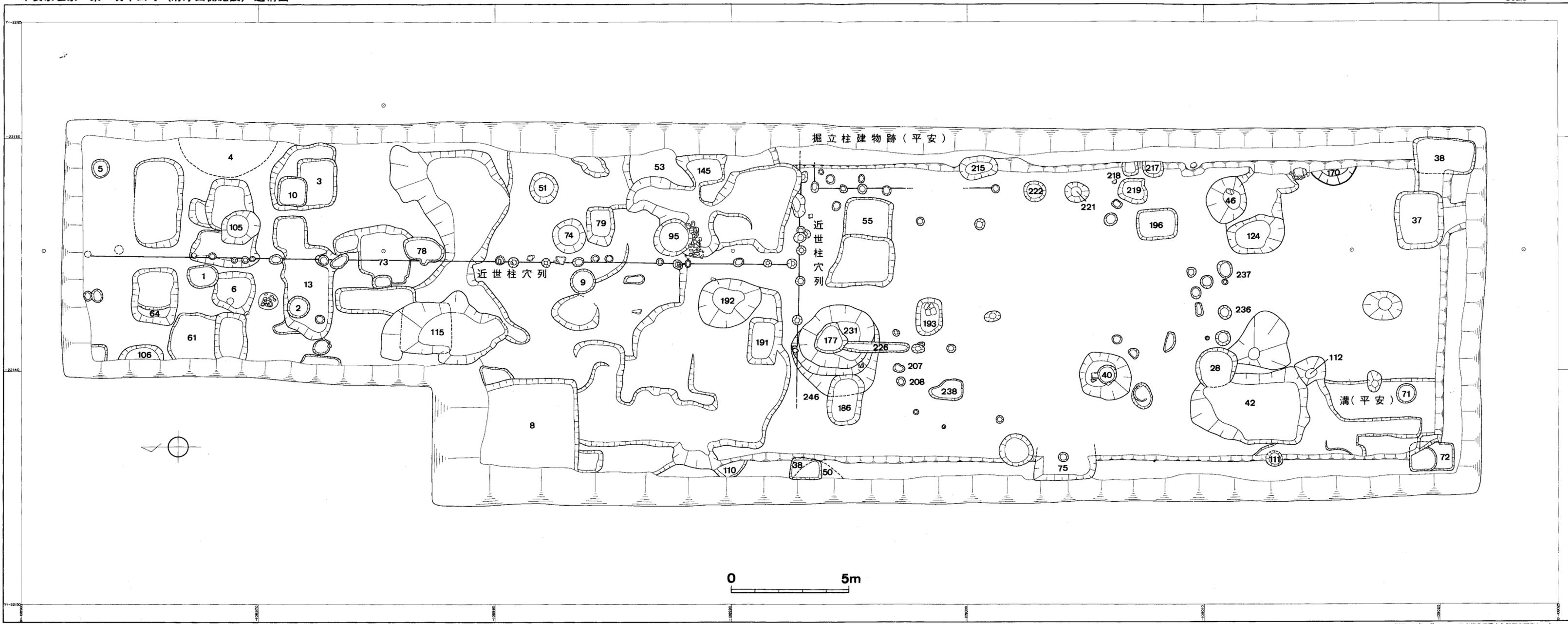
一方、東壁の北端から21mの地点には、炭や焼土を埋土の主体とする土坑が位置し、その土坑以南に地山の高まりが確認できた。この高まりを境に、 $X=-108,990\text{m}$ 以南で、厚み40cmの平安時代の遺物包含層を検出した。この包含層は、淡黒褐色土を主体としており、比較的均一な広がり認められる。

以上のように、地山直上に平安時代の遺物包含層が堆積し、それ以後、安土・桃山時代

から江戸時代にかけての堆積状況が把握できた。堆積状況は、極めて複雑であり、各時代の生活面は認識できなかったが、最下層の平安時代の遺物包含層は、地表下2m前後で最上面を検出しており、比較的安定していることがわかった。包含層内からは、土器・瓦が多く出土しており、平安時代の遺構は、この包含層の上層で検出した。遺物は、第20図に示したA地区が最も多く出土している。



第4図 南トレンチ土層断面実測図(上3段:東壁、下段:南壁)



第5図 南トレンチ下層遺構平面実測図

(2)平安時代の遺構・遺物

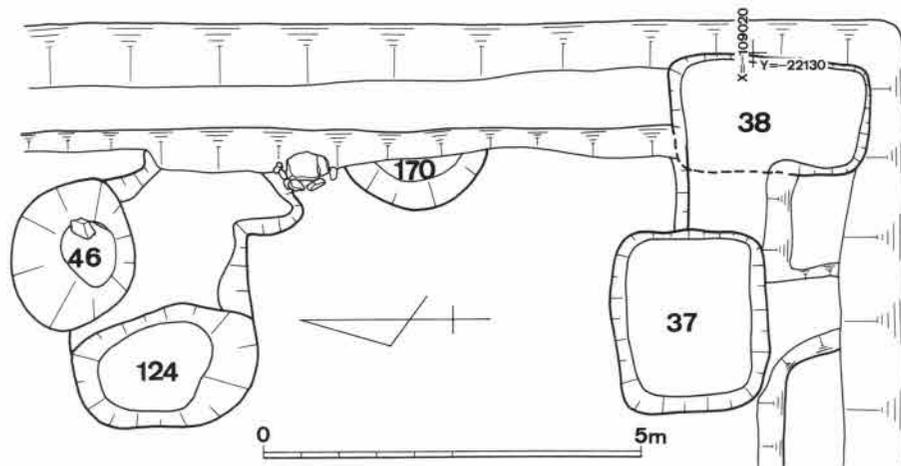
**遺構** 平安時代に比定できる遺構は、トレンチ南東で確認した土坑170、トレンチ中央部で確認した井戸231、井戸231より東方7mのところ確認した掘立柱建物跡や土坑群、トレンチ南西端で検出した溝などである。

**土坑170(第6図)** 土坑の大半は、トレンチ外になるため全容については、不明な点が多い。現状で確認しうる直径は2mを測り、円形を呈している。深さは30cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。坑内から土師器・須恵器・土馬などが出土している。

**掘立柱建物跡(第5図)** トレンチ中央部東端で検出したが、土坑170同様、建物跡の大半は、トレンチ外にのびている。周辺では、後述する近世柵列群が位置しており、柱穴埋土の違いから、掘立柱建物跡周辺に後世の削平をまぬがれた柱穴群が存在している。建物跡を構成する柱穴の直径は約30cmで、深さは20～28cm前後である。柱間距離は1.2mを測り、建物主軸線は真北と一致している。

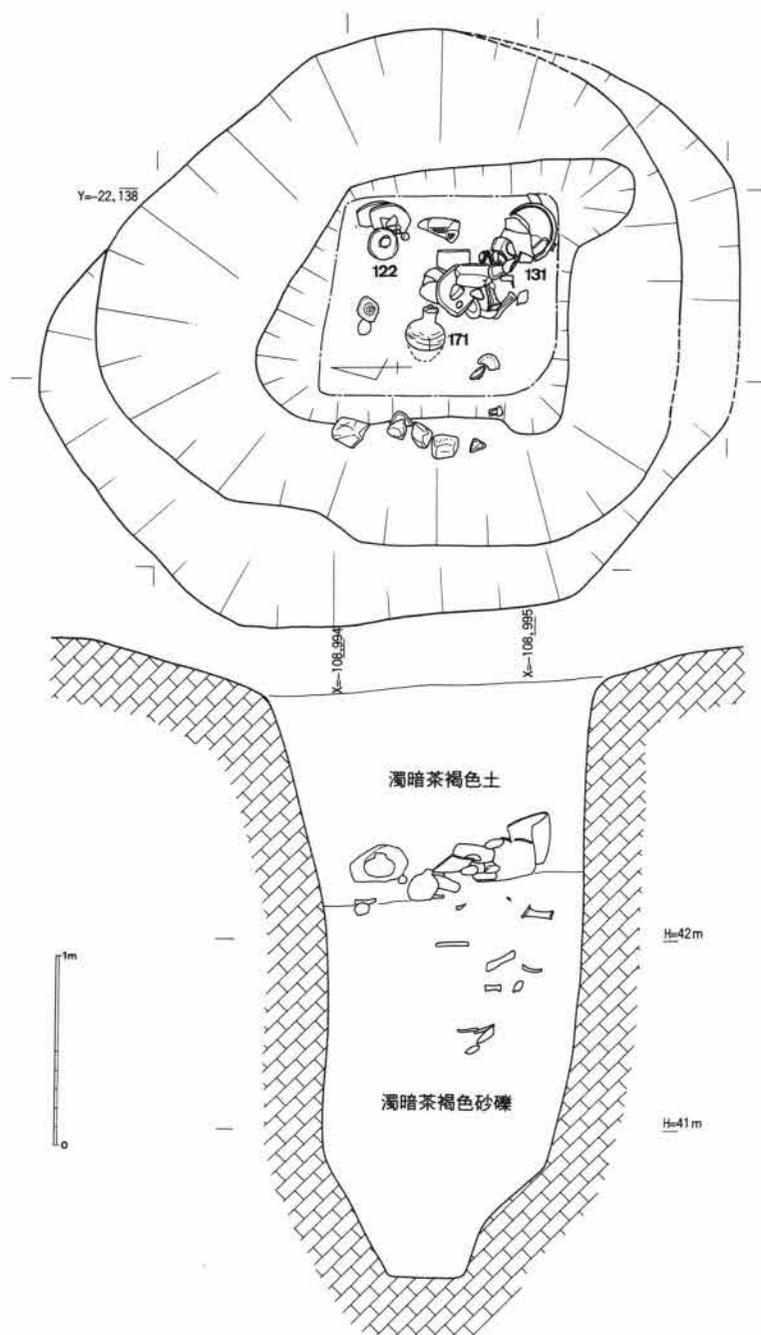
**溝(第5図)** 安土・桃山時代の土坑42によって大半が消失し、以北では完全に削平を受け、残存率は著しく悪いが、幅3mを測り、溝中央部で30～40cmの深さを測る。埋土は、淡黒褐色土で、わずかではあるが、土師器・須恵器を検出した。

**井戸231(第7図)** 井戸の掘形は、2段に掘られており、外輪線は3.6m×3.0mを測り、内輪線は3.0m×2.7mを測る。最深部では3mを測る。井戸底部中央は、1m×0.4mの長方形に深く掘り込んだ部分があり、深さ2.6m部分で計測すると一辺1.2mの方形の井戸枠があったことが想定される。基本的に井戸枠は抜き取られており、最下層でも一括土器群は検出されなかったが、深さ0.7～2mの間に大半の遺物が出土している。なお、部分的に掘形の埋土が残存しているところがあり、井戸最深部出土灰釉陶器と接合関係をもつ



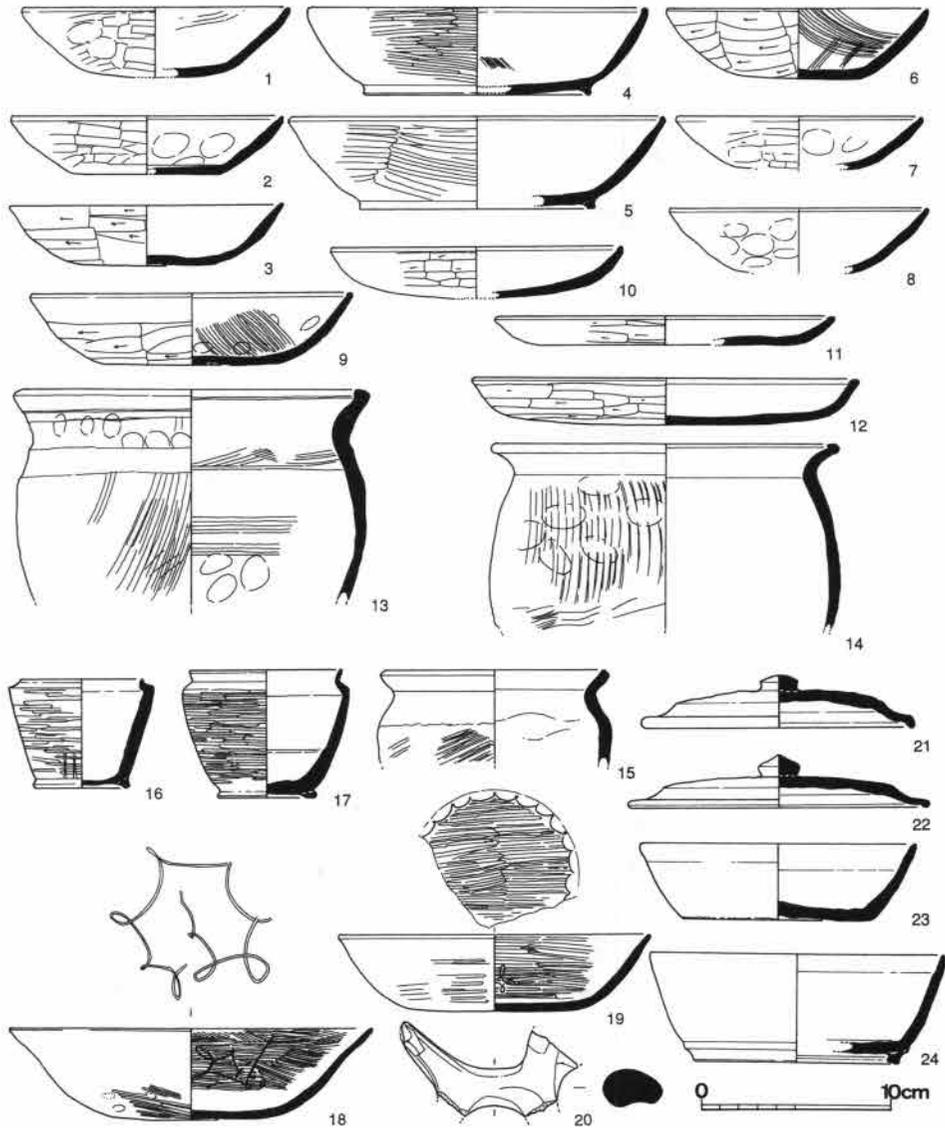
第6図 土坑170実測図

資料も見られる。出土遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・無釉陶器などがあり、二面硯・黒色土器・円面硯などの遺物は注目できる。

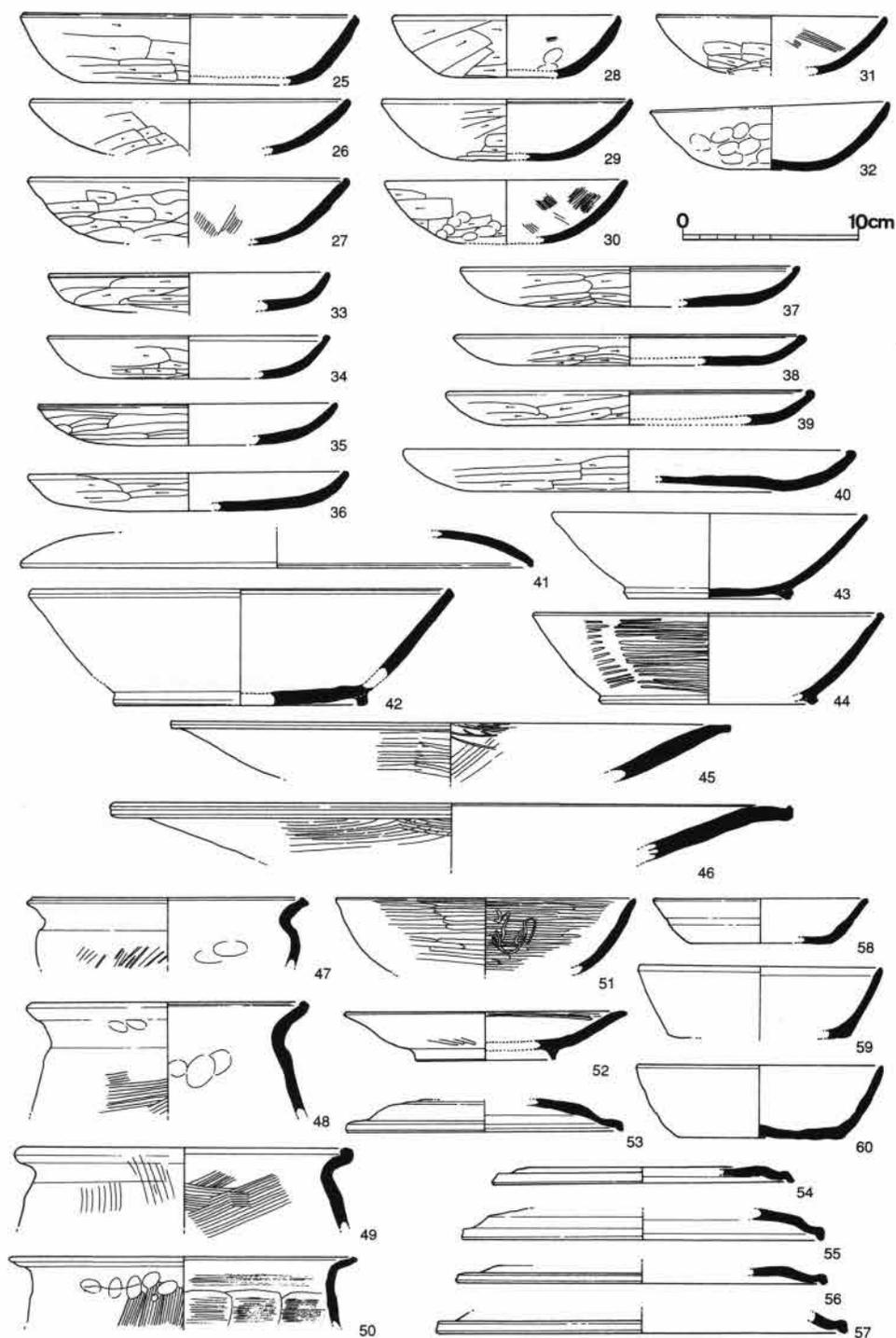


第7図 井戸231実測図

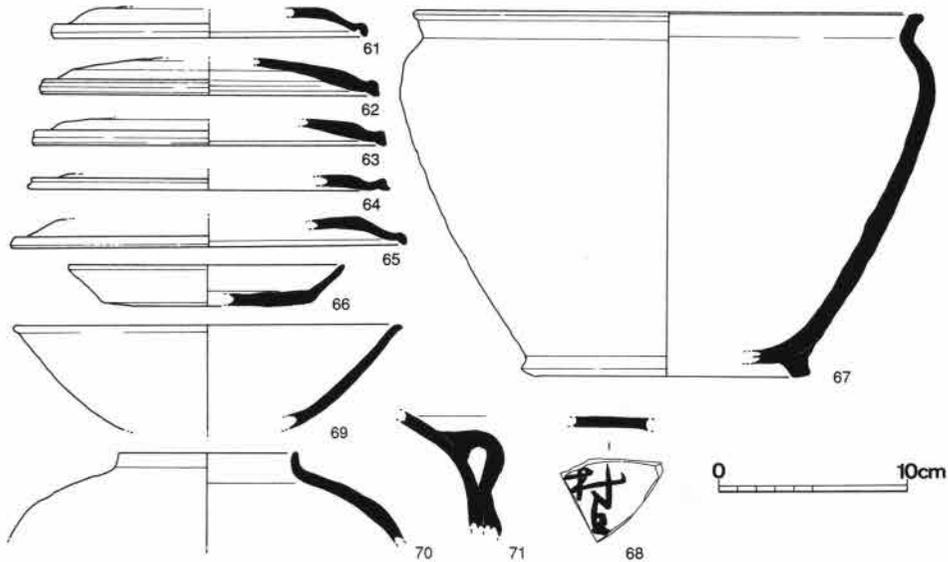
土坑170出土遺物(第8～10図) 土師器・杯A 1～3 外面をヘラ削りにより成形し、底部と体部に屈曲部が見られる。土師器・杯B 4・5 外面をヘラ磨きで調整し、口縁端部は内面にわずかに肥厚する。土師器・碗 6～9 基本的に外面をヘラ削りによって成形するが、ナデにより最終調整を行う7・8がある。土師器・皿11・12 外面をヘラ削りにより成形する。土師器・甕13・14 体部外面をタテハケにより調整し、口縁端部は、内面へ肥厚する。土師器・甕E 16・17 外面のヘラ磨きが密である17と粗である16がある。口縁部及び高台の位置が異なる。黒色土器・碗18・19 見込みに輪花文を施すが、細かい暗



第8図 出土遺物実測図(1) (平安時代) 土坑170



第9図 出土遺物実測図(2) (平安時代) 土坑170



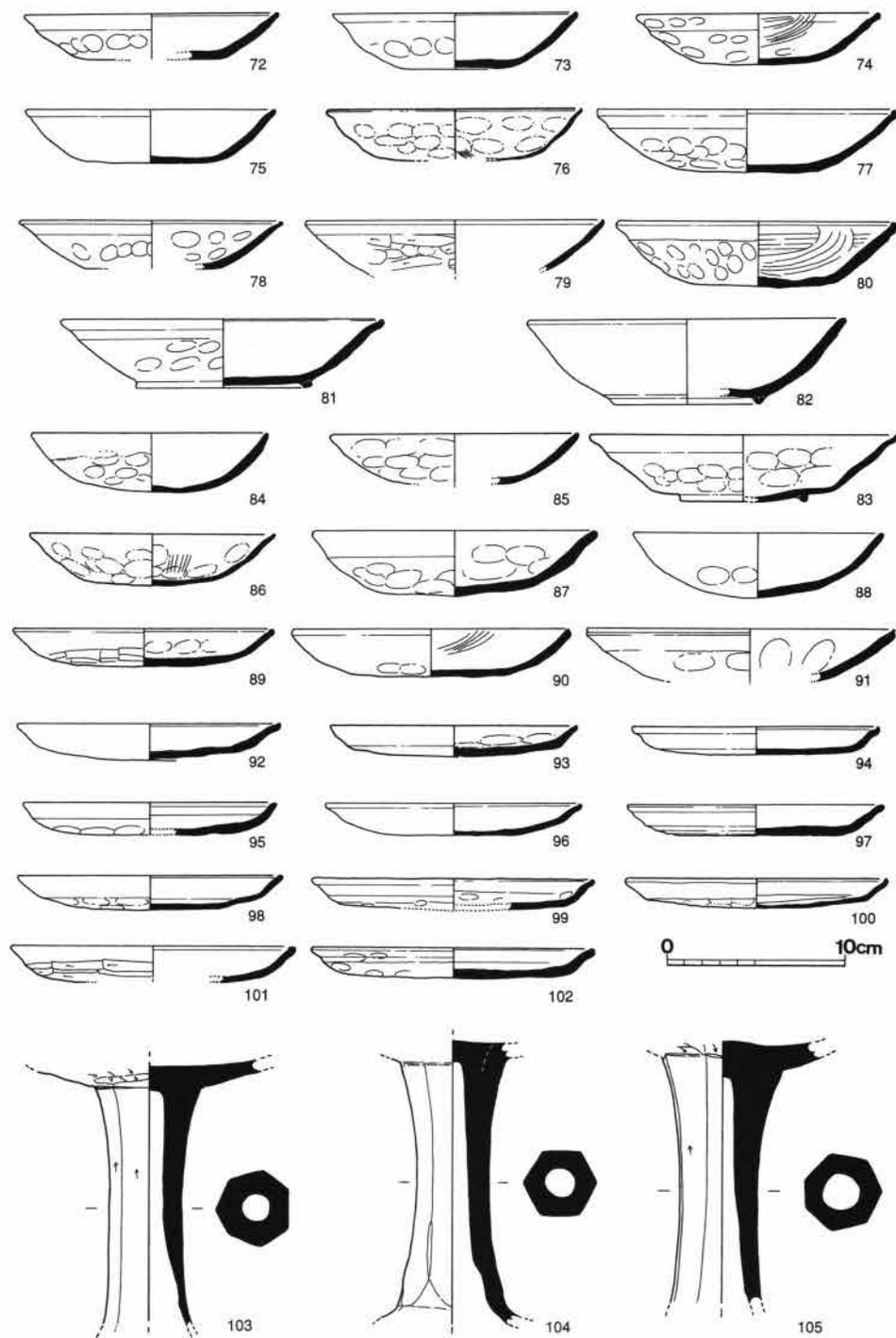
第10図 出土遺物実測図(3) (平安時代) 土坑170

付表1 土坑170出土土器破片計数表

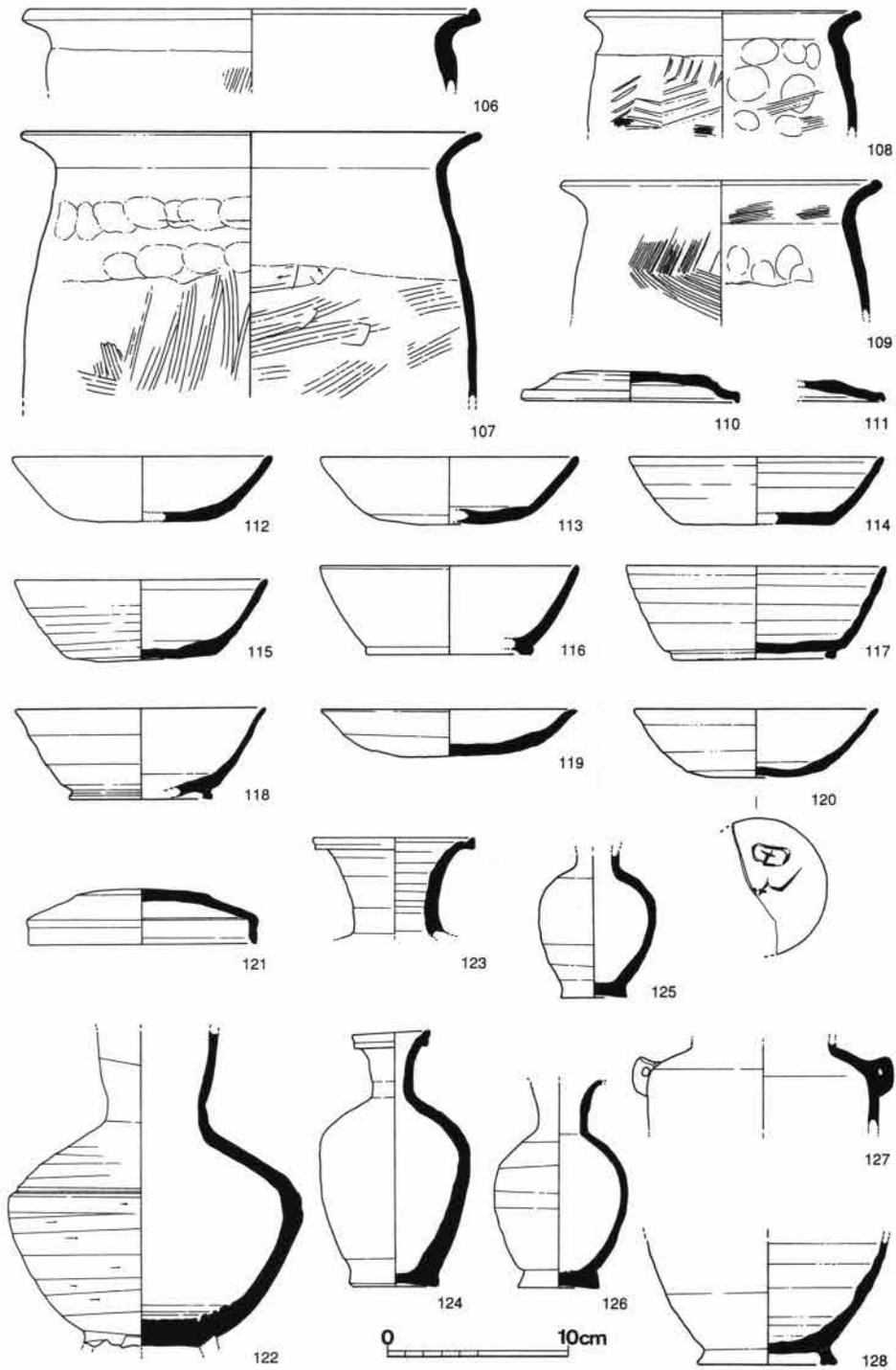
器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	2716	74.0
	高杯・盤・鉢	54	1.5
	甕・釜・鍋	876	24.4
	その他	4	0.1
	不明	0	0.0
	小計	3650	100.0
黒色土器	杯・碗・皿	80	96.0
	甕	3	4.0
	その他	0	0.0
	不明	0	0.0
	小計	83	100.0
須恵器	杯・碗・皿	214	47.0
	壺・瓶	59	13.0
	鉢	73	16.0
	甕・大型壺	108	24.0
	その他	0	0.0
	不明	0	0.0
小計	454	100.0	
緑釉陶器	杯・碗・皿	49	100.0
	壺・瓶	0	0.0
	その他	0	0.0
	不明	0	0.0
	小計	49	100.0
無釉陶器	杯・碗・皿	0	0.0
	高杯	0	0.0
	盤	0	0.0
	その他	0	0.0
	不明	0	0.0
	小計	0	0.0
灰釉陶器	杯・碗・皿	15	100.0
	壺・瓶	0	0.0
	その他	0	0.0
	不明	0	0.0
	小計	15	100.0
総数		4251	100.0

文と形骸化した暗文に分けられる。土坑内からは、土師器・高杯45・46、須恵器・杯A58～60、須恵器・鉢D67、双耳壺71が出土している。

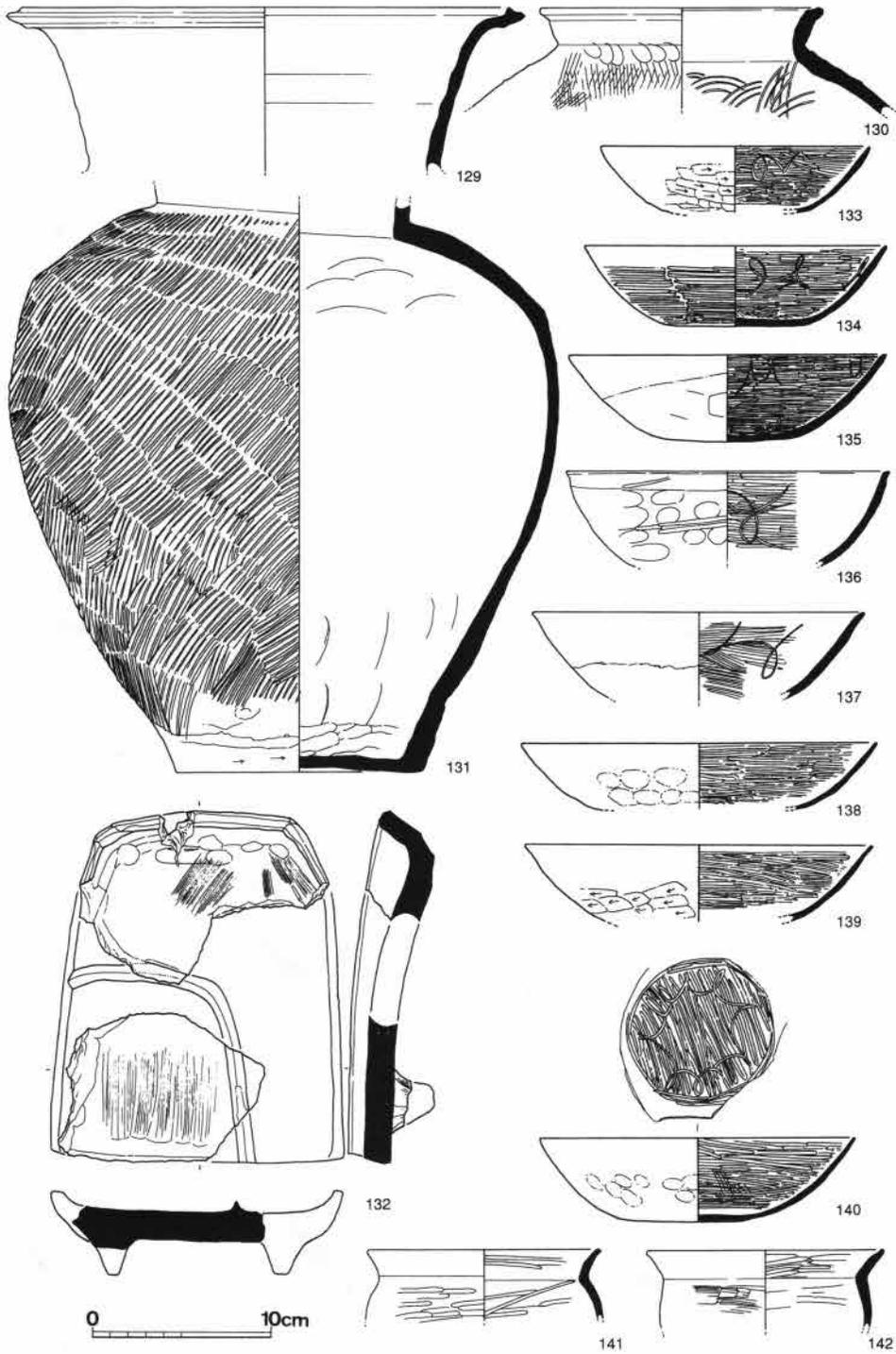
井戸231出土遺物(第11～15図) 土師器・杯A72～80 基本的に外面はヘラ削りによって成形しているが、指頭圧痕が多く見られる。土師器・杯B81～83 器表面の残存状況は不良であり、観察できないが、部分的にヘラ磨きが認められる。土師器・碗A84～88 外面には指頭圧痕が観察でき、86の内面にはハケ目が見られる。土師器・皿A89～102 101のように外面をヘラ削り成形する皿とヘラ削りの後、オサエにより成形する皿が見られる。一方、94・97のように回転により成形する皿も見られ、比率は少ないものの成形技法上、重要である。103～105は、六角または七角に面取りした土師器・高杯の脚部である。



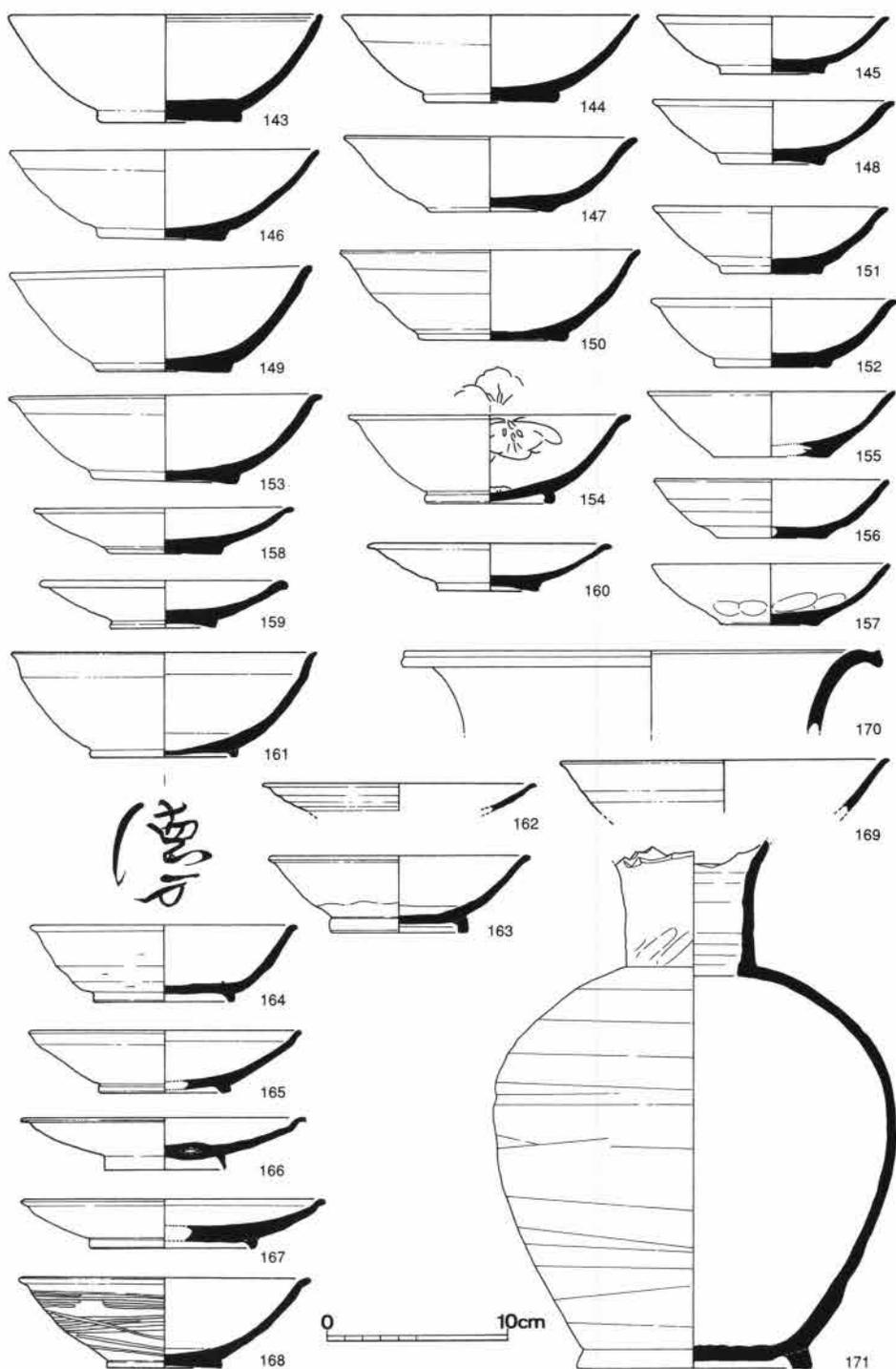
第11図 出土遺物実測図(4) (平安時代) 井戸231



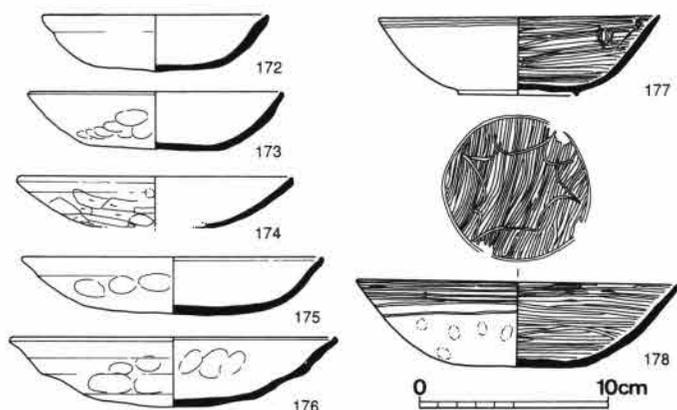
第12図 出土遺物実測図(5) (平安時代) 井戸231



第13図 出土遺物実測図(6) (平安時代) 井戸231



第14図 出土遺物実測図(7) (平安時代) 井戸231



第15図 出土遺物実測図(8) (平安時代) 井戸231検出面直下

106・107は、土師器・甕で、108・109は小形の甕である。107の外表面は、頸部直下をオサエにより成形し、以下、タテハケにより成形しているが、108は叩き、109はハケ目により成形している。110・111は、須恵器・杯蓋である。112～115は、須恵

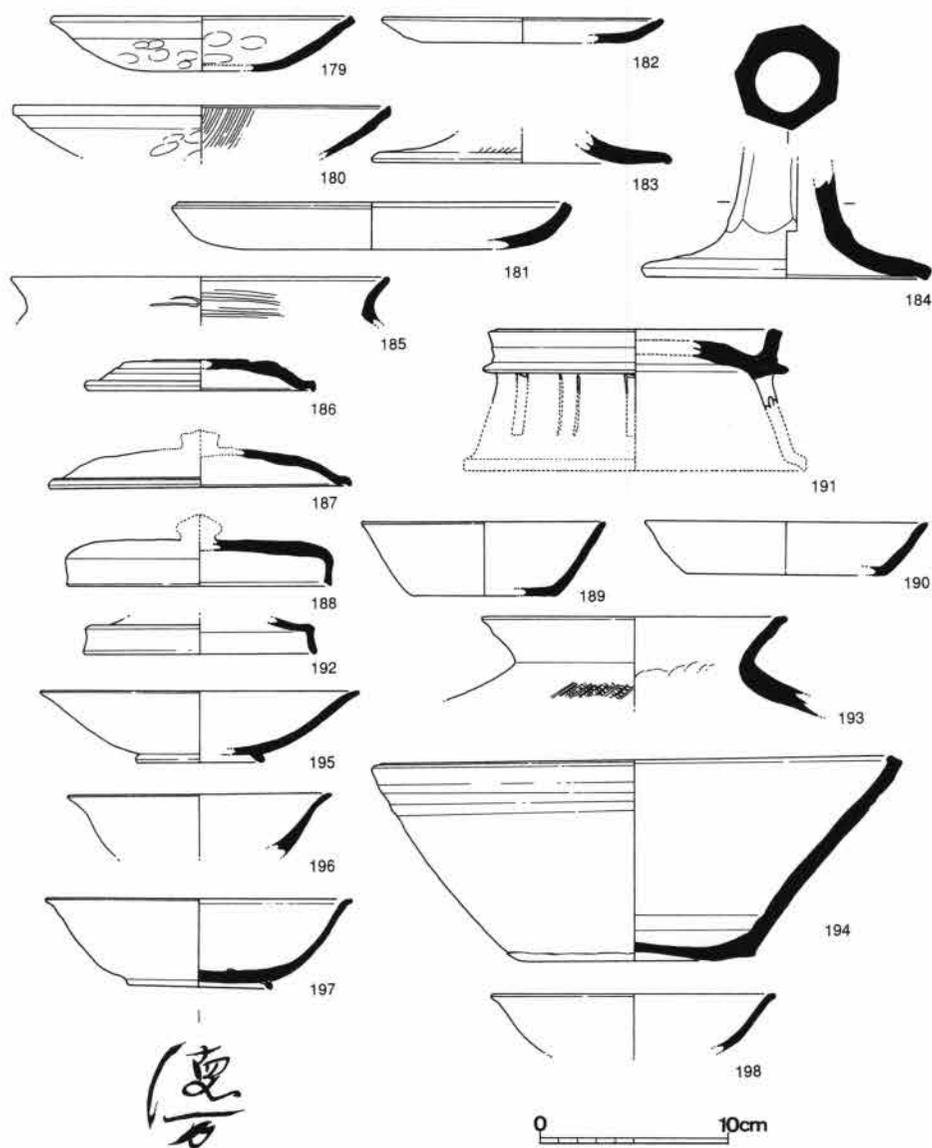
器・杯A、116～118は杯Bである。119は、丸い底部から外反する口縁をもつ須恵器・皿で、口縁端部は尖頭状である。色調は、暗灰褐色で焼成は不良である。121は、口縁部が

付表2 井戸231出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	1227	92.0
	高杯・盤・鉢	16	1.0
	甕・釜・鍋	91	7.0
	その他	1	0.0
	不明	0	0.0
	小計	1335	100.0
黒色土器	杯・碗・皿	36	92.0
	甕	3	8.0
	その他	0	0.0
	不明	0	0.0
	小計	39	100.0
須恵器	杯・碗・皿	165	32.0
	壺・瓶	107	21.0
	鉢	57	11.0
	甕・大型壺	185	36.0
	その他	0	0.0
	不明	0	0.0
小計	514	100.0	
緑釉陶器	杯・碗・皿	259	99.0
	壺・瓶	1	1.0
	その他	0	0.0
	不明	0	0.0
	小計	260	100.0
無釉陶器	杯・碗・皿	1	100.0
	高杯	0	0.0
	盤	0	0.0
	その他	0	0.0
	不明	0	0.0
	小計	1	100.0
灰釉陶器	杯・碗・皿	52	99.0
	壺・瓶	1	1.0
	その他	0	0.0
	不明	0	0.0
	小計	53	100.0
総数		2202	100.0

下垂する壺の蓋である。123～126は、大きさが異なる壺Mで、122は口縁部及び高台を欠くものの、外面をヘラ削りにより成形する壺Kである。127は、四耳壺または三耳壺である。131は、肩部が丸く、平らな底部をもち、外面は叩き目、底部外面は、ヘラ削りによって成形している。須恵器・二面硯132は、海部の底部は接地し、陸部は、高さ2cmの脚を両端に付す。底部全面はヘラ削りにより成形し、硯面は、ていねいに磨いている。全体的な形態は、風字硯に酷似しており、硯面には、断面三角形の粘土によって分割している。なお、硯面には、朱が付着している。

黒色土器・碗133～140 いわゆる、内黒である。133・139は外面をヘラ削りによって成形しているが、136・139・140には、指頭圧痕が観察できる。また、134は、器外面をヘラ磨きにより調整している。内面には、暗文が見られ、140の見込みは平行磨きの後、輪

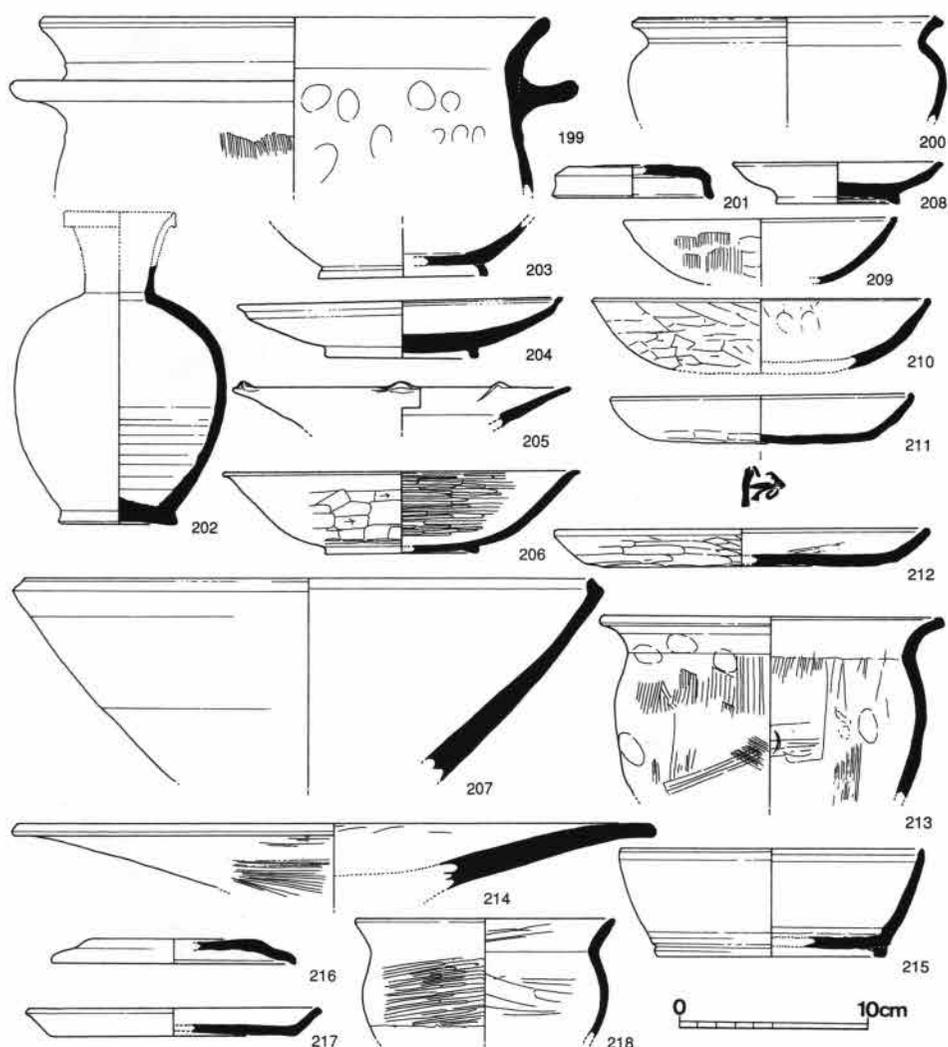


第16図 出土遺物実測図(9) (平安時代) 井戸231掘形

花文を施している。141・142は、ヘラ磨きで調整する黒色土器・甕である。

緑釉陶器・碗143～154 いわゆる蛇目高台を有する京都産で、軟質と硬質に分類できる。その中で154は、貼り付け高台を有し、内面には陰刻による法相華文を施す。色調・形態から東海産である。158～160は、いずれも蛇目高台をもつ京都産の緑釉陶器・碗である。

161は、内面に灰釉がかかった灰釉陶器・碗である。口縁部直下でわずかに屈曲する器形的特徴をもっている。底部外面に「徳万」の墨書が見られるが、これは掘形内から出土

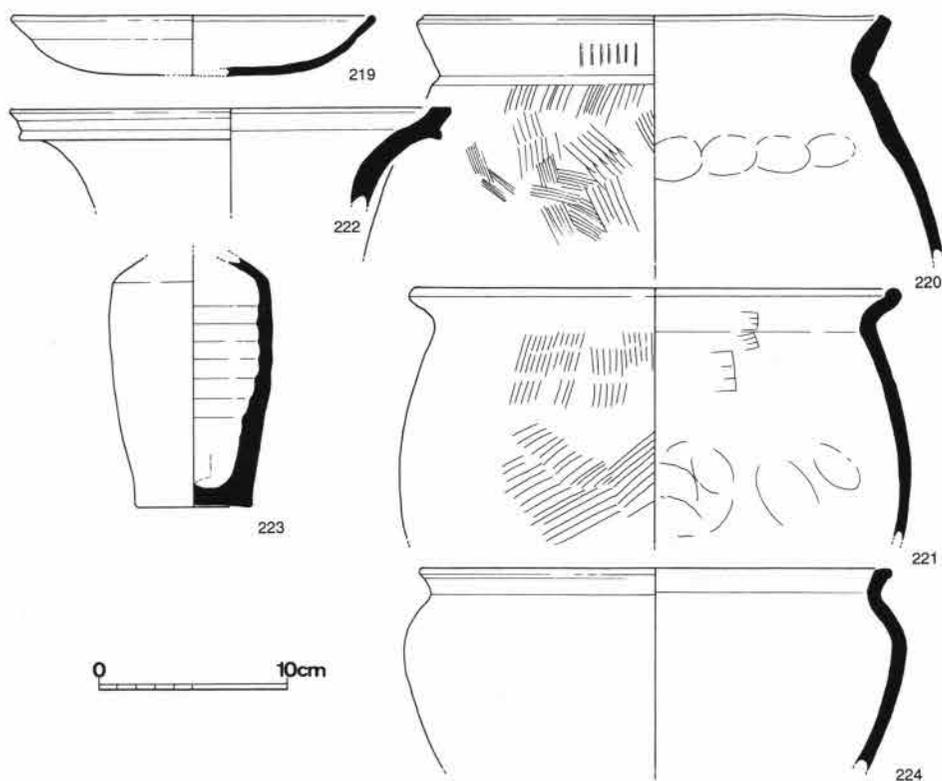


第17図 出土遺物実測図(10) (平安時代)

199~202・208. 土坑159    203~205. 土坑177    206・207. 土坑200    209. 土坑165  
 212~215. 土坑243    216~218. 土坑246

した灰釉陶器・椀197の底部に書かれた文字と同じ筆跡である。165~167は、口縁部でわずかに屈曲する灰釉陶器・皿である。171は、器表面に均一な釉が施された灰釉陶器・壺Lである。壺内には、5点の堅炭が入っており、口縁部を12回にわたって打ち欠いている。168は、外面にヘラ磨きを施した無釉陶器・椀である。焼成は良好で、色調は淡青灰色を呈している。

井戸231掘形出土遺物(第16図) 井戸は、湧水機能が失われた段階で井戸の板材を再利用する目的で抜き取られたことを想定できる。その際、最小限の作業を目的に井戸枠とそ



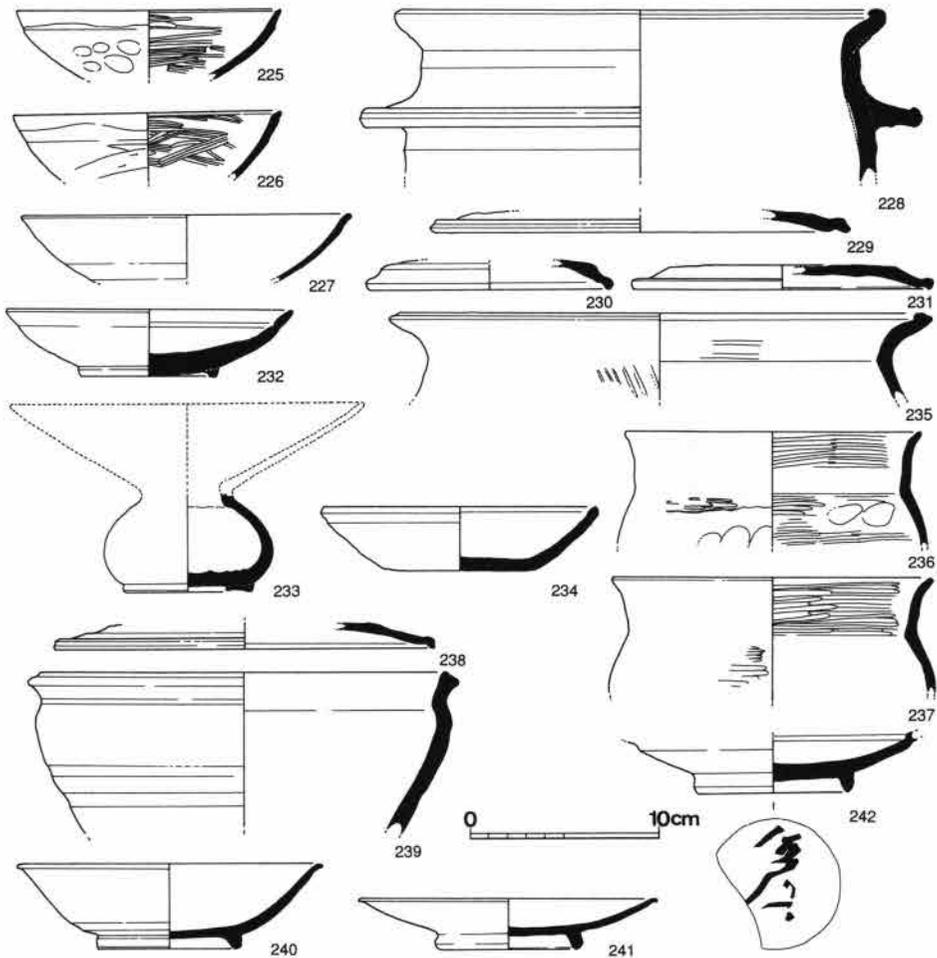
第18図 出土遺物実測図(11) (平安時代) 土坑219

の掘形の一部を崩し、板材を抜き取ったと考えられる。そのため、部分的に掘形埋土が残存しており、包含されている土器群を一括して取り上げた。出土遺物の点数は、限られており、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器がある。188は、下垂する口縁部をもつ須恵器・蓋で、壺Aまたは壺Bに伴うものである。また、192は、188に比べて口径は小さく、形態は異なるが、壺Aまたは壺Bの蓋である。195は、断面が「ハ」字状の貼り付け高台をもつ須恵器・椀である。197は、内面のみ灰釉を施した灰釉陶器・椀である。見込みに陶枕(トチン)痕が認められ、底部外面には「徳万」の墨書が見られる。161と同じ筆跡である。191は円面硯、194は須恵器・鉢である。

土坑177出土遺物(第17図) 205は、口縁部に5か所のしのぎをもつ緑釉陶器・皿である。濃緑色の釉葉から東海産と考えられる。

土坑159出土遺物 201は、平らな天井部から屈曲し下垂する口縁部をもつ。屈曲部外面はヘラ削りで調整する壺の蓋である。

土坑167出土遺物(第19図) 232は、口縁部内面に屈曲部をもつ緑釉陶器・皿である。貼り付け高台と釉葉の色調から東海系と考えられる。



第19図 出土遺物実測図(12) (平安時代)

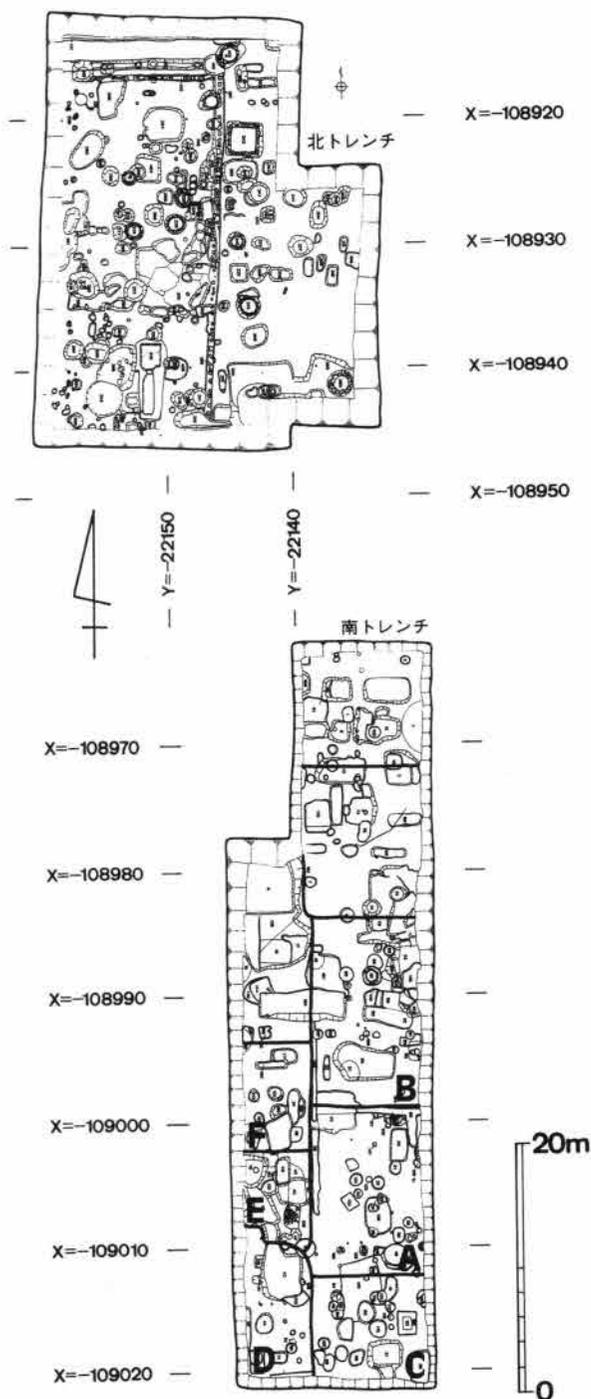
225~231. 土坑109 232. 土坑167 233土坑168 234~242. 土坑193

土坑168出土遺物(第19図) 233は、口縁部を欠くが、胴部最大径が胴部下半に位置する緑釉陶器・唾壺である。平らな底部の高台の断面形態は、中央部が凹状を呈している。

土坑193出土遺物(第19図) 240は、口縁端部が外反し、内面に釉薬がかかる灰釉陶器・椀である。241は、240と酷似する高台をもつ灰釉陶器・皿である。2点の灰釉陶器は、形態の特徴から東海系灰釉陶器である。

#### 遺物包含層出土遺物

土層堆積状況については、先述した通りであるが、平安時代の遺物包含層は、南トレンチの南半に限られており、遺物の取り上げは、基本的に安土・桃山時代の地区設定を踏襲した。この地区設定は、元来、国土座標を基準に行うべきであるが、土坑8や土坑42などのように、大規模土坑により、包含層の残存状況が著しく異なるため、遺構の規模・

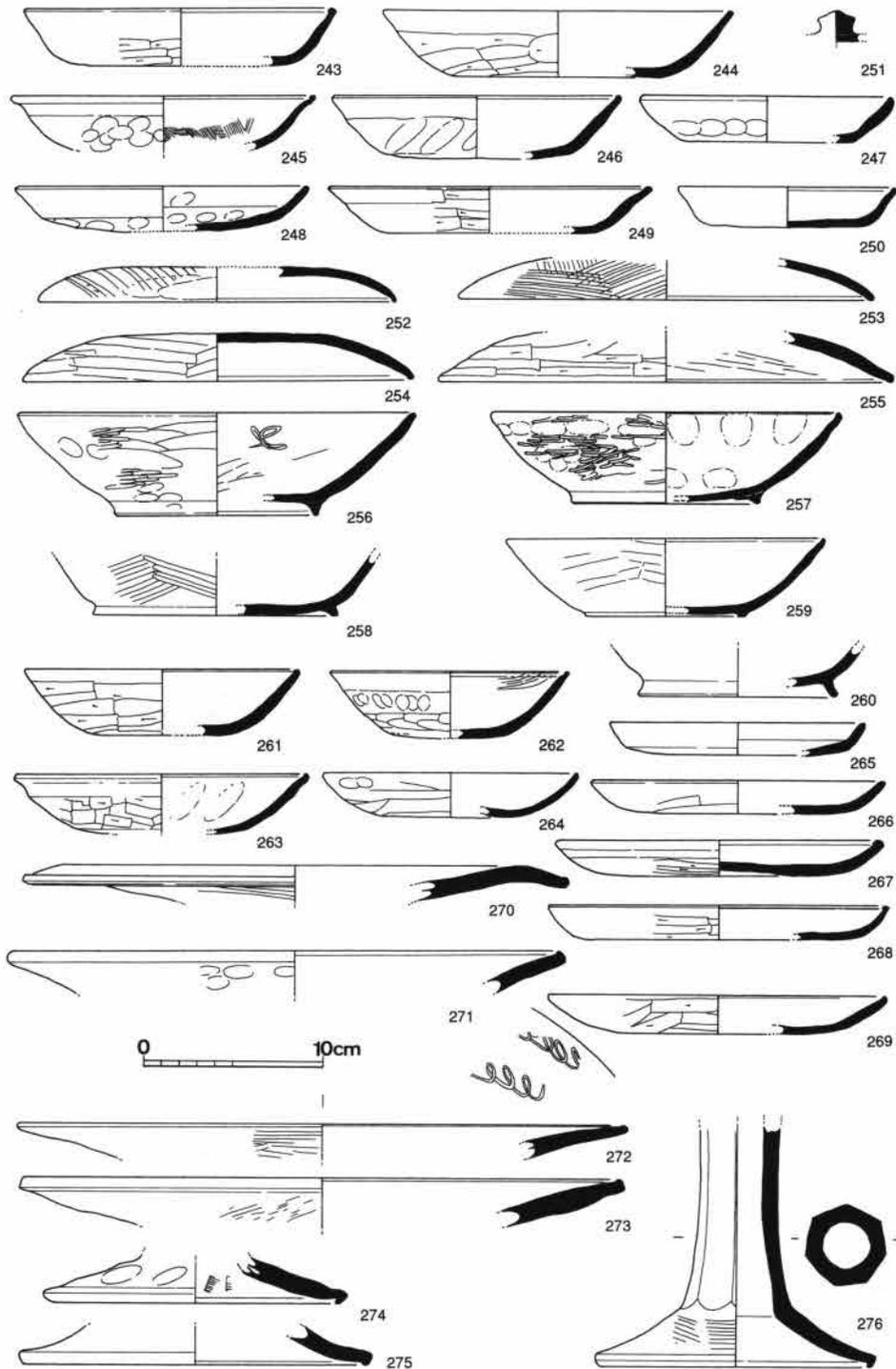


第20図 地区設定図

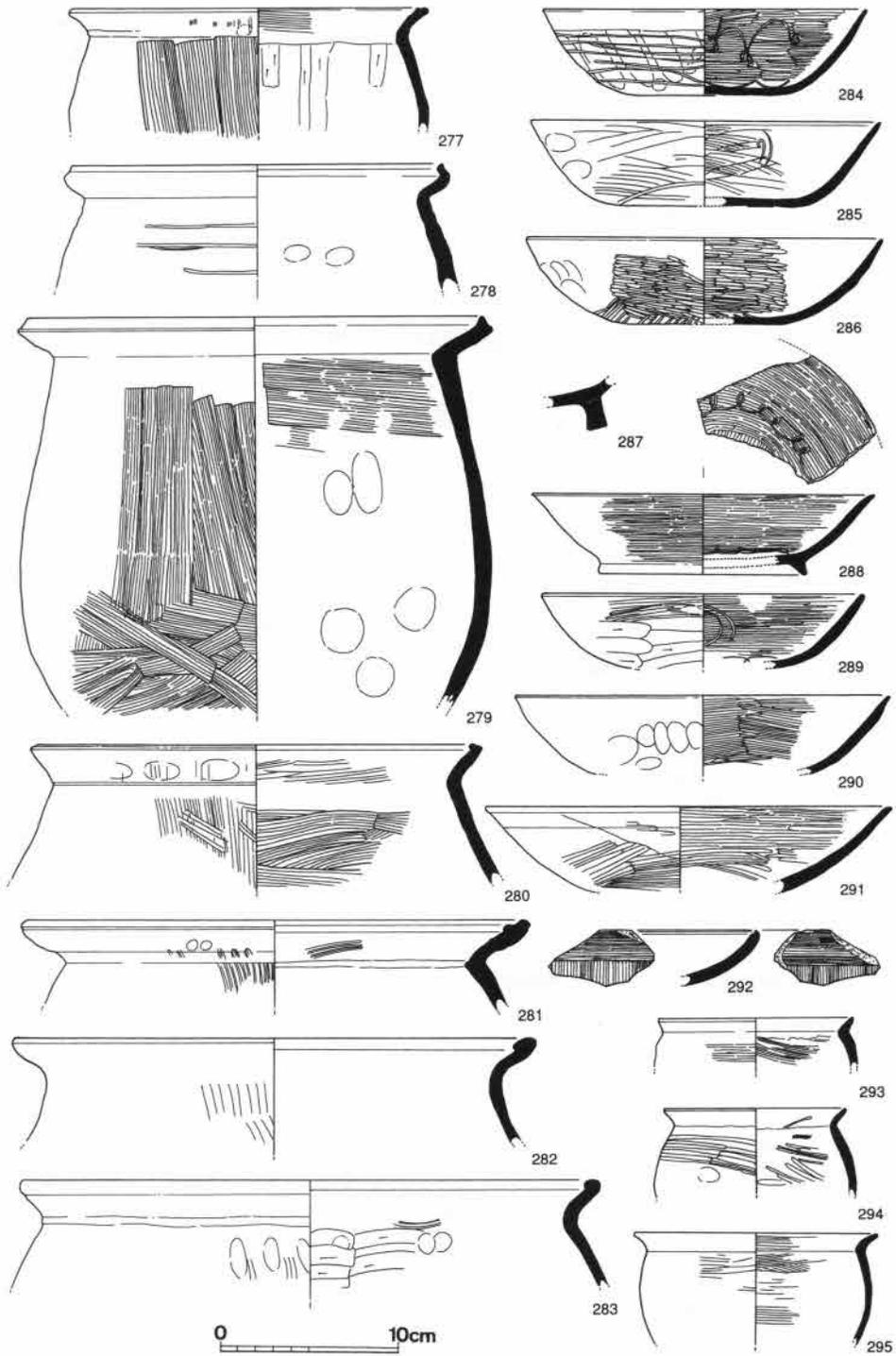
深さなどを参考にし、設定した。

A区出土遺物(第21~25図)

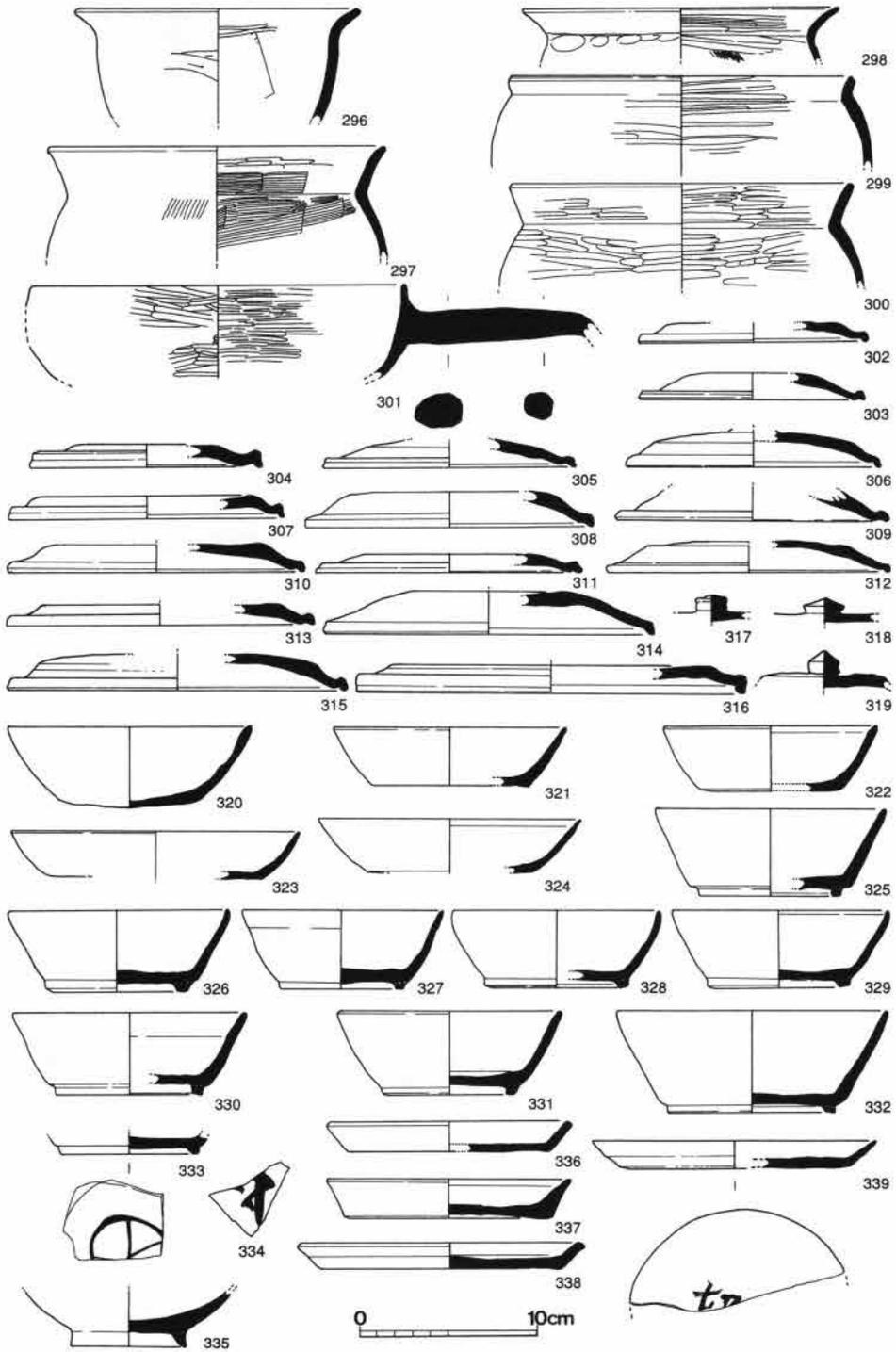
土師器・杯A(243~250) 杯部外面をヘラ削りで調整する243・244と、ナデによって成形する245~250に分けられる。口縁端部が肥厚する243・245・246・249は、概して口径が大きい傾向がある。土師器・杯B蓋252~255は、天井部外面を線状にヘラ磨きを施す252・253と、一部ヘラ磨きは認められるものの、ヘラ削りで調整する254・255に分けられる。土師器・杯B256~259 外面は、基本的にナデなどにより成形した後、線状のヘラ磨きを施す。また、内面に暗文を施す256がある。土師器・碗261~264 外面をヘラ削りにより成形し、部分的に指頭圧痕が見られる。土師器・皿265~269 外面はヘラ削りで成形するが、口縁部が内面に肥厚する一群がある。土師器・高杯270・273 口縁部内方で屈曲する270と上方へ肥厚する271類に分類できる。なお、同一個体ではないが、脚部の出土が見られる。土師器・甕277~283 口径及び肩部の形態は異なるが、基本的に口縁端部は肥厚している。体部外面はハケ目調整を施



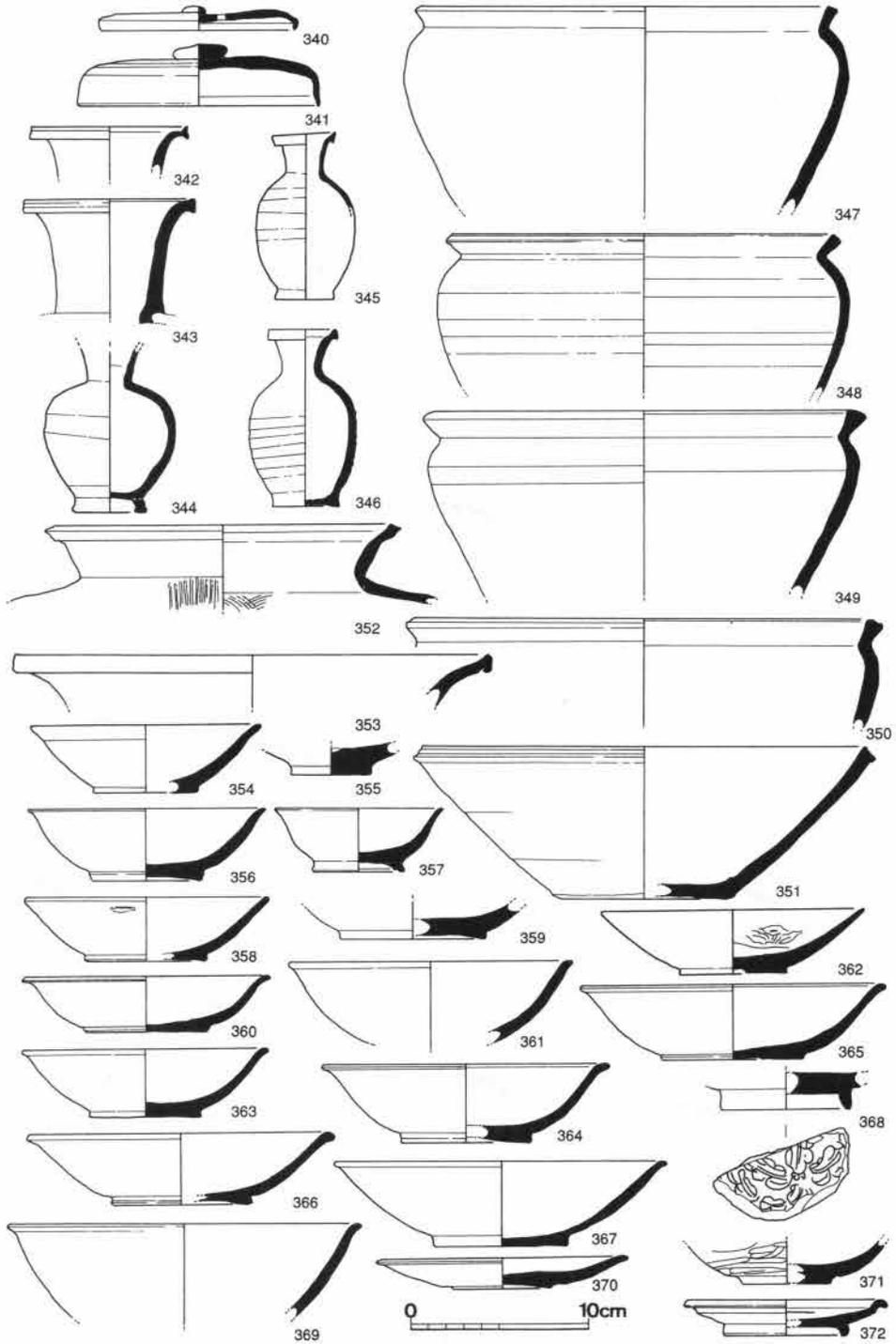
第21図 出土遺物実測図(13) (平安時代) A区



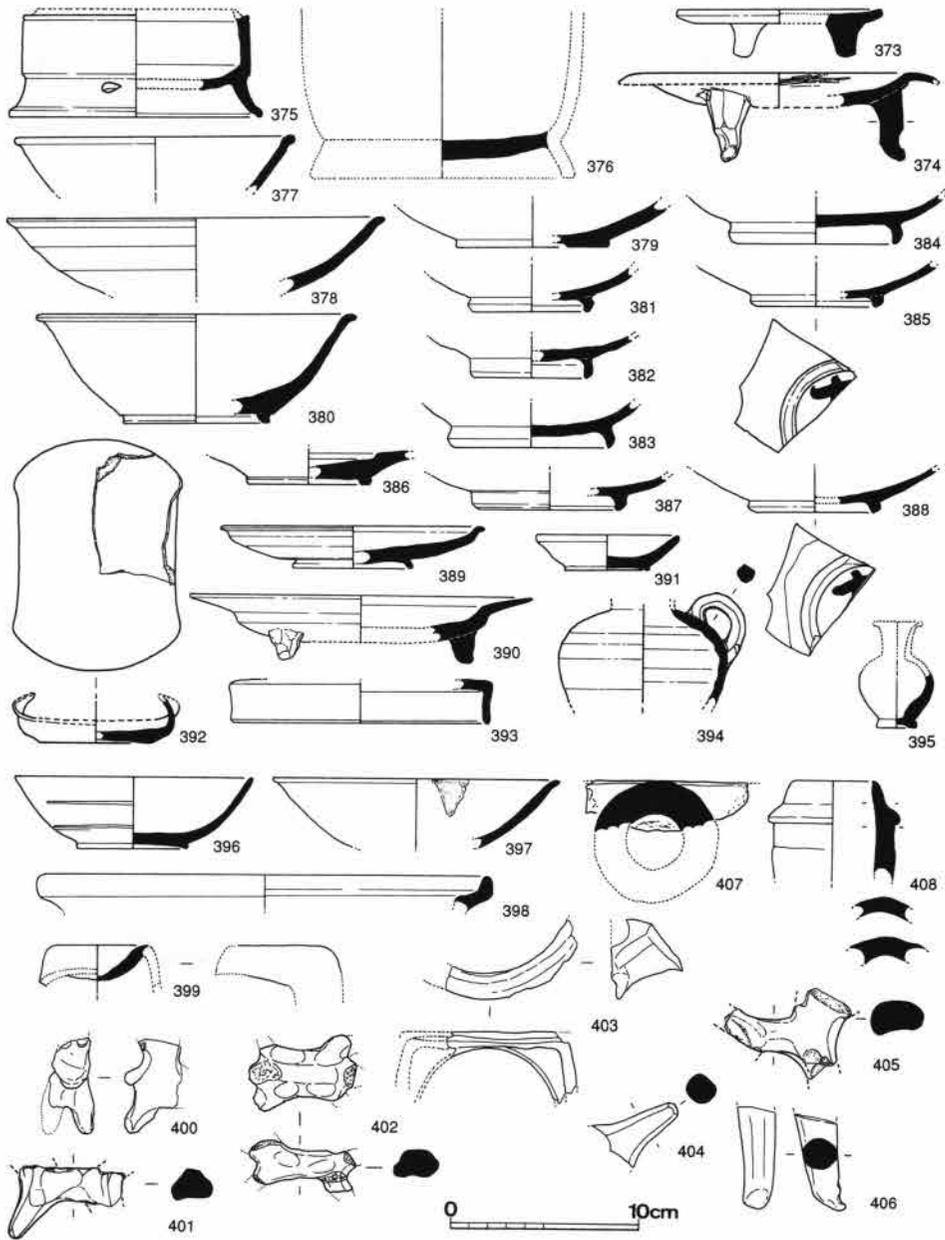
第22図 出土遺物実測図(14) (平安時代) A区



第23図 出土遺物実測図(15) (平安時代) A区



第24図 出土遺物実測図(16) (平安時代) A区



第25図 出土遺物実測図(17) (平安時代) A区

す。黒色土器・碗A284~286・289~291 内外面ともヘラ磨きを施す典型例に284・286があり、他に内面のみでいねいにヘラ磨きを施すものも含まれている。内面の輪花文の粗密も認められる。黒色土器・甕293~300 内外面をヘラ磨きにより調整しており、頸部で屈曲する形態と外反する口縁に分類できる。黒色土器の中にあつて301は、端部が下方へ屈

曲する把手をもつ。須恵器・杯蓋302～319 口縁端部が下方へ肥厚する共通した形態的特徴を有している。残存率は低く、つまみの有無及び口径の関係については、明らかではない。白色土器・三足盤373・374 373は、口径10.6cm、374は、斜め下方に外反する口縁部を有し、17cmの口径を測る。須恵器・杯A320～324 平らな底部から内湾気味に斜め上方へのびる体部と直線的にのびる体部に分かれる。須恵器・杯B325～333 底部と体部の屈曲部外面に貼り付け高台がつく共通した器形的特徴が認められる。333は、底部に記号を墨書する。須恵器・皿336～339 平らな底部から短かく外反する口縁部をもつ。339 底部に「切」の墨書が認められる。須恵器・蓋340は、口縁部が内湾し、天井部に2か所の円孔を穿つ。341は、壺Aまたは壺Bの蓋である。須恵器・壺L342・343は口縁部のみの残存である。京都府亀岡市篠古窯跡群産を含む。須恵器・鉢D347～350 頸部で屈曲し、端部が肥厚する口縁部をもつ。壺Lと同じく篠古窯跡群産を含む。緑釉陶器・椀354～369・371 357・369以外は、すべて削り出し高台を有しており、362・365は蛇目高台である。357は、濃緑色の釉薬をかけており、近江系の特徴をもつことから、やや新しい時期に比定できる。また、362は、釉薬が淡黄褐色を呈しており、貫入が入っている。368は、見込みに陰刻花文を施す東海系の椀である。371は、削り出し高台であるが、通有に見られる高台とは形態的に異なる。緑釉陶器・皿370・372 削り出し高台を有する370と、貼り付け高台の372に分類できる。375は、口縁部を欠くが、脚部に漏斗状の透かし孔を2孔穿っている。釉調は均一で硬質である。東海系緑釉陶器・香炉である。376は、緑釉陶器・火舎の底部である。釉薬・ヘラ磨きはていねいに施されており、出土緑釉陶器の中でも優品である。

緑釉陶器・椀377・378・380・388 口縁部の形態は、基本的に同傾向であるが、高台の断面形態が正方形に近似する380と、貼り高台端部が尖頭部を呈する381～388に分類できる。前者には、見込みに陶枕(トチン)痕を残すが、後者には見られないことから、重ね焼

付表3 A区出土土器破片計数表

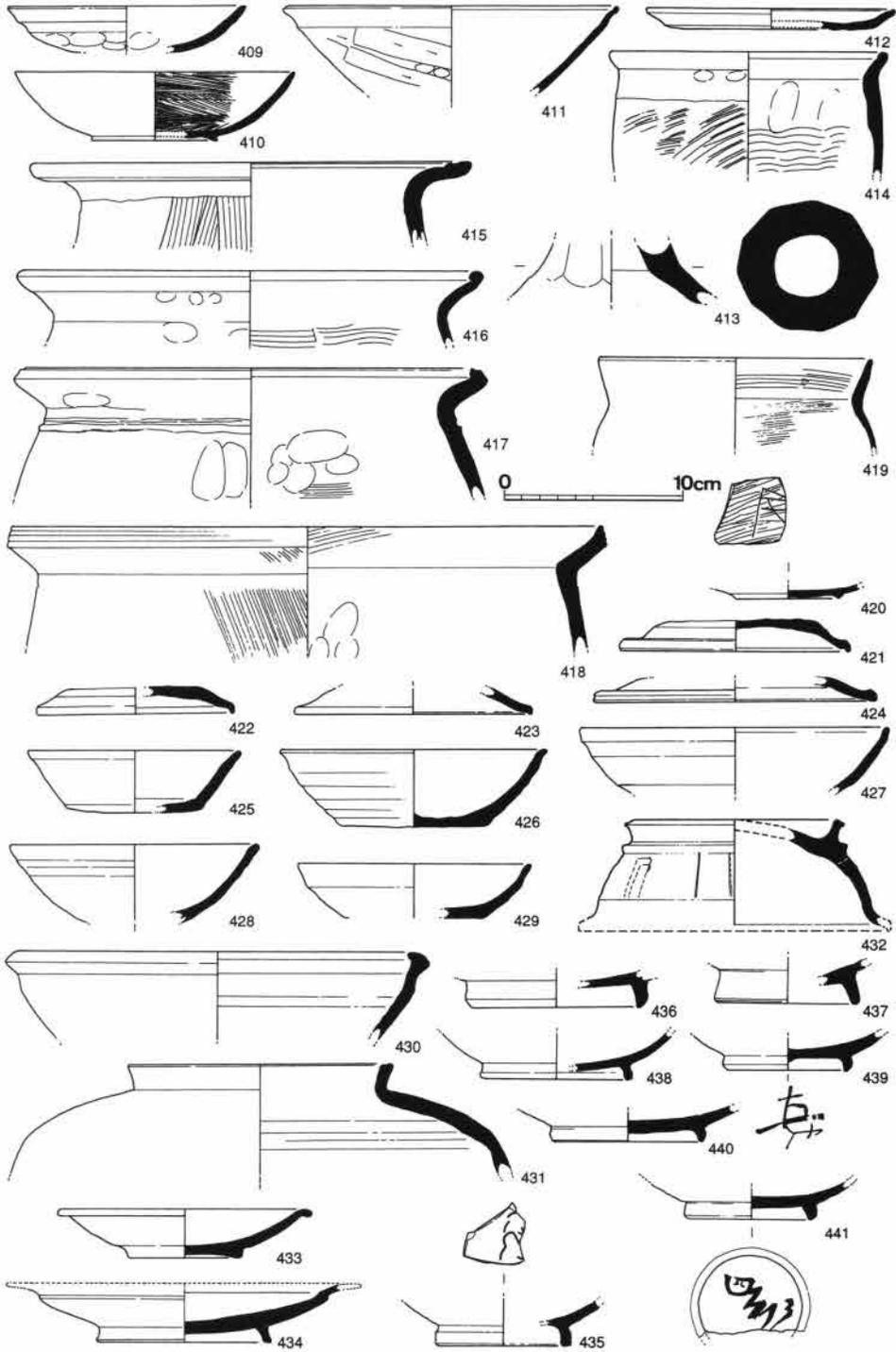
器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	杯・椀・皿	12078	78.6	71.0
	高杯・盤・鉢	176	1.1	
	甕・釜・鍋	3119	20.3	
	その他	10	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	15383	100.0	
黒色土器	杯・椀・皿	647	89.0	3.4
	甕	79	11.0	
	その他	1	0.0	
	不明	1	0.0	
	小計	728	100.0	
須恵器	杯・椀・皿	1311	33.0	18.6
	壺・瓶	806	20.0	
	鉢	470	12.0	
	甕・大型壺	1377	35.0	
	その他	0	0.0	
	不明	1	0.0	
小計	3965	100.0		
緑釉陶器	杯・椀・皿	1138	99.0	5.3
	壺・瓶	10	1.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	1148	100.0	
無釉陶器	杯・椀・皿	1	100.0	0.0
	高杯	0	0.0	
	盤	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	1	100.0	
灰釉陶器	杯・椀・皿	334	93.0	1.7
	壺・瓶	23	6.4	
	その他	2	0.6	
	不明	0	0.0	
	小計	359	100.0	
総数		21583	100.0	

きに対する工夫が見られる。形式的に380→385→381→383の組列を設定することができる。385・388の底部には墨書が見られる。386は、貼り付け高台を有する段皿である。また、390は、足部の成形が粗雑ではあるが、灰釉陶器の三足盤である。392は灰釉陶器・耳杯、393は壺AまたはBの灰釉陶器・蓋である。394は、丸い胴部を有し、肩部に半環状の把手をもつ東海系灰釉陶器・壺Xである。395は、復原器高が5.6cmを測る模型灰釉陶器・壺Lで、水滴として使用されたものである。396は無釉陶器・椀、397は二彩陶器・椀である。二彩については、出土例が平安京内でも少なく、共伴土器とともに重要な資料である。398は青磁・壺、407は鞆羽口で銅滓の溶着が認められる。399・403は、模型移動式竈の破片である。400～402・404～406は、破片であるが土馬の胴部・足部などで、焼成・胎土など各々異なっており、複数個体の土馬が確認できる。408は、貼り付け粘土帯を端部から2cmの部位に有する不明土製品である。硬質ではあるが、熱を受けた形跡はない。

A区は、各区の中で最も多くの資料が出土しており、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器の器種も多岐に及ぶ。灰釉陶器で見た場合、高台の端部が尖頭状に変化することがわかっており、東海地方の黒笹14号から黒笹90号の特徴が認められる。また、緑釉陶器で見れば、香炉や火舎のように優品が含まれている一方、東海・京都産の椀・皿が多く見られる。京都産には、洛北・洛西系の椀・皿が見られる。全体の比率については、破片計数表に譲るが、当該地の性格を考える上でそれらの比率は、他地区の比率とともに重要である。

**B区出土遺物** 土師器・椀 409は、部分的にナデで調整している。土師器・杯B 410は、内面をていねいなヘラ磨きにより調整し、口縁部はやや尖頭状を呈している。土師器・皿 412は、外面に回転を加えた後、ナデ調整を行う。土師器・甕414～418 414は、ほぼ直立する胴部を有し、頸部でわずかに屈曲する口縁部をもつ。胴部内外面をハケにより調整する。415～418の口縁部は、形態は異なるが、口縁端部が内面に肥厚する共通の特徴をもっている。418は、口縁部に面をもっており、凹線を施している。413は、白色土器・高杯の脚部で、11面の面取りを行う。黒色土器・椀 420は、残存率が著しく不良であるが、いわゆる内黒で、内面にヘラ磨きを施す。焼成後、文字か記号かは不明であるが、線刻が観察できる。須恵器・杯蓋421～424 口縁端部が下方へ肥厚する共通の特徴をもっている。須恵器・円面硯 432は、長方形透し孔とヘラを刺し込んだだけの透し孔をもっている。灰釉陶器・椀は、高台の端部が尖頭状を呈するものが多く見られる。緑釉陶器・椀 435は、高い高台と厚い釉薬が特徴的である。内面には、陰刻花文を施す。中国製青磁・合子蓋 446は濃緑色の厚い釉薬がかかる。

**C区出土遺物(第27図)** 土師器・椀447～450 口縁部が内面に肥厚する共通の特徴をもつ。外面をヘラ削りで成形する448・450と指頭圧及びナデで成形する449に分けられる。



第26図 出土遺物実測図(18) (平安時代) B区

土師器・杯B451・452 452は、口縁端部が内面に肥厚し、外面は横方向のていねいなヘラ削りを行い成形する。高台は低く、逆台形を呈している。土師器・甕 454は、肩部が張らず、内面へ折り曲げる口縁端部を有する。内面は、横方向のハケ調整を行う。土師器・高杯 453は、脚柱部を七面に面取りを加える脚であるが、焼成後にていねいに直径1cmの円孔を2孔穿っている。何らかの転用が考えられるが、用途は不明である。製塩土器455は、胎土は粗く、暗赤褐色を呈している。外来系緑釉陶器・罐 459は、緑色の釉薬を施し、内面の頸部直下は指頭圧痕が残る。胎土・釉調とも国産緑釉陶器とは異なる。

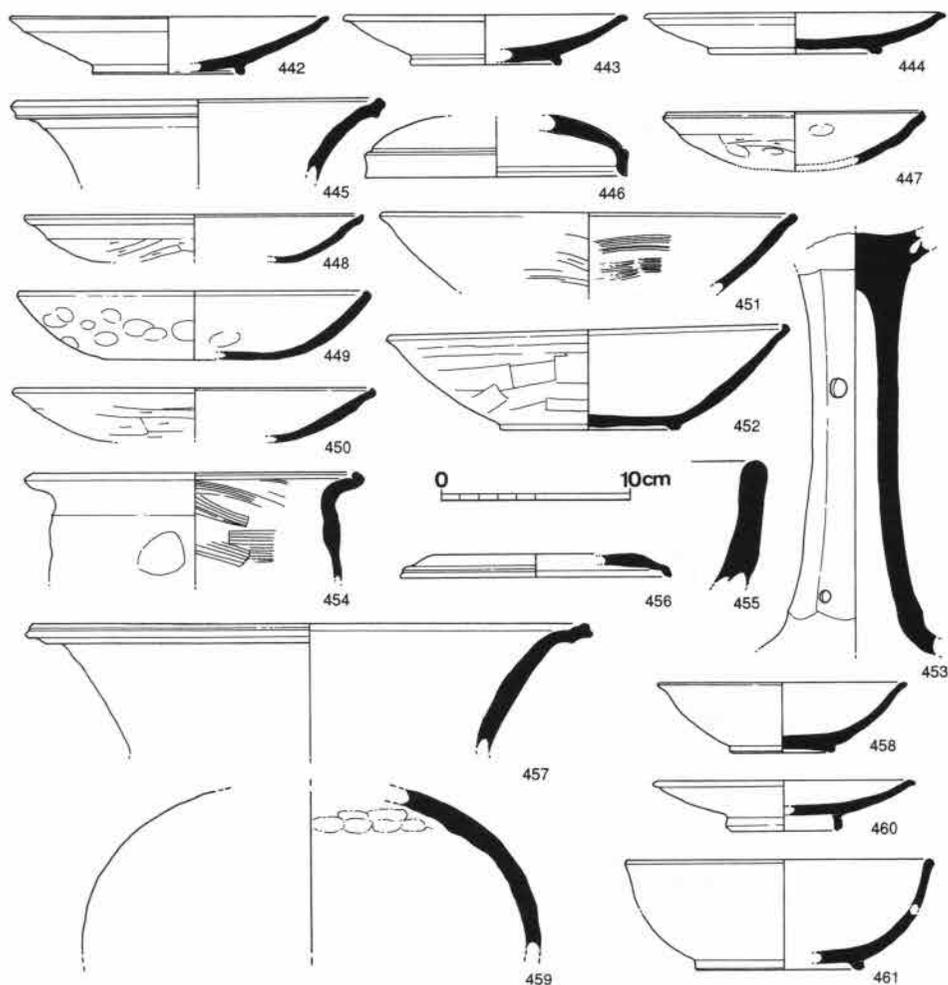
D区出土遺物(第28図) 土師器・杯B463・464 器表面の残存率が不良で、正確に観察できないが、内面にヘラ磨きが観察できる。465は、口縁端部がわずかながら肥厚する土師器・皿である。466は、頸部に屈曲し、口縁部に凸帯をめぐらせる土師器・甕である。468は、平らな底部を高台状に削り出し、直線的に斜め上方にのびる口縁部をもつ黒色土器・皿で、内面をヘラ磨きにより調整し、全体的にていねいな成形である。471は、口縁部が三角形状に肥厚する須恵器・鉢である。472は、平らな底部から直線的に斜め上方に

付表4 B区出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	杯・碗・皿	967	66.7	50.7
	高杯・盤・鉢	27	1.9	
	甕・釜・鍋	455	31.4	
	その他	1	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	1450	100.0	
黒色土器	杯・碗・皿	180	85.7	7.3
	甕	30	14.3	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	210	100.0	
須恵器	杯・碗・皿	245	26.9	31.8
	壺・瓶	151	16.6	
	鉢	79	8.7	
	甕・大型壺	435	47.8	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	910	100.0	
緑釉陶器	杯・碗・皿	138	100.0	4.8
	壺・瓶	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	138	100.0	
無釉陶器	杯・碗・皿	2	100.0	0.1
	高杯	0	0.0	
	盤	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	2	100.0	
灰釉陶器	杯・碗・皿	126	84.0	5.3
	壺・瓶	24	16.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	150	100.0	
総数		2860	100.0	

付表5 C区出土土器破片計数表

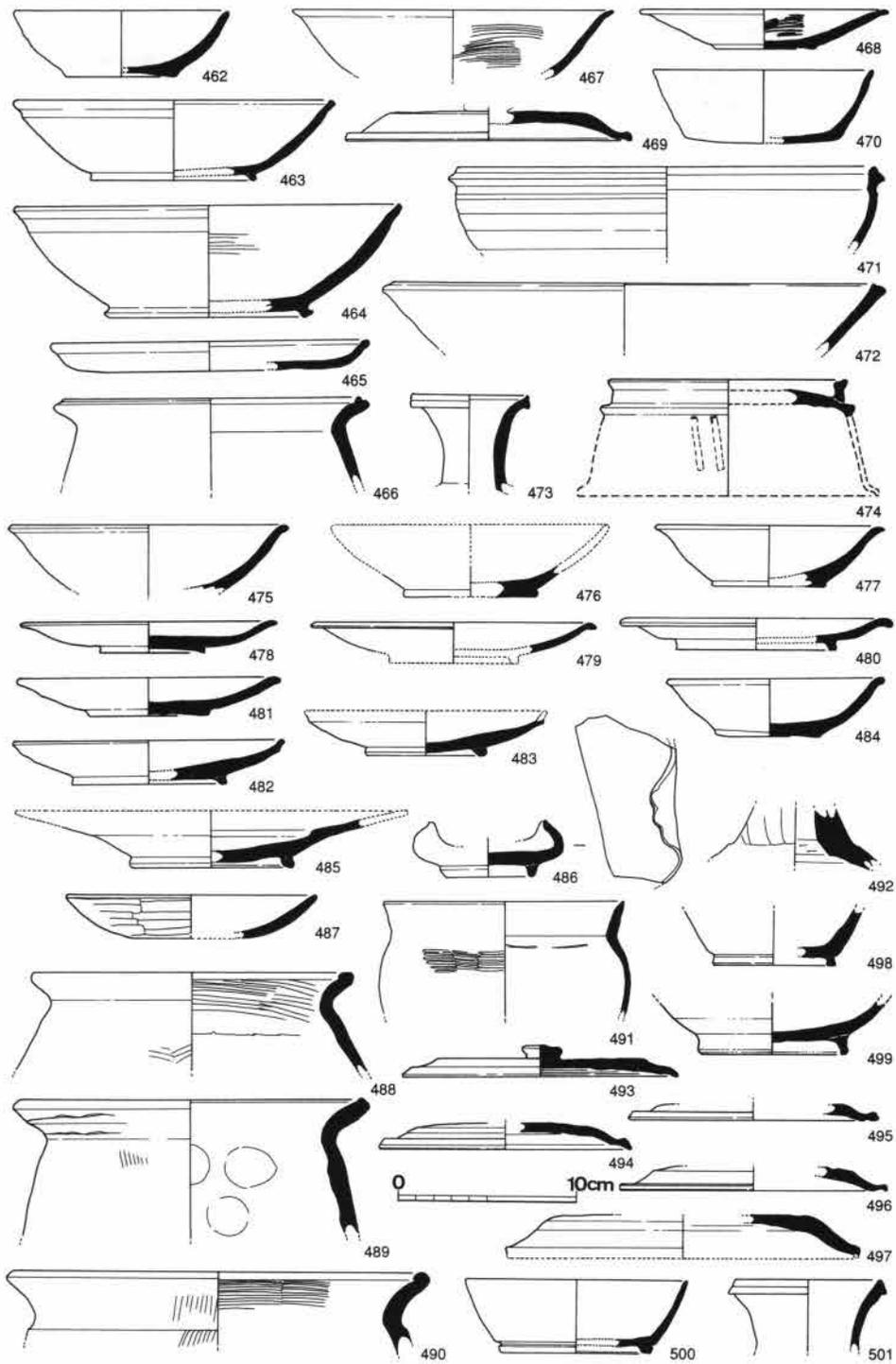
器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	杯・碗・皿	983	79.9	64.5
	高杯・盤・鉢	12	1.0	
	甕・釜・鍋	235	19.1	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	1230	100.0	
黒色土器	杯・碗・皿	52	92.9	2.9
	甕	4	7.1	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	56	100.0	
須恵器	杯・碗・皿	134	31.0	22.7
	壺・瓶	71	16.4	
	鉢	70	16.2	
	甕・大型壺	157	36.4	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	432	100.0	
緑釉陶器	杯・碗・皿	145	100.0	7.6
	壺・瓶	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	145	100.0	
無釉陶器	杯・碗・皿	0	0.0	0.0
	高杯	0	0.0	
	盤	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	0	0.0	
灰釉陶器	杯・碗・皿	43	100.0	2.3
	壺・瓶	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	43	100.0	
総数		1906	100.0	



第27図 出土遺物実測図(19) (平安時代)  
442~446. B区 447~461. C区

体部がのびる須恵器・鉢で、井戸231掘形出土の194に類例がある。473は、口縁部が三角形に肥厚する須恵器・壺Mである。474は、脚の大半が欠損しているが、縦長の長方形透かしをもつ円面硯である。緑釉陶器・碗475~477 平らな底部を有し、内湾した後、わずかに外反する口縁部を呈している。緑釉陶器・皿478~481 478は、軟質系で、ヘラ磨きが明瞭に観察できる。480は、硬質で貼り付け高台であることから東海系と認められる。灰釉陶器・皿482・483・485 いずれも貼り付け高台であることから東海系であるが、482・483は、口縁端部で屈曲する器形的特色を有している。485は、いわゆる段皿である。486は、灰釉陶器・耳杯で、折り曲げた部位を波状に処理している。

E区出土遺物(第28・29図) 487は、外面をヘラ削りによって器面調整を行う土師器・



第28図 出土遺物実測図(20) (平安時代)

462~486. D区 487~501. E区

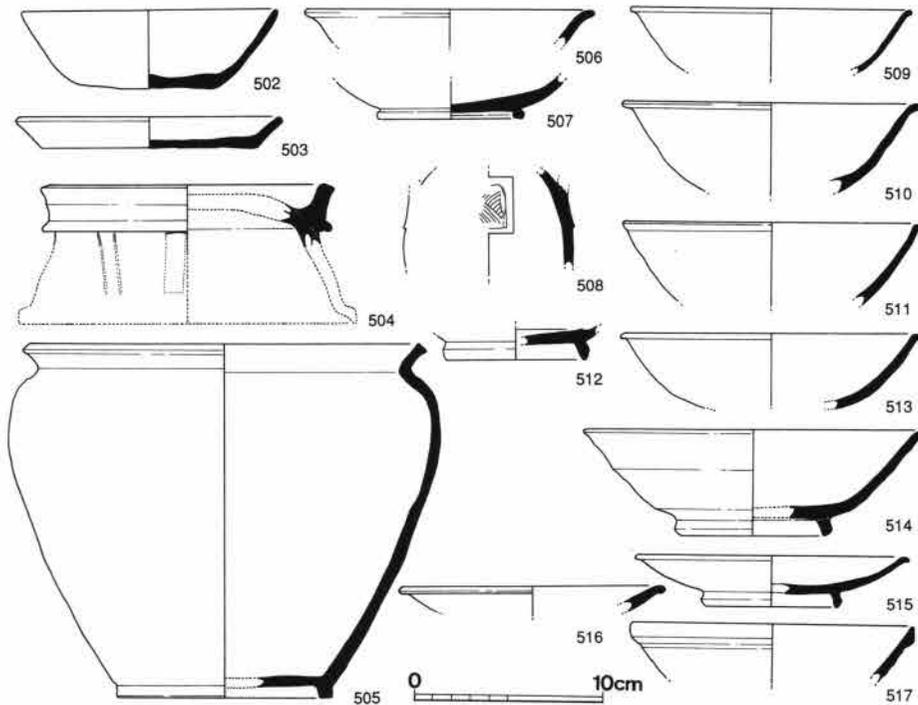
椀である。土師器・甕488～490 残存状況は不良であるが、口縁部内面が肥厚する共通の器形的特徴をもっている。488・490は、口縁部内面を横ハケによって成形する。492は、白色土器・高杯で、内面をヘラ削りで器面調整し、外面に面取りを行う。499は、高台が尖頭状を呈する須恵器・椀である。504は、先述したB区出土432と同じ透し孔をもつ円面硯であり、器壁は基本的に厚い。508は、なだらかな肩部に厚さ0.5cmの平たい把手が付く、肩部と把手の接合部には、剝離を防ぐために特殊な文様の叩きを施す。胴部最大径がやや短く、検討を要するが、緑釉陶器の水注瓶か壺に復原できる。516は、二彩・椀である。A区出土397とは、口径・体部の傾斜などの相違点も指摘できるが、釉調や胎土は近似している。517は、白磁であり、平安時代以後のものである。

F区出土遺物(第30図) 土師器・椀518・519 口縁部が内面にやや肥厚し、519は外面をヘラ削りで器面調整を行う。土師器・皿A520～522 520は、底部と口縁部との屈曲部にシャープな稜が走る。土師器・甕523～525 524は、頸部で屈曲し、外反する口縁部をもつ。器壁は厚く、内外面をハケで調整する甕Cである。黒色土器・甕526・527 527の内面には、線状のヘラ磨きと横ナデが観察できる。須恵器・杯A528・529 底部と杯部の屈曲が著しい528に対して、529は、屈曲部はゆるやかである。535は、須恵器・皿Bである。平らな底部からゆるやかな杯部をもつ。緑釉陶器・椀536・537 536の底部は、平らに削り出しており、537の底部は、蛇目高台である。540は灰釉陶器・段皿で、貼り付け高台を有している。緑釉陶器・香炉蓋539は、天井部を欠いており、つまみは復原的に図示した。天井部に二条の稜をもち、透かしと線刻により花蝶文を描いている。釉薬・成形などでいねいである。

以上が、平安時代の出土土器の概観であるが、土坑170出土遺物からの緑釉陶器・灰釉陶器の出土は基本的には見られず、一連の平安時代の遺構では、最も古い器種構成である。また、井戸231出土遺物は、比較的残存状況の良好な資料を含んでおり、井戸枠を抜き取

付表6 D区出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	杯・椀・皿	774	86.5	79.4
	高杯・盤・鉢	6	0.7	
	甕・釜・鍋	115	12.8	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	895	100.0	
黒色土器	杯・椀・皿	37	97.4	3.4
	甕	1	2.6	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	38	100.0	
須恵器	杯・椀・皿	41	33.3	10.9
	壺・瓶	19	15.5	
	鉢	17	13.8	
	甕・大型壺	46	37.4	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	123	100.0	
緑釉陶器	杯・椀・皿	56	100.0	5.0
	壺・瓶	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	56	100.0	
無釉陶器	杯・椀・皿	0	0.0	0.0
	高杯	0	0.0	
	盤	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	0	0.0	
灰釉陶器	杯・椀・皿	15	100.0	1.3
	壺・瓶	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	15	100.0	
総数		1127	100.0	

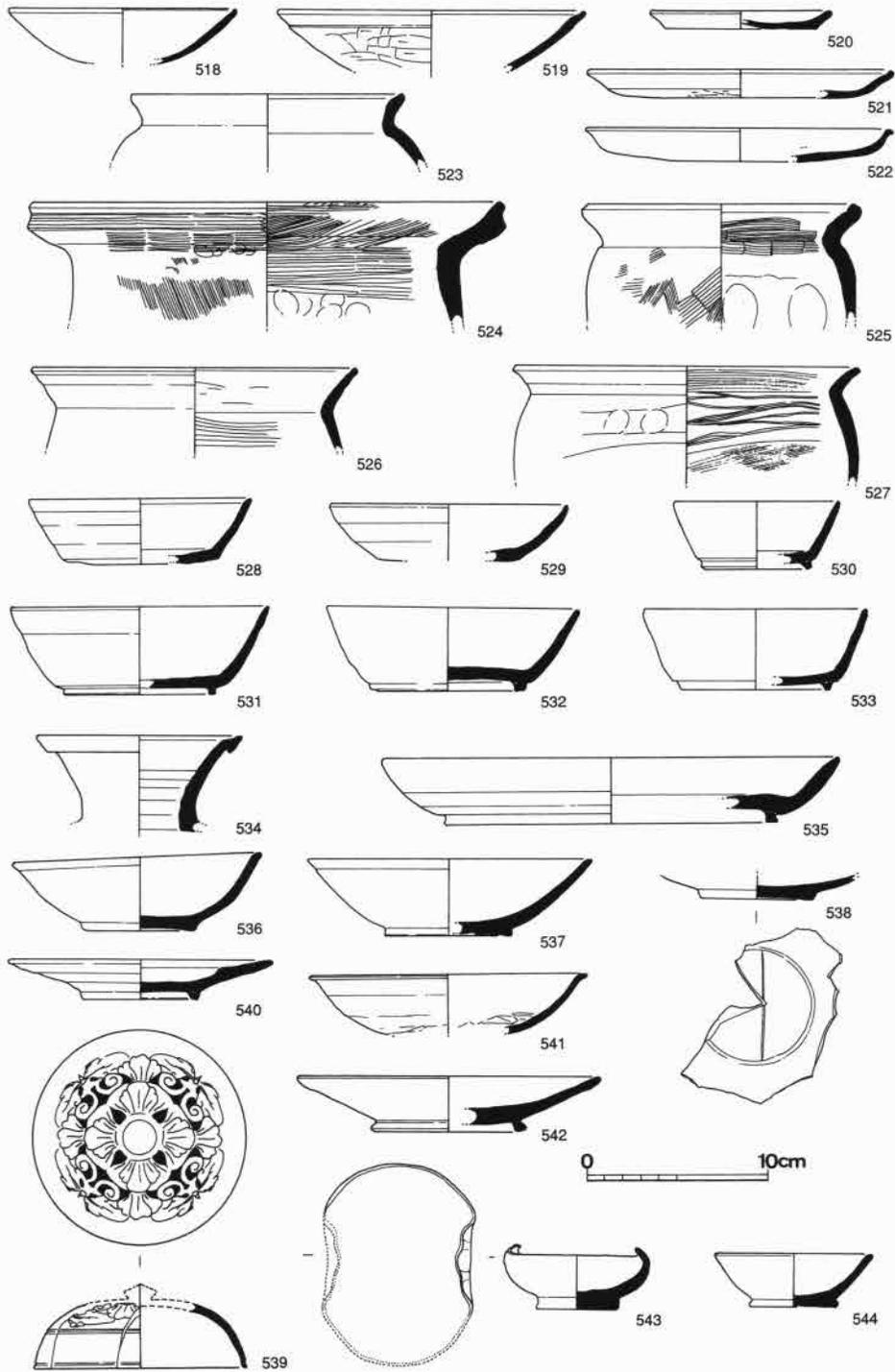


第29図 出土遺物実測図(21) (平安時代) E区

った後に、一括して投棄された土器群である。灰釉陶器・椀の高台の形態も陶枕痕を残すものと重ね焼きを行う段階のものまで認められ、東海地方の黒笹14号窯併行期から同90号窯併行期に比定できる。一方、緑釉陶器は、貼り付け高台を有する東海系緑釉陶器と京都系緑釉陶器が確認できた。A区357の椀は、高台内面を2段に成形し、底部に糸切り痕が残存し、さらに、釉調が濃緑色を呈していることから、近江系緑釉陶器として認識できる。そのことから10世紀第3四半世紀から第4四半世紀に比定でき、明らかに井戸231出土土器群及び各地区包含層出土土器群とは、区別される資料である。全体の比率などについては、後半に譲りたい。

**瓦類** 土器については、各地区における各器種の共伴関係が重要な要素であるから、地区ごとの記述を行ったが、瓦及び銭貨・鉄製品については、瓦そのものの年代観に幅があることと、出土土器の示唆する年代観と相違する場合も少なくないことから、ここに一括して拓影を提示し、概観しておきたい。なお、出土地などについては、各図キャプション下に別記しており、参照願いたい。

(軒丸瓦) 545は、中房内蓮子数は1+6を数え、内区弁数は、複弁8葉である。基本的には2本の圈線であるが、一部彫り直しのため、螺旋状を呈している。外区内縁には、



第30図 出土遺物実測図(22) (平安時代) F区

16の珠文をもつ。平安京創建瓦の彫り直しであり、平安前期に比定できる。西賀茂系か。  
 546 中房は残存せず、蓮子など不明である。内区弁数は、単弁12葉に復原でき、1本の  
 圏線をもつ。外区内縁には16の珠文をもつ。花卉はやや膨らんでおり、搬入瓦の可能性も  
 ある。547 中房は残存せず、蓮子など不明である。内区弁数は、単弁12葉に復原でき、  
 一本の圏線と、外区内縁には16の珠文をもつ。平安前期に比定できる。548 中房内蓮子  
 数は、1 + 6を数え、内区弁数は、複弁8葉である。一本の圏線と外区内縁には、12また  
 は16の珠文をもつ。平安中期に比定でき、栗栖野瓦窯産である。549は、中房及び外区内  
 縁・外縁は欠損しており、内区弁数は、複弁で12または16である。平安前期に比定できる。  
 550 中房内蓮子数は、1 + 6を数え、内区弁数は単弁16葉である。外区は欠損しており、  
 珠文数など不明である。平安前期に比定でき、吉志部瓦窯産である。

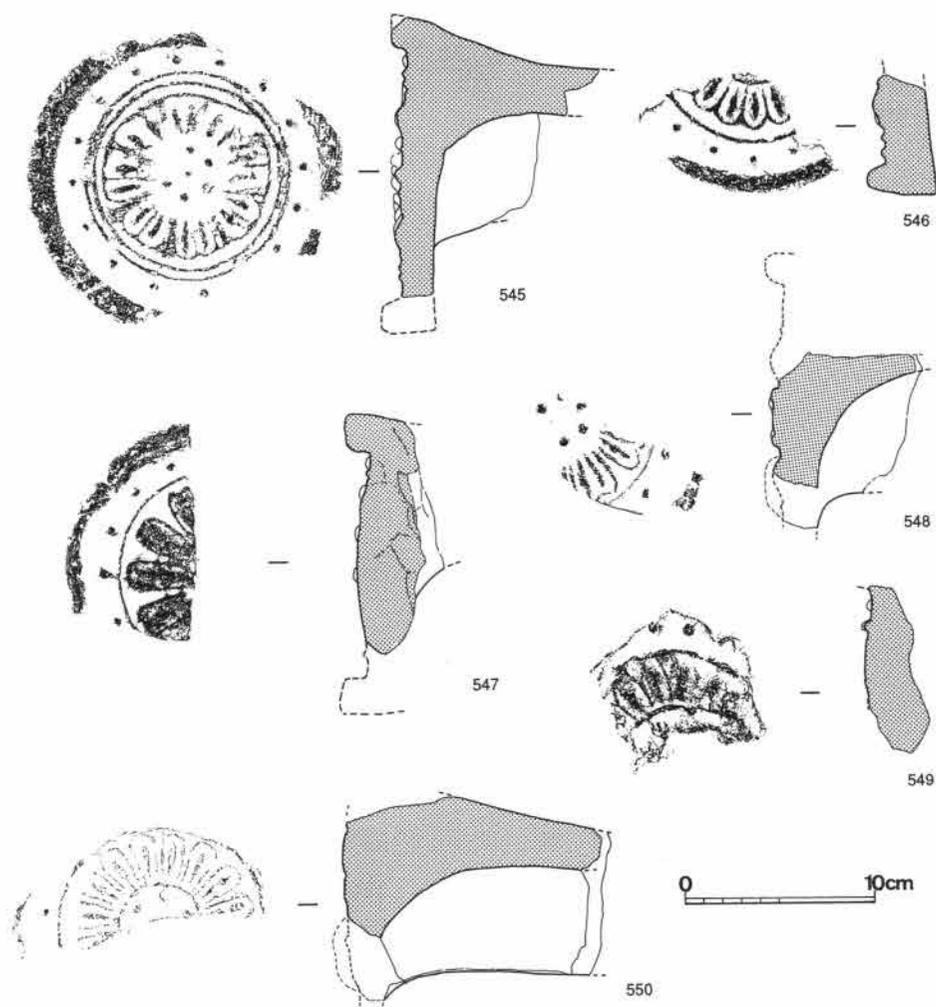
(軒平瓦) 551 内区の重郭が、丸みを帯びる重郭文軒平瓦であり、難波宮式である。  
 553は、雲文の一部が残存するだけであるが、平城宮式6801Aと認められる。555 上内縁  
 には11の珠文、下内縁には11の珠文をもち、脇区には3の珠文をもつ平安京創建瓦であり、

付表7 E・F区出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)	
土 師 器	杯・碗・皿	3990	82.6	63.2
	高杯・盤・鉢	39	0.8	
	甕・釜・鍋	794	16.4	
	その他	10	0.2	
	不明	0	0.0	
	小計	4833	100.0	
黒 色 土 器	杯・碗・皿	278	82.7	4.4
	甕	58	17.3	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	336	100.0	
須 恵 器	杯・碗・皿	516	29.7	22.7
	壺・瓶	280	16.1	
	鉢	227	13.0	
	甕・大型壺	717	41.2	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	1740	100.0	
緑 釉 陶 器	杯・碗・皿	531	99.3	7.0
	壺・瓶	4	0.7	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	535	100.0	
無 釉 陶 器	杯・碗・皿	8	100.0	0.1
	高杯	0	0.0	
	盤	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	8	100.0	
灰 釉 陶 器	杯・碗・皿	176	87.6	2.6
	壺・瓶	25	12.4	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	201	100.0	
総数		7653	100.0	

吉志部瓦窯か西賀茂瓦窯産である。556 上内  
 縁には12以上の珠文を有し、脇区には珠文は  
 ない。支葉を5反転しており、平城宮式6721  
 と認められる。557 上内縁には11の珠文、脇  
 区には3の珠文を配しており、3反転の支葉  
 からなる唐草文を施す。平安中期に比定でき、  
 栗栖野瓦窯産である。561 4反転の支葉から  
 なる唐草文を施しており、長岡宮式7757に認  
 定できる。562 珠文は上下部では界線上に配  
 置されており、蕨手を中心に唐草を左右に展  
 開させる。平安中期に比定でき、河上瓦窯産  
 である。563 外縁と珠文のみの残存であり、  
 鬼瓦の左側部である。須恵質に焼成されてお  
 り、暗青灰色である。

(丸瓦) 564は、外面に濃緑色の釉をかけた  
 緑釉瓦である。内面は、細かい布目圧痕が観察  
 でき、端部及び側面を糸切りにより成形する。  
 565は、外面に緑色の釉をかけた緑釉瓦である。  
 側面を糸切りにより成形する。556は、重なり



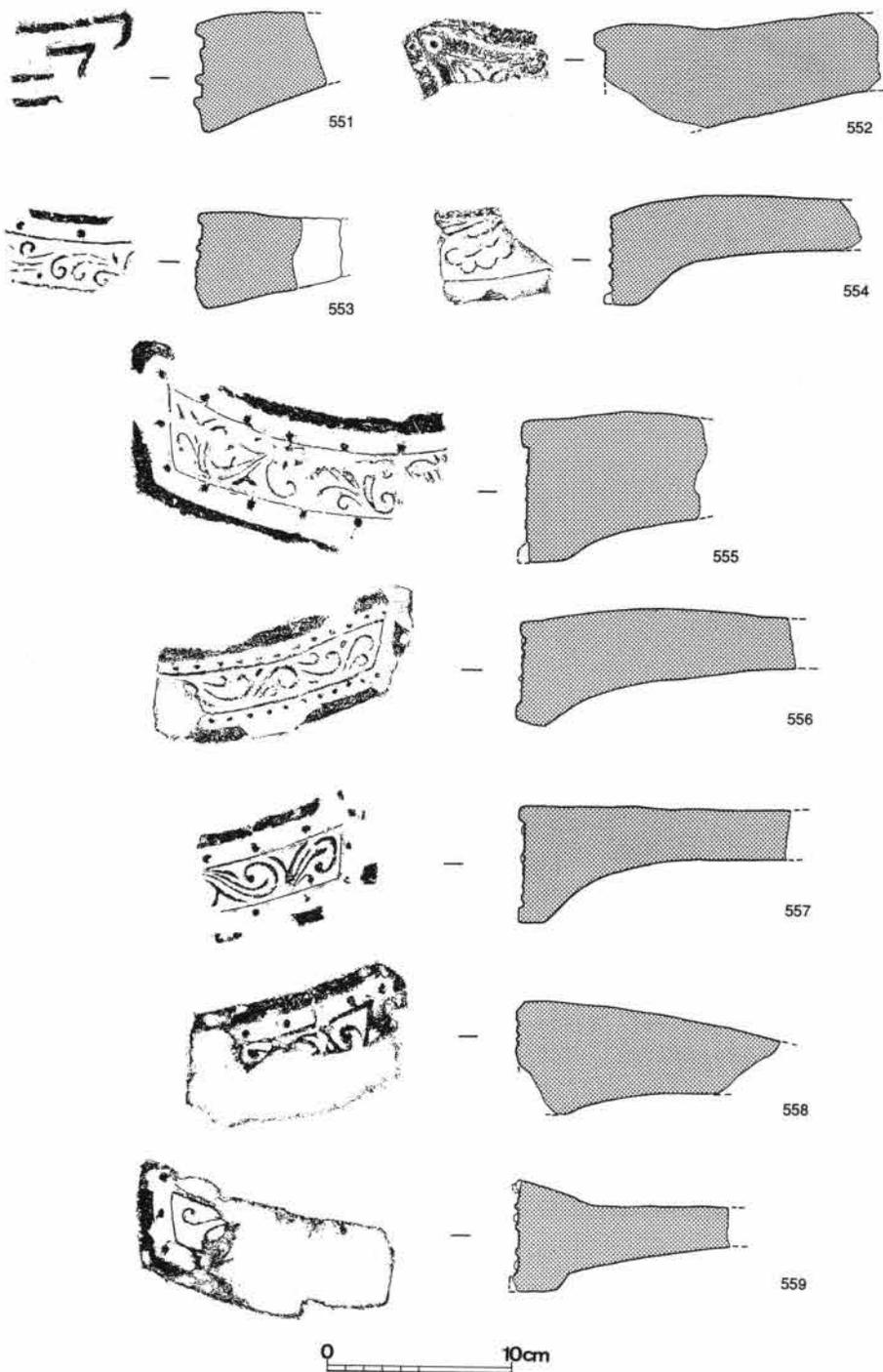
第31図 出土瓦拓影(1) (平安時代)

545・549. A区 547・548. B区 546. 土坑159 550. 土坑110

あった斜格子の叩き目をもつもので、内面に布目圧痕が観察できる。

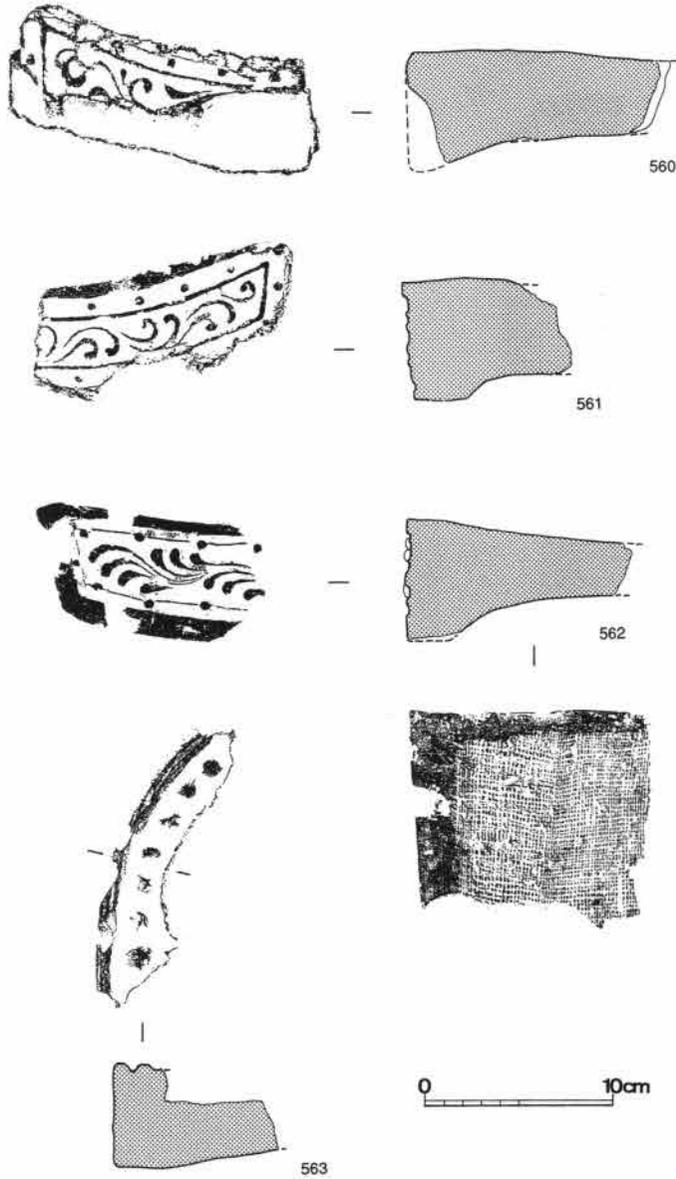
(平瓦) 567は、566と同じく斜格子の叩き目をもつもので、内面に細い布目圧痕をもつ。568は、外面には縄目叩き目が観察でき、内面は細い布目圧痕である。端部及び側面を糸切りにより成形する。569は、外面には縄目叩き目、内面には布目圧痕が観察できる。端部及び側面を糸切りにより成形する。

以上が、平安時代の出土瓦の概観であるが、型式認定については、残存状況が不良であり、正確に把握できない個体もある。基本的には、難波宮式・平城宮式・長岡宮式のように平安京創建以前の他域からの搬入瓦と、平安京創建を含む平安時代前期の瓦群、そして、



第32図 出土瓦拓影(2) (平安時代)

554・556・559. A区 551~553・555・557. B区 558. 井戸231

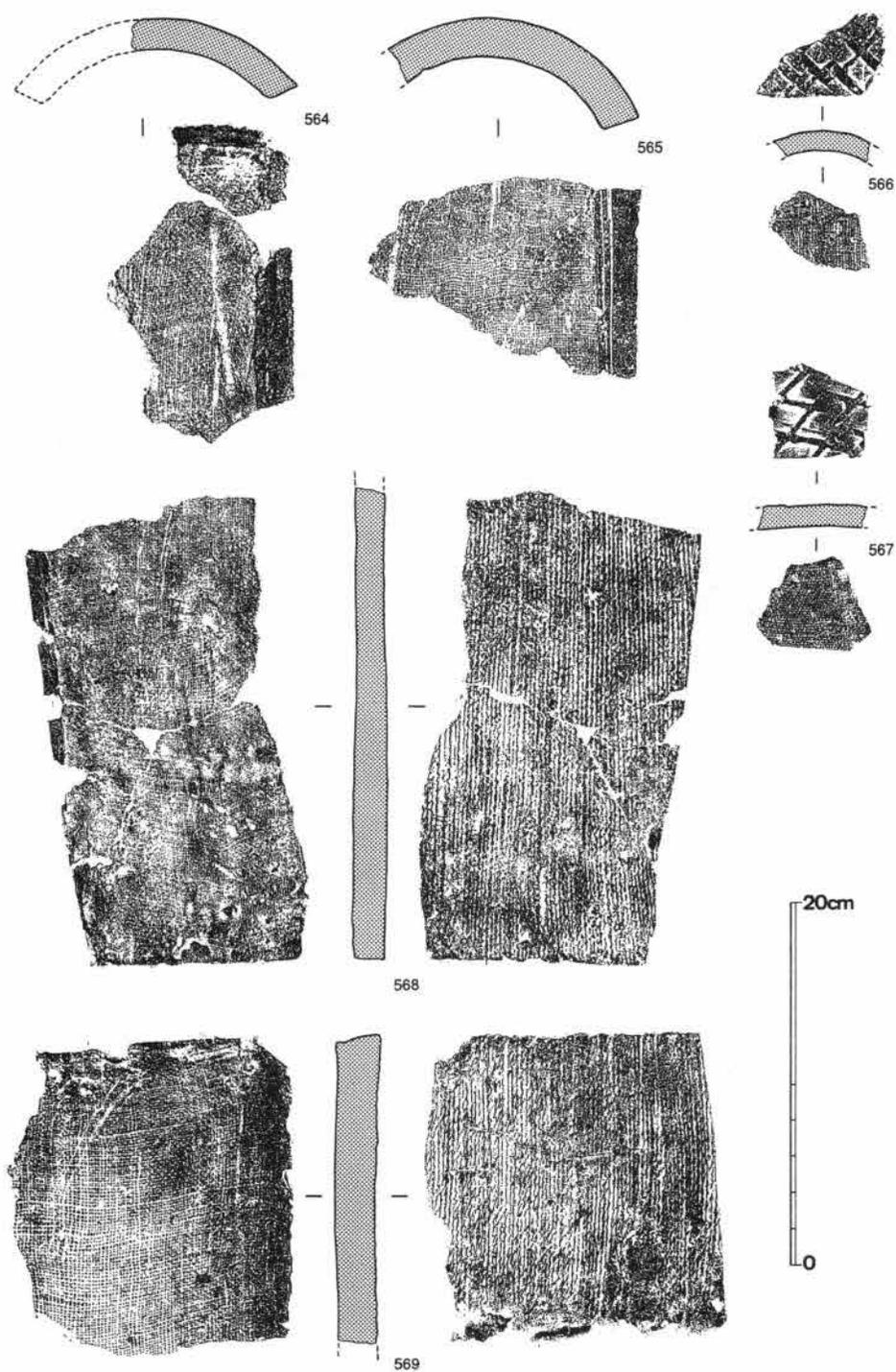


第33図 出土瓦・鷗尾拓影 (平安時代)

560. 井戸231 561. 北トレンチC 2区 562・563. B区

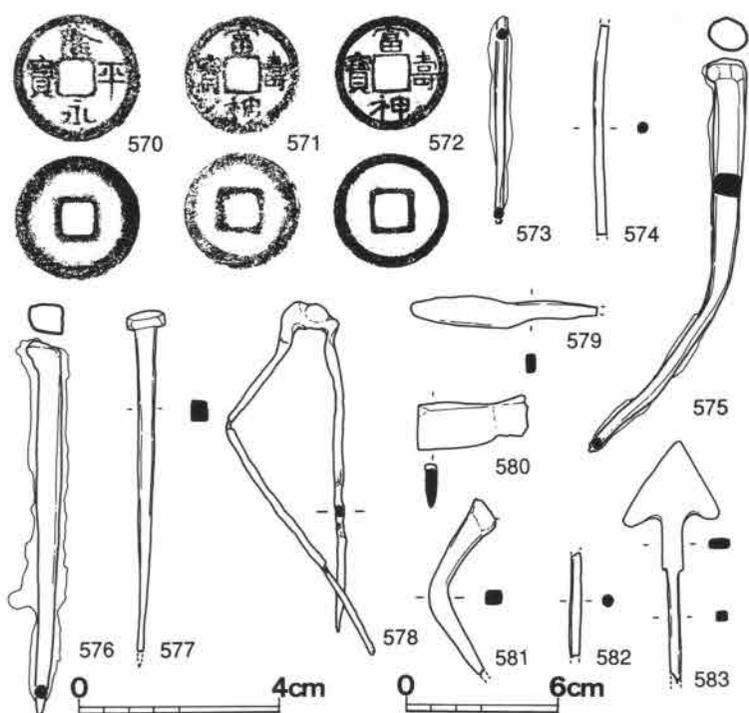
平安中期に比定できる瓦群に分類できる。出土点数も少なく、また、出土地点の大半が遺物包含層であるため、瓦の示す年代観と土器の型式に年代差が生じている。その中にあって、井戸231出土の軒平瓦558と軒丸瓦560は、残存率が不良ではあるが、井戸の年代を総合的に判定する際、重要な資料となる。

図示し得なかったが、軒瓦の破片も出土しており、また、丸瓦・平瓦も比較的多く出土



第34図 出土瓦拓影(3) (平安時代)

564. 土坑169 565. 北トレンチ土坑409 566~569. A区



第35図 出土銭貨・鉄製品実測図 (平安時代)

570・574・577～583. A区 571. 井戸231 572. F区 573・575. E区

している。検出した建物跡は非常に規模も小さく、瓦葺きの建物とは認定できないが、丸瓦・平瓦の出土量から隣接地に中心的施設が存在する可能性が大きい。

(銭貨及び鉄製品) 570は、皇朝十二銭の六番目である隆平永宝(初鑄796年)である。571・572は、同じく7番目の富寿神宝(初鑄818年)である。572の鑄上りは良好である。573は、直径0.3cm・残存長8.4cm、574は、直径0.3cm・残存長8.3cmを測る針状鉄製品である。575は、歪みを復原すると全長18cm、針頭部が短径1.2cm・長径1.6cm、576は、全長7.4cm、針頭部は0.6cm四方、577は、全長6.9cmを測る鉄釘である。578は、太さ0.3cmの直径をもち、針部が基部で二又に分岐する銅製品である。579・580は、残存率は不良であるが、刀子または小刀の一部である。583は、全長9.6cmを測る鉄鎌である。

570の隆平永宝の初鑄年代は、796年であり、富寿神宝の初鑄年代は、818年である。8世紀末から9世紀前半の明確な遺構は、現状では検出していないが、土坑170の器種構成と施釉陶器がほとんど見られないことから、出土銭貨と時的に近似しており、後述するが、遺物包含層の堆積時期を具体的な暦年代で示す上で非常に重要である。

### (3) 安土・桃山時代の遺構・遺物

第36図に図示した遺構は、江戸時代に比定できるものもあり、一部、14・15世紀の遺物

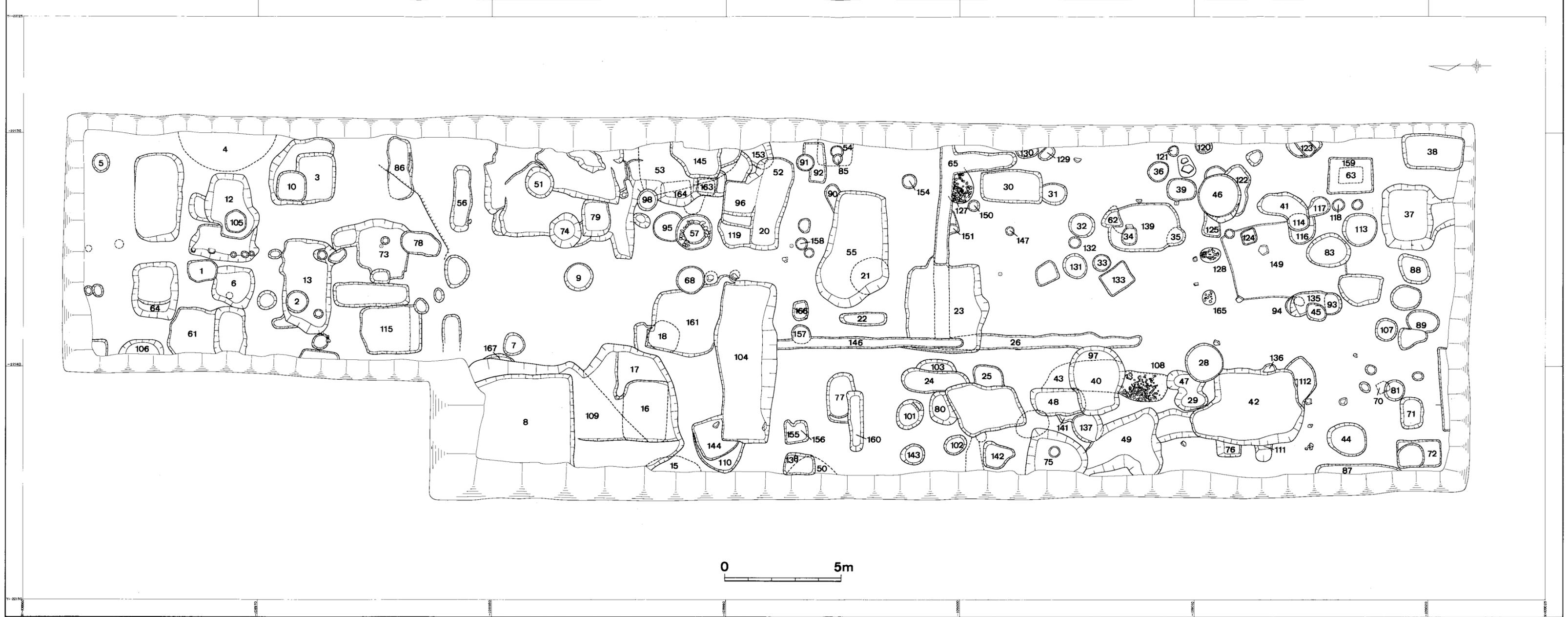
が出土する遺構も含まれている。しかし、基本的には、安土・桃山時代を中心とする遺物が出土する遺構が多く見られる。時期的には、先述した平安時代後期から中世の遺物出土量は希薄であり、江戸時代中期に比定できる遺構も希薄である。

ここでは、以上のことを念頭におき、安土・桃山時代を中心に、検出した遺構・遺物について概観するが、後述する江戸時代の遺構・遺物は、18世紀中頃から19世紀が中心となっており、年代差が生じるため、江戸時代初頭に比定できる遺物についても、ここで取り上げておきたい。また、同時期の遺構及びその配置は、極めて煩雑であり、一定のまとまりをもって遺物が出土した土坑8と土坑42を中心に、出土遺物の概観をしておきたい。なお、全出土遺物の器種・器形の比率・構成などを表化し、概ねの傾向を表示すべきであるが、整理箱にして300箱を越える出土量であり、実測可能な土器を中心に土坑8と土坑42について図示し、その傾向にかえたい。

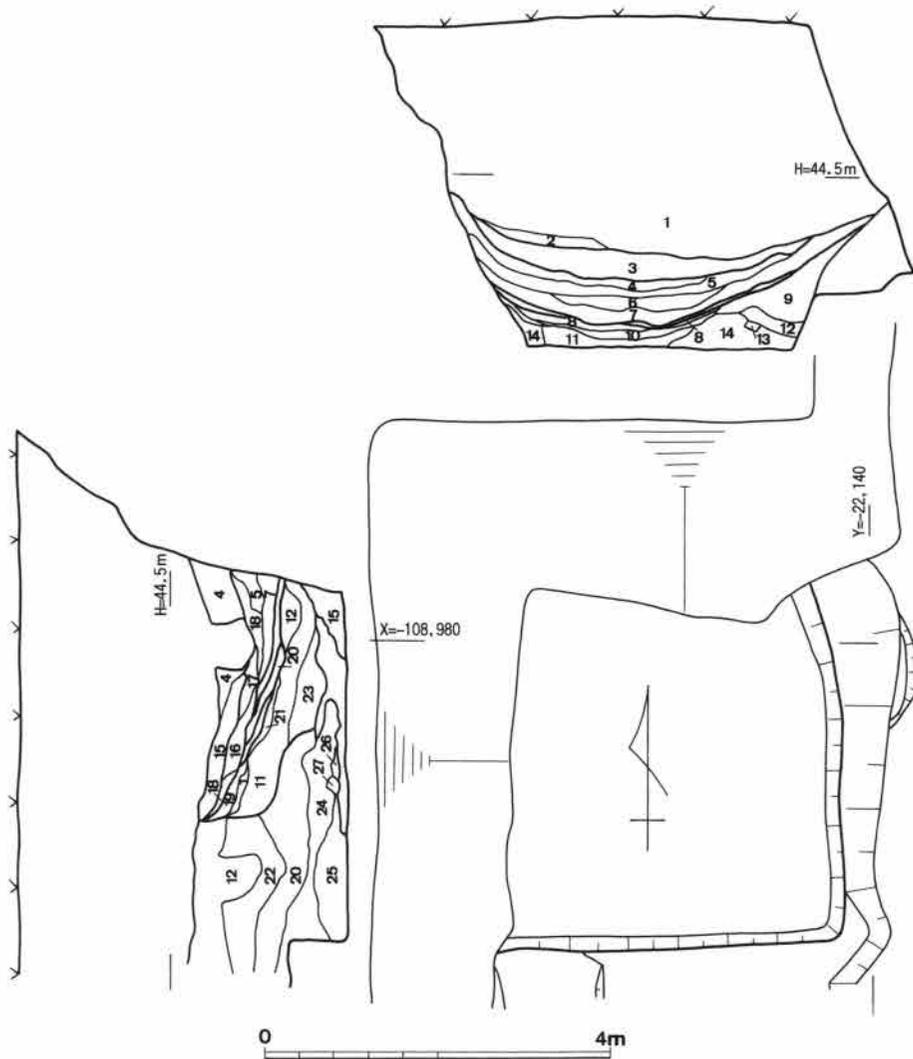
安土・桃山時代の遺構の検出は、トレンチ南方においては、第4図の第65層淡黒褐色土を基層に掘り込まれる一群とその上層に堆積している第18層を基層とする一群にほぼ分けられる。しかし、遺構の切り合いも複雑であり、第36図の遺構平面図は、基本的にトレンチ北方については、地表下1.6~1.8m、南方については、2mを前後するレベルにおいて検出した遺構を中心に図示した。

正確に輪郭を把握した遺構は、200前後を数える。トレンチ中央には、南北に走る溝26とそれに直交する溝65が位置しており、区画を目的に穿たれた溝である可能性が高い。その直交する2条の溝周辺には、土坑・ピット・井戸の存在は希薄で、溝65を中心に南北に分かれる2群と溝26を中心に西方に分かれる1群の合計3群に分けられる。また、溝26は、途中で途切れているが、南方延長線上には、ほとんど遺構は確認されておらず、溝を利用した区画から溝を利用しない区画に移行した可能性が指摘できる。

土坑8と土坑42は、一連の遺構の中で規模の大きい土坑であるが、出土遺物から両者がほぼ同時期であることから、溝26で区画された空間内に同時期に併存していたことがわかった。また、土坑8・42とはほぼ同時期の土坑104は、溝26の掘り直しである溝146を切り込んでおり、先述した区画の変遷を示唆している。各区画内での建物跡を示すピットや礎石・根石充填土坑などの検出は、明らかではないが、土坑112の西隣接部分で3石ではあるが直線的に並ぶ礎石(根石)列を確認しており、また、礫を充填した根石土坑128と165のラインが、溝26の主軸と直交している。土坑39とピット120間では、上面が平らな礫を2石据えたピットも建物跡の存在を示唆している。なお、土坑42から土坑48にかけては、比較的規模の大きい土坑群が掘り込まれており、この一画が、建物と建物の間に存在した平坦な空間である可能性も指摘できる。



第36図 南トレンチ上層遺構平面実測図



第37図 土坑8実測図

- |                      |                               |                         |
|----------------------|-------------------------------|-------------------------|
| 1. 茶褐色土              | 2. 濁茶褐色土                      | 3. 濁暗茶褐色土(焼けた壁土や瓦・焼土含む) |
| 4. 濁黒褐色炭混入土(瓦・土器を含む) | 5. 明褐色礫層                      | 6. 暗茶褐色砂利層              |
| 7. 暗茶褐色土(3に比べ淡い)     | 8. 暗茶褐色土(木製品と土器含む)            | 9. 褐色砂礫                 |
| 10. しじみを大量に含む褐色土     | 11. 淡黒褐色土(木製品と礫含む)            | 12. 暗茶褐色土               |
| 13. 暗青灰色粘土ブロック       | 14. 暗茶褐色土(拳大の礫含む)土坑掘り込み直後の流入土 |                         |
| 15. 褐色砂利焼土混入土        | 16. 褐色土                       | 17. 暗褐色砂利               |
| 18. 炭混入褐色土           | 19. 褐色砂利                      |                         |
| 20. 褐色礫              | 21. 褐色礫(20より明るい)              | 22. 褐色礫                 |
| 23. 茶褐色砂利層           | 24. 暗茶褐色土(礫混入)                | 25. 暗茶褐色土(礫混入)(24より礫細い) |
| 26. 黒褐色炭混入土          | 27. 茶褐色礫ブロック                  |                         |

土坑8 土坑8は、トレンチ西北部の屈折部分で検出した大型方形土坑であり、南辺は4m以上、東辺では4.2m以上を測り、平面プランは方形を呈している。地山である淡黄褐色礫層に掘り込まれた土坑底部の状況は、垂直に掘り込まれており、底部の形状は、平坦である。壁面と底面は直角をなしており、残存していないが、板材で壁を構成していたと考えられる。復元的に土坑規模を考えた場合、北壁中央部で堆積層がレンズ状をなしているのに対して、西壁では、北方に傾斜する堆積状況を呈しており、土坑が埋没する段階における土坑の中心部は、検出した底面の北端に位置する可能性が高く、少なくとも一辺6mを越える規模を有していた可能性が考えられる。

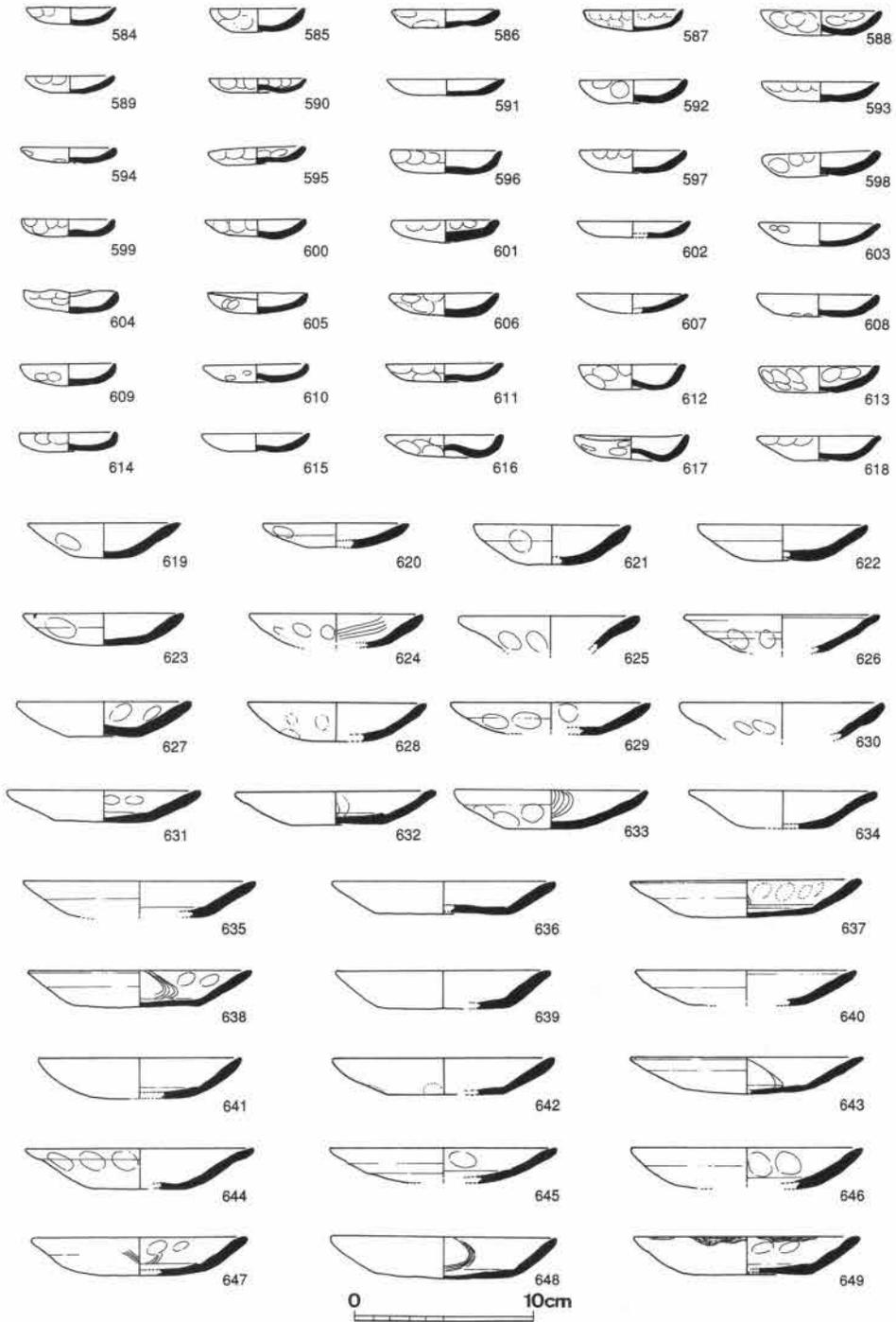
埋土の堆積状況は、8・11～14層の炭を主体とする堆積層群を最下層として認識でき、7・10層が最下層と9層上に堆積しており、第2堆積層群として認識できる。これらの層群は、基本的には炭を主体にしており、明らかに分層は可能ではあるが、時間的には、最下層群と第2堆積層群はあまり隔たらない時期に堆積したと考えられる。なお、土坑内から、多量の陶磁器・瓦とともに、樹木や漆器・建築部材などが出土しているが、大半は最下層群上面から第2堆積層群にかけて出土したものである。なお、5層は、炭を含まない礫を主体としており、3層は、焼土・焼けた瓦・礫を多く含んでおり、第2堆積層以下とは様相が異なっている。第2堆積土中、10層は、貝殻によって構成されており、大量に投棄された状況を呈している。

土坑8の性格であるが、以上の堆積状況と土坑底面の形態から、土坑掘り込み時点では、地下収納庫としての機能があったものの、その機能を消失した段階で、日常生活で生じたゴミを焼いたり、貝殻などを投棄したゴミ坑としての副次的機能が生じたと考えられる。

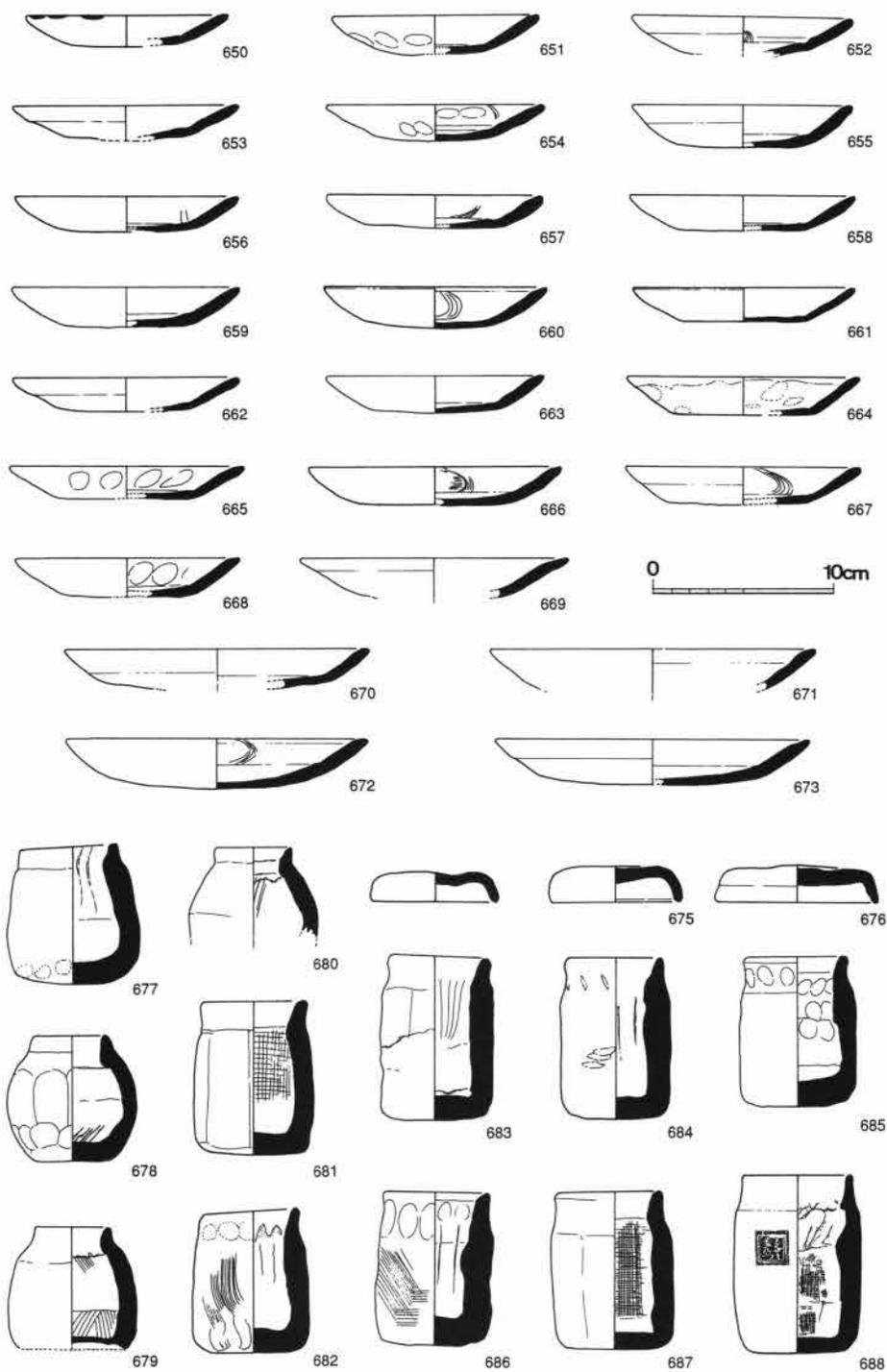
土坑8出土遺物(第38～46図) 土師皿584～673 土坑から大量に出土した土師皿は、584～618のように口径5cmから7cmを測る一群、619～634のように口径8.6cmから11cmを測る一群、635～669のように口径13cmから14.8cmを測る一群、670～673のように口径16.8cmから17.2cmを測る一群に分類できる。これらの4群の出土量の比率は、最大径を測る670～673の一群がわずかの出土量であり、成形技法も、手捏ねによるものが大半あり、内面にナデ上げ痕が残る個体も見られる。なお、口縁端部に煤が付着し、燈明皿として使用された土師皿は、最小径を測る584～618群には見られない。

焼塩壺674～688・696～698 基本的には、円筒状を呈する一群と底部直上に最大径をもつ一群、中央部に最大径をもつ一群に分類できる。内面には、布圧痕やナデ、絞り痕を残す個体があり、外面に17世紀前半に見られる「ミなど 藤左エ門」の刻印をもつ個体も見られる。

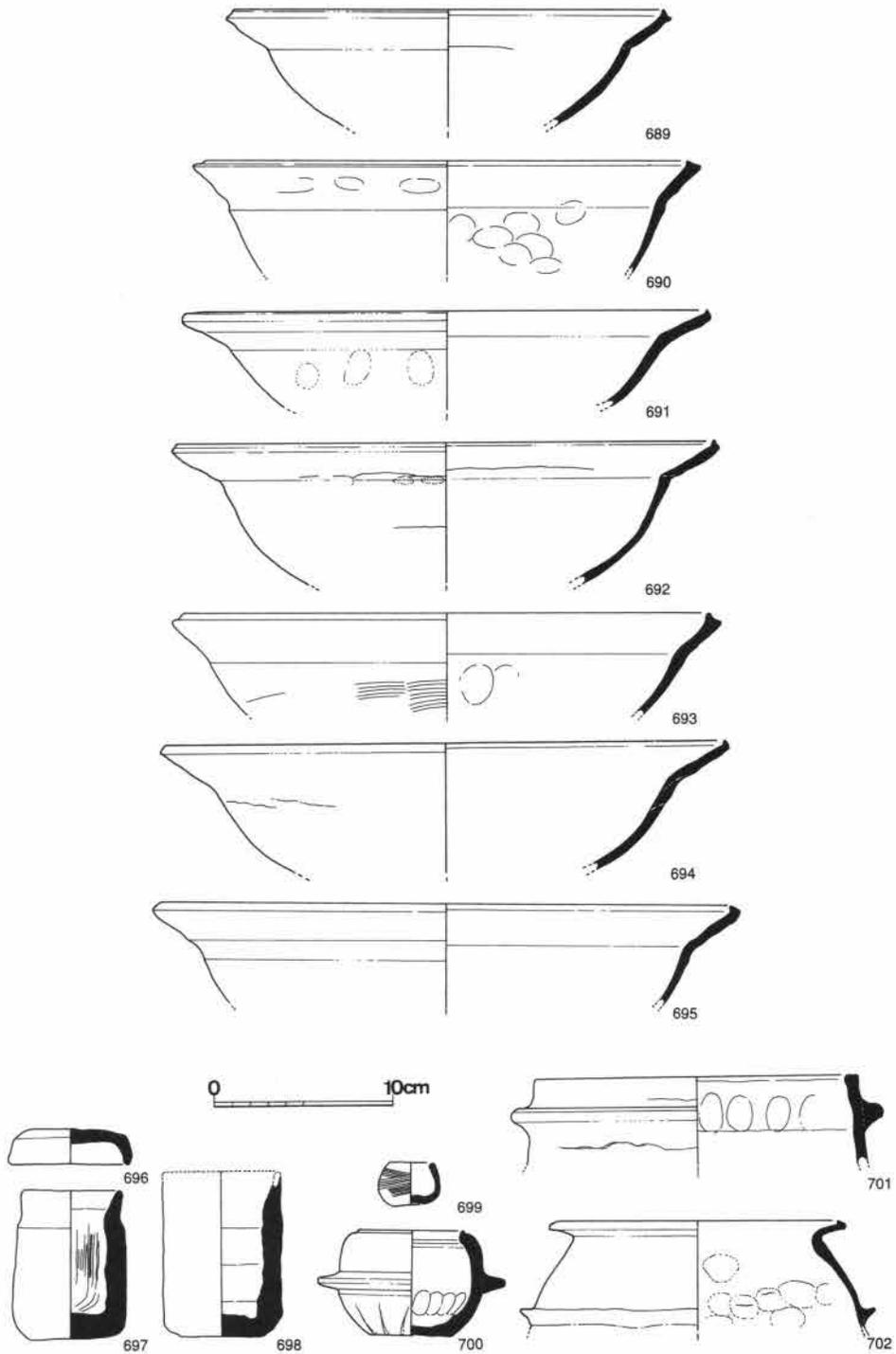
焙烙689～695 口径は24.8cmから32.8cmと、ばらつきがあるが、丸い底部をもち、屈曲



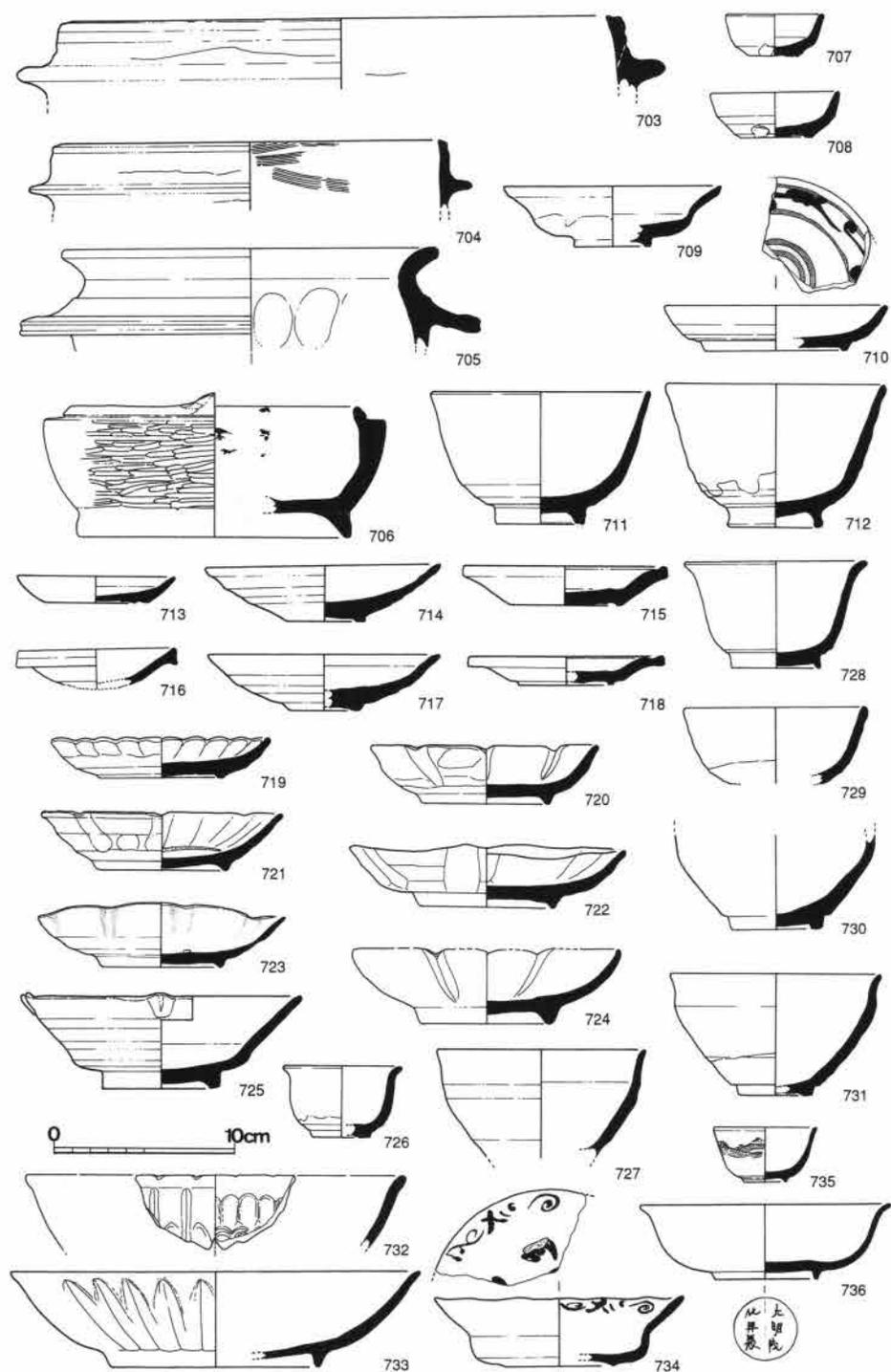
第38図 出土遺物実測図(23) (安土・桃山時代) 土坑 8



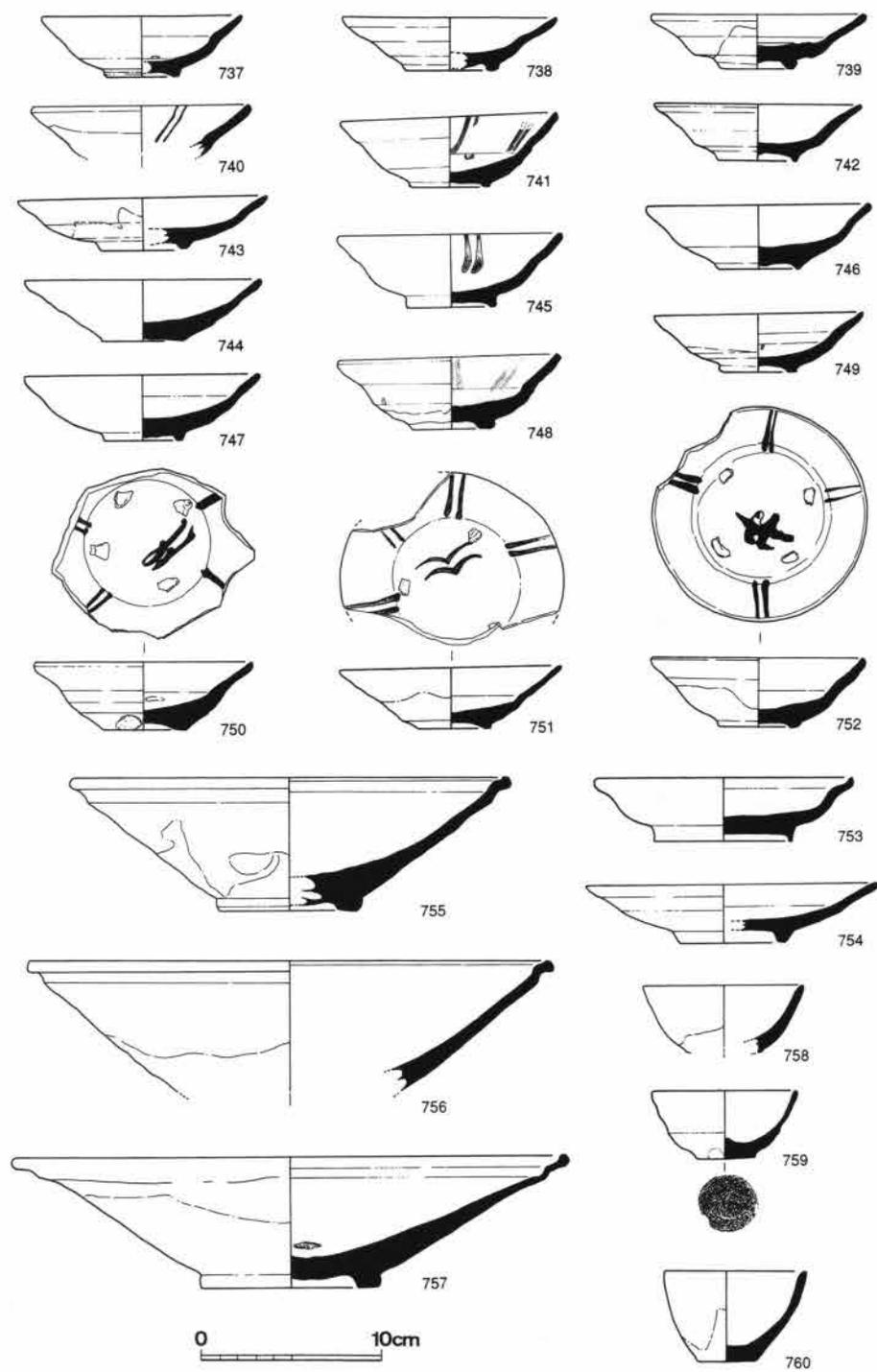
第39図 出土遺物実測図(24) (安土・桃山時代) 土坑8



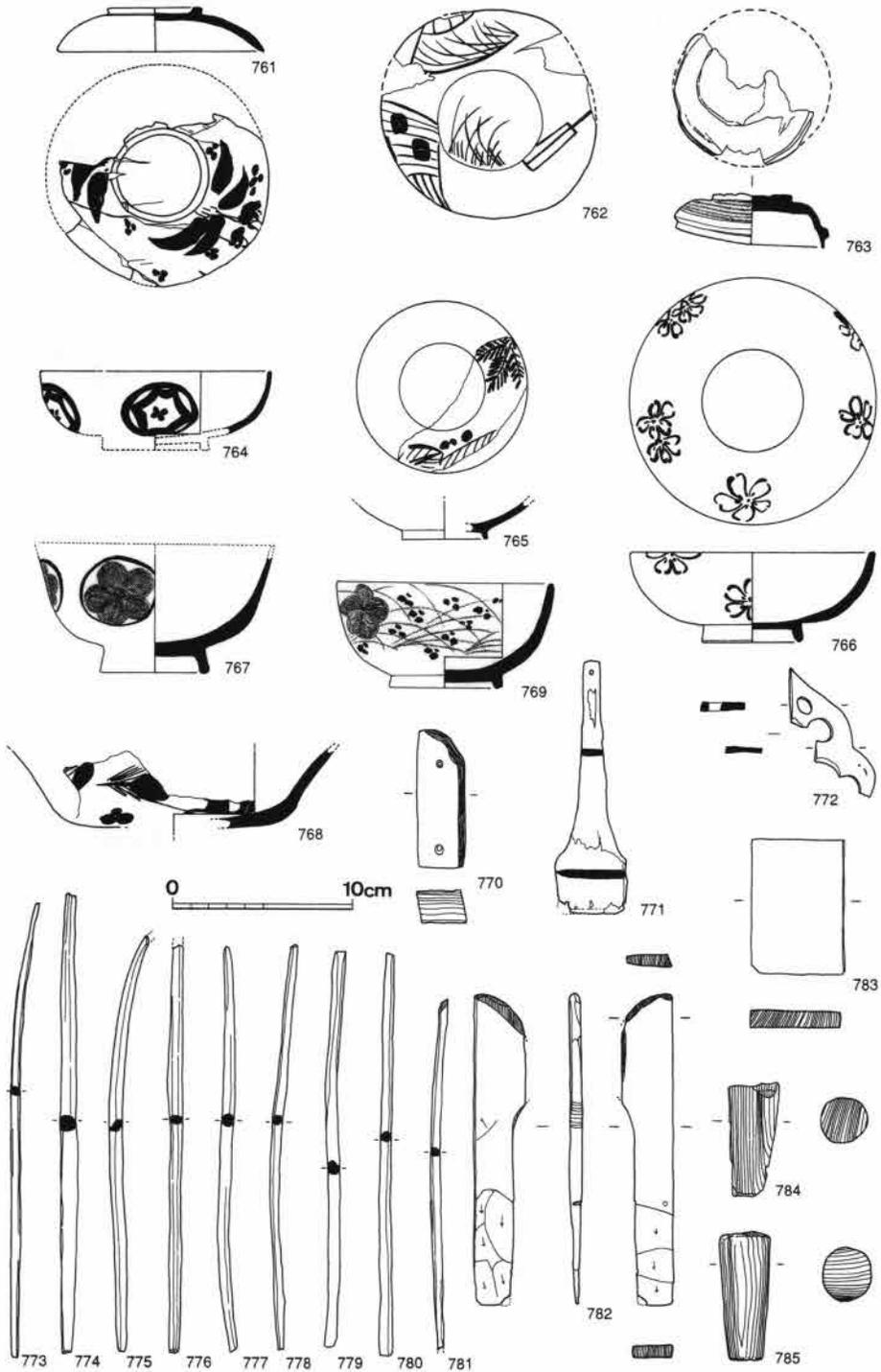
第40図 出土遺物実測図(25) (安土・桃山時代) 土坑 8



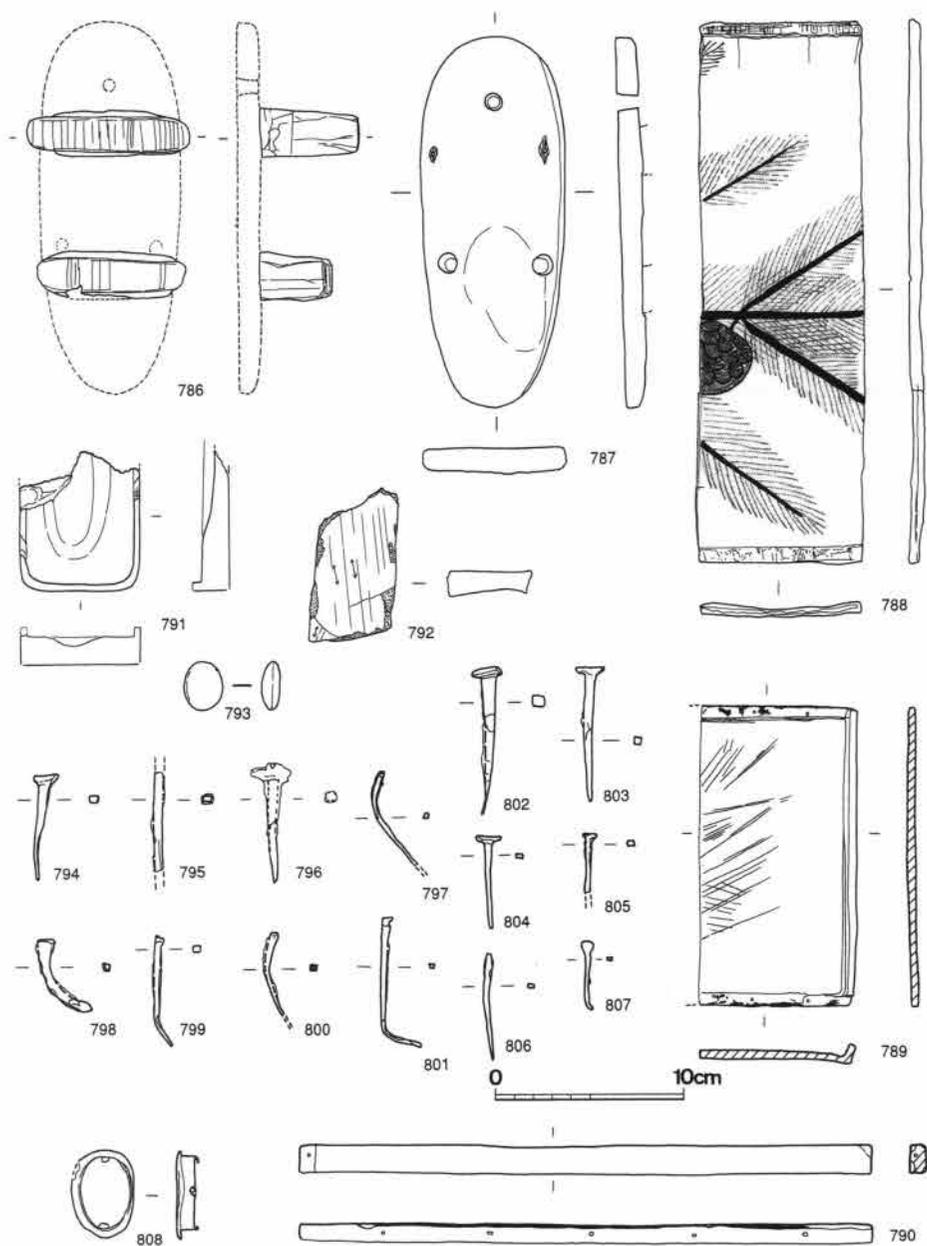
第41図 出土遺物実測図(26) (安土・桃山時代) 土坑 8



第42図 出土遺物実測図(27) (安土・桃山時代) 土坑 8

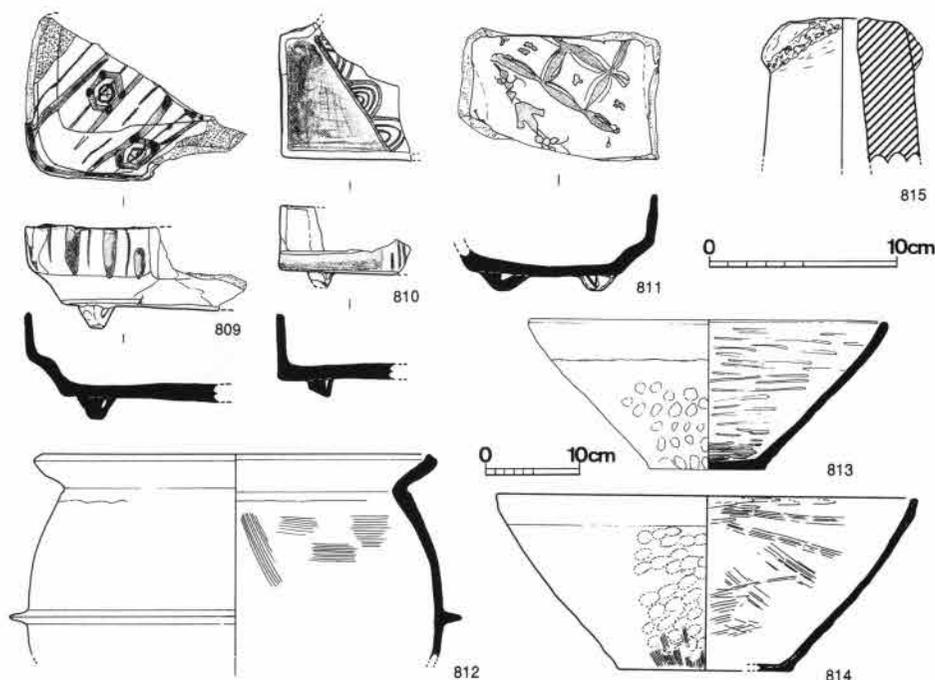


第43図 出土遺物実測図(28) (安土・桃山時代) 土坑 8



第44図 出土遺物実測図(29) (安土・桃山時代) 土坑 8

し外反する口縁をもつ。口縁端部は内面に肥厚する形態が一般的である。模型羽釜 700 は、鍔を胴部中央にもち、底部内面に指頭圧痕が見られる。羽釜701~705 口縁部に鍔をもつ701・703・704と、頸部で屈曲し、胴部肩に短い鍔をもつ702、頸部直下に水平にのびる鍔をもつ705に分けられる。火舎 706は、外面を棒状工具によりていねいにヘラ磨きを



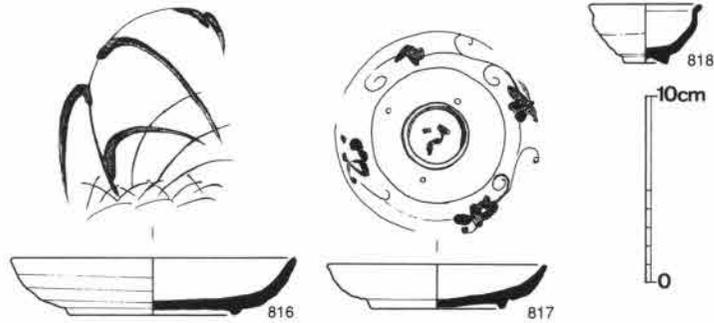
第45図 出土遺物実測図(30) (安土・桃山時代) 土坑8

施す。志野系・小杯707・708 底部3か所に胎土目を有し、底部直下で屈曲する。瀬戸美濃系・皿 710は、内面に鉄絵が描かれている。瀬戸美濃系・天目椀727・730・731 暗茶褐色の釉を施し、削り出し高台をもつ。瀬戸美濃系・皿715・718 底部で屈曲し、上方へ肥厚する口縁端部をもつ。志野系・皿719 皿の受け部から口縁部まで波状を呈するように外面からおさえている。志野系・鉢734 直立する鉢部と直線的にのびる口縁部からなり、口縁部内面には、鉄絵が観察できる。釉調は、乳白色を呈し、凹凸が目立つ。

中国製白磁椀736 底部内面は、わずかに饅頭心の傾向があり、外面には、「大明成化年製」の文字が認められる。唐津系・皿737～754 口縁部に2条の直線で施文する絵唐津740・741・745・748・750～752の一群と施文のない一群に分けられる。基本的には、内面に胎土目が観察できる。753は、屈曲率が高く、口縁端部を上方へつまみ上げている。唐津系・鉢755～757 底部から斜め外方へ直線的にのび、口縁部では屈曲する。唐津系・小杯758～760 糸切りの底部に砂目を確認できる。

漆器・椀(第43図) 761～769 先述したように、土坑8の第2堆積層から漆器が比較的まとまって出土している。しかし、残存状態が著しく不良であり、図化できない個体が多く、かろうじて図化できたものは、9点にすぎない。762は、木質部分の残存状況が不良であり、厚みや断面・側面形態など図示し得なかった。また、763は歪みが著しく、768は、

通有に見られる椀であるが、口縁部が上圧によって外方へ広がっている。761は、蓋であり、内外面とも黒漆を施し、外面に花文を描く。



第46図 出土遺物実測図(31) (安土・桃山時代) 土坑8

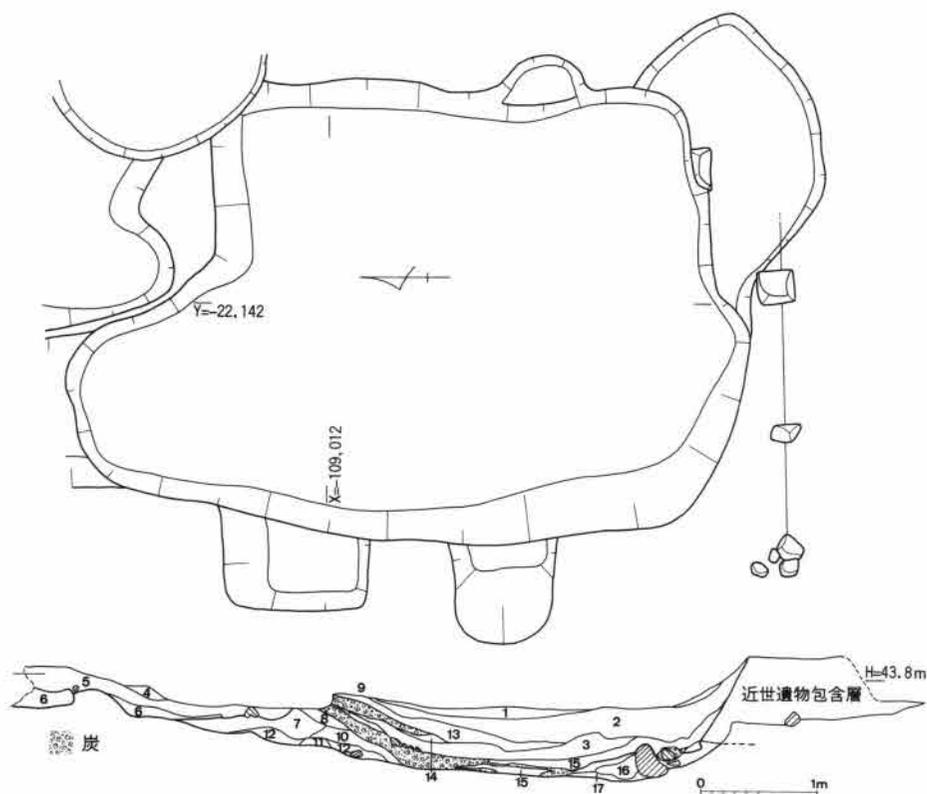
766は、内外面とも黒漆を施し、外面には、赤漆で単形ではあるが、花文を描く。

**加工木製品** 770は、用途は不明であるが、上端部を波状に削り、直径0.2cm程度の2孔を貫通させる。771は、全長14cmを測る刷毛で、握部上部には、紐通し用の孔を穿っている。一方、ハケ端部には、ハケを固定するために、端部から0.3cmの部位に列点が見られる。772は、複雑に加工された加工木片で、厚みは0.2cmと非常に薄い。調度品などの加飾に使用されたものか。773～781は、21.6cmから25.4cmを測る箸である。不整形ではあるが、基本的に断面形態が円形である。783は、両面に黒漆を塗布した漆製品である。用途は不明であるが、調度品の一部と考えられる。782は、しゃもじ形の木製品であり、約50%は欠損している。握部には削りを中心とする加工痕が明瞭に観察できる。784は、長径2.8cm・短径1.2cm・全長6.4cm、785は、長径2.8cm・短径1.5cm・全長7.2cmを測る栓である。786は、下駄の基部から5.2cmと3.8cmの長さの歯を削り出した下駄である。787は、歯の部分が欠損しているが、前後19.6cm・左右7.6cmを測る下駄である。788は、端部に剝離痕を残す漆製品であり、黒漆を基調に、赤漆で松葉・種子を描いている。剝離痕内法の長さは26.6cmを測る。789は、接合痕以外の面に黒漆を塗布した漆製品である。一方の端部を「L」字形に削り出しており、盆や膳の一部と考えられる。790は、全面に漆を塗布しており、一面に5.6cm間隔に穿孔を行っている。

**石製品** 791は、海と陸部の一部を欠く硯である。陸部中央は、使用により凹状を呈している。硯の幅は、6.4cmを測る。792は、平偏な粘板岩系の砥石で擦痕を良好に残している。793は、長径2.6cm・短径2cm・厚み0.9cmを測る那智石製の基石である。

**鉄製品・青銅製品** 794～807は、頭部が半月形を呈し、断面形態が方形を呈する鉄釘である。808は、釘穴を残す刀子の鞘金具である。内法長径4cm・短径2.6cmを測る。

以上が、土坑8の出土遺物の概要であるが、その他、第45図809～811の織部・向付、瓦質・播鉢813～814、816～817の志野・皿、818の瀬戸・美濃の小天目・椀なども出土している。基本的に第2層を中心とする層位からの出土遺物であり、また、短時間内に堆積し



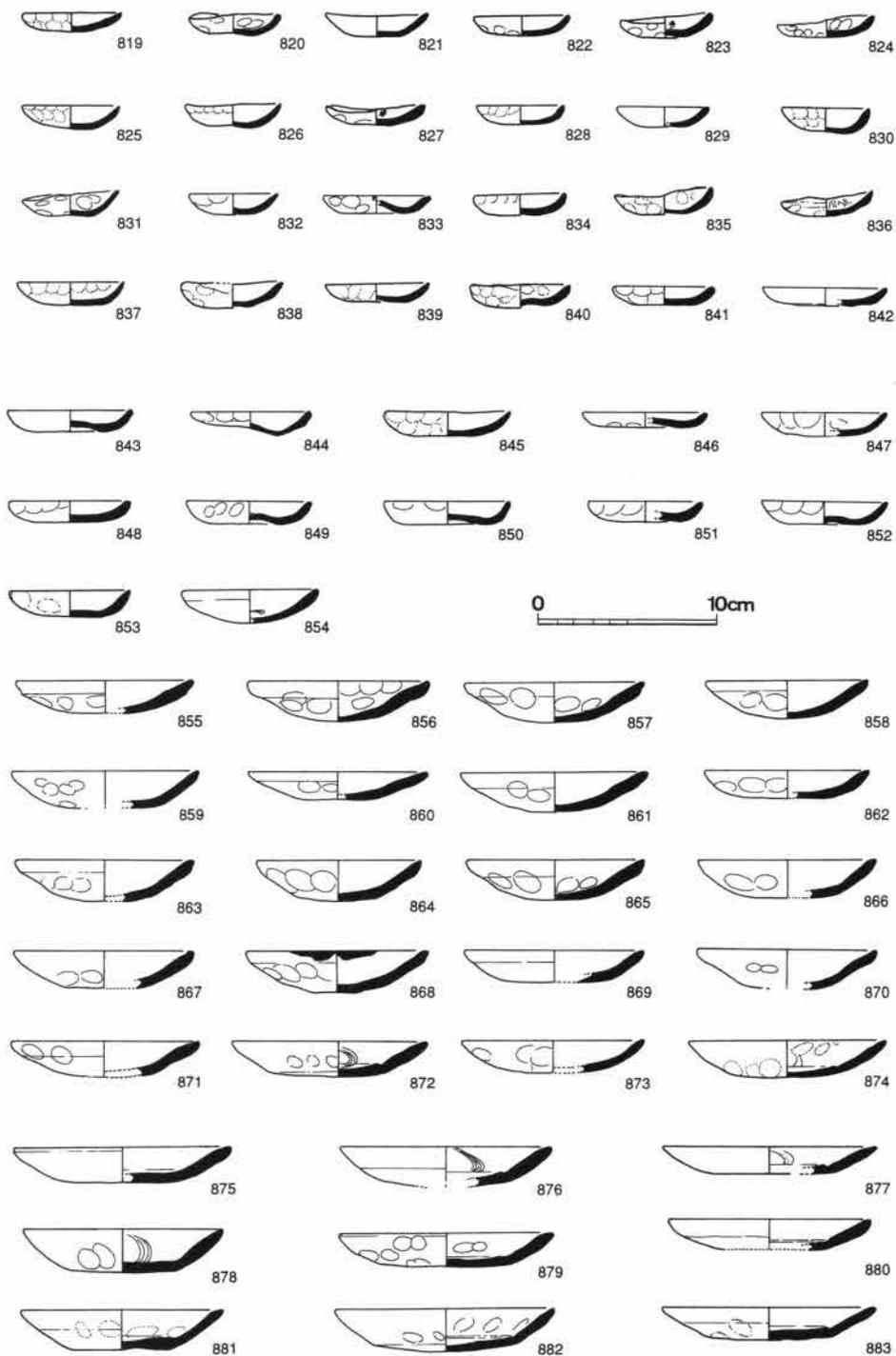
第47図 土坑42実測図

- |                 |               |                 |             |
|-----------------|---------------|-----------------|-------------|
| 1. 淡黄褐色粘質土      | 2. 濁茶褐色土(炭混入) | 3. 濁茶褐色土(2より暗い) | 4. 濁灰色土     |
| 5. 濁淡茶褐色土(砂利混入) | 6. 濁赤茶褐色土(焼土) | 7. 淡茶褐色砂利       | 8. 濁茶褐色土    |
| 9. 濁暗茶褐色土       | 10. 暗茶褐色土     | 11. 茶褐色砂質土      | 12. 淡茶褐色土   |
| 13. 濁暗茶褐色土(炭混入) | 14. 濁暗茶褐色土    | 15. 暗茶褐色土       | 16. 濁黄褐色粘質土 |
| 17. 淡黒褐色粘土      |               |                 |             |

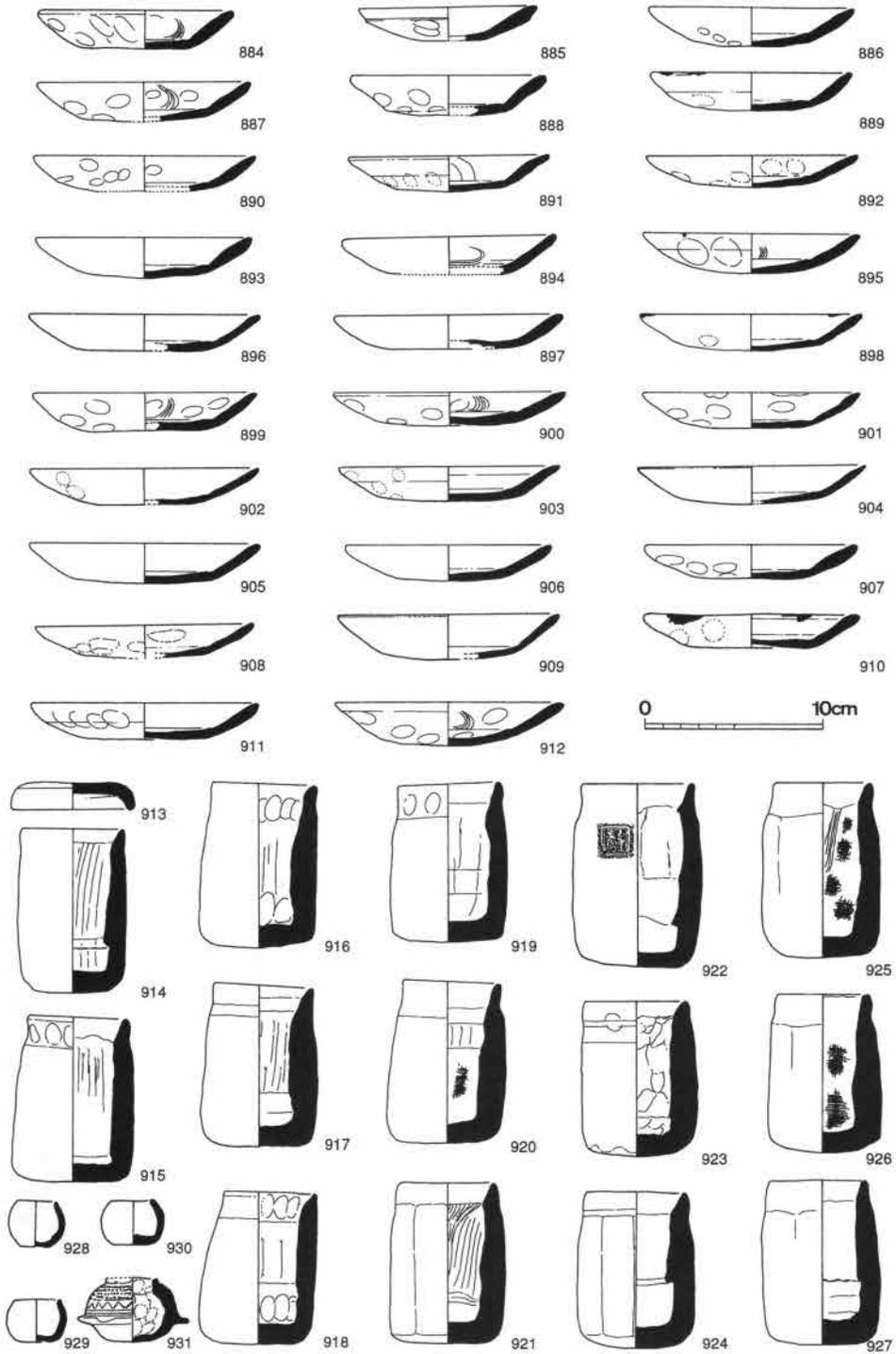
たことから、一括性が高い資料群である。

土坑42 土坑の北東隅部は掘り残し部を設けているが、基本的には、南北6m・東西4mの方形プランを有している。土坑中央部の深さは0.6mを測り、南に深く北に浅く掘り込まれている。埋土の堆積状況は、南半の堆積土を削り込み、その後、炭層が北半に堆積していることから、土坑の北半が一定の深さまで埋没した段階で、新たに掘り直されたことが想定できる。

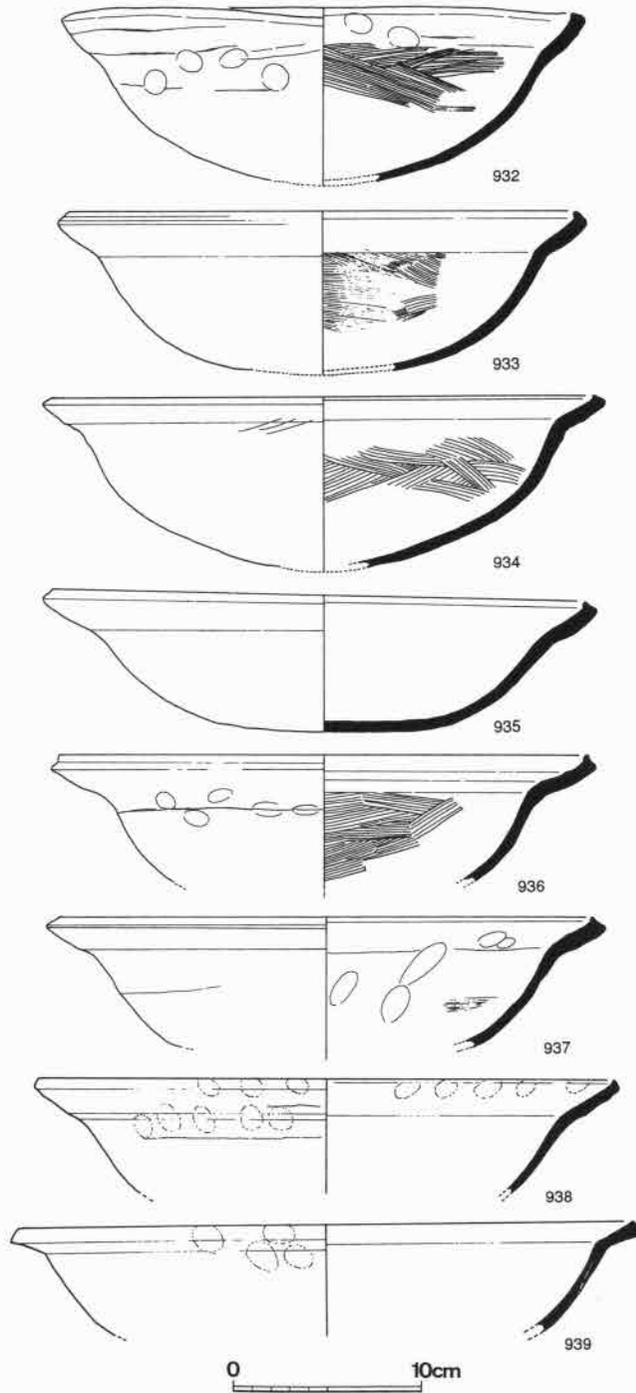
土坑北半の堆積状況は、第1層から第17層までの堆積土が基本的にレンズ状を呈しており、北側については、最下層に炭が堆積し、濁茶褐色土である第3層が中間層として堆積した後、さらに炭層が堆積している。坑内からの多量の出土遺物は、上位炭層の直上堆積層である第13層以下に集中しており、わずかではあるが第1・2層にも認められる。



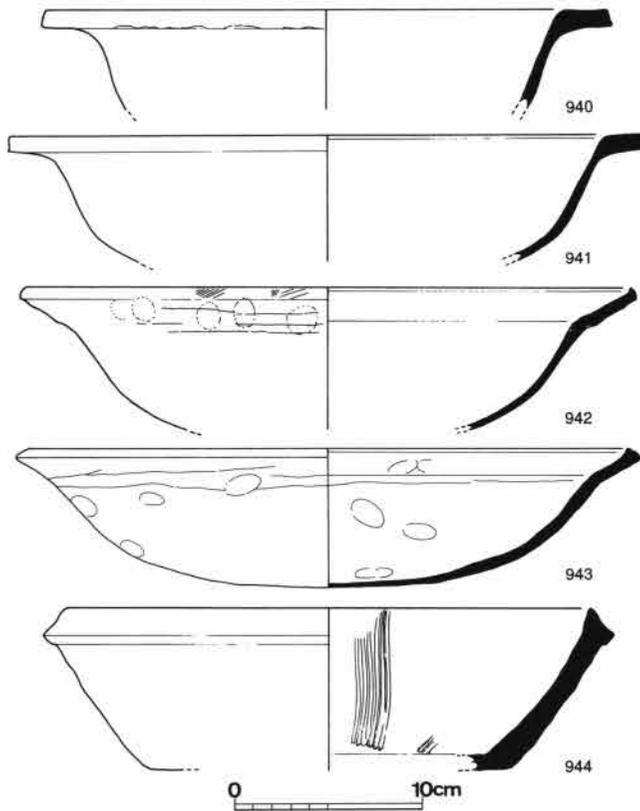
第48図 出土遺物実測図(32) (安土・桃山時代) 土坑42



第49図 出土遺物実測図(33) (安土・桃山時代) 土坑42



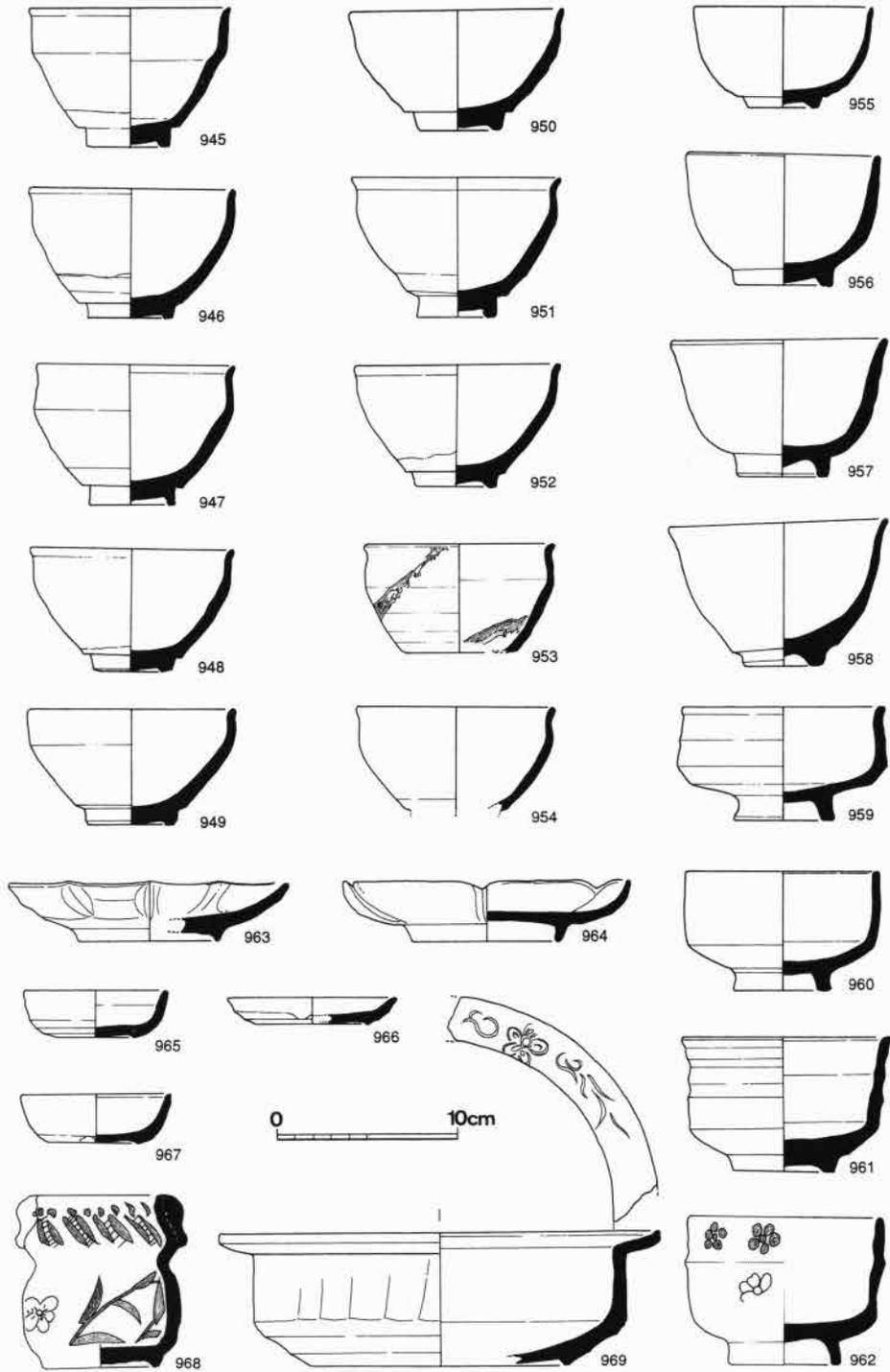
第50図 出土遺物実測図(34) (安土・桃山時代) 土坑42



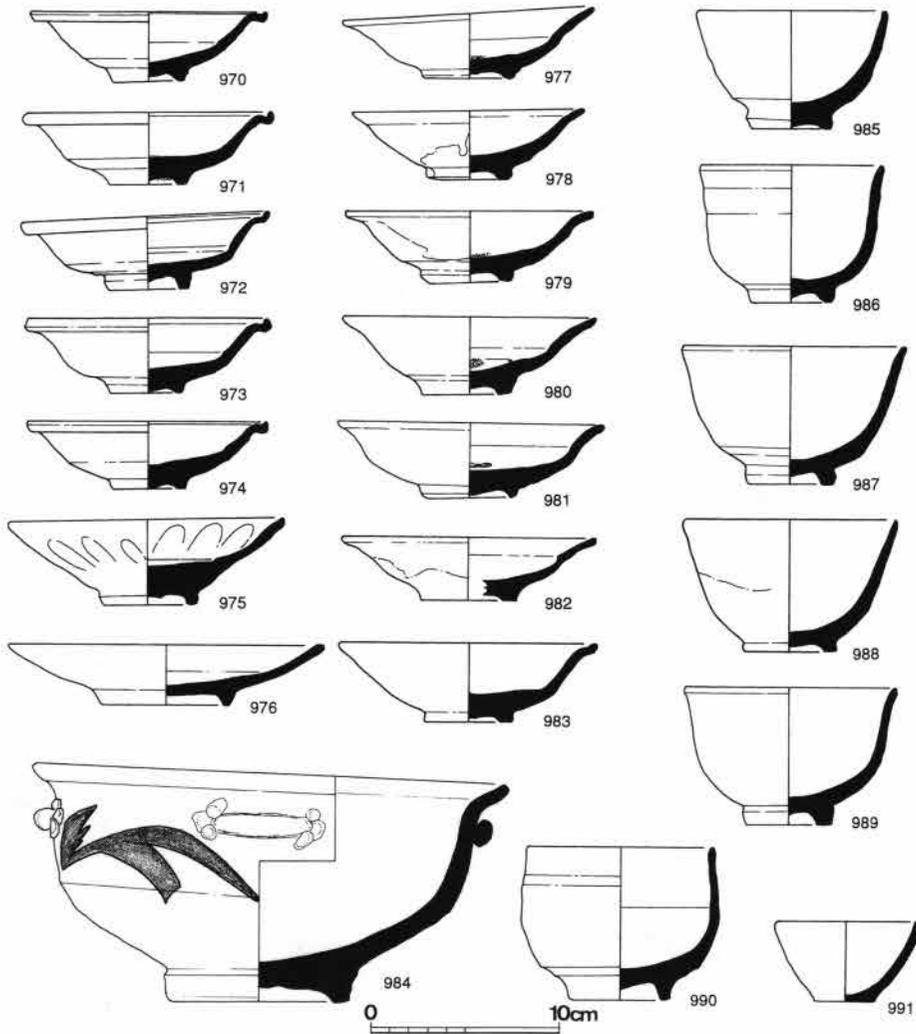
第51図 出土遺物実測図(35) (安土・桃山時代) 土坑42

坑内出土遺物には、土師皿・焼塩壺・模型羽釜・焙烙鍋・瀬戸美濃系陶器・志野系陶器・唐津系陶器・中国製磁器・鉄釘などがある。特に、図示しなかったが、土坑8出土の鉄釘(第44図794~807)と同じタイプの釘も多数あることと、出土地点が炭層であることを勘案すると、坑内で建築部材を焼くなどの処理を行ったと考えられる。

**土坑42出土遺物** 土師皿819~912 出土した土師皿は、多量であるが、法量によってグルーピングできることが土坑8同様、予想できた。そのため、恣意的に口径の異なる個体を抽出し、分類を行った。その結果、口径5cmから7.2cmの一群、口径9.2cmから11cmの一群、12.2cmから13cmの一群の三群に分類できる。土坑8の場合は、さらに17cm前後を測る一群も認識できたことから、最大径の一群は、土坑42については、出土していないことが判明した。調整及び成形は、基本的には、手捏ねであるが、最小径以外の2群では、内面にナデ上げた痕が明瞭に観察できる。また、最小径以外の2群中、数点は燈明皿に使用されたことを示す煤が口縁部に付着している。焼塩壺913~927 基本的には、円筒状を呈しており、内面に布目圧痕が残存する個体も見られる。922の外面には、「ミなど藤左工門」の刻印が認められる。模型羽釜 931は、鉄製羽釜を忠実に模した土器で、鑄直上の波状文・列点文も良好に残存している。土師器・焙烙鍋932~943は、頸部で屈曲し、外反する口縁部と口縁部内面が上方へ肥厚する特徴をもつ。なお、940・941の口縁部は、頸部で屈曲し、水平に横にのびる形態をもっており、口縁端部は、肥厚していない。瀬戸美濃系・



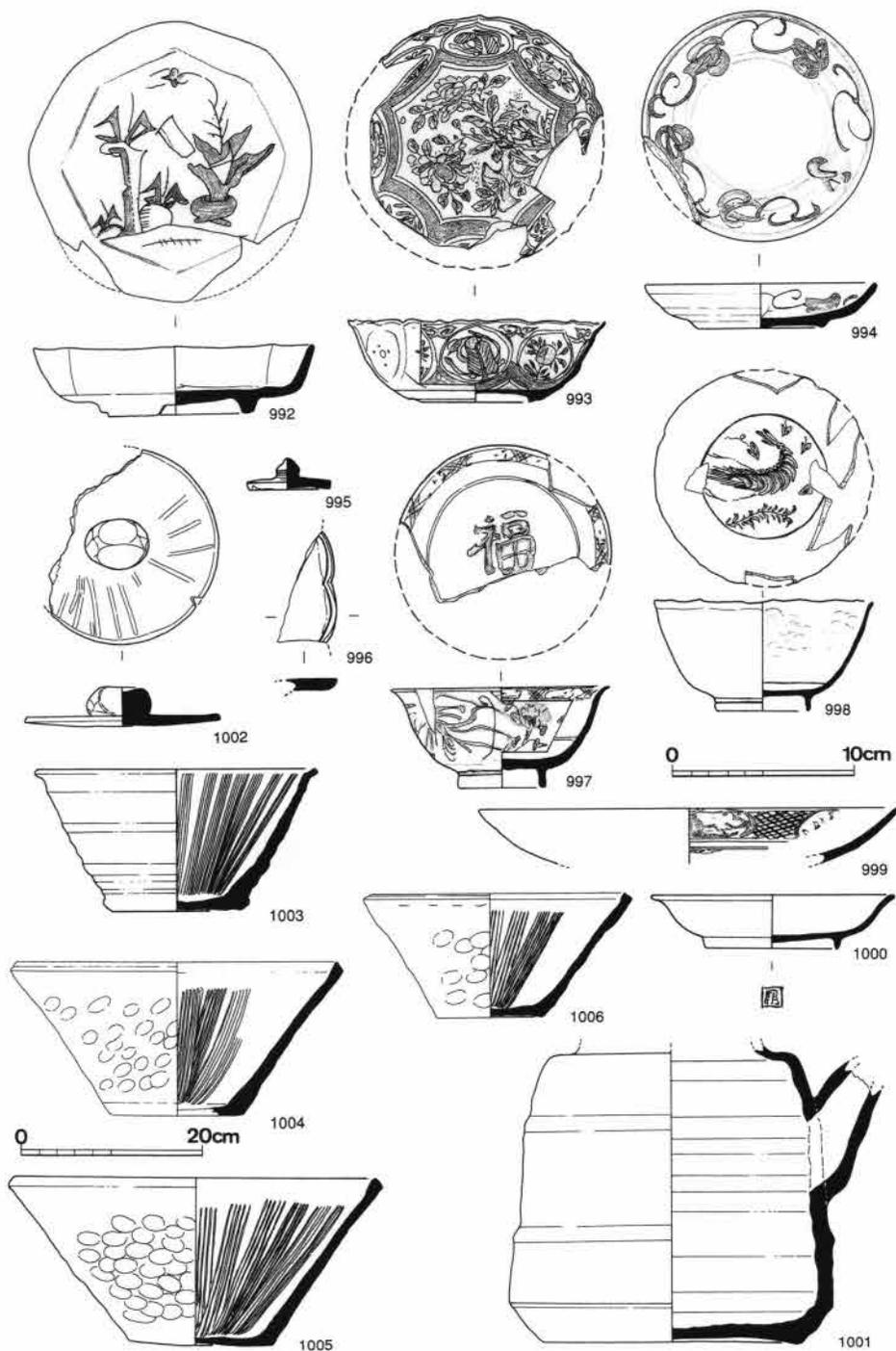
第52図 出土遺物実測図(36) (安土・桃山時代) 土坑42



第53図 出土遺物実測図(37) (安土・桃山時代) 土坑42

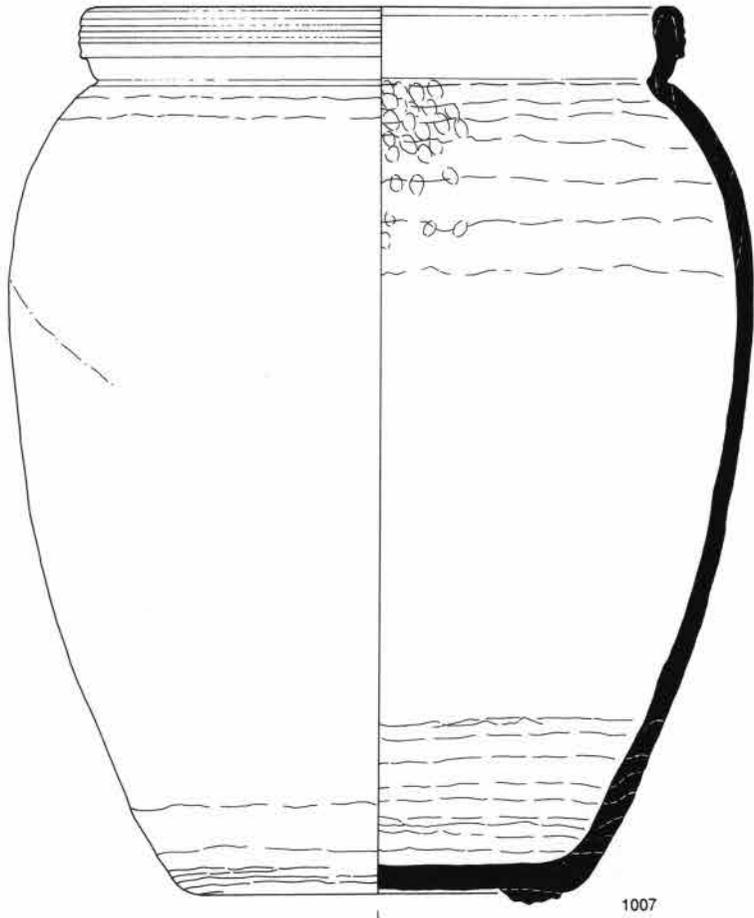
天目碗945～954 暗茶褐色の鉄釉と削り出し高台を有する。基本的な形態は、酷似している。唐津系・碗955～958 いずれも灰褐色の釉薬をかけ、削り出し高台である。志野系皿963・964 波状の皿部と口縁部にしのぎをもつ。瀬戸美濃系・皿965～967 底部は削り出しによって成形する。底部から直立に近い口縁部をもつものと、斜め外方へ短くのびる個体に分類できる。968は、胴部で屈曲し、口縁部に2か所、耳をもつ鼠志野・深鉢である。969は、黄瀬戸であり、口縁部内面に線刻による花文を施す。

唐津系・皿970～983 削り出し成形による高台には、低く成形する個体と、比較的高く成形する個体に分類できる。基本的な形態は共通しているが、底部内面に残存する目痕が



第54図 出土遺物実測図(38) (安土・桃山～江戸時代) 土坑42

1003～1005は1/4



第55図 出土遺物実測図(39) (安土・桃山時代) 土坑49

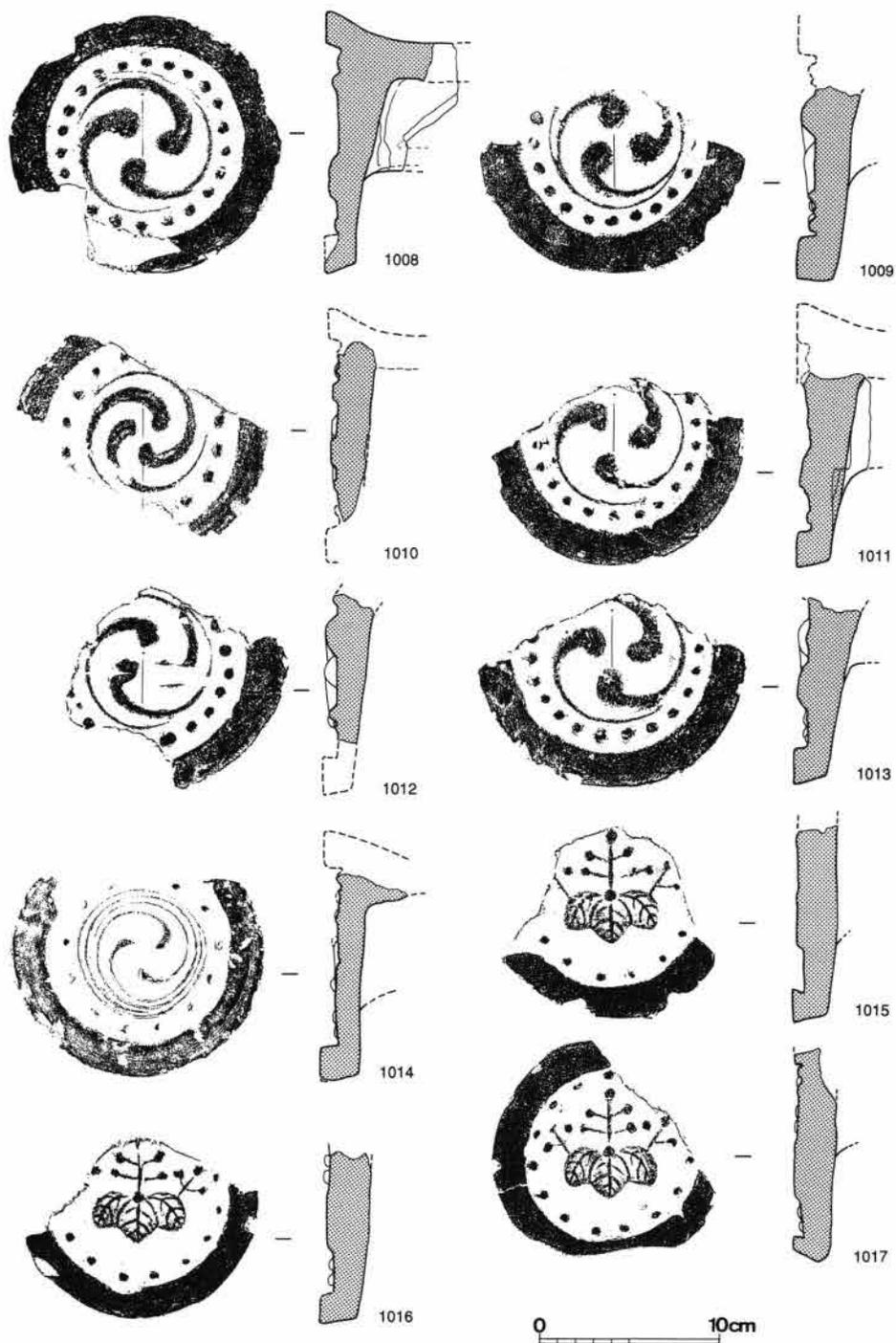
胎土目の個体である981の群と、砂目の個体である979・980の群に分類でき、それらが同一層から出土している。唐津系・皿については、その目痕から、胎土目から砂目へと移行することが知られており、目痕と口縁部の外反度の違い・口縁端部の形状など、特徴の抽出により前後関係が把握される。唐津系・碗985～989 削り出し高台を有し、丸い体部をもつものと、ほぼ直線的に内湾する体部をもつ個体に分類できる。唐津系・鉢 984は、削り出し高台をもち、頸部に屈曲し短く外反する口縁部を有している。屈曲直下には、二方に把手を付す。李氏朝鮮磁器・皿976 見込みに、多数の胎土目を有し、乳白色の釉調を呈している。

中国製磁器・青花皿 993は、底部内面を削り出し、高台を成形する。口縁部は波状を呈し、見込みには、八角内行花文様の区画内外に鮮やかな花文・草文を描く。青花・碗997は、高い高台を有し、外反する口縁部をもつ。口縁部内面には、文様区画帯を描き、鋸歯状の直線文を描き、その下方に花文・草文を描く。見込みには、「福」を書く。998は、波状口縁をもち、見込みに海老を描く。白磁・皿 1000は、無文様で、均整のとれた形態である。白磁・水注 1001は、釉調は乳白色を呈し、成形痕が体部外表面に明瞭に残存する。注口は、完存しないが、器高主軸に対し、30°の角度で取り付けられている。肩部以上は残存しないが、把手が肩部に付く。中国華南三彩・盤 996は、口縁部の一部のみの出土であり、口径などは不明である。波状口縁を有し、明緑色と明黄褐色の釉薬がかかる。後述する男子像(第59図)の年代を比定する際、釉調を比較し、同一傾向にあることを肉眼で観察した資料である。

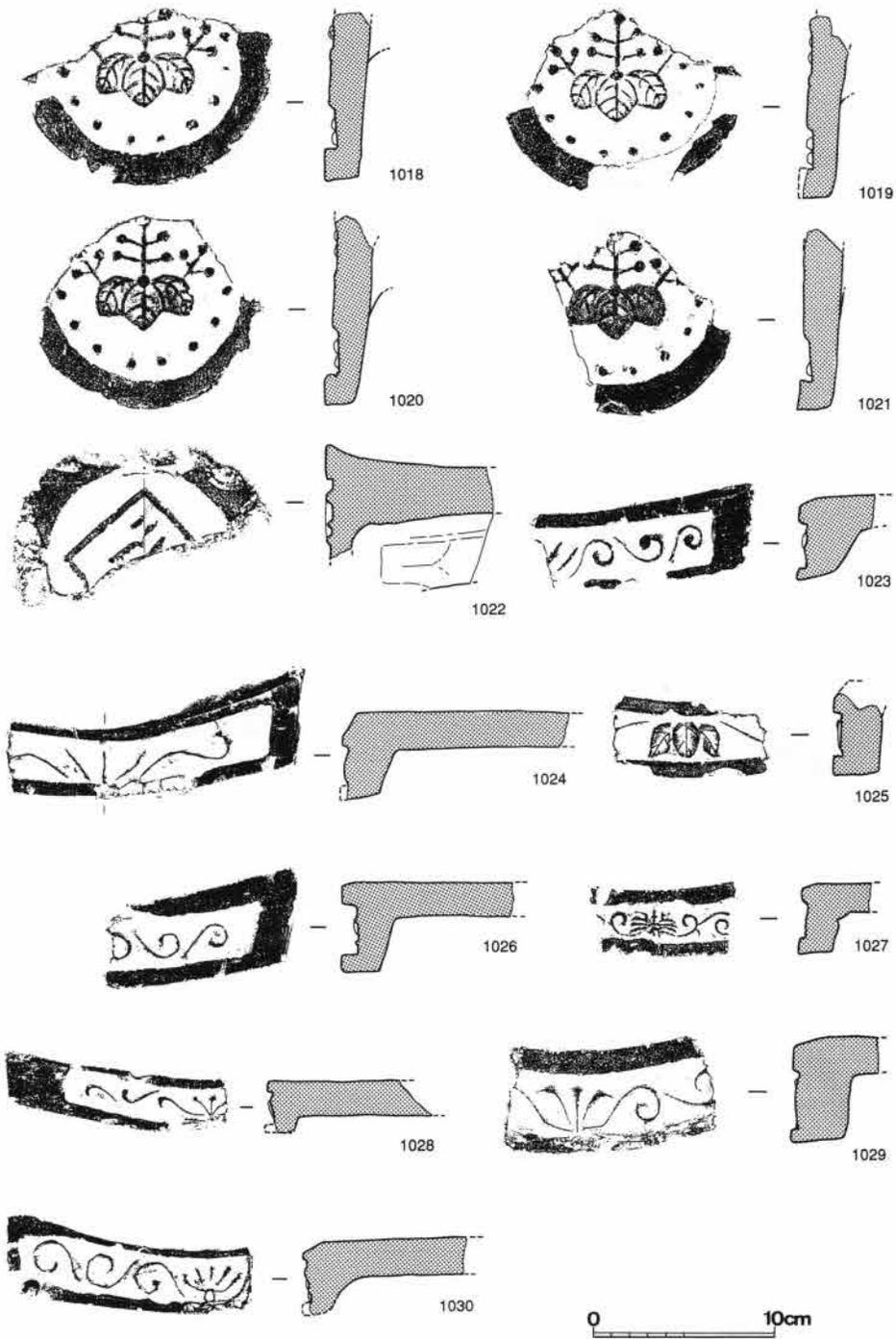
以上が、土坑42出土遺物の概観である。先述した土坑8との出土土器の構成は、基本的に同一であり、一括資料としての器種構成などを後述する。

土坑49出土遺物(第55図) 備前焼・大甕 1007は、底部外面には溶着した粘土魂が付着しており、全体的に板状工具で格子状に平滑に整形する。肩部はあまり張らず、屈曲し、内湾した後、ほぼ直線的に直立する口縁部を有している。口縁部は、外内方へ肥厚し、外面に3条の凹線を施す。

軒丸瓦1008～1022 軒丸瓦の瓦当文様は、巴文1008～1014・桐文1015～1021などを主体とすることを現時点で確認した。巴文の方向はすべて左巻きであり、右巻きの巴は確認していない。外区内縁の珠文は、22を数える1008や18～20を数える1010など、一定しないが、基本的に16以上を数える個体が多く見られる。珠文は、厳密に割り付けられ、等間隔に配されている個体もあるが、1012のように珠文と珠文が重なりあい、瓢箪形を呈する個体もある。巴は、頭部と尾部が比較的明瞭に表現されているが、1008のように、尾部が隣接する巴の頭部と離れているものや、隣接する巴と同じカーブを描くものなど、同一の瓦当に

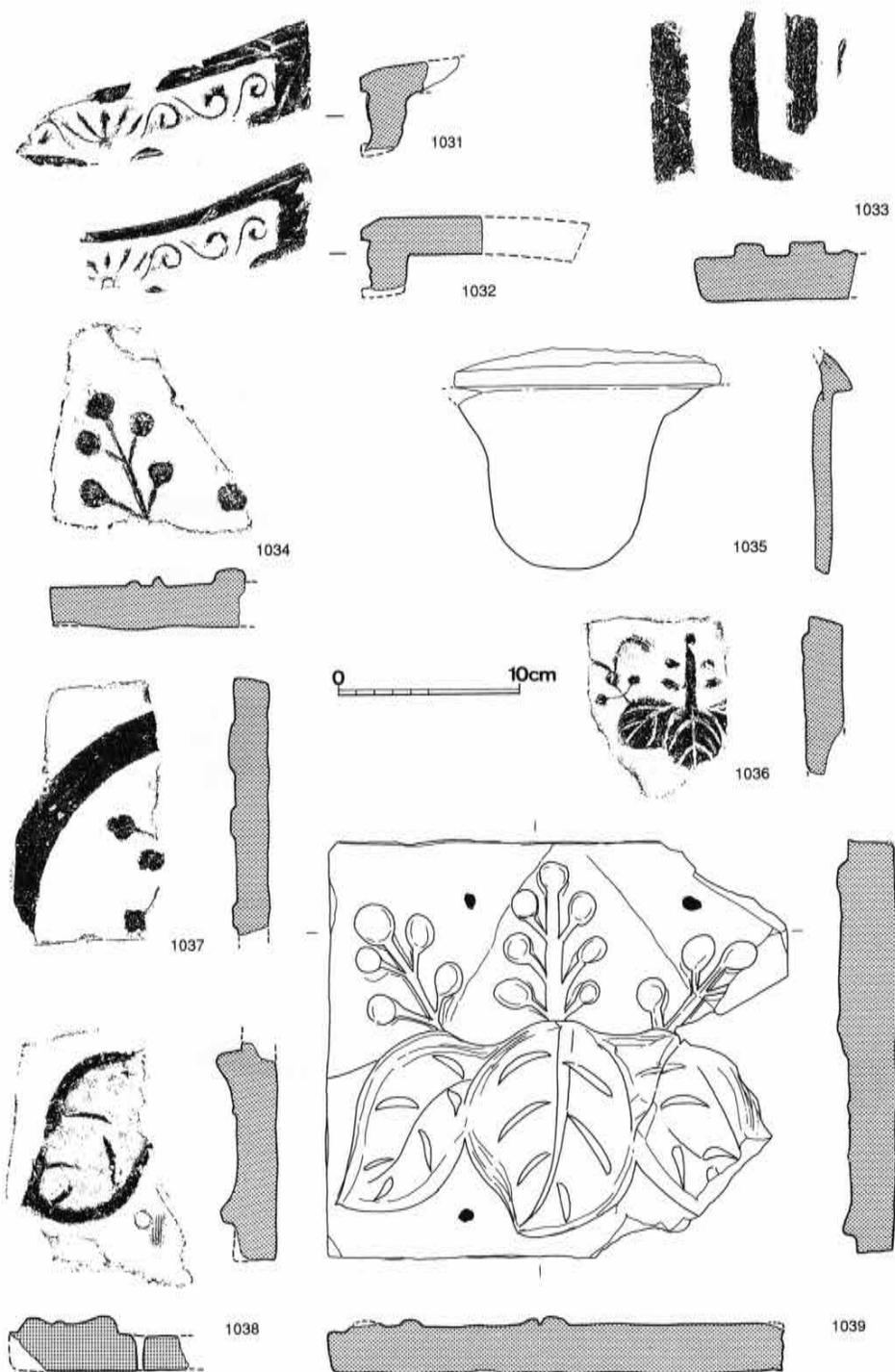


第56図 出土瓦拓影(4) (中世~安土・桃山時代)  
 1008~1013・1015~1017. 土坑169 1014. 土坑109



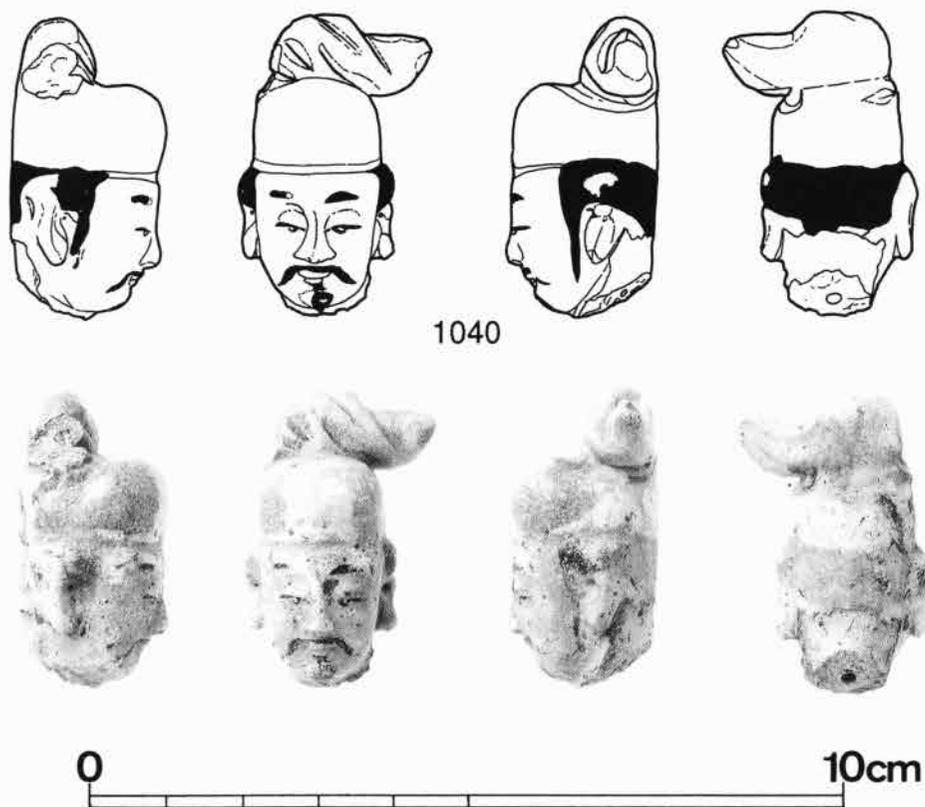
第57図 出土瓦拓影(5) (安土・桃山時代)

1018~1021・1026・1028・1030.土坑108 1023.土坑12 1025.土坑169  
1022・1024・1027・1029.L.N.49周辺



第58図 出土瓦拓影及び実測図(安土・桃山時代)

1031・1032・1034・1038・1039.土坑169 1036・1037.土坑108 1033・1035.L.N.49周辺



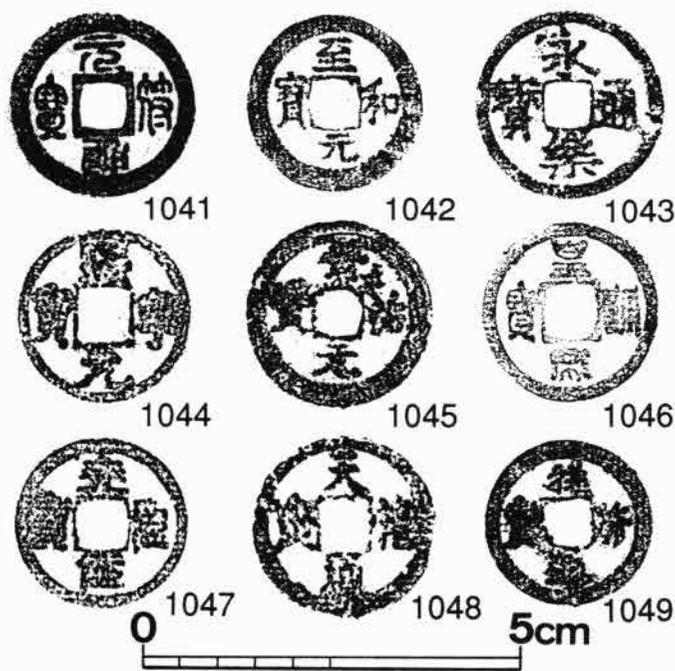
第59図 男子像実測図(L.N.49周辺)

おいても不均一なものも見られる。これらには、微細であるが、金箔あるいは接着剤としての暗赤色系の漆が付着している。なお、1014は、巴の頭部は小さく、尾部が派生した頭部付近にまで及ぶため、一見すると3重圏線のように見える。これは、一連の巴文の中でも最古型式に比定できる。桐文1015~1021 いわゆる「五三」の桐文で、桐の葉の先端は丸みをもたせ、葉脈は突線で描く。外区に16の珠文をもつ。桐文自体は、かなり形骸化している。1022は、中央に菱形文をもつ。

軒平瓦 1024~1033 1023・1026・1031・1032は、五葉の中心飾りと、三反転の唐草の脇飾りをもつ。1024・1029は、文様の大小はあるが、三葉の中心飾りと一反転する唐草を脇飾りにもつ。1025は、桐文を中心飾りにもち、1027は、草文を中心飾りにもつ。

飾り瓦 突き出した粘土を貼り付け、五・七の桐文を施す1034・1037・1039と五・三の桐文を施す1036などが見られ、葉文を主体とする1038などがある。

男子像(第59図) 1040は、頸部以下を欠損しているが、眉・目・口髭・顎髭・両側頭部及び後頭部を墨書にて描き、前頭部と帽冠後部に明緑色釉、帽冠後部と後頭部の一部に黄



第60図 出土銭貨拓影(南トレンチ)

(4) その他の時代と遺構・遺物

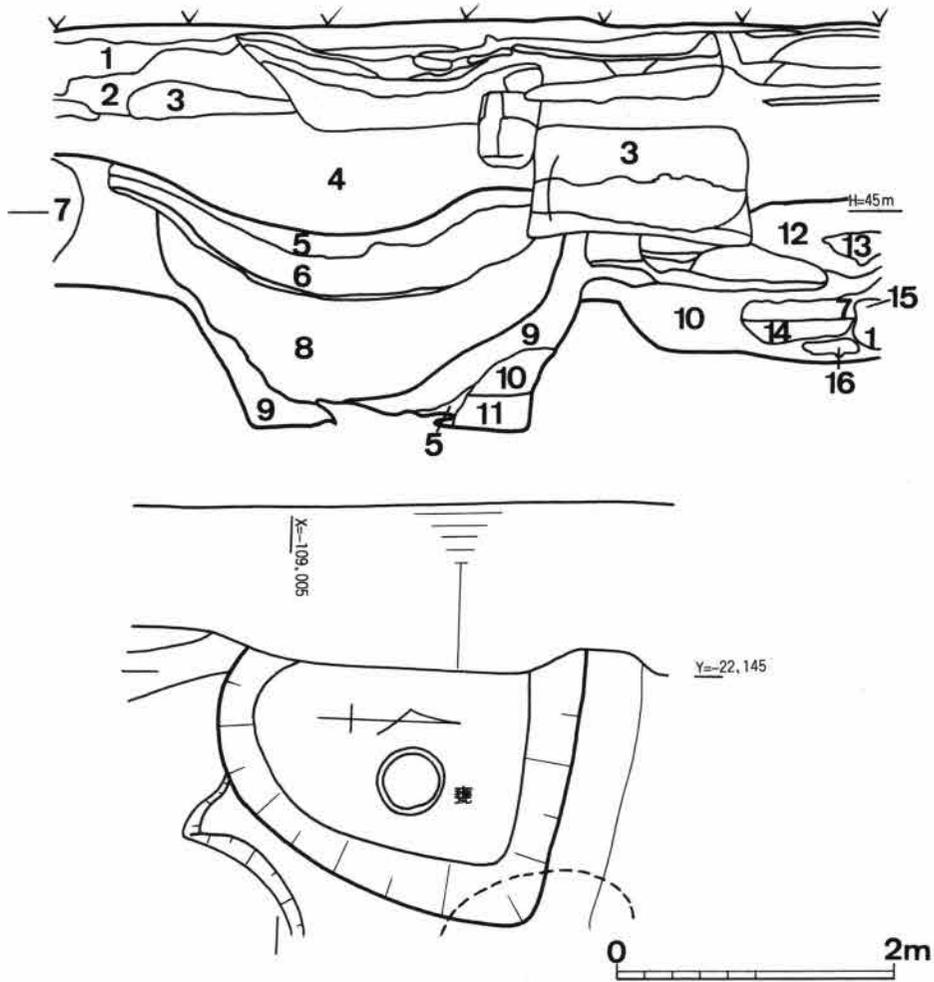
平安時代と安土・桃山時代を中心に記述したが、遺構では13～15世紀に比定できる土坑や江戸時代に比定できる土坑などを検出している。しかし、平安、安土・桃山時代の遺構の総数と比較した場合、わずかであり、また、紙面の都合もあることから、土坑75について概述し、方形土坑3・土坑14・円形土坑21・方形土坑23・方形土坑25・方形土坑30・不整形土坑53・大型方形土坑55・溝状遺構56・井戸57・長方形大型土坑104・土坑(便所)75・根石土坑128出土遺物について図示し、若干の補足説明を記したい。

土坑(便所)75(第61図) 南北2.6m・東西2m以上の不整形土坑である。遺構面は、第4層暗黒褐色土が埋土最上層となっており、第12層濁黒褐色土から掘り込まれている。堆積層は、最下層から暗茶褐色砂利層・多量の遺物を含む第8層黒褐色土・茶褐色礫層・褐色砂利層・暗黒褐色土の層序である。土坑中央に、丹波系甕を据え置いており、使用目的としては、便所が想定できる。

平安時代と安土・桃山時代以外の遺物には、不整形土坑53出土遺物1092・1093、大型方形土坑55に見られる備前陶磁器があり、18～19世紀に比定できる資料群である。また、土坑104からは、大量の陶磁器類の中で、信楽系の茶壺が出土しており、比較的類例の少ない器種であるが、伴出遺物から17世紀前半に比定できる陶器として重要である。

色釉、帽冠上部に淡茶褐色の釉をかける三彩人形である。額と帽冠の境には、赤彩により一線を描く。頸部破面中央に直径2mmの芯棒痕が観察できる。

中国銭1041～1049元符通宝1041・至和元宝1042・永樂通宝1043・熙寧元宝1044・景祐元宝1045・皇宋通宝1046・元□□宝1047・天禧通宝1048・祥符通宝1049などが出土している。

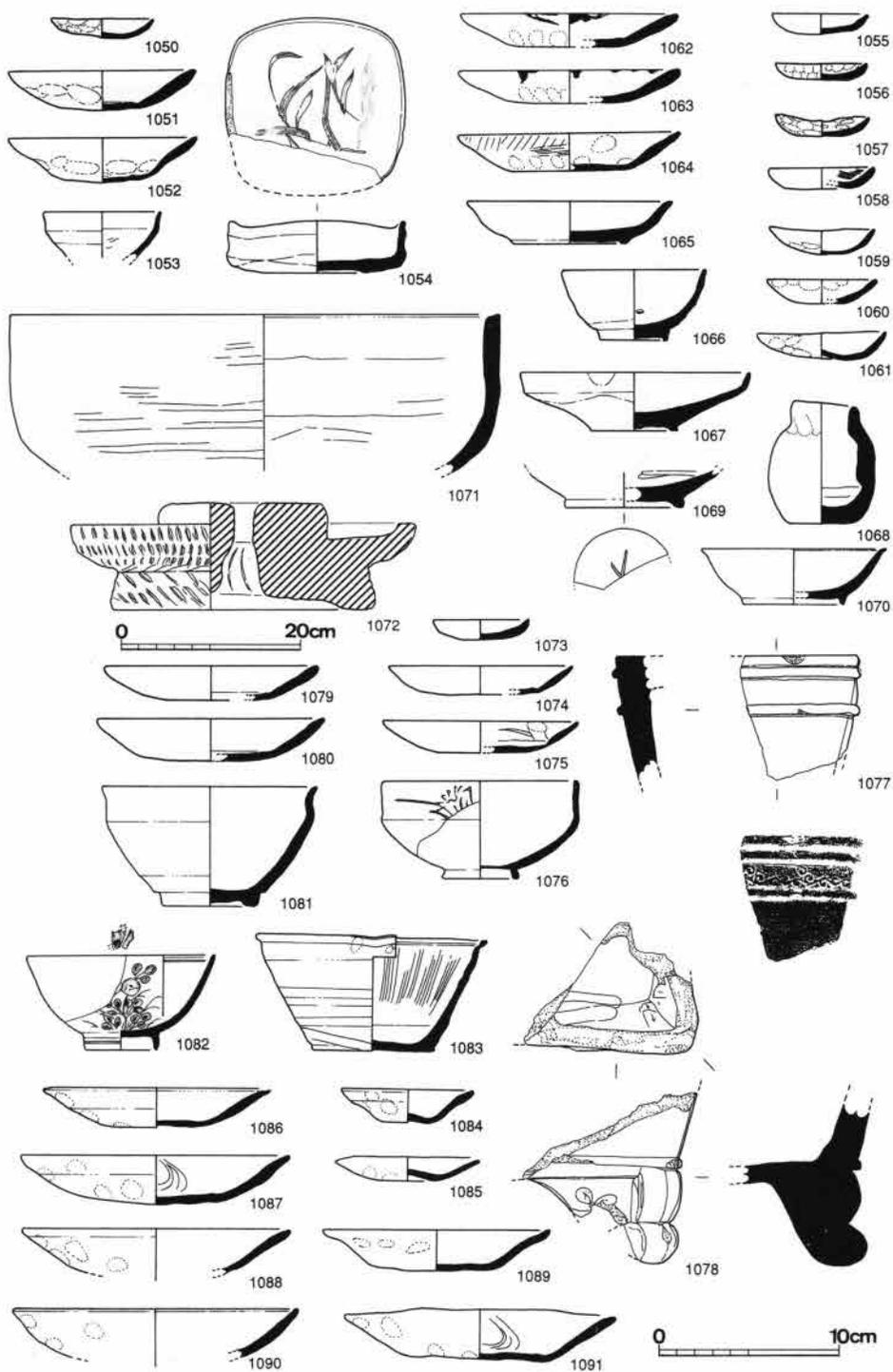


第61図 土坑75実測図

- |           |             |                  |            |            |
|-----------|-------------|------------------|------------|------------|
| 1. 茶褐色土   | 2. 暗茶褐色土    | 3. 濁黄褐色土         | 4. 暗黒褐色土   | 5. 褐色砂利層   |
| 6. 茶褐色礫層  | 7. 黒色土      | 8. 黒褐色土(遺物を多く含む) | 9. 暗茶褐色砂利層 |            |
| 10. 淡黒褐色土 | 11. 暗褐色土    | 12. 濁黒褐色土        | 13. 褐色砂    | 14. 黒色土(炭) |
| 15. 濁茶褐色土 | 16. 黒褐色ブロック |                  |            |            |

14世紀から15世紀にかけては、量的に少ないながら土師皿が見られる。皿の見込み部分が盛り上がる形態的特徴をもつ土器群1134・1136や、15世紀に比定でき京都系・奈良系の皿類も見られる。また、数量的にはわずかであるが、瓦器・椀1157の出土も見られる。

現時点において、縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物は、微細片ながら確認できる。特に、1158は、外面に叩き目を残し、底部中央が凹状を呈している特徴から、弥生時代末から古墳時代初頭に位置付けられる甕である。A区などの包含層中から、叩きをもった古



第62図 出土遺物実測図(40)

1050~1054. 土坑3

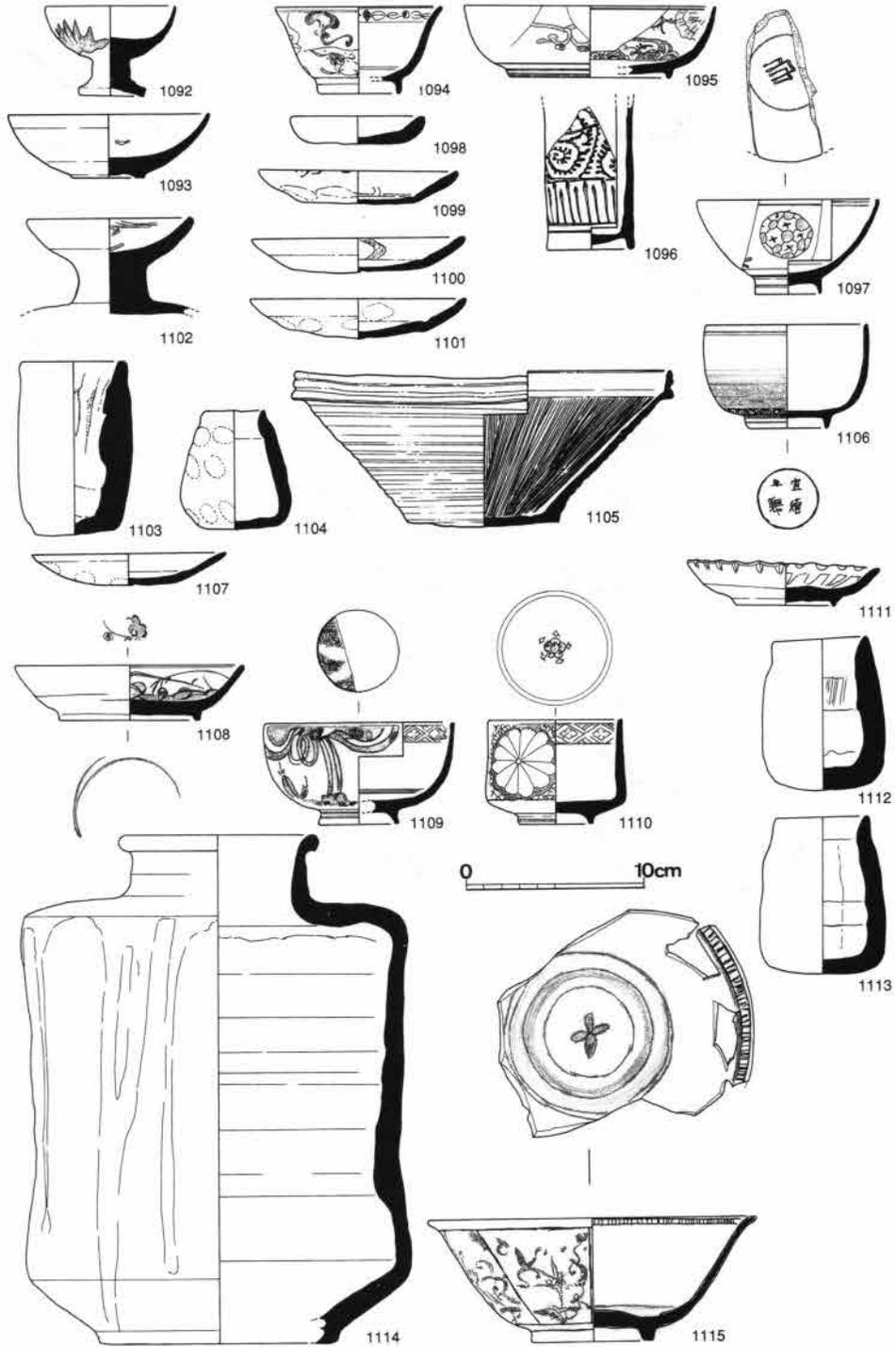
1055~1071. 土坑14

1072. 土坑21

1073~1078. 土坑23

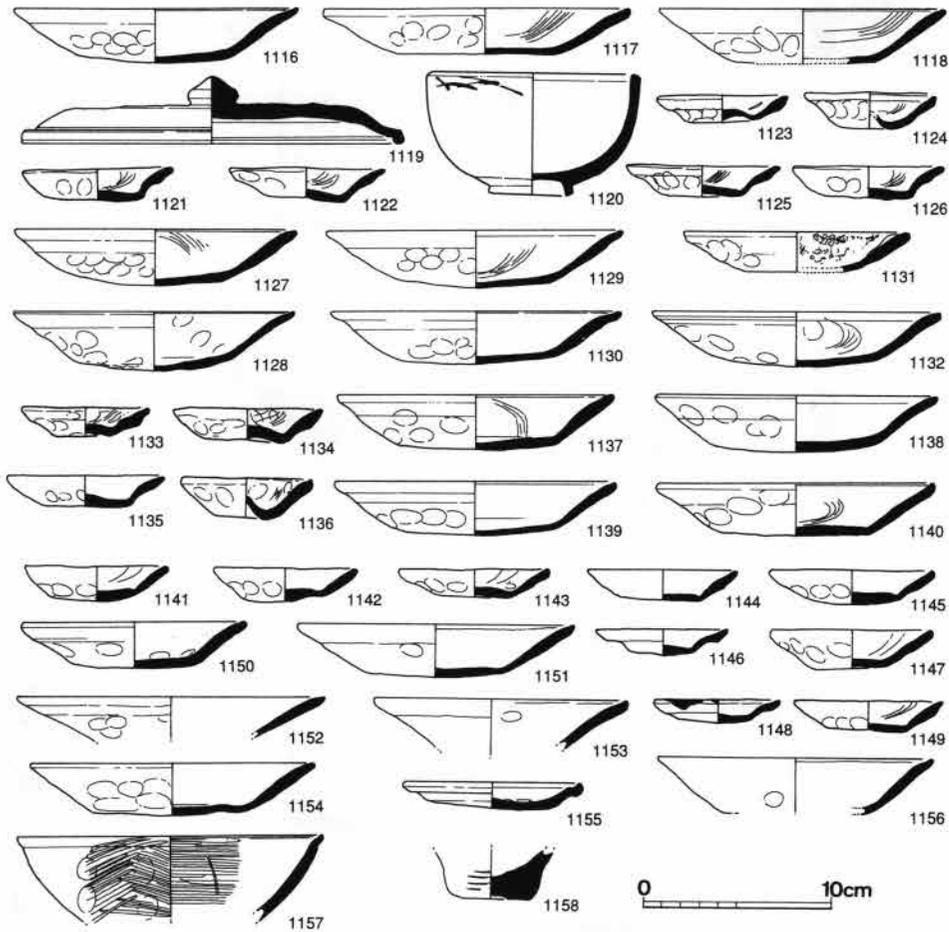
1079~1083. 土坑25

1084~1091. 土坑30



第63図 出土遺物実測図(41) (安土・桃山～江戸時代)

1092・1093. 土坑53    1094～1097. 土坑55    1098～1106. 土坑56    1107～1110. 土坑57  
 1111～1114. 土坑104    1115. L.N. 24周辺



第64図 出土遺物実測図(42) (古墳～江戸時代)

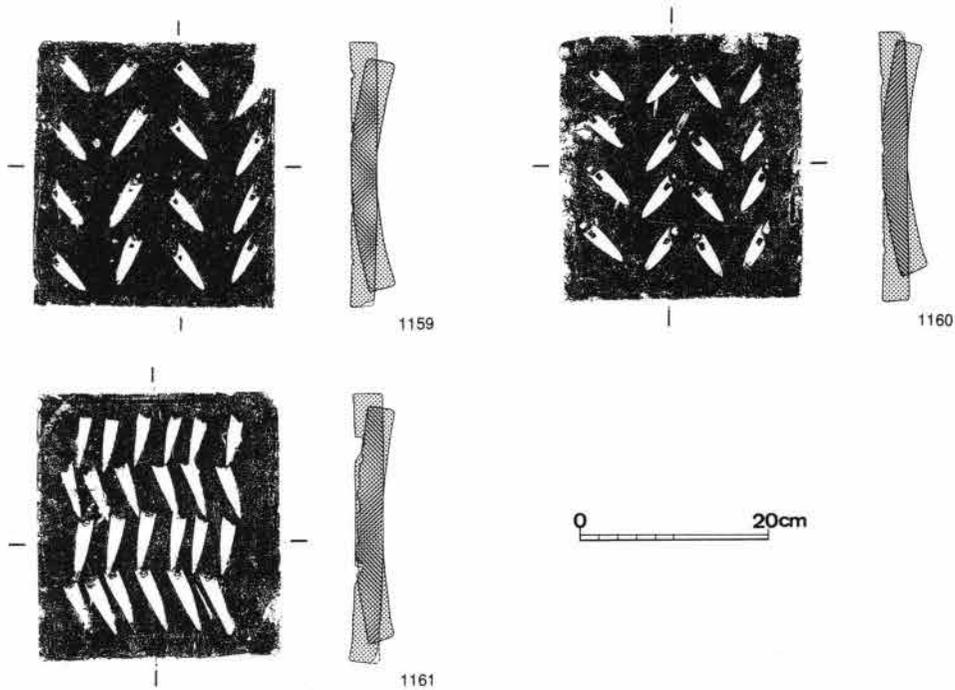
1116～1120. 土坑75 1121～1132. 土坑128 1133～1140. L.N. 37周辺 1141～1158. L.N. 26東

墳時代の土師器・須恵器なども出土しており、周辺地域に同時期の遺跡が存在していることを示唆している。なお、1159～1161は、井戸105を構成する罅であり、タイプの異なるヘラ工具の押圧が見られる。

#### 北トレンチ

南トレンチの北方に設定したトレンチで、 $X = -108,910\text{m}$ から $X = -108,945\text{m}$ の範囲、 $Y = -22,135\text{m}$ から $Y = -22,160\text{m}$ の範囲にわたって、約 $850\text{m}^2$ を設定した。トレンチ北東部は、不整形ではあるが、地下埋設物のため著しく遺構が破壊される可能性が少ないため、排土置き場及び資材置き場とした。

南トレンチは、主に平安時代と安土・桃山時代を中心としているが、北トレンチでは、17世紀前半の井戸313以外は、基本的に江戸時代中期以降が中心となっている。検出した



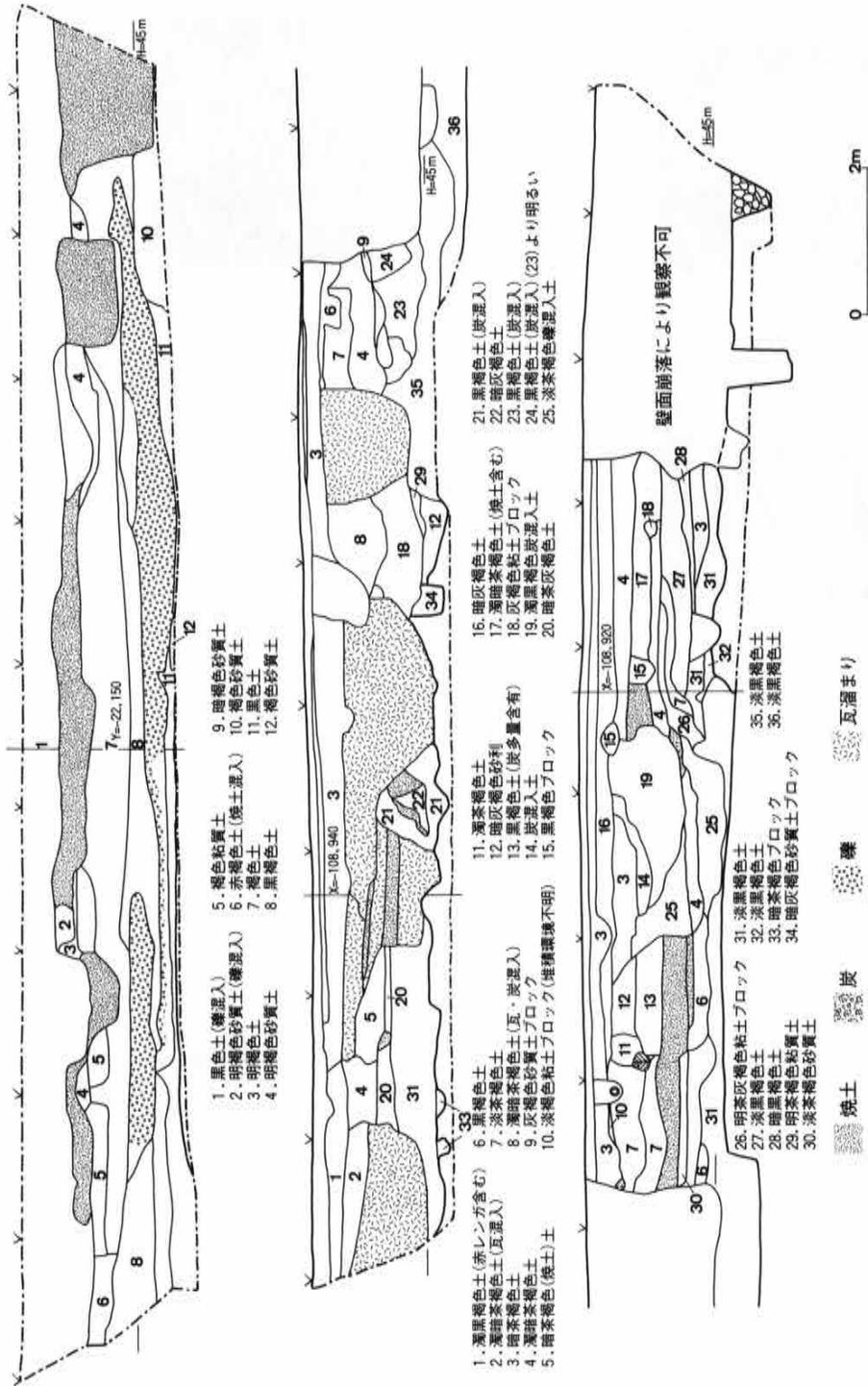
第65図 井戸105磚拓影

遺構は、石組の円形・方形井戸、方形石室、土堀基礎布掘り、出水通南側溝、漆喰遺構などであり、主に、トレンチ中央以西に集中する傾向が見られる。

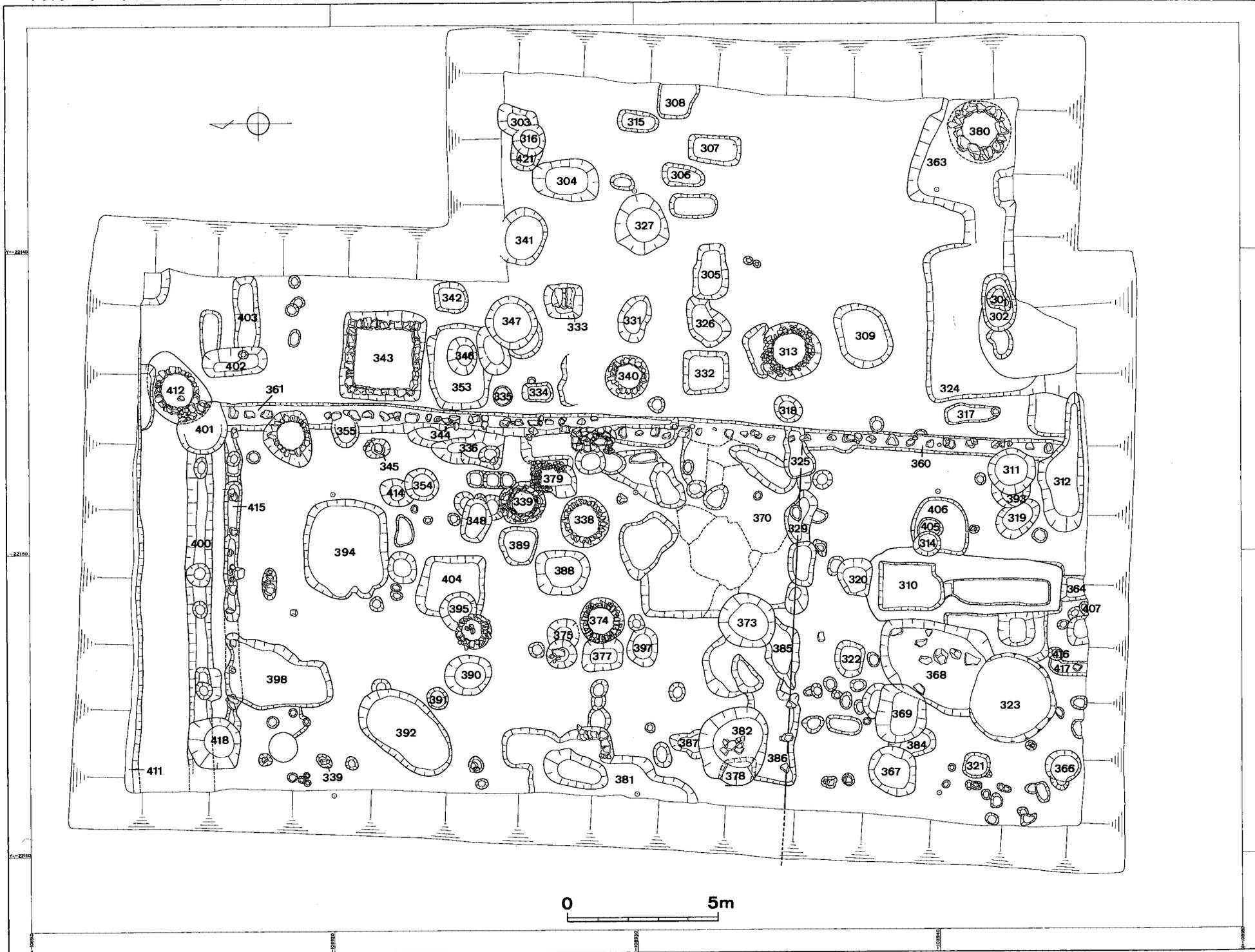
### (1)基本層序

トレンチ北壁については、出水通南側溝の縦断面が位置することもあって、土層堆積状況も比較的的水平堆積に近く、単純な堆積状況を呈している。地山のレベルは、トレンチ内では、ほぼ平坦であり、南方へゆるやかに傾斜している。

南トレンチ同様、焼土・炭・礫・瓦で充填された土坑やそれらが主体となる堆積層なども見られる。北壁では、最下層に出水通の南側溝の埋土である礫層がほぼ水平に堆積しており、また、西壁南方では、大量の瓦が層をなして堆積している状況が把握できた。一方、西壁北方では、標高45.5mを中心とし、厚さ40~60cmにわたって焼土層を確認している。その堆積時期を特定することは、極めて困難ではあるが、検出した遺構との切り合いから19世紀を中心とする時期に想定できる。このことからトレンチ各所で見られる焼土(層)・炭(層)・礫(層)・瓦(層)の堆積時期も、この焼土層に近似する時期と認識して大過ないところである。また、西壁北方では、20~30cmの第4層濁暗茶褐色土、第17層濁暗茶褐色土(焼土含む)、第4層・第27層淡黒褐色土、第28層暗黒褐色土、第31層淡黒褐色土、第32層



第66図 北トレンチ西壁断面実測図



第67図 北トレンチ遺構平面実測図

淡黒褐色土層が上位から確認できており、部分的に炭や焼土層も見られるところから、幾多の整地・造成作業が繰り返し行われていたことが把握できた。

検出した遺構は、このような堆積状況を把握した上で掘り込み作業を行った。

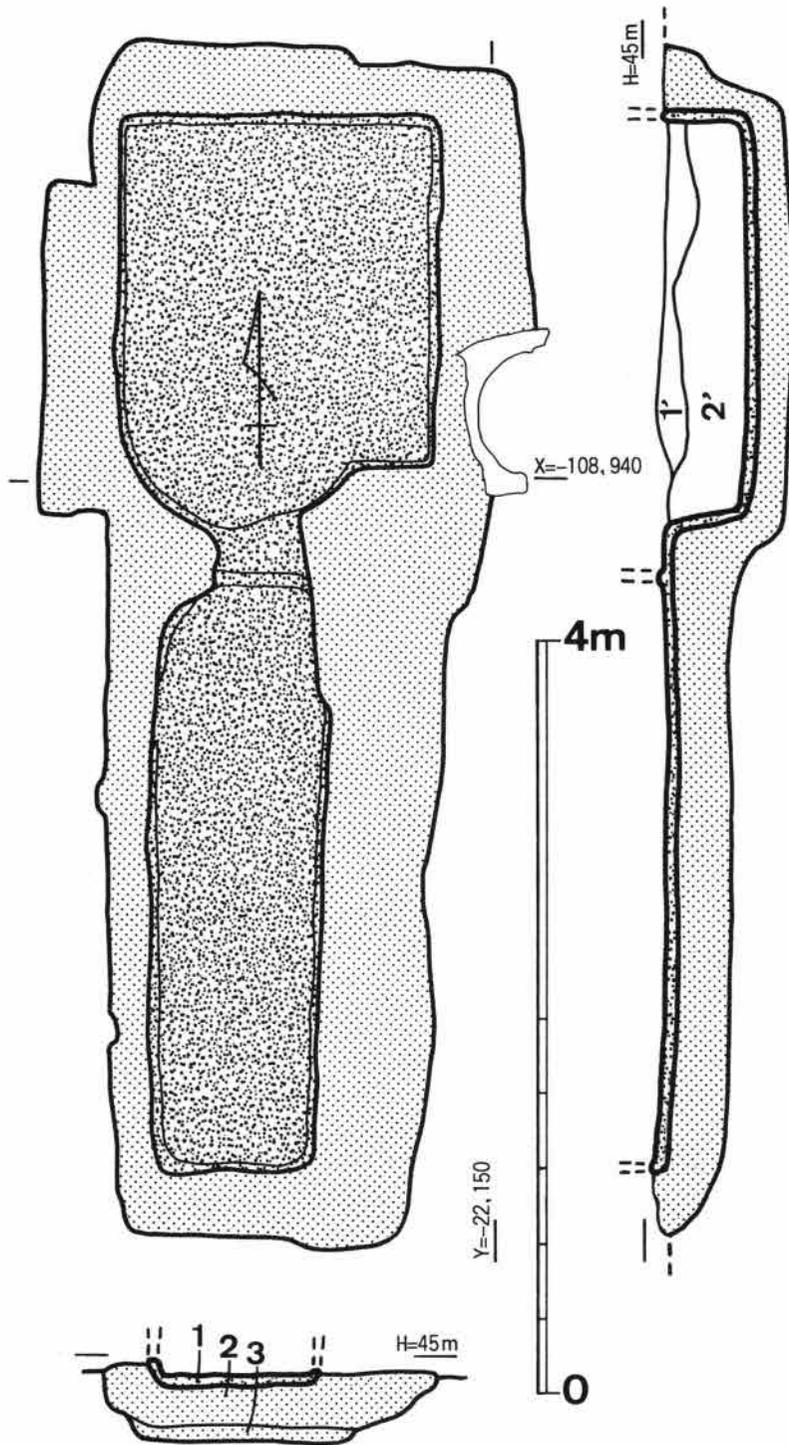
まず、敷地を区画する遺構としては、トレンチ中央を横断する土塀基礎布掘り360と361(第75図)がある。両者は同時併存した可能性はあるものの、361が360を切り込むようにして掘り込まれている。この360または361を境界にして、西方に井戸・土坑などの遺構が密集しており、東方には希薄な状況を呈している。一方、土塀基礎布掘り361は、北壁で検出した出水通南側溝411とは接続しておらず、屋敷を区画する溝400と接続している。また、溝415は、溝400と並行して走っており、土塀基礎布掘り361と接続し、それ以東にはつながっていない。

敷地の北面は、溝400または溝415で区画しているが、南面は、溝などの明確な表示はない。しかし、溝400の最深部を起点に南方へ19.5~20mの東西ラインには、人頭大の面をもつ礫を1m間隔に直線的に配している。その礫列は、完存していないが、ライン上に不整形な土坑が東西に並んでおり、この土坑群が敷地を区画している可能性を示唆している。なお、土坑群以南では、土坑や漆喰遺構などが位置しており、北方敷地とは異なった遺構群が展開している。

一方、土塀基礎布掘り360・361以東は、先述したように遺構は希薄である。石室343は、土塀基礎布掘り361の東側肩部から20cmの位置から掘り込まれており、隣接した地下式石室の存在が想定できる。石室は、町家の中にあつては、最も奥に敷設されることが一般的に知られている。その際、石室の両側には、町家と町家を区画する塀が造設されることが多く、礎石などが列状に検出されることが多い。しかし、石室343の周辺には、土塀を示唆するような石列は確認されていない。また、石室343以南4.6mの地点には、中央に木柱を自立させる施設である柱穴333が位置している。この柱穴333は、構造上、鳥居などの下部構造と酷似しているが、鳥居の場合、一定間隔に同じ構造をもつ施設が必要となる。今回、これと同じ構造をもった施設は、柱穴333のみであることから、ここに柱を自立させていたことになる。その他の遺構が希薄であることと、木柱が樹立されていることなどから、石室343以南には、建物が建っていない空間である(庭)が存在した可能性が高くなる。

北トレンチを以上のように概観し、以下、各遺構について、概述しておきたい。なお、検出した遺構は、江戸時代において130前後を数えており、主要な遺構の説明にとどめ、出土遺物についても解説を加えた遺構の出土遺物について図示しておく。

**漆喰遺構310(第68図)** 土塀基礎布掘り360以西のトレンチ南半で検出した遺構である。基本的な下部構造は、地山を6.3m×1.8mの範囲に深さ40cm程度掘り込み、その中央部を



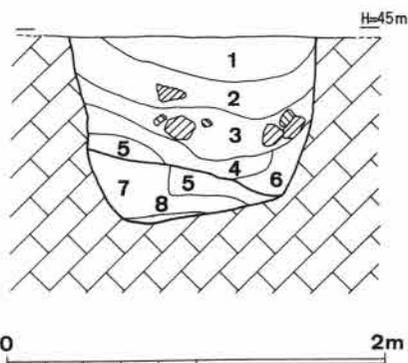
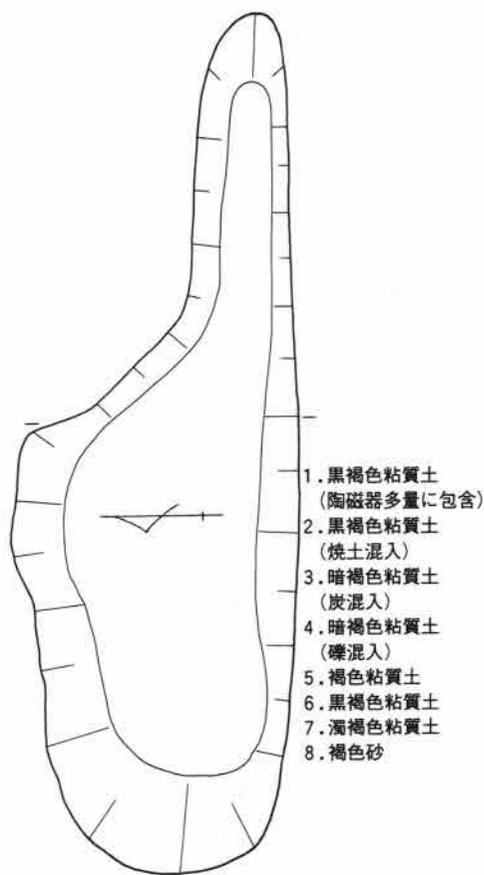
第68図 漆喰遺構310実測図

1. 漆喰 1'. 濁淡黒褐色粘土 2. 濁茶褐色粘土 2'. 濁暗灰褐色粘土 3. 淡褐色土

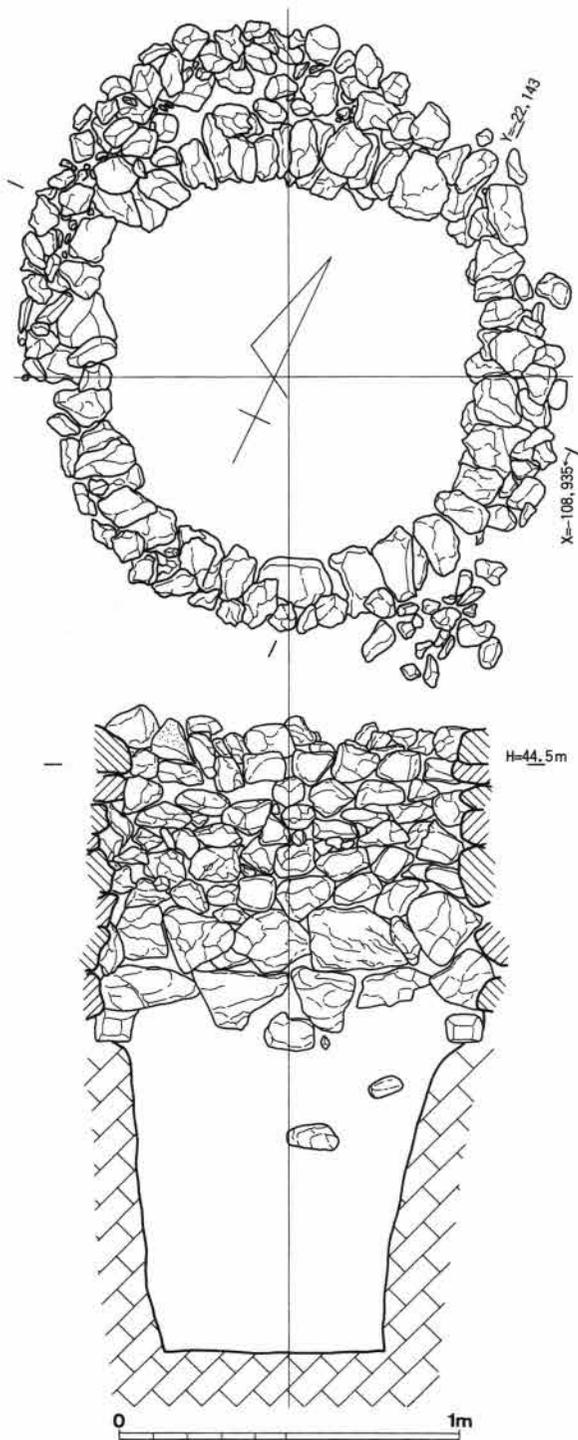
中心に5～8cm程度の厚みで淡褐色土を充填している。さらに、深さ30cm程度の濁茶褐色粘土で掘り込みの大半を埋め戻し、固く叩き締めている。その濁茶褐色粘土の中央上面に、南半は3.2m×1.9mの範囲に漆喰を叩き締めている。北半は、南半の漆喰上面よりも50cm程度深く箱状に漆喰を叩き締めている。北半の北・東・西壁は、直線的な壁を呈しているが、南壁は弧状を呈しており、漆喰は南半と接続している。南半と北半の接合部には、幅4cm・残存高2cm程度の盛り上がりがあり、液体など流動物が自然に流入・流出しないように工夫がなされている。北半の埋土は、大半が濁暗灰褐色粘土で、粘土内に土器・瓦類が混入している。このことから、機能消失に伴い、人為的に埋め戻されたことが想定できる。遺物から、18世紀～19世紀前半に比定できる。

当該遺構の用途については、類似する遺構の検出が希有であり、正確には把握できないが、台所や便所という生活に密着した性格を推定できる。今後の類例を待ちたい。

土坑312(第69図) 土塀基礎布掘り360を切り込んでおり、東西長軸4.6m・短軸2.4m・南辺長軸1.5m・短軸0.5mを測る。西半部の深さは、約1mを測り、坑内から多量の陶磁器類が出土している。土坑の埋土は、褐色砂・濁褐色粘質土・褐色粘質土が北に高く、南に低く堆積



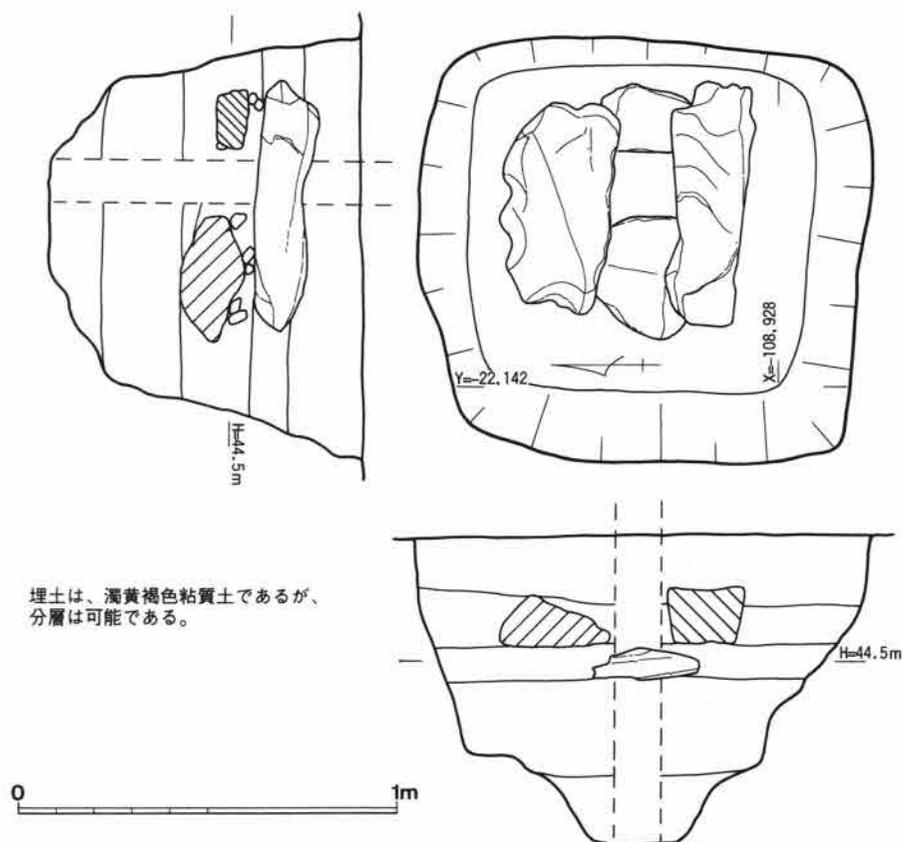
第69図 土坑312実測図



第70図 井戸313実測図

している。また、暗褐色粘質土と黒褐色粘質土が中央部を凹状に堆積しており、第3層暗褐色粘質土、第2層黒褐色粘質土、第1層黒褐色粘質土が層序をなしている。土坑の平面プランは不整形であり、土坑の性格については不明である。なお、出土遺物から18世紀後半から19世紀に比定できる。

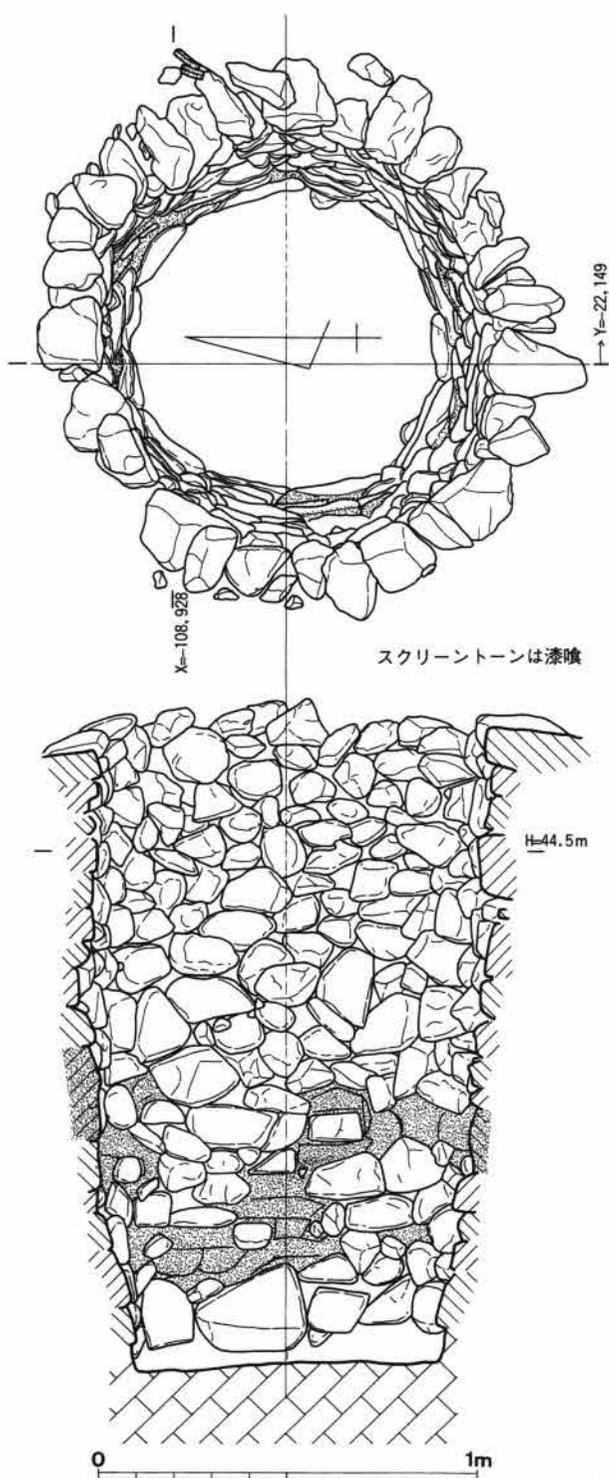
井戸313(第70図) 上端部分は削平を受けており、構造は不明である。井戸は、1.8mの深さまで方形に掘り、地表下0.8m下で10cm程度の段を付けている。また、それ以上を一辺2mの範囲に掘り広げており、掘り広げた上半部到人頭大から拳大の礫で隅丸方形の井戸石組みを設けている。石組みの内法は一辺1mを測り、下方には人頭大の角礫を配し、上位には徐々に小さめの礫で四壁をなしている。石組みの北方掘形は、礫を充填し、強度を高めている。井戸内埋土は、濁黄褐色粘質土が主体となっているが、茶褐色系や黒褐色系の粘土が、ところどころブロックで入っており、人為的に埋め戻された可能性が高い。なお、地山は、ある程度風化が進行した砂礫であるが、礫



第71図 柱穴333実測図

の崩落もほとんど見られず、安定している。

柱穴333(第71図) 先述したように、石室343の南方で検出した遺構で、南北1.2m・東西1.1mを測り、平面プランは、ほぼ正方形である。柱穴中央部では、木柱の自重によって掘り込んだ段階よりも深度を深めている可能性があるが、0.8mを測る。基本的な埋土は、濁黄褐色粘質土であるが、中央部を0.8mの深さまで掘り込み、5回に分割して埋め戻しを行っていることがわかった。木柱樹立を復元的に記述すると、まず、0.8mまで掘り込んだ後、直径13~15cmの柱木を立て、柱穴底部から18cmまで、濁黄褐色粘質土で叩きしめるように埋め戻している。その後、さらに、25cmにわたり同様の埋土で叩きしめるように埋め戻し、自立させる。次に、埋め戻し面に木柱をある程度厚みをもった平坦な礫で、東西から挟み込むようにして埋め戻し、さらに、長さ0.6~0.7mの礫で南北から木柱を挟み込むように据え、埋め戻している。最後に、固定する目的で使用した礫が地上には見えないうちに、いねいに埋め戻している。



第72図 井戸338実測図

柱穴333の遺構は、建物跡の柱穴の構造とは異なり、木柱を自立させる工夫がなされている。当該遺構周辺は、一定の広さをもった空間、換言すれば「庭」になることから、木柱を樹立させることを目的としている。その性格については、物干しや鯉織などに使用したことを想定しておきたい。

井戸338(第72図) 上部は削平を受けており、構造など不明である。検出面で南北1.1m・東西1.2mを測り、深さ1.8mの底部で、直径0.8mを測る。平面プランは、円形を呈しており、底部には人頭大の礫を配している。石組みの断面形態は、検出面から約1m下はほぼ垂直に掘り込み、礫を配しているが、それ以下は、内傾するように礫を配している。そのわずかな屈曲部以下には、漆喰を扁平な形や礫状に加工し、礫の代用として使用している。検出した他の井戸では、漆喰を石組みに組み込めるように加工した例は見られず、当時の井戸造作工法を知る上で重要な類例である。なお、井戸の埋土は、濁茶褐色土や炭・濁黄褐

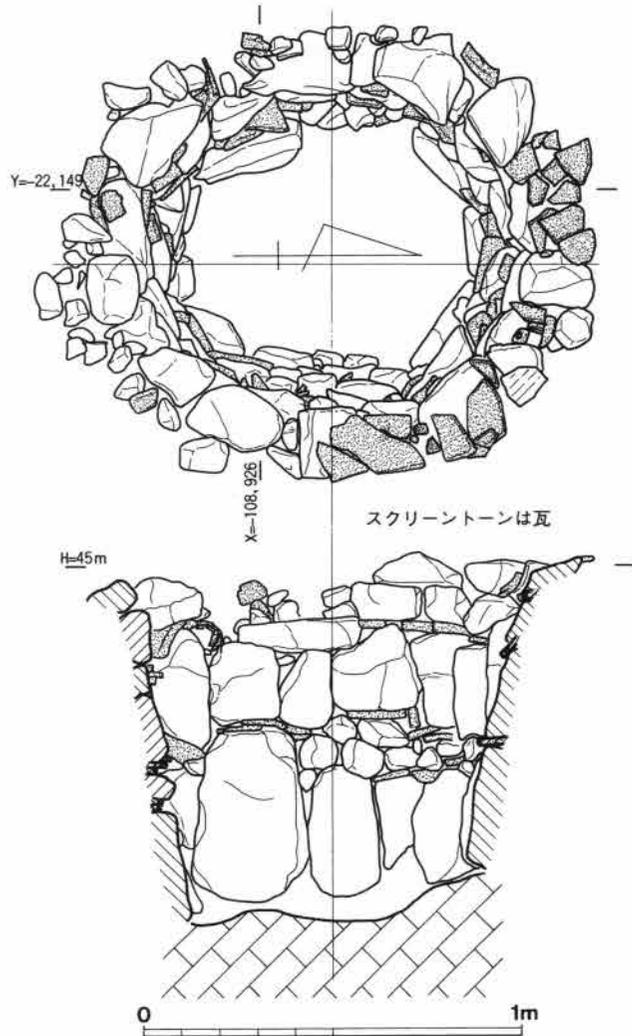
色土が乱雑に入っており、人為的に埋め戻しを行ったと考えられる。また、井戸最下層及び底部には、一括して投棄された遺物群は出土しておらず、粘土や細砂の堆積も見られない状況である。

井戸339(第73図) 上部は削平を受けており、構造など不明であるが、検出面で南北1m・東西0.8mの楕円形を呈している。井戸の深さは、検出面から約1mを測り、井戸底部は、南に深く北に浅く削り込まれている。井戸は、礫と瓦によって組み込まれており、他の検出した井戸には見られない構造的特色を有している。

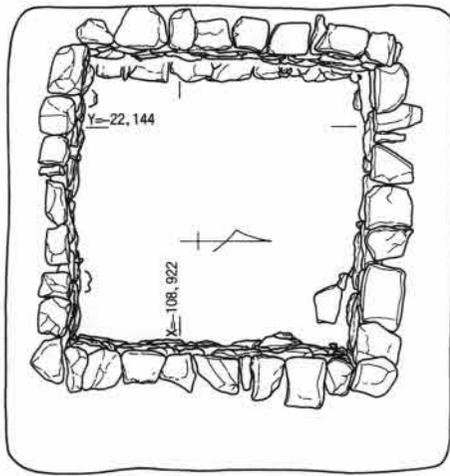
井戸底部から40~45cm  
 までには、縦長で幅25cm

の面をもつ礫で基底部分を構成している。その礫の長さは、必ずしも一致していないため、拳大の礫や瓦を挟み込んで高さを調整し、一定の高さを保持した面に、さらに、平坦化するように瓦の破片を挟み込んでいる。2段目は、1段目よりは小形の礫で壁を構成しており、1・2段目間で施したように、2段目上面にも瓦片を敷いている。井戸の断面形態は、逆台形を呈しており、また、底部が湧水面までは達していないことから、湧水を目的とした井戸ではなく、水を溜める施設と考えられる。なお、埋土は、先述した井戸338と同じく人為的に埋め戻されたことを示唆している。

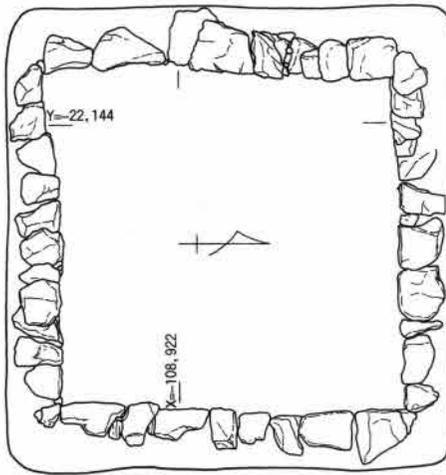
後述する方形石組み土坑379と隣接しており、井戸339に溜まった水が、調査中、方形石



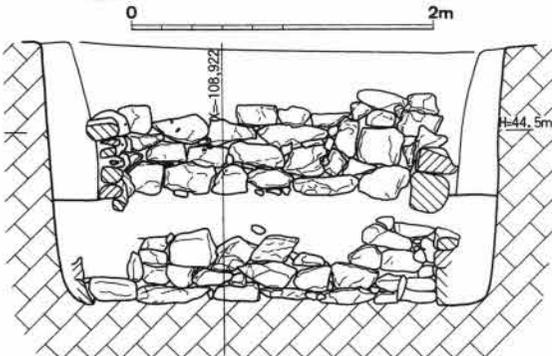
第73図 井戸339実測図



修復時の平面図



石室構築当初の基底石列



第74図 石室343実測図

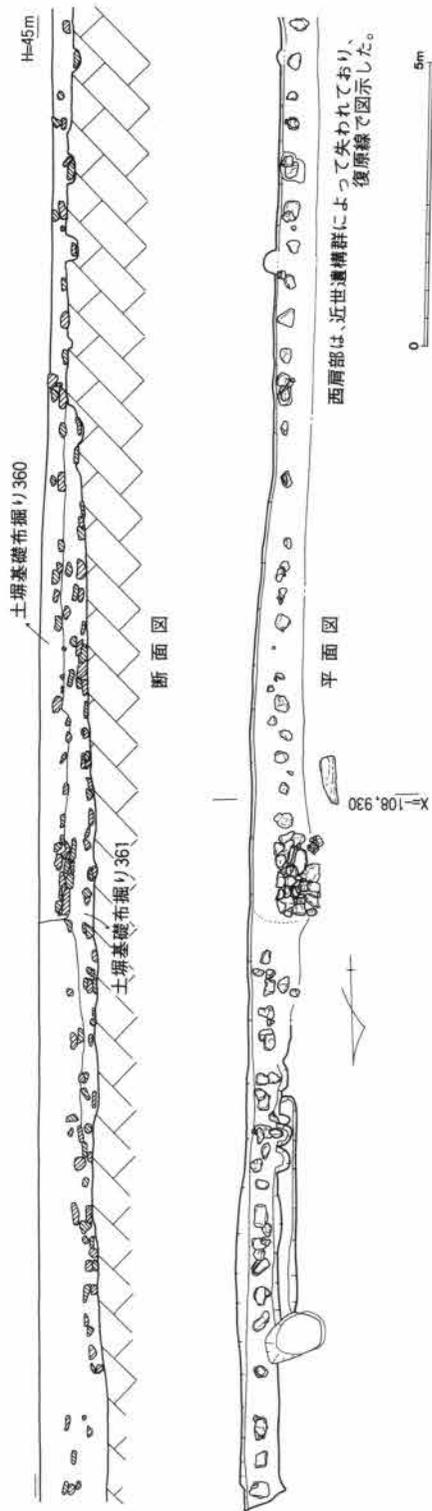
組み土坑379の湧水源になっており、両者の機能上の関連性が想定できる。

石室343(第74図) 上半部を削平されているため、構造的特徴は不明であるが、石室掘形は、南北2.9m・東西3.1mの方形プランをもつ。検出面から石室床面までの深さは1.7mを測る。当該遺構検出時は、通有に見られる石室を想定し、調査を進めたが、検出面から1m下に整地された床面を確認した。さらに、この床面を掘り下げると、上位で検出した石組みよりも広いプランの石組みを確認した。上位の石組みは、南北の内法で0.9m・東西1m、最も残存状況の良好な部分の石組みの高さは、0.7mを測る。埋土には、濁黄褐色粘土などがブロックで入り、陶磁器類も多量に出土した。石室西壁に2か所、鉄錆が付着している個所を確認した。おそらく、蠟燭立てなどの照明具を取り付けた痕であろう。一方、下位の石組みは、基底石列のみの残存であるが、南北1.2m・東西1.2m・残存高0.5mを測る。上位石組みを完全に除去し、精査した結果、西壁の残存状況は比較的良好である

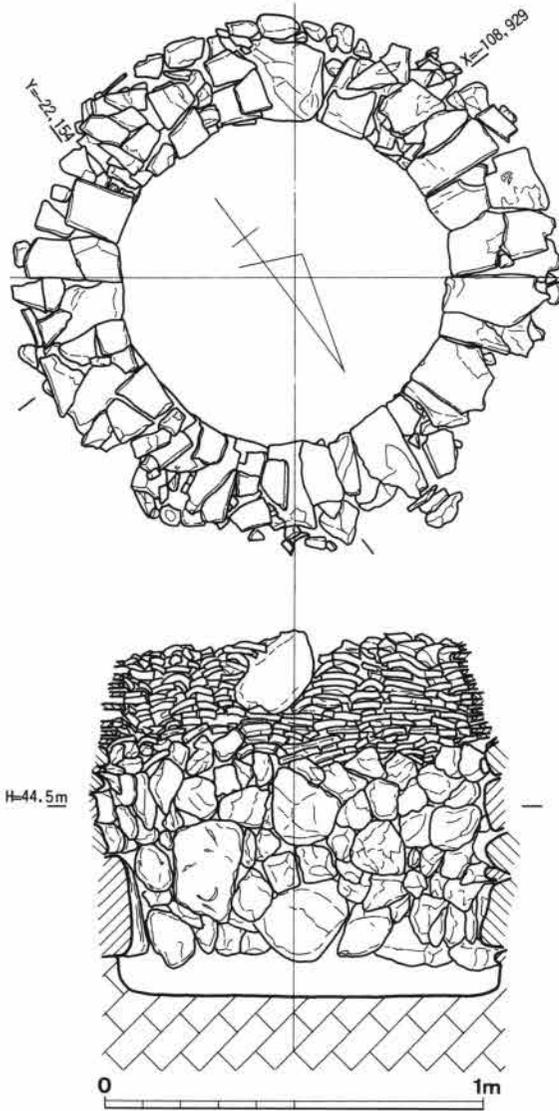
が、他の面の残存状況は、基底石を残すだけである。埋土中には、陶磁器・瓦類とともに、木柱・紙などが焼け焦げた状況で混入しており、一部、基底石に煤が付着している部分が

確認できた。以上の結果から、土蔵造築当初の石室は、火災が原因で倒壊し、部分的に転用できる石材を抜き取った後、0.6~0.7mを濁黄褐色粘土で埋め戻し、その整地面をベースとして、石室を新たに改築したことがわかった。

土塀基礎布掘り360・361(第75図) トレンチのほぼ中央に横断する遺構で、この布掘りを中心に、東西での遺構の粗密が認められる。中心座標は、北端で $Y = -22,144.48\text{m}$ 、南端で $Y = -22,143.40\text{m}$ を測り、北から東へほぼ $2^\circ$ 振っている。布掘りの幅は、部分的に異なるが、平均0.7mを測り、深さは北端で1.2m、南端の最も浅い部分で0.35mを測る。布掘りは、断面観察による埋土の切り合いと根石の配置状況から、布掘り361が土塀築造当初の状況を残しており、その後、布掘り360が一部、掘り直しなどによって修復がなされている。布掘り361は、検出した布掘りの3分の2以北で地山に平坦な礫を据え置いている。布掘り361は、南北19.2mを測り、北端で1.2m、南端で0.5mの深さを測る。根石は、基本的に0.38~0.4m間隔に据えているが、柱の長さにより、根石面の高さを調節するために根石の直上に複数の根石を置く部分も見られる。布掘り360は、検出長13.8mを測り、北端で0.5m、南端で0.35mの深さを測る。根石は、地山面に据えた礫と地山に15cm程度の根石充填坑を掘ったものがある。布掘り360の北半は、布掘り361を埋め戻し、南半の地山と同じレベルになるように整地した後、礫を据えている。



第75図 土塀基礎布掘り360・361実測図



第76図 井戸374実測図

両遺構の用途として、築地塀の基礎柱を安定させるために掘られた布掘りと考えることが最も妥当な解釈である。類例としては、御所南遺跡で検出した金森出雲守邸の屋敷境を区画する土塀基礎に同様な布掘りが知られている。当該トレンチにおいても、布掘り360・361を基準に東西で遺構の粗密を区別できることから、当該遺構の用途を考察することができる。

井戸374(第76図) 下半は円磔、上半は破碎した平瓦によって構成され、平面形が円形を呈する。検出面の直径は1m、磔上面の直径は1.1mを測る。井戸底までの深さは、1mを測る。なお、上半部を構成する瓦群の中に、人頭大の磔を入れているが、磔を入れる必然性はないことから、工人の意匠を読み取ることができる。

方形石組み土坑379(第77図) 南面は、すでに隣接遺構のため消失しているが、三壁は、拳大の磔によって構成されている。検出面で一辺1mを測り、基底石で0.7mを測る。深さは0.8mであり、東壁は一部分が崩壊している。先述した井戸339と何らかの関連が考えられる。

溝400・415(第78図) 土塀基礎布掘り361の北端から、直角に西方に屈曲する。溝415は、布掘り361と同じく平坦な磔を1m間隔に配置しており、ほぼ、中央部に幅2.8mにわたってさらに深く掘り込んでいる。一方、溝400は、幅0.8m・深さ0.5mを測る。溝415の中央

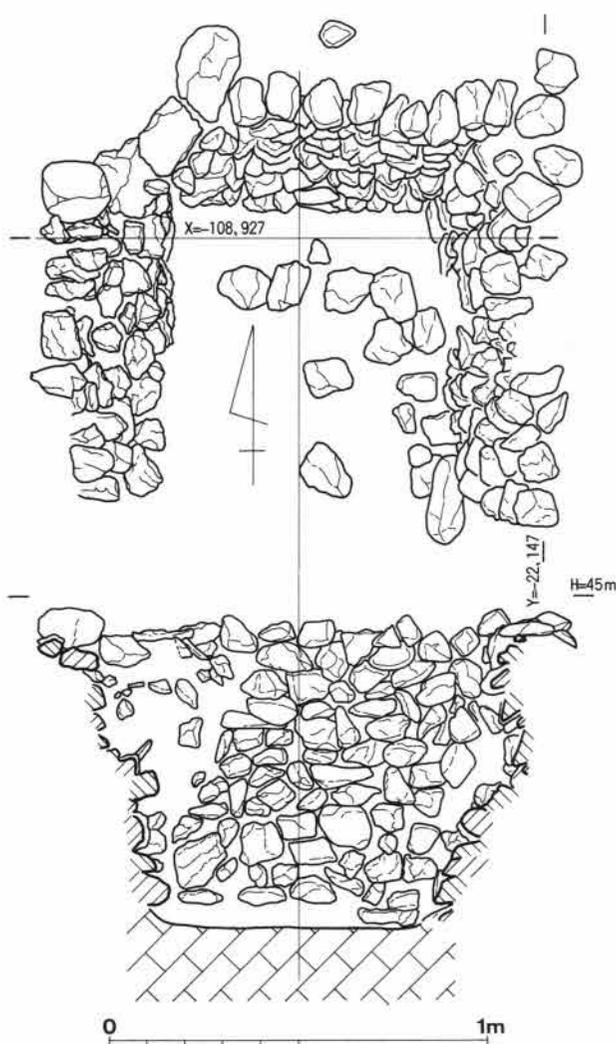
部の深く掘り込んだ部分に対応するように、1.2mのピットが溝底に穿たれている。これらの溝は、土塀基礎布掘りである可能性も指摘できるが、出水通に面した屋敷地の門が位置したと想定しうる。

**溝401(第79図)** 出水通りの南側溝であるが、トレンチ北壁にわずかにかかって検出されたにすぎない。また、南側溝南肩から1.5m南方に、少なくとも2回にわたって掘り込まれた溝群を検出しており、出水通の側溝である可能性がある。なお、基本的に北方に掘り直されている状況を把握しており、出水通の道路幅が徐々に狭められている状況を確認できた。

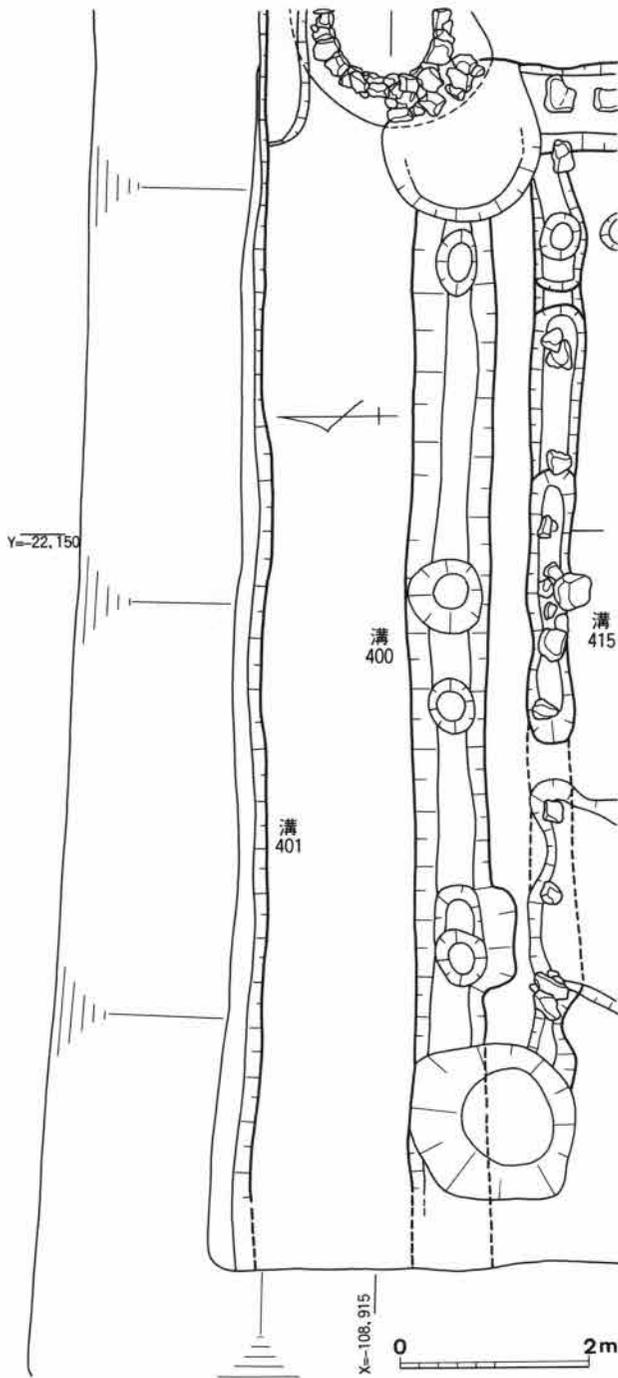
**漆喰遺構310出土遺物(第80図)** 土師皿とともに伊万里などの磁器も多く出土している。図示した資料はその内の一部であるが、染付・椀1169の形態的特徴と京焼・蓋1167の形態から、ほぼ18世紀後半に比定できる。

**土坑312出土遺物** 土師器や陶磁器に加え、伏見人形の出土も見られる。1179・1180は、高台が高く、いわゆる広東椀であり、18世紀後半～19世紀前半に比定できる資料群である。また、1182は、伊万里染付椀であり、広東椀と同時期に比定できる資料である。なお、1185は、土師皿であるが、底部外面に「富蔵所持」と判読できる墨書が見られる。1186の伏見人形・犬形の底部外面には、複圏線の亀甲内に「亀」と言う文字を刻印している。

京焼・椀の中で1176には、赤色で「ふや町、かめや」と屋号を手書きしている。1189～



第77図 方形石組み土坑379実測図



第78図 溝400・415実測図

1204は、土坑312の3～6層で検出した土師器であるが、胡粉・墨書により花文を書いたり、「幸神供」と書いた土師皿が多く見られる。何らかの儀礼に使用后、一括投棄したものであろう。1205・1206は、型押しによる葉皿であり、無釉である。焼成は1209の碗と酷似しており、墨書をもつ土師皿と一括して投棄されたものである。なお、1209は、底部内面は、二次的に火を受け、煤が付着している。その他、出土層は特定できないが、土坑312から出土した磁器には、第82図に図示した資料群が見られる。広東碗や流調な波状文の入る碗などが多く見られ、一般的に18世紀後半を中心とする遺物群である。

井戸313出土遺物(第83図) 瀬戸美濃系・碗(1253～1258)及び唐津系・皿(1254)がまとめて出土している。特に、瀬戸美濃系・碗は元屋敷または窯ヶ根併行期の特徴を有しているところから、17世紀前半に比定できる資料群であ

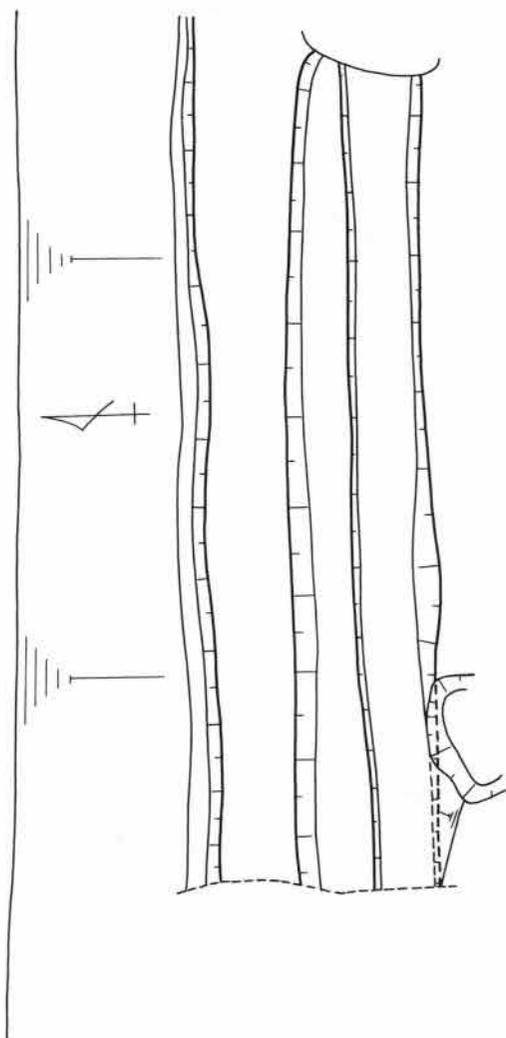
る。北トレンチでは、当該時期の遺物が出土している遺構は、わずかである。

**土坑324出土遺物**

1268は、一升徳利であるが、「ふや町・中法、二百二十文」と判読できる。当時の流通単価を知る上で、重要な資料である。18世紀後半～19世紀前半。

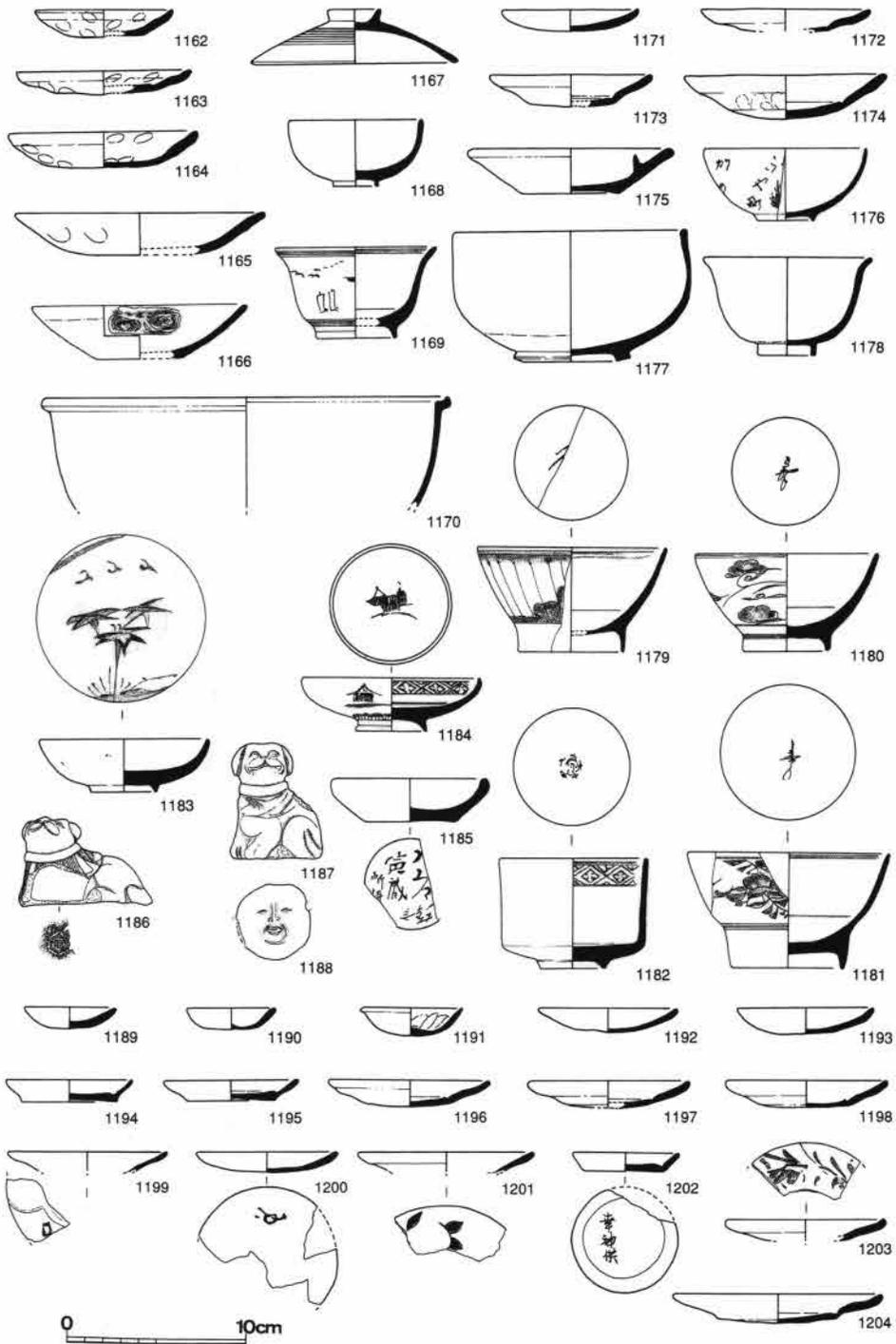
**石室343出土遺物(1271～1290)** 多くの土師皿は、図示したように、口径4.8cm前後のものとして10cm前後のものに分類できる。また、伊万里・椀1282は、外面に3段に分割された流調な波状線が描かれているのが特徴であり、18世紀前半の様相を呈している。

**土堀基礎布掘り360出土遺物(第85図)** 土師皿は、平らな底部から直線的に外反する口縁部をもつ。外面には指頭圧痕が明瞭に残存する。1295は伊万里・椀であり、器形的特徴から18世紀前半から後半に比定できる。



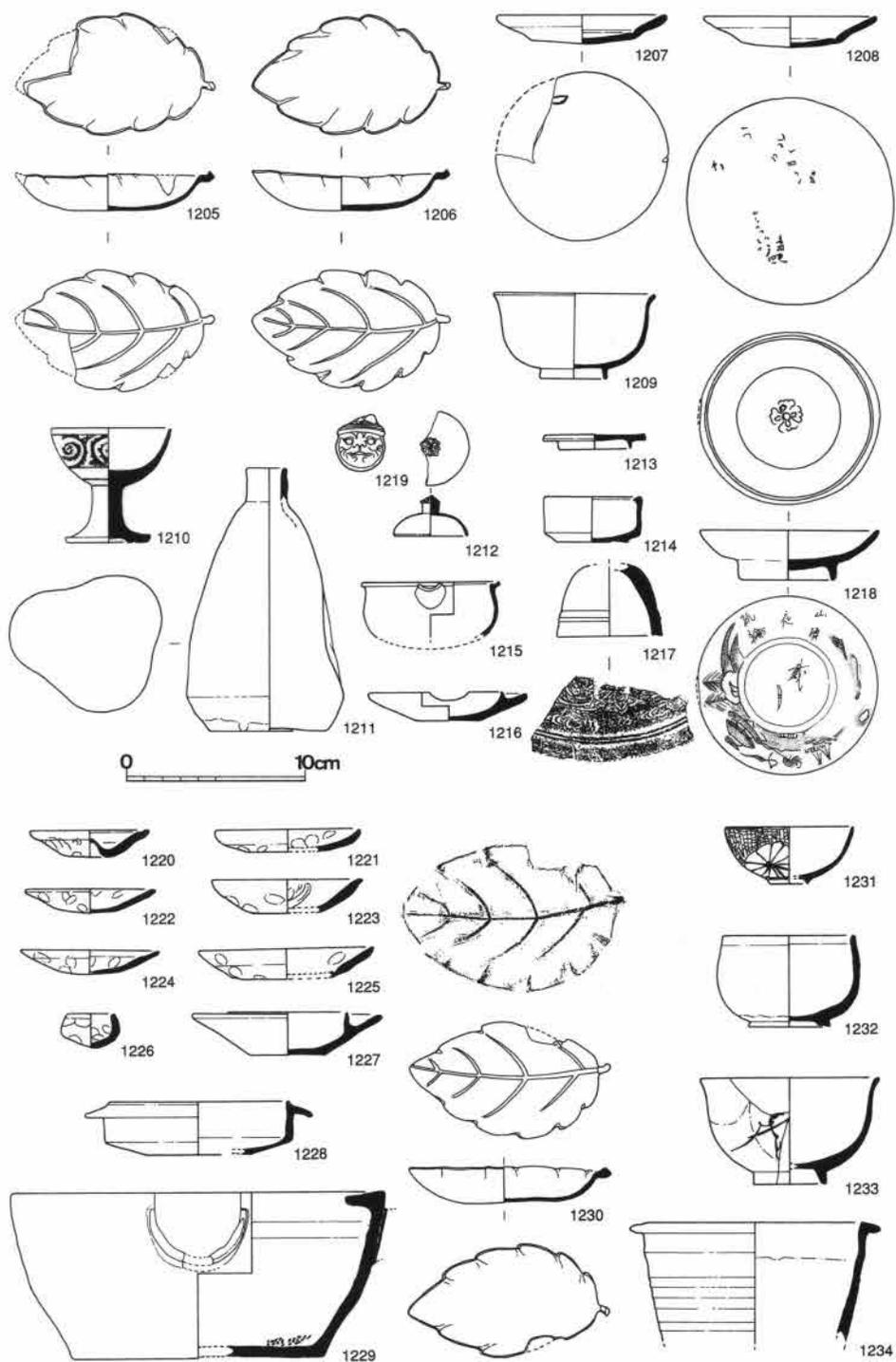
- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1. 黒褐色土        | 4. 黄褐色土(礫多く含む) |
| 2. 黒褐色土(礫多く含む) | 5. 暗黄褐色土       |
| 3. 黄褐色土        | 6. 礫層          |

第79図 溝411実測図

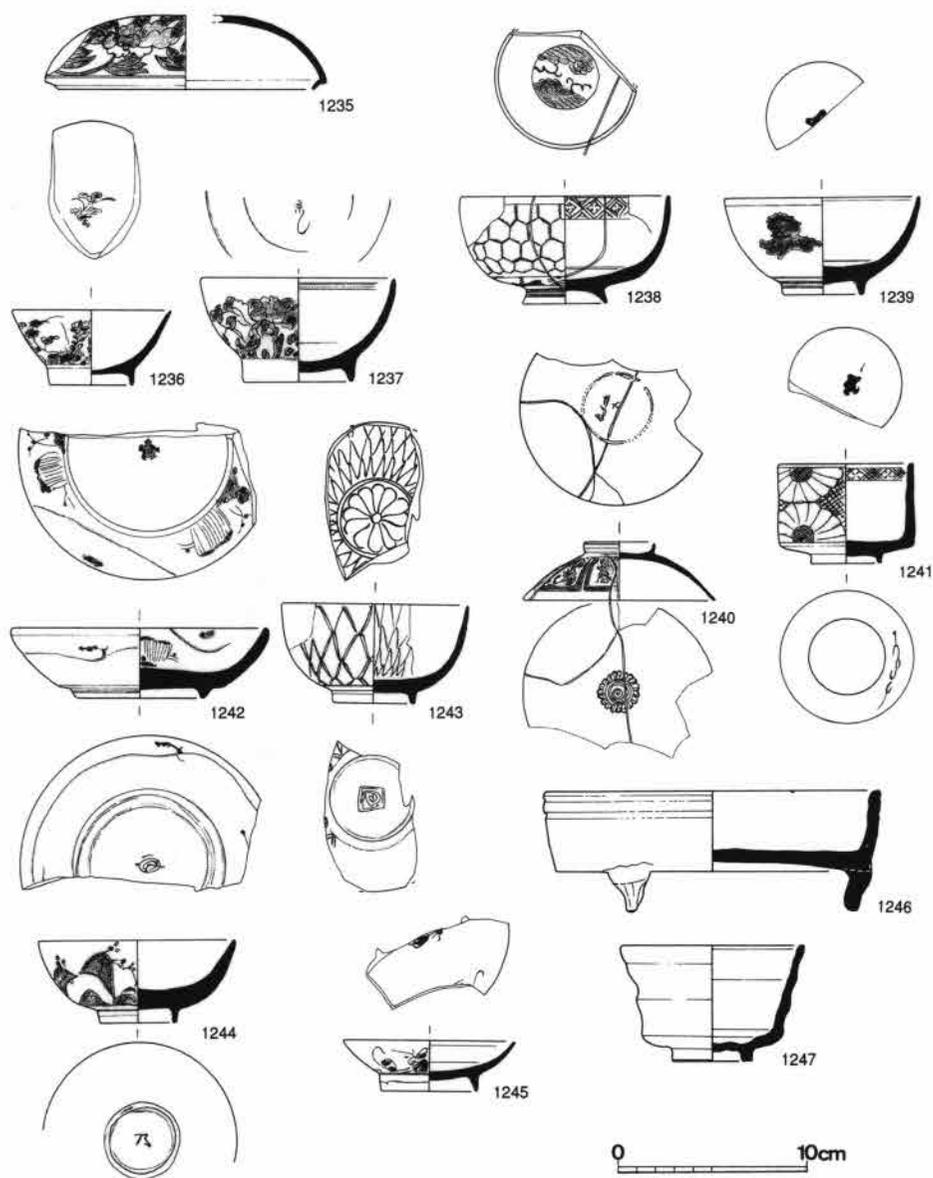


第80図 出土遺物実測図(43) (江戸時代)

1162~1170. 漆喰遺構310 1171~1188. 土坑312-1層 1189~1204. 土坑312-3~6層



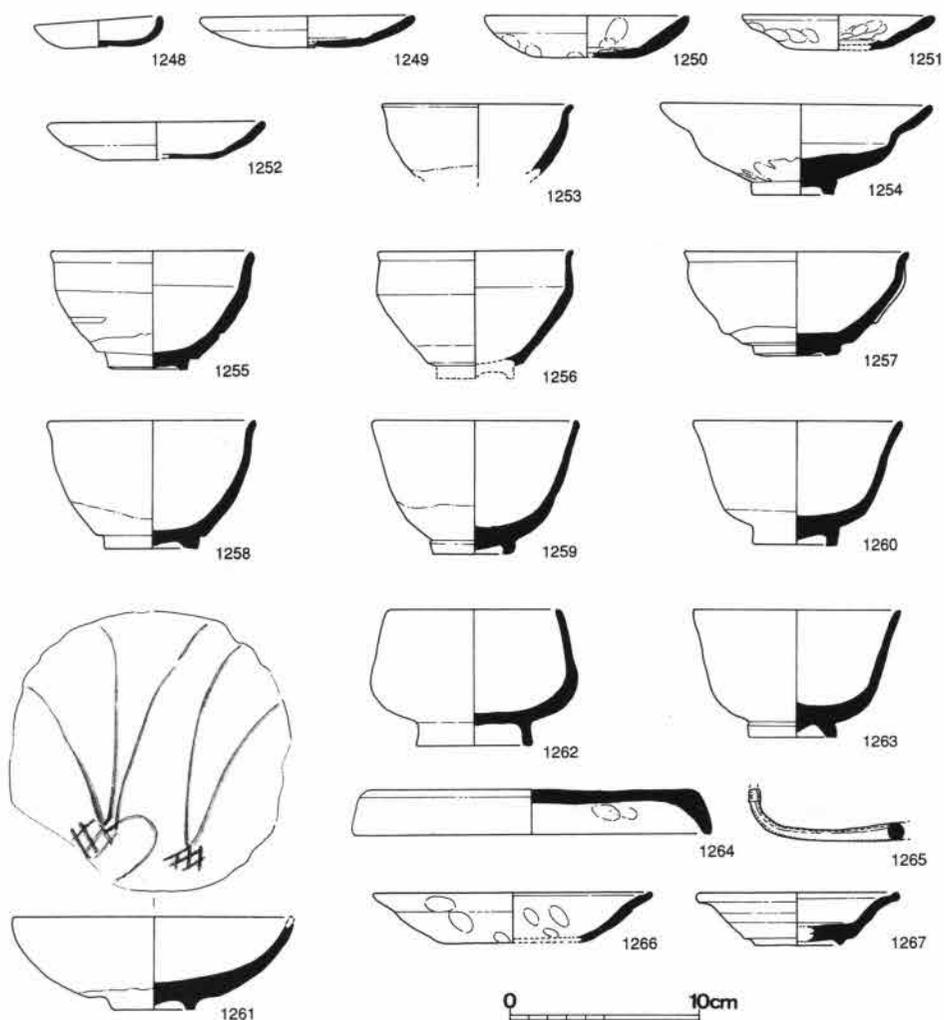
第81図 出土遺物実測図(44) (江戸時代)  
 1205~1219. 土坑312-3~6層 1220~1234. 土坑312



第82図 出土遺物実測図(45) (江戸時代)  
1235~1247. 土坑312

井戸374出土遺物 瀬戸美濃系・澆瓶1311は、平らな底部と半球体をなす体部からなる。上位に把手をもち、口縁部を横位に付す。18世紀後半から19世紀前半に比定できる。

土坑382出土遺物(第86図) 近世土坑からの出土であるが、平安時代に比定できる凝灰岩の切石である。加工面は風化しており、一部欠損している。



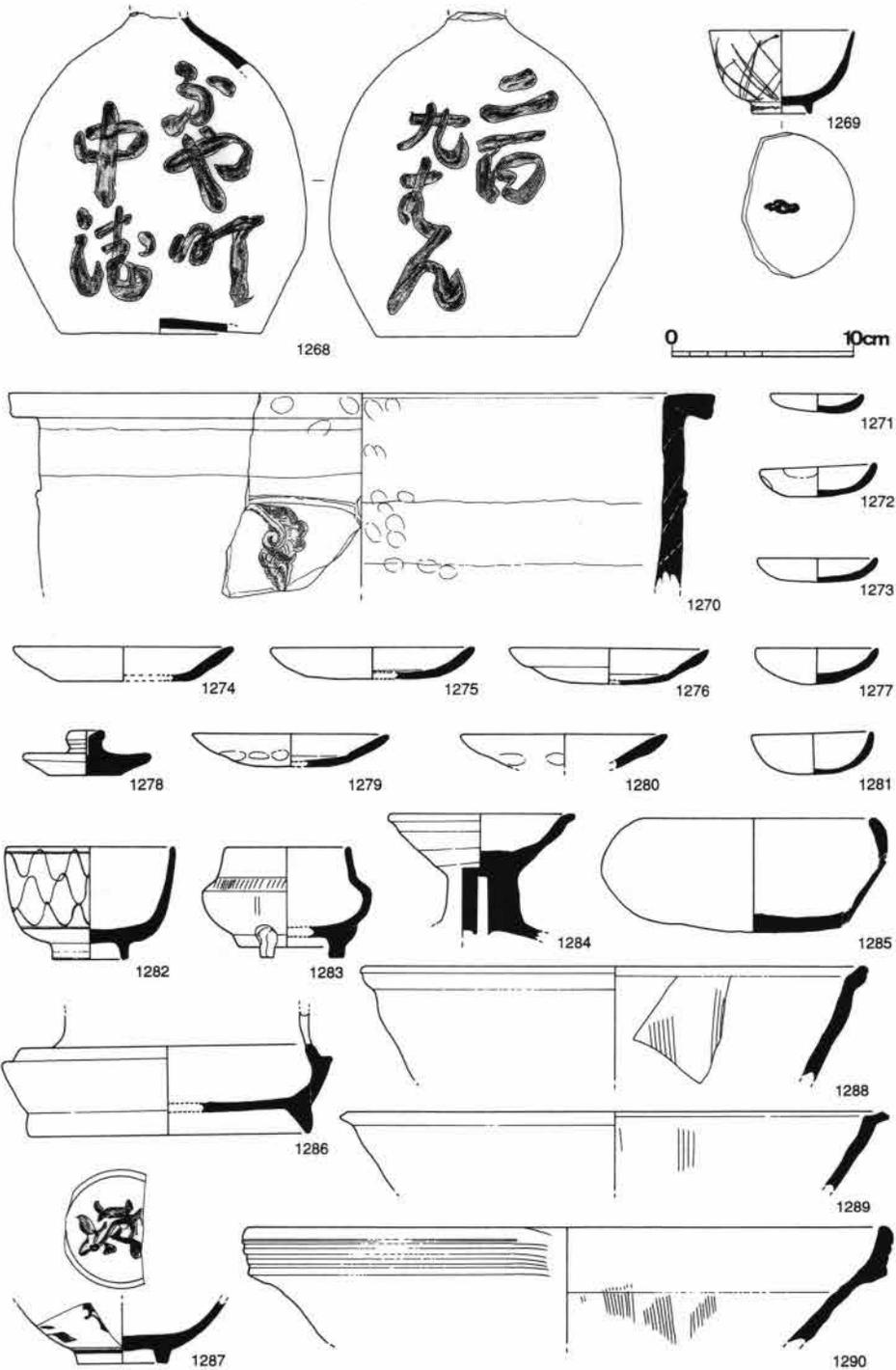
第83図 出土遺物実測図(46) (安土・桃山～江戸時代)

1248～1265. 井戸313 1266・1267. 井戸313掘形

溝400出土遺物(第87図) 土師皿は、平らな底部から外反する口縁部をもつ。外面には指頭圧痕が観察できる。全体的な特徴から18世紀中葉を前後する時期に比定できる。

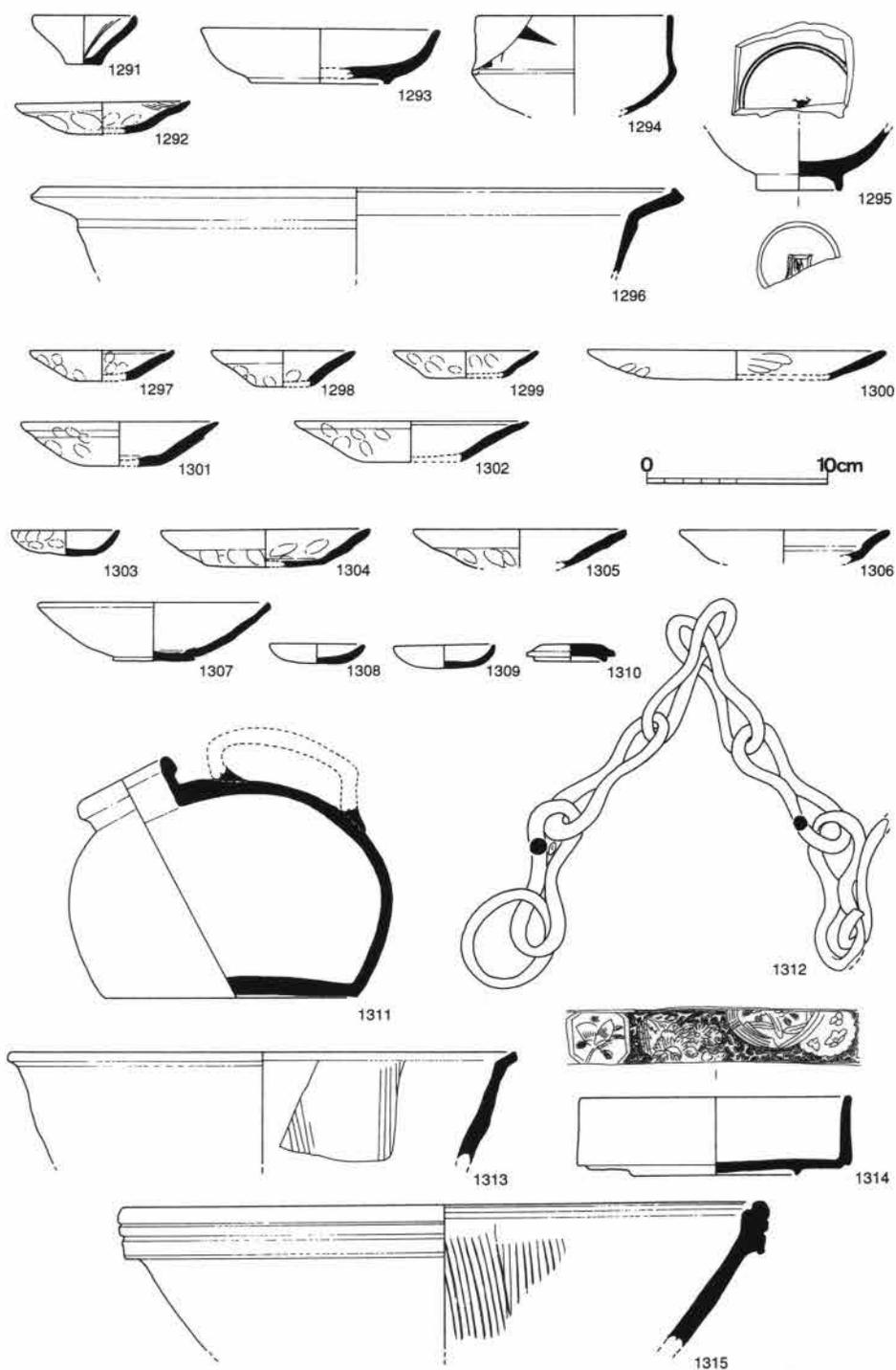
#### 4. 小 結

今回、実施した平安京跡左京一条二坊十四町の発掘調査では、主に平安時代、安土・桃山時代、江戸時代の遺構・遺物を検出することができた。特に、遺物は、整理箱にして900箱を数え、全資料を通観していないが、平安時代の遺物については、近世遺構に伴う資料を除外すれば、ほとんどの資料を図・表の形で資料化できた。また、安土・桃山時代



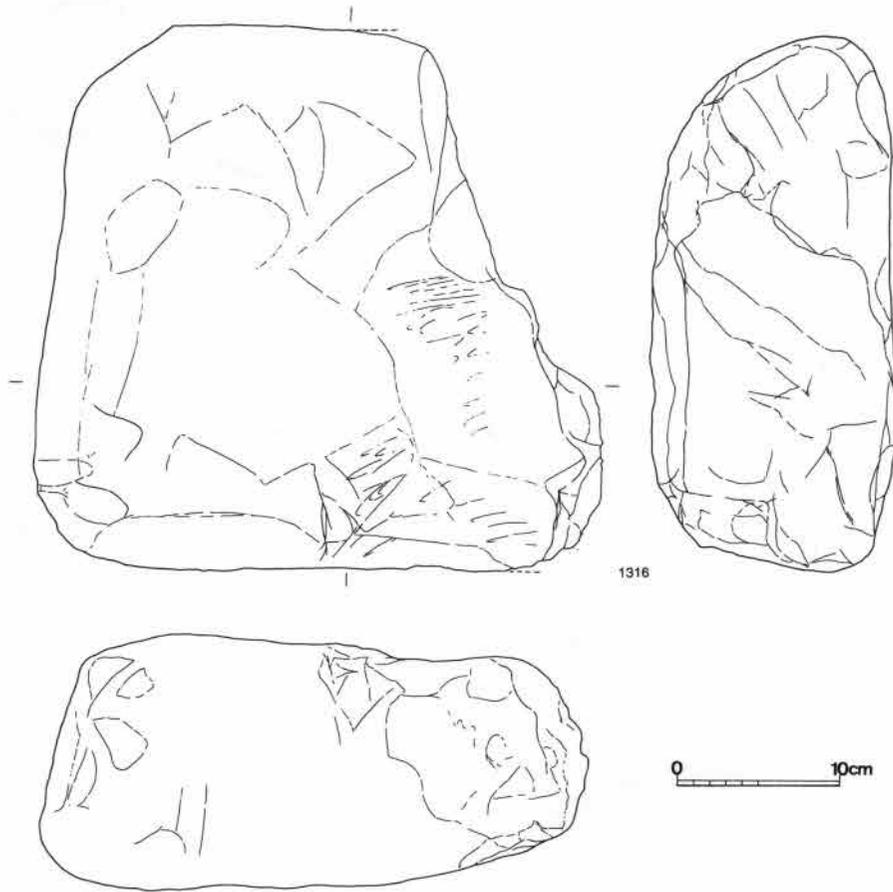
第84図 出土遺物実測図(47) (江戸時代)

1268. 土坑324 1269・1270. 井戸338 1271~1290. 石室343



第85図 出土遺物実測図(48) (江戸時代)

1291~1296. 土塀基礎布掘り360-C1区      1297~1302. 土塀基礎布掘り360-D1区  
 1303~1307. 土塀基礎布掘り361              1308~1315. 井戸374

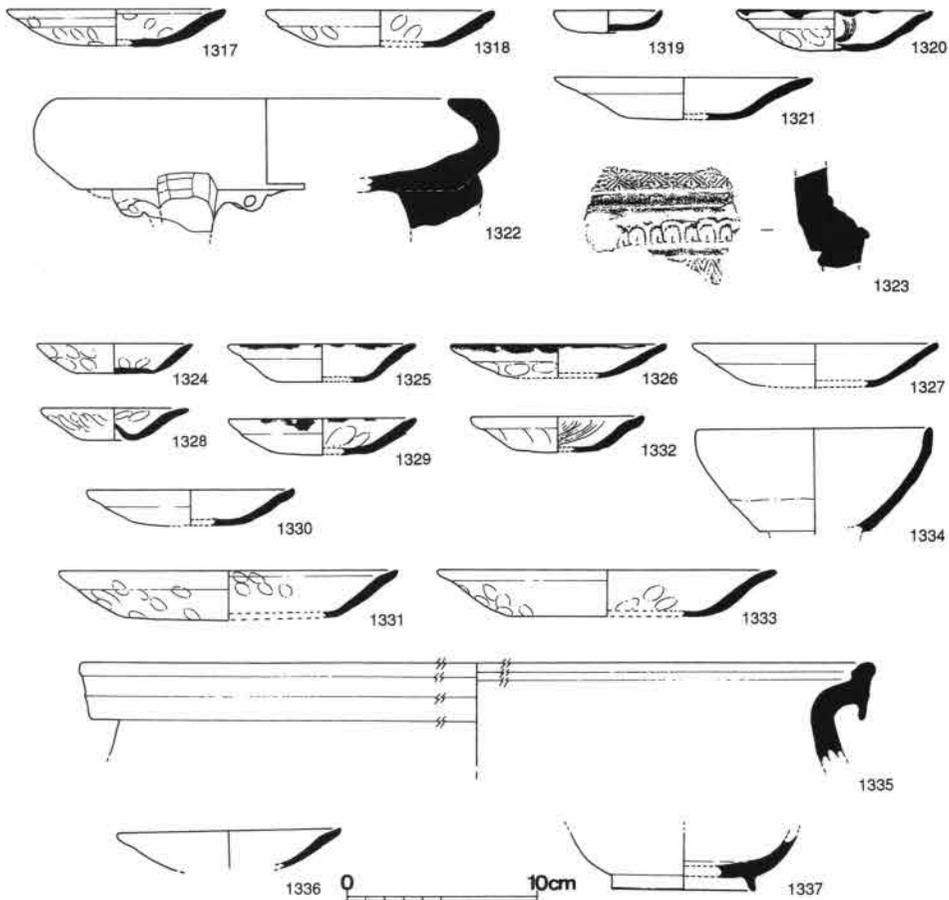


第86図 出土凝灰岩実測図(土坑382)

については、検出遺構及び出土遺物が多量であるため、土坑8・42を中心に、器種構成を念頭に置き、資料化を行った。なお、江戸時代については、主に北トレンチが中心となったが、当該地の歴史的環境を复原する際、重要な遺構を抽出し、概観を行った。

以上のような経過と現状を踏まえ、以下に各時代ごとに総括しておきたい。

平安時代に属する遺構・遺物としては、土坑170及び土坑周辺の遺物群と井戸231、柱穴群をあげることができる。土坑170の出土遺物は、施釉陶器の出土量もわずかであり、黒色土器・碗の内面に施されたヘラ磨きと暗文などから、9世紀第2四半世紀を中心とする時期に比定できる。相伴している皇朝十二銭の内、富寿神宝の初鑄年代が818年であり、年代的には矛盾しない。一方、井戸231は、井戸枠などは抜き取られていたが、井戸内から土師器・須恵器などとともに黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土しており、土坑170と比較すれば施釉陶器の出土量は激増している。また、灰釉陶器・碗は、高台が短く、内



第87図 出土遺物実測図(49) (江戸時代)

1317・1318. 溝400-A1区 1319~1323. 溝400-A2区 1324~1335. 溝400 1336・1337. 溝411

面に釉薬がかかる特徴を有していることから、いわゆる、黒笹14号に比定できる資料群である。他の器種なども考慮すれば、9世紀中葉を前後する時期に比定できる。なお、井戸231以東に位置する掘立柱建物跡については、時期を示す土器の検出はわずかであるが、同型式の灰釉陶器・碗の破片が出土している。このように平安時代の検出遺構は、極めて限られており、ほぼ9世紀前半~中葉に比定できることが判明した。

次に、A~F区の遺物包含層について概観しておきたい。A区では、土師器・須恵器の他に緑釉陶器・灰釉陶器の出土比率が増加しており、須恵器・壺Mの底部は、糸切り調整346と貼り付け高台をもつ344が見られる。また、灰釉陶器・碗では、低い高台をもつもの出土比率が低下し、端部が尖頭状を呈する高い高台をもつものの比率が高くなっていることから、いわゆる、黒笹90号窯の特色を抽出することができる。これらから9世紀中葉から9世紀第3四半世紀にかけての年代比定が可能である。同区において、特記すべき遺

物としては、把手付黒色土器・椀、東海系陰刻花文緑釉陶器・椀、白色土器・三足盤、二彩陶器・椀・模型竈、土馬・緑釉瓦などがある。B区では、須恵器・鉢の口縁端部が玉縁状を呈しており、灰釉陶器の大半が黒笹90号窯の特徴を有していることから、9世紀第3四半世紀を中心とする時期に比定できる。C・D・E・F区においても同じ傾向が見られる。一方、軒丸瓦や軒平瓦には、平安京創建瓦を含み、中期に至るまでの瓦が出土しており、当該地の建物の存続年代を考える上で、土器とともに重要である。量的には少ないものの、近江系緑釉陶器・椀357のように10世紀中葉に比定できる土器も出土している点も考慮に入れる必要がある。

当該地は、『大内裏圖考證』において左獄・囚獄司が推定されているところであり、これらの土器・瓦類が示唆する年代と基本的には一致している。しかし、極めて小規模な掘立柱建物跡や井戸のみの検出では、積極的に両者を関連付けることはできない。また、文献を総括的に網羅する『古事類苑・法律部』を通観しても、平安時代の後半期以降の文献が多く見られ、当該時期に係わる記事は、ほとんど見られない傾向がうかがわれる。今後、左獄または囚獄司を積極的に指示できる墨書土器や類似資料の検出があれば、さらに、その関連性については、徐々にではあるが明確になるものと考えられる。

ここでは、遺物が示す年代と文献から推定される左獄・囚獄司の関連が、上述のように希薄ではあるという認識をもった上で、器種構成の比率を比較しておきたい。

平安京内の調査は、主に平安宮及びその周辺に集中する公的施設の調査と右京三条三坊に見られるような貴族の邸宅の調査、そして、一般官人層の居住空間の調査に分類することができる。これらは、明らかに性格の異なるものであるから、各々の調査によって出土する土器の器種構成は異なる。例えば、土師器・須恵器・黒色土器などの日常食器に対する緑釉陶器・灰釉陶器の占める割合は、一般に平安宮及びその周辺に集中する公的施設の方が比率は高く、宮域から遠ざかれば遠ざかるほど、その比率は低くなる傾向を示している。また、各器種ごとにおいても、土師器は、平安宮内であれ京極周辺であれ、使用頻度は高く、また、破碎されやすいことから、絶対点数は、その歴史的背景に関係なく高い比率を示す。例えば、中務省SK01でさえ、土師器は、全体の83.2%を超え、次いで、須恵器が13.6%を示しており、両者の合計は、96.8%となる。一方、右京三条三坊貴族邸SK14でも、土師器は、95.5%を占め、須恵器との合計は99.9%となる。このように、土師器の絶対点数(破片数)があまりにも多いため、抽出データは、当該調査地の性格を正確に表わすことができない結果となる。今回の検出遺構では、井戸231を例に取り上げると、土師器が61%を占め、次いで須恵器が23%を占めている。両者を合計すると84%を占めることとなる。このように、中務省よりも土師器・須恵器が占める割合は低く、緑釉陶器・

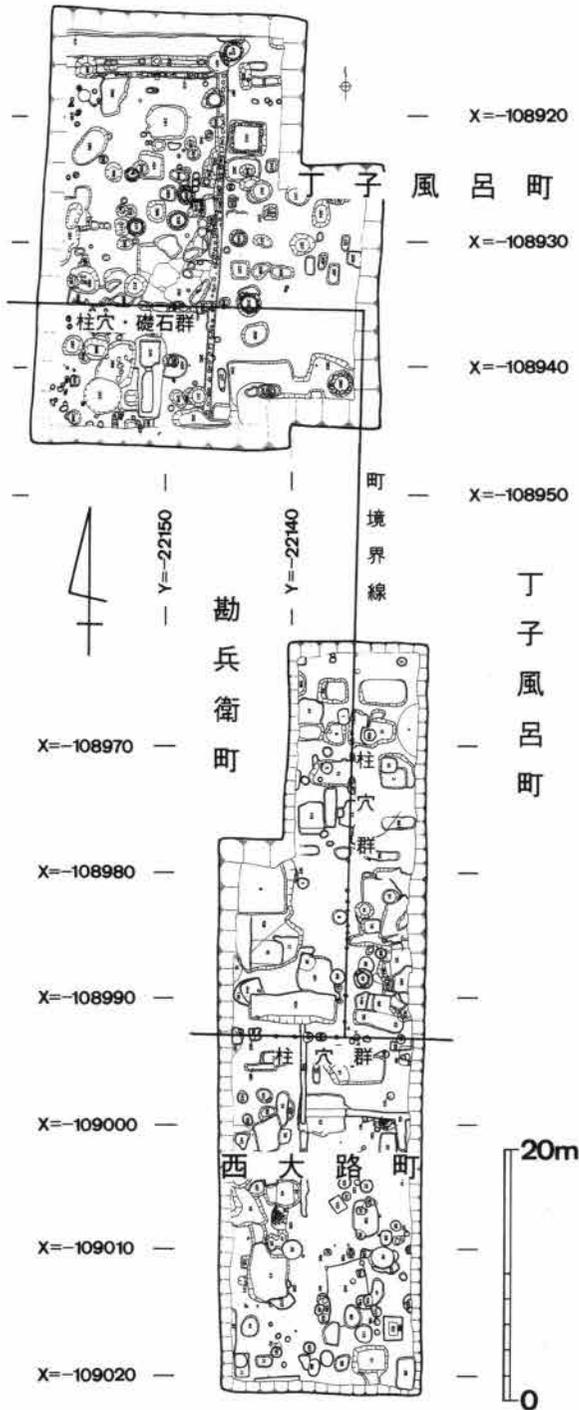
灰釉陶器の占める割合は、13%前後を占めている。以上のように、土師器に起因する器種比率の問題は、平安京出土土器の分類が開始された時から指摘されていることであり、右京三条三坊の報告書では、土師器を除く小型供膳用器だけの比率を出している。今後、破片数のカウント作業が有効に作用すべく統計処理方法の確立がまたれるところであるが、本報文では、一応、基本データとして、比率表を作成した。

以上、簡単ではあるが、平安時代のまとめとおきたいが、直接的には囚獄司や東獄の存在を示唆する状況ではないが、緑釉陶器や灰釉陶器に特記すべき器形が含まれていることなど、今後の検討及び周辺の調査の進行により、さらに明確になる部分が存在することを指摘しておきたい。

次に、安土・桃山時代の概観であるが、南トレンチで検出した土坑8は、その時代にあって極めて規模の大きい土坑であり、その性格が注目される場所である。また、溝26・65・146は、土坑8と併存する可能性が高く、当該地を広い範囲に区画していたことが考えられる。各敷地にどのような建物が存在したかについては、検出した遺構からは不明な点が多いが、土坑8や土坑42のように、規模の大きい土坑は、一定敷地内における建物が、比較的規模の大きいものであることを傍証している。事実報告でも記述したように、土坑8の底部は、壁が垂直に立ち上がる状況を呈しており、底(床)面も平坦に仕上げられていることから、地下式収納庫が存在した可能性がある。

今回の調査地から出水通を挟んだ北方には、京の豪商で著名な茶屋四郎次郎邸が推定され、その存在が一部、確認されつつある。また、茶屋邸が所在したことから、茶屋町という町名が存在したことも知られている。平安時代以降、数々の文献に、当該地には獄舎が所在していたことが知られているが、この獄舎が安土・桃山時代には、すでに廃止されたことが推定されている。この地の北隣接地に茶屋四郎次郎邸が営まれたことは、政治的側面が強調されるべきであるが、一定の敷地を要する茶屋邸が、当該地周辺に設定された基本的条件としては、平安時代以後、東獄・囚獄司などの官司が所在し、規模の縮小はあったものの、一定の空間が公的施設として存続し続け、その空間が、安土・桃山時代になって重要視されたため、当該地周辺に、比較的広い敷地を占有することを許された豪商の屋敷街となった可能性が指摘できる。

今回検出した土坑8は、規模が大きい地下庫と推定できるが、当該地にも、茶屋四郎次郎と同様に、豪商が居住していた可能性が考えられる。『京都叢書』の勘兵衛町の町名起源は、慶長年中(1596~1615)以来、当時の京都の富者である三勘兵衛の一人が居住したことを記載しているが、今回、検出した安土・桃山時代の各遺構は、勘兵衛なる豪商の存在を示唆する可能性も指摘できる。また、第59図に示した男子像は、胎土と釉調から明らか



第88図 検出遺構と町境界

に中国製と考えられる。当時、茶屋四郎次郎は、琉球貿易によって財を成したことで知られており、今回、検出した男子像が、こうした琉球貿易によって日本にもたらされ、さらに茶屋四郎次郎を経由して、当該地へもたらされたと考えることも可能である。いずれにしても、当該地における安土・桃山時代のあり方は、特殊な側面を有していたことを示唆している。

江戸時代では主に北トレンチにおいて、良好な遺構を検出した。まず、トレンチ中央を縦断する土塀基礎布掘り360・361は、わずかな出土遺物ではあるが、18世紀中葉から後半に比定できる。この布掘りは、深さなどの点で異なるが、溝415に接続し、溝400と溝415が、単なる排水溝ではなく、土塀基礎布掘り360・361と同じ性格を有していたと考えられる。また、溝400の北方には、出水通が東西に走っているところから、溝400・415内の柱穴は、出水通に面した敷地の門が存在したことを示唆している。一方、敷地の東面は、土塀基礎布掘り360・361で区画されているが、敷地内の小区画としては、X = -

108,934.8mラインで検出した柱穴列に柵などを敷設することによって行われたと考える。これらは、西方に広がりを見せており、現時点ではその全容を明確にすることはできないが、仮に、当該地西方に走る小川通を西限とすると、敷地面積は、約660㎡(約200坪)を測る。この面積は、一般的な町家と比較すると8倍から10倍の面積を有していたこととなり、何らかの公的施設が存在した可能性を考える必要が生じてくる。これについては、寛保元年(1741年)に編纂された『京大絵図』によると宝林寺が所在したことが描かれている。この宝林寺は、『京都叢書』によると、真宗本願寺に属する寺院で、山城国葛野郡川島村から慶長5(1600)年に当該地に移転した記事が見られる。また、宝永・正徳・天明の3回にわたり火災により焼失し、その度ごとに再建したと書かれている。『京大絵図』には、宝林寺とあり、『京都叢書』坊目誌には「法林寺」とあるが、坊目誌の説文には、「西洞院通。出水下る十六番戸にあり。」と記述されていることから、両者は同一寺院と考えられる。また、寺域についても記述があり、170坪(566㎡)を有したとある。一方、天保2年(1831年)に描かれた『京町絵図細身大成』において当該地は、空白となっており、小川通以東・西洞院以西、出水通以南・下立売通以北の範囲の南半に、長門毛利藩邸が描かれており、天保2年には、法林寺(宝林寺)は描かれていない。

以上のように、当該地の歴史的背景から考えれば、土堀基礎布掘りなどによって区画された敷地及び諸施設は、近世の法林寺と何らかの関連を肯首できる。今後、出土遺物の中に墨書土器などが確認できれば、その関連性についてさらに正確に把握できるであろう。

最後に、検出遺構と町境界について確認しておきたい。当該地には、「丁子風呂町」・「西大路町」・「勘兵衛町」が隣接しているが、丁子風呂町と勘兵衛町の町境界を現行地図で計測すれば、 $Y = -22,134.4 \sim 5m$ ラインを走る。このラインを各トレンチにあてはめて見ると南トレンチ中央を縦断する柱穴列と合致する。一方、勘兵衛町・丁子風呂町と西大路町の町境界は、 $X = -108,992.4m$ ラインを走り、南トレンチでは、縦断する柱穴列に逆「T」字で直角に走る柱穴列と合致している。さらに、丁子風呂町と勘兵衛町の町境界は、 $X = -108,934.8m$ を走り、北トレンチ土堀基礎布掘り360・361以東では、該当する柱列などはないが、以西では、礎石や柱穴・土坑列と合致している。このように、現行の町境界と検出した遺構が一致することが確認できたことは、町境界の歴史を把握する上でも重要であり、町家の変遷を考える上でも重要である。

以上、簡単ではあるが、小結としたい。今回の調査では、東獄・囚獄司から勘兵衛邸、そして、法林寺へと変遷し、現在では府庁関連施設が建設された過程を推測の域を出ないが復原できた。このように、今に至るまで比較的広い範囲にわたって土地利用があったことが、ある程度、検出遺構で確認できたことは、周辺の歴史的環境を考える上で、考古学

調査の重要性を提示したばかりでなく、文献・地図・考古資料が地域史を復原する上で極めて重要であることを今さらながら提起しているのである。

(小池 寛)

調査参加者(順不同、敬称略)

前田暁宏・久保田琢磨・皿木 綾・河野幸代・岸本由紀・齋藤真司・広瀬智行・遠藤 実  
陳 敏・森川敦子・友井川十三代・羽生夕紀子・由水ゆう子・梶間直美・小松佳彦・山中朝子・田中  
美恵子・大島紀子・木村朗子・山本弥生・小滝初代・中島恵美子・疋田季美枝・林 秀子・有近敬  
子・中瀬かほり・田中ゆかり

謝辞

本概要報告書を作成するにあたり、多くの方々からご教示を得た。中でもご多忙の中、古地図や文献についてご指導を賜った京都市歴史資料館山路興造氏、佐藤文子氏、緑釉陶器・灰釉陶器の研究の現状をご教示いただいた国立歴史民俗博物館高橋照彦氏には、記して感謝の意を表したい。また、本文中の記述の中で、中・近世遺物については、当センターの伊野近富、引原茂治、森島康雄調査員に、瓦については松井忠春主任調査員の教示を得た。

付表8 出土土器・木器観察表(口：口縁、頸：頸部、底：底部、台：高台、胴：胴部)

挿図 番号	器種	器形	口径	残存率	図番 号	写真 番号
8-1	土師器	杯	14.0	40%	D590	
2	土師器	杯	14.3	10%(口)	D580	
3	土師器	杯	14.5	30%	D16	
4	黒色土 器	杯	18.0	40%(口)	D140	118
5	土師器	杯	19.6	10%(口)	D594	
6	土師器	杯	13.6	90%	D12	98
7	土師器	椀	12.9	10%(口)	D591	
8	土師器	椀	13.6	40%	D592	
9	土師器	椀	16.8	20%	D13	
10	土師器	皿	15.4	30%	D589	
11	土師器	皿	17.7	10%(口)	D349	
12	土師器	皿	20.0	20%(口)	D348	
13	土師器	甕	17.8	20%	D17	
14	土師器	甕	18.0	10%(口)	D587	
15	土師器	甕	11.6	20%(口)	D607	
16	土師器	壺	6.4	30%	D10	
17	土師器	壺	8.0	30%	D9	
18	黒色土 器	椀	19.1	40%	D138	120
19	黒色土 器	椀	16.4	10%(口)	D586	
21	須恵器	杯蓋	14.4	80%	D8	21
22	須恵器	杯蓋	15.7	30%	D14	
23	須恵器	杯	14.6	50%	D7	
24	須恵器	杯	15.4	20%	D11	
9-25	土師器	杯	18.6	10%(口)	D224	
26	土師器	椀	17.9	10%(口)	D229	
27	土師器	椀	18.0	30%(口)	D225	
28	土師器	椀	12.7	30%(口)	D226	
29	土師器	椀	14.0	30%(口)	D228	
30	土師器	椀	13.7	20%	D529	
31	土師器	椀	13.0	40%	D227	
32	土師器	椀	13.5	90%	D121	42
33	土師器	皿	15.8	30%	D218	
34	土師器	皿	15.7	5%	D216	
35	土師器	皿	16.8	40%	D217	
36	土師器	皿	18.0	30%	D219	
37	土師器	皿	19.0	10%	D220	
38	土師器	皿	19.8	10%	D223	
39	土師器	皿	20.7	20%	D222	
40	土師器	皿	25.2	20%	D528	
41	土師器	杯蓋	29.0	10%	D221	
42	土師器	杯	24.0	20%	D484	
43	土師器	杯	17.7	10%(口)	D145	
44	土師器	杯	19.6	10%	D233	
45	土師器	高杯	31.0	5%(口)	D588	
46	土師器	高杯	38.4	10%(口)	D585	
47	土師器	甕	16.0	10%(口)	D230	
48	土師器	甕	15.4	10%(口)	D231	
49	土師器	甕	18.4	10%	D232	
50	土師器	甕	19.8	20%(口)	D423	
51	黒色土 器	椀	17.0	30%(口)	D313	
52	黒色土 器	皿	15.6	30%	D460	
53	須恵器	杯蓋	15.8	20%(口)	D416	
54	須恵器	杯蓋	17.0	10%(口)	D238	
55	須恵器	杯蓋	20.4	10%(口)	D417	
56	須恵器	杯蓋	20.9	10%(口)	D240	
57	須恵器	杯蓋	23.2	10%(口)	D239	
58	須恵器	杯	12.0	20%(口)	D236	
59	須恵器	杯	13.7	10%(口)	D419	
60	須恵器	杯	13.8	10%(口)	D237	
10-61	須恵器	杯蓋	16.6	10%(口)	D415	
62	須恵器	杯蓋	18.0	20%(口)	D578	
63	須恵器	杯蓋	18.6	5%(口)	D418	
64	須恵器	杯蓋	19.0	20%(口)	D328	
65	須恵器	杯蓋	20.8	30%(口)	D329	
66	須恵器	皿	14.6	5%(口)	D420	
67	須恵器	鉢	26.6	30%(口)	D424	
69	緑釉陶 器	椀	20.4	10%(口)	D308	
70	灰釉陶 器	壺	9.3	5%	D422	
71	須恵器	壺	-	-	D421	
11-72	土師器	杯	14.0	20%(口)	D405	
73	土師器	杯	13.6	70%	D199	101
74	土師器	杯	13.8	60%(口)	D283	
75	土師器	杯	14.0	40%	D210	
76	土師器	杯	14.4	20%(口)	D96	
77	土師器	杯	16.6	80%	D197	109
78	土師器	杯	14.6	80%(口)	D407	
79	土師器	杯	16.6	30%(口)	D361	

80	土師器	杯	15.4	100% (口)	D30	107	122	須恵器	壺	5.7 (頸)	80%	D41	18
81	土師器	杯	17.9	70%	D153	110	123	須恵器	壺	4.7 (頸)	100%	D291	
82	土師器	杯	17.6	40%	D408		124	須恵器	壺	4.1 (口)	100%	D380	91
83	土師器	杯	17.2	30%	D68		125	須恵器	壺	—	90%	D70	94
84	土師器	椀	13.2	95%	D120	44	126	須恵器	壺	2.6 (頸)	100%	D25	92
85	土師器	椀	13.9	40%	D214		127	須恵器	壺	8.0 (頸)	30%	D365	
86	土師器	椀	13.6	100%	D84	99	128	須恵器	壺	—	—	D53	
87	土師器	椀	16.1	80%	D111	45	13-129	須恵器	甕	27.5	20%(口)	D208	
88	土師器	椀	13.8	50%	D178	100	130	須恵器	甕	16.0	20%(口)	D288	
89	土師器	皿	14.4	95%	D134	37	131	須恵器	甕	14.5 (頸)	80%	D362	17
90	土師器	皿	15.5	40%	D213		132	須恵器	二面 硯	—	—	D305	19
91	土師器	皿	16.2	30%(口)	D425		133	黒色土 器	椀	15.2	30%(口)	D99	
92	土師器	皿	14.7	90%	D124	38	134	黒色土 器	椀	16.9	30%(口)	D74	48
93	土師器	皿	13.7	50%	D69		135	黒色土 器	椀	17.8	60%	D33	
94	土師器	皿	13.6	50%	D194	114	136	黒色土 器	椀	18.0	50%	D434	
95	土師器	皿	14.0	40%(口)	D404		137	黒色土 器	椀	18.6	20%	D171	
96	土師器	皿	14.2	60%	D193	115	138	黒色土 器	椀	20.0	10%	D100	
97	土師器	皿	14.4	100%	D29	113	139	黒色土 器	椀	19.6	30%	D98	
98	土師器	皿	14.8	90%	D132	39	140	黒色土 器	椀	17.7	20%	D75	119
99	土師器	皿	16.0	10%	D289		141	黒色土 器	甕	12.8	20%(口)	D366	
100	土師器	皿	14.6	50%(口)	D32		142	黒色土 器	甕	13.0	10%(口)	D367	
101	土師器	皿	15.8	30%(口)	D406		14-143	緑釉陶 器	椀	17.3	70%	D72	72
102	土師器	皿	15.8	30%	D282		144	緑釉陶 器	椀	16.3	70%	D57	7
103	土師器	高杯	—	—	D71		145	緑釉陶 器	椀	12.6	60%(口)	D67	
104	土師器	高杯	—	—	D97								
105	土師器	高杯	—	—	D73								
12-106	土師器	甕	24.8	10%(口)	D428								
107	土師器	甕	25.6	30%	D95								
108	土師器	甕	14.7	20%	D429								
109	土師器	甕	17.2	10%	D176								
110	須恵器	杯蓋	12.0	70%	D133	23							
111	須恵器	杯蓋	—	—	D284								
112	須恵器	杯	14.0	30%	D431								
113	須恵器	杯	14.0	50%	D433								
114	須恵器	杯	14.1	30%	D292								
115	須恵器	杯	14.0	100%	D110	84							
116	須恵器	杯	14.0	40%	D430								
117	須恵器	杯	14.4	100%	D106	25							
118	須恵器	杯	13.8	10%	D52								
119	須恵器	皿	14.2	90%	D109	32							
120	須恵器	椀	13.4	50%	D82								
121	須恵器	壺蓋	12.5	70%	D198	88							

平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)発掘調査概要

146	緑釉陶器	椀	17.2	95%	D107	6	168	無釉陶器	椀	16.0	30%	D39	
147	緑釉陶器	椀	15.6	70%	D122	46	169	灰釉陶器	椀	18.4	10%	D87	
148	緑釉陶器	椀	13.4	70%	D143	75	170	灰釉陶器	甕	26.4	10%	D432	
149	緑釉陶器	椀	16.8	100%	D28	73	171	灰釉陶器	壺(頸)	7.2	95%	D40	1
150	緑釉陶器	椀	16.6	95%	D108	8	15-172	土師器	椀	11.8	40%	D212	
151	緑釉陶器	椀	12.8	90%	D117	10	173	土師器	杯	13.6	80%	D114	102
152	緑釉陶器	椀	13.5	90%	D144	77	174	土師器	椀	14.4	40%	D402	
153	緑釉陶器	椀	17.4	70%	D112	5	175	土師器	椀	15.9	70%	D196	108
154	緑釉陶器	椀	15.6	30%	D37	74	176	土師器	椀	17.0	10%	D593	
155	緑釉陶器	椀	13.7	50%	D401		177	黒色土器	椀	15.0	60%	D43	49
156	緑釉陶器	椀	12.8	50%	D179	112	178	黒色土器	椀	17.0	30%	D44	
157	緑釉陶器	椀	13.2	70%	D113	43	16-179	土師器	椀	20.4	10%(口)	D388	
158	緑釉陶器	皿	14.4	30%	D392		180	土師器	椀	19.9	10%(口)	D390	
159	緑釉陶器	皿	13.4	100%	D27		181	土師器	皿	19.9	10%(口)	D389	
160	緑釉陶器	皿	12.9	100%	D60	78	182	土師器	皿	14.7	10%(口)	D385	
161	灰釉陶器	椀	16.7	-	D56	14	183	土師器	高杯	15.6	10%(口)	D386	
162	灰釉陶器	皿	15.3	20%(口)	D88		184	土師器	高杯	-	-	D387	
163	灰釉陶器	椀	14.6	30%(口)	D36	15	185	黒色土器	皿	19.9	5%	D391	
164	灰釉陶器	椀	14.9	50%	D38		186	須恵器	杯蓋	12.0	50%(口)	D324	
165	灰釉陶器	椀	14.8	70%(口)	D164		187	須恵器	杯蓋	15.9	10%(口)	D323	
166	灰釉陶器	皿	15.9	70%	D42	16	188	須恵器	壺蓋	13.9	肩部20%	D326	
167	灰釉陶器	皿	16.7	50%	D31		189	須恵器	杯	12.7	20%(口)	D325	
							190	須恵器	杯	14.9	30%(口)	D383	
							191	須恵器	凹面硯	15.6	10%(口)	D103	
							192	須恵器	壺蓋	12.2	20%(口)	D327	
							193	須恵器	甕	16.0	5%(口)	D381	
							194	須恵器	鉢	27.0	60%	D151	97
							195	須恵器	椀	16.8	10%(口)	D382	
							196	緑釉陶器	椀	13.8	30%	D384	
							197	灰釉陶器	椀	16.1	80%(口)	D55	13
							198	灰釉陶器	椀	14.7	30%(口)	D322	
							17-199	土師器	羽釜	26.7	羽部20%	D493	
							200	須恵器	鉢	15.8	10%(口)	D492	

201	須惠器	壺蓋	8.3	40%(口)	D491	
202	須惠器	壺	—	10%	D490	89
203	緑釉陶器	椀	12.9	100%	D64	
204	緑釉陶器	皿	16.9	40%	D58	12
205	緑釉陶器	皿	18.0	30%	D65	
206	黒色土器	椀	18.8	30%(口)	D141	117
207	須惠器	鉢	30.1	10%	D601	
208	黒色土器	皿	11.0	40%	D142	80
209	土師器	椀	14.5	30%	D209	
210	土師器	椀	17.8	10%	D448	
211	土師器	皿	19.0	60%	D123	
212	土師器	皿	20.0	10%	D451	
213	土師器	甕	18.2	20%	D449	
214	土師器	高杯	34.3	20%	D450	
215	須惠器	杯	16.0	5%	D452	
216	須惠器	杯蓋	12.8	40%	D243	
217	須惠器	皿	15.4	20%	D244	
218	須惠器	甕	13.6	10%	D246	
18-219	土師器	皿	18.9	5%	D564	
220	土師器	甕	24.0	10%	D150	
221	土師器	甕	25.4	20%(口)	D278	
222	灰釉陶器	壺	23.2	30%(口)	D565	
223	須惠器	壺	—	—	D147	90
224	須惠器	鉢	24.8	30%	D563	
19-225	黒色土器	椀	13.8	20%	D205	
226	黒色土器	椀	14.0	30%	D206	
227	灰釉陶器	椀	17.6	10%	D202	
228	土師器	羽釜	25.0	20%	D204	
229	須惠器	杯蓋	21.9	20%	D190	
230	須惠器	杯蓋	12.7	20%	D191	
231	須惠器	杯蓋	15.6	20%	D189	
232	緑釉陶器	皿	15.2	10%(口)	D595	
233	緑釉陶器	唾壺(頸)	4.8	50%	D1	2
234	須惠器	杯	14.2	40%	D311	
235	土師器	甕	27.6	10%(口)	D355	
236	黒色土器	甕	15.7	10%(口)	D356	
237	黒色土器	甕	16.8	10%(口)	D281	
238	須惠器	杯蓋	20.0	10%(口)	D331	
239	須惠器	鉢	21.4	10%(口)	D330	
240	灰釉陶器	椀	13.2	10%(口)	D285	
241	灰釉陶器	皿	15.6	70%	D157	82
242	灰釉陶器	皿	—	20%	D469	
21-243	土師器	杯	17.1	20%	D318	
244	土師器	杯	19.2	10%	D262	
245	土師器	椀	16.6	20%	D341	
246	土師器	杯	16.0	20%(口)	D374	
247	土師器	杯	13.7	30%	D551	
248	土師器	皿	16.4	10%	D395	
249	土師器	杯	17.6	10%	D319	
250	土師器	杯	12.0	10%(口)	D350	
251	土師器	杯蓋	2.0	10%	D479	
252	土師器	杯蓋	19.8	20%	D339	
253	土師器	杯蓋	23.0	10%	D263	
254	土師器	杯蓋	21.6	60%	D192	116
255	土師器	杯蓋	25.7	30%	D523	
256	土師器	杯	22.2	10%	D399	
257	土師器	杯	19.2	30%	D79	
258	土師器	杯	—	—	D279	
259	土師器	杯	17.6	40%(口)	D162	111
260	土師器	杯(台)	11.0	30%	D241	
261	土師器	杯	15.2	30%	D315	
262	土師器	杯	13.2	40%(口)	D262	
263	土師器	椀	16.0	20%(口)	D250	
264	土師器	椀	14.2	30%	D394	
265	土師器	皿	14.1	10%	D549	
266	土師器	皿	16.2	10%	D317	
267	土師器	皿	18.0	30%	D314	
268	土師器	皿	18.8	10%	D548	
269	土師器	皿	18.6	60%(口)	D251	
270	土師器	高杯	30.6	10%(口)	D364	
271	土師器	高杯	29.6	10%	D526	

平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)発掘調査概要

272	土師器	高杯	34.0	10%	D525	
273	土師器	高杯	33.3	10%	D571	
274	土師器	高杯 (底)	15.8	30%	D273	
275	土師器	高杯 (底)	18.9	20%	D264	
276	土師器	高杯 (底)	15.2	10%	D480	
22-277	土師器	甕	18.8	10%(口)	D369	
278	土師器	甕	20.8	10%(口)	D368	
279	土師器	甕	25.4	10%(口)	D363	
280	土師器	甕	24.0	20%(口)	D321	
281	土師器	甕	27.8	10%(口)	D370	
282	土師器	甕	28.8	20%(口)	D277	
283	土師器	甕	32.2	5%(口)	D371	
284	黒色土器	椀	18.0	60%	D139	121
285	黒色土器	椀	19.6	10%	D397	
286	黒色土器	椀	20.0	10%	D398	
287	黒色土器	壺	-	-	D499	
288	黒色土器	椀	19.2	10%(口)	D345	
289	黒色土器	椀	17.9	20%(口)	D343	
290	黒色土器	椀	21.0	10%	D354	
291	黒色土器	椀	23.6	20%	D344	
292	黒色土器	不明	-	-	D478	
293	黒色土器	甕	10.8	20%	D597	
294	黒色土器	甕	10.0	10%(口)	D375	
295	黒色土器	甕	13.5	50%	D488	
23-296	黒色土器	甕	15.6	10%(口)	D342	
297	黒色土器	甕	18.8	30%(口)	D247	
298	黒色土器	甕	17.9	10%(口)	D378	
299	黒色土器	甕	19.0	40%	D487	
300	黒色土器	甕	19.0	10%(口)	D473	
301	黒色土器	鉢	26.6	10%(口)	D272	
302	須恵器	杯蓋	12.8	10%(口)	D353	
303	須恵器	杯蓋	12.6	20%(口)	D602	
304	須恵器	杯蓋	12.8	20%(口)	D599	
305	須恵器	杯蓋	14.2	30%	D310	
306	須恵器	杯蓋	14.1	30%(口)	D259	
307	須恵器	杯蓋	15.5	10%(口)	D372	
308	須恵器	杯蓋	16.0	10%(口)	D598	
309	須恵器	杯蓋	15.2	10%	D245	
310	須恵器	杯蓋	16.5	30%	D522	
311	須恵器	杯蓋	15.0	10%(口)	D271	
312	須恵器	杯蓋	15.7	10%(口)	D566	
313	須恵器	杯蓋	17.2	20%(口)	D553	
314	須恵器	杯蓋	18.4	10%(口)	D261	
315	須恵器	杯蓋	19.0	10%(口)	D257	
316	須恵器	杯蓋	21.5	10%(口)	D260	
317	土師器	杯蓋	1.7	10%	D320	
318	須恵器	杯蓋	-	-	D489	
319	須恵器	杯蓋	-	-	D248	
320	須恵器	杯	13.6	10%(口)	D258	
321	須恵器	杯	13.0	10%(口)	D256	
322	須恵器	杯	11.8	10%	D462	
323	須恵器	杯	16.1	10%	D376	
324	須恵器	杯	15.5	10%(口)	D377	
325	須恵器	杯	12.8	10%(口)	D568	
326	須恵器	杯	12.5	-	D158	
327	須恵器	杯	11.2	10%(口)	D280	
328	須恵器	杯	11.5	10%(口)	D596	
329	須恵器	杯	12.1	60%	D154	85
330	須恵器	杯	13.0	10%(口)	D574	
331	須恵器	杯	12.4	30%	D242	
332	須恵器	杯	15.1	10%(口)	D255	
333	須恵器	杯 (台)	7.4	20%	D470	
334	須恵器	杯	-	-	D496	
335	須恵器	椀 (台)	6.4	50%	D269	

336	須恵器	皿	13.2	30%(口)	D316	
337	須恵器	皿	13.8	10%(口)	D494	
338	須恵器	皿	14.0	50%	D538	
339	須恵器	皿	15.8	20%(口)	D83	
14-340	須恵器	壺蓋	10.8	60%	D115	24
341	須恵器	壺蓋	13.6	50%	D537	
342	須恵器	壺	8.7	30%(口)	D373	
343	灰釉陶器	壺	9.5	20%(口)	D572	
344	須恵器	壺	2.6	90%	D80	93
		(頸)				
345	須恵器	壺	3.5	90%	D46	96
346	須恵器	壺	3.8	100%	D3	95
347	須恵器	鉢	22.8	30%(口)	D427	
348	須恵器	鉢	21.4	10%	D463	
349	須恵器	鉢	23.0	20%	D527	
350	須恵器	鉢	25.7	10%	D524	
351	須恵器	鉢	25.0	10%(口)	D570	
352	須恵器	甕	19.1	40%	D554	
353	須恵器	甕	26.6	10%(口)	D272	
354	緑釉陶器	椀	12.8	10%(口)	D567	
355	緑釉陶器	椀	4.5	60%	D573	
		(台)				
356	緑釉陶器	椀	13.3	—	D160	76
357	緑釉陶器	椀	9.4	50%	D18	
358	緑釉陶器	椀	13.8	30%(口)	D439	
359	緑釉陶器	椀	8.2	20%	D541	
		(台)				
360	緑釉陶器	椀	14.0	30%	D396	
361	緑釉陶器	椀	15.8	10%(口)	D309	
362	緑釉陶器	椀	14.7	30%	D47	
363	緑釉陶器	椀	13.6	10%(口)	D215	
364	緑釉陶器	椀	16.2	30%	D400	
365	緑釉陶器	椀	17.2	50%	D521	4
366	緑釉陶器	椀	16.9	40%	D486	
367	緑釉陶器	椀	18.4	30%(口)	D163	71
368	緑釉陶器	椀	—	10%	D20	
369	緑釉陶器	椀	19.6	20%(口)	D474	
370	緑釉陶器	皿	14.2	10%	D393	
371	緑釉陶器	椀	5.0	30%	D443	273
		(台)				
372	緑釉陶器	皿	11.0	10%(口)	D516	
25-373	白色土器	三足盤	10.6	10%	D498	
374	白色土器	三足盤	17.0	20%	D86	
375	緑釉陶器	香炉	10.5	10%	D375	
376	緑釉陶器	火舎	—	—	D506	
377	灰釉陶器	椀	14.4	30%	D332	
378	灰釉陶器	椀	13.9	10%(口)	D515	
379	灰釉陶器	椀	8.1	10%	D569	
		(台)				
380	灰釉陶器	椀	17.1	10%(口)	D410	
381	灰釉陶器	椀	—	—	D543	
382	灰釉陶器	椀	—	—	D542	
383	灰釉陶器	椀	8.1	30%	D603	
		(台)				
384	灰釉陶器	椀	8.4	30%	D270	
		(台)				
385	灰釉陶器	椀	6.1	10%(底)	D19	
		(底)				
386	須恵器	段皿	6.4	50%	D550	
		(台)				
387	灰釉陶器	椀	7.5	10%	D575	
		(台)				

388	灰釉陶器	椀	6.1 (底)	30%	D495		425	須恵器	杯	11.8	30%	D437	
389	灰釉陶器	皿	13.0	10%(口)	D461		426	須恵器	椀	14.8	30%(口)	D435	
390	灰釉陶器	三足盤	18.2	20%	D2	81	427	須恵器	椀	17.2	10%	D185	
391	灰釉陶器	皿	7.5	40%	D556		428	須恵器	椀	13.6	10%	D186	
392	灰釉陶器	耳杯	6.0 (底)	30%(底)	D66		429	須恵器	杯	13.0	70%(口)	D510	
393	灰釉陶器	壺蓋	13.4	10%(口)	D604		430	須恵器	鉢	22.0	10%	D512	
394	灰釉陶器	壺	—	50%	D85		431	須恵器	壺	14.7	10%	D187	
395	緑釉陶器	模型壺	2.1 (底)	100%	D116		432	須恵器	円面硯	11.6	—	D90	
396	無釉陶器	椀	12.6	70%	D268	83	433	無釉陶器	皿	13.2	30%	D136	87
397	二釉陶器	椀	15.0	30%(口)	D440		434	緑釉陶器	段皿	9.6 (底)	50%	D303	
398	青磁	皿	11.8	10%(口)	D477		435	緑釉陶器	壺	4.6 (底)	10%	D21	
399	土師器	小竈	—	—	D504		436	灰釉陶器	椀	9.2	30%	D583	
403	土師器	小竈	—	—	D503		437	灰釉陶器	椀	8.0 (台)	20%	D576	
408	須恵質	筒形	2.1		D502		438	灰釉陶器	椀	7.8 (台)	20%	D438	
26-409	土師器	椀	13.2	20%	D518		439	灰釉陶器	椀	6.4	30%	D146	
410	土師器	杯	13.8	10%	D302		440	灰釉陶器	椀	8.4 (底)	20%	D411	
411	土師器	椀	18.6	10%(口)	D412		441	灰釉陶器	椀	6.7	70%	L47	
412	黒色土器	皿	15.6	10%	D304		27-442	灰釉陶器	皿	16.8	10%(口)	D581	
413	白色土器	高杯	—	—	D511		443	灰釉陶器	皿	14.6	10%(口)	D582	
414	土師器	甕	15.2	30%(口)	D312		444	灰釉陶器	皿	16.0	20%	D184	
415	土師器	甕	24.8	5%(口)	D414		445	灰釉陶器	甕	19.1	10%(口)	D513	
416	土師器	甕	25.4	10%(口)	D301		446	中国青磁	合子蓋	13.9	20%	D509	
417	土師器	甕	24.8	5%(口)	D413		447	土師器	椀	13.5	30%	D626	
418	土師器	甕	33.2	10%(口)	D465		448	土師器	椀	17.8	10%	D627	
419	黒色土器	甕	15.2	10%(口)	D436		449	土師器	椀	18.3	20%	D552	
420	黒色土器	杯	5.8 (台)	20%(底)	D517		450	土師器	椀	18.8	10%	D628	
421	須恵器	杯蓋	13.1	30%(口)	D508	22	451	土師器	杯	21.7	10%	D630	
422	須恵器	杯蓋	10.9	20%(口)	D347		452	土師器	杯	21.0	60%	D131	47
423	須恵器	杯蓋	13.4	10%(口)	D466		453	土師器	高杯	—	—	D629	
424	須恵器	杯蓋	15.6	10%(口)	D188								

454	土師器	甕	17.1	10%	D631	
455	土師器	—	6.5	—	D562	
456	須恵器	杯蓋	12.4	20%(口)	D426	
457	須恵器	甕	28.3	10%(口)	D632	
458	緑釉陶器	椀	13.0	50%(底)	D624	
459	外来系 緑釉	罐 (胴)	23.8	—	D50	276
460	灰釉陶器	皿	13.4	30%	D625	
461	灰釉陶器	椀	16.0	10%(口)	D561	
28-462	土師器	椀	12.0	30%(口)	D299	
463	土師器	杯	17.6	20%	D167	
464	土師器	杯	21.4	20%	D170	
465	土師器	皿	17.6	20%(口)	D173	
466	土師器	甕	16.4	20%(口)	D175	
467	黒色土器	椀	18.0	20%(口)	D181	
468	黒色土器	皿	13.6	10%(口)	D172	
469	須恵器	杯蓋	16.0	20%	D183	
470	須恵器	杯	12.3	30%	L454	
471	須恵器	鉢	23.4	10%(口)	D514	
472	須恵器	鉢	28.0	10%(口)	D207	
473	須恵器	壺	6.5	20%(口)	D211	
474	須恵器	円面 硯	13.5	20%(口)	D101	
475	緑釉陶器	椀	15.2	30%	D148	
476	緑釉陶器	椀 (底)	7.4	30%	D298	
477	緑釉陶器	椀	12.4	10%(口)	D174	
478	緑釉陶器	皿	13.8	50%(口)	D54	11
479	緑釉陶器	皿	15.5	30%(口)	D297	
480	緑釉陶器	皿	14.6	10%(口)	D296	
481	緑釉陶器	皿	25.1	20%	D447	
482	灰釉陶器	皿	15.0	10%(口)	D293	
483	灰釉陶器	皿 (底)	6.7	50%(台)	D294	
484	緑釉陶器	皿	12.4	10%(口)	L446	
485	灰釉陶器	段皿 (台)	9.0	30%(台)	D295	
486	灰釉陶器	耳杯	17.1	10%	D410	
487	土師器	椀	14.0	10%	D266	
488	土師器	甕	17.6	40%(口)	D274	
489	土師器	甕	19.2	10%	D267	
490	土師器	甕	22.7	10%	D351	
491	土師器	甕	13.5	10%	D177	
492	白色土器	高杯	—	—	D497	
493	須恵器	杯蓋	15.4	30%	D555	
494	須恵器	杯蓋	14.4	40%	D577	
495	須恵器	杯蓋	13.6	10%	D616	
496	須恵器	杯蓋	14.9	10%	D615	
497	須恵器	杯蓋	20.0	10%	D290	
498	須恵器	杯	6.8	30%	D265	
499	須恵器	椀 (台)	7.8	30%(台)	D81	
500	須恵器	杯	12.5	20%(底)	D105	
501	須恵器	壺	8.0	30%(口)	D352	
29-502	須恵器	杯	13.5	70%	D119	26
503	須恵器	皿	13.8	50%	D127	31
504	須恵器	円面 硯	15.6	20%	D104	
505	須恵器	鉢	20.6	20%(口)	D152	
506	緑釉陶器	椀	15.0	10%(口)	D441	
507	緑釉陶器	椀 (台)	7.6	30%(台)	D613	
508	緑釉陶器	瓶 (胴)	9.0	—	D505	
509	灰釉陶器	椀	14.7	10%	D612	
510	灰釉陶器	椀	15.4	10%	D610	
511	灰釉陶器	椀	15.9	10%	D611	
512	灰釉陶器	椀	7.3	30%	D614	

平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)発掘調査概要

513	灰釉陶器	椀	15.4	10%	D182		544	須恵器	杯	8.5	70%	D129	29
							38-584	土師器	皿	4.9	70%	L42	
514	灰釉陶器	椀	18.0	30%	D149		585	土師器	皿	5.1	90%	L220	
							586	土師器	皿	5.9	80%	L6	182
515	灰釉陶器	皿	14.2	30%	D165		587	土師器	皿	5.5	100%	160	
							588	土師器	皿	6.7	50%	L222	
516	二彩	椀	13.8	10%(口)	D442		589	土師器	皿	4.8	60%	L205	
517	白磁	椀	13.9	10%	D584		590	土師器	皿	5.3	50%	L211	
30-518	土師器	椀	12.5	40%	D445		591	土師器	皿	6.4	40%	L192	
519	土師器	椀	16.7	20%	D622		592	土師器	皿	5.8	30%	L218	
520	土師器	皿	9.9	10%	D620		593	土師器	皿	6.5	30%	L208	
521	土師器	皿	16.6	20%	D621		594	土師器	皿	5.3	60%	L309	
522	土師器	皿	16.6	10%	D559		595	土師器	皿	5.4	100%	L213	
523	土師器	甕	15.0	20%(口)	D306		596	土師器	皿	6.2	30%	L214	
524	土師器	甕	26.0	10%(口)	D482		597	土師器	皿	5.8	50%	L43	
525	土師器	甕	14.6	40%(口)	D275		598	土師器	皿	6.4	30%	L212	
526	黒色土器	甕	17.6	10%(口)	D623		599	土師器	皿	5.1	50%	L219	
							600	土師器	皿	5.5	100%	L4	
527	黒色土器	甕	18.8	20%(口)	D558		601	土師器	皿	5.6	30%	L44	
							602	土師器	皿	6.4	30%	L187	
528	須恵器	杯	12.2	20%(口)	D606		603	土師器	皿	6.8	30%	L189	
529	須恵器	杯	13.0	20%(口)	D557		604	土師器	皿	5.2	100%	L118	
530	須恵器	杯	9.0	20%(口)	D608		605	土師器	皿	5.5	100%	L119	
531	須恵器	杯	14.2	10%(口)	D481		606	土師器	皿	5.5	90%	L5	
532	須恵器	杯	13.8	80%	D126	30	607	土師器	皿	6.2	30%	L191	
533	須恵器	杯	12.2	10%(口)	D560		608	土師器	皿	6.7	60%	L308	
534	須恵器	壺	11.2	20%(口)	D307		609	土師器	皿	5.4	80%	L188	
535	須恵器	盤	25.1	20%	D447		610	土師器	皿	5.7	60%	L307	
536	緑釉陶器	椀	13.5	70%	D128	28	611	土師器	皿	6.6	50%	L209	
							612	土師器	皿	5.7	60%	L210	
537	緑釉陶器	椀	15.6	10%(口)	D605		613	土師器	皿	6.6	100%	L183	
							614	土師器	皿	3.4	30%	L310	
538	緑釉陶器	椀	6.1	70%(底)	D618		615	土師器	皿	4.8	40%	L206	
							616	土師器	皿	6.4	60%	L184	
539	緑釉陶器	香炉 蓋	11.8	10%	D102	3	617	土師器	皿	6.3	100%	L117	164
							618	土師器	皿	6.8	50%	L221	
540	灰釉陶器	皿	14.4	40%	D135	79	619	土師器	皿	8.4	50%	L80	
							620	土師器	皿	8.0	20%	L207	
541	灰釉陶器	椀	15.4	10%	D456		621	土師器	皿	8.8	20%	L185	
							622	土師器	皿	9.4	20%	L199	
542	無釉陶器	皿	16.6	10%(口)	D619		623	土師器	皿	8.8	20%	L200	
							624	土師器	皿	9.6	50%	L157	
543	須恵器	耳杯 (長)	11.3	70%	D130	33	625	土師器	皿	10.0	40%	L159	
							626	土師器	皿	10.8	10%	L201	

627	土師器	皿	9.6	40%	L 59				
628	土師器	皿	10.2	35%(口)	163				
629	土師器	皿	11.1	30%	L 245				
630	土師器	皿	11.4	30%	L 158				
631	土師器	皿	10.8	30%	L 18				
632	土師器	皿	11.0	30%	157				
633	土師器	皿	10.7	50%	L 196				
634	土師器	皿	10.4	30%	L 66				
635	土師器	皿	13.0	30%	L 226				
636	土師器	皿	11.2	30%	L 67				
637	土師器	皿	12.8	80%	8				
638	土師器	皿	12.5	80%	L 182	140			
639	土師器	皿	11.8	20%	L 62				
640	土師器	皿	12.7	30%	L 197				
641	土師器	皿	11.2	30%	L 64				
642	土師器	皿	12.2	30%	145				
643	土師器	皿	12.9	30%	9				
644	土師器	皿	12.7	20%	L 198				
645	土師器	皿	12.6	30%	L 244				
646	土師器	皿	13.0	20%	L 246				
647	土師器	皿	11.8	50%	L 19				
648	土師器	皿	12.5	100%	L 100	142			
649	土師器	皿	12.6	50%	L 111				
39-650	土師器	皿	11.2	20%(口)	150				
651	土師器	皿	11.3	40%	L 258				
652	土師器	皿	12.1	60%	L 285				
653	土師器	皿	12.6	30%	44				
654	土師器	皿	12.2	20%	17				
655	土師器	皿	12.2	40%	L 240				
656	土師器	皿	12.2	30%	156				
657	土師器	皿	11.8	30%	L 20				
658	土師器	皿	12.2	30%	L 63				
659	土師器	皿	12.4	30%	L 60				
660	土師器	皿	12.2	70%	153				
661	土師器	皿	12.2	30%	155				
662	土師器	皿	12.6	30%	50				
663	土師器	皿	11.8	40%	L 61				
664	土師器	皿	13.0	30%	52				
665	土師器	皿	12.8	30%	L 81				
666	土師器	皿	13.8	50%	154				
667	土師器	皿	11.0	60%	181				
668	土師器	皿	12.3	50%	83				
669	土師器	皿	10.2	30%	249				
670	土師器	皿	16.6	20%	L 194				
671	土師器	皿	17.8	20%	L 186				
672	土師器	皿	16.3	90%	L 124	132			
673	土師器	皿	17.2	20%(口)	L 195				
674	土師器	烧塩壺	6.9	100%	188	178			
675	土師器	烧塩壺	6.9	100%	L 76				
676	土師器	烧塩壺	9.7	70%	L 92				
677	土師器	烧塩壺	5.4	100%	79	179			
678	土師器	烧塩壺	3.9	90%	L 94				
679	土師器	烧塩壺	4.0	50%	L 95				
680	土師器	烧塩壺	4.1	30%(口)	L 96				
681	土師器	烧塩壺	5.4	100%	L 93				
682	土師器	烧塩壺	4.5	100%	376				
683	土師器	烧塩壺	5.1	100%	90				
684	土師器	烧塩壺	5.1	100%	189				
685	土師器	烧塩壺	5.3	100%	L 431				
686	土師器	烧塩壺	5.6	100%	L 230				
687	土師器	烧塩壺	5.6	100%	L 97				
688	土師器	烧塩壺	5.9	50%(口)	149				
40-689	土師器	焙烙鍋	24.2	10%(口)	202				
690	土師器	焙烙鍋	27.0	20%(口)	L 32				
691	土師器	焙烙鍋	29.8	20%	135				
692	土師器	焙烙鍋	30.2	20%(口)	187				
693	土師器	焙烙鍋	31.0	20%(口)	L 179				

## 平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)発掘調査概要

694	土師器	焙烙鍋	31.4	40%	L 375							
695	土師器	焙烙鍋	32.0	10%(口)	L 110							
696	土師器	焼塩壺	6.4	100%	L 28							
697	土師器	焼塩壺	5.4	100%	2	143						
698	土師器	焼塩壺 (体)	6.50	70%	3							
699	土師器	小壺	2.4	100%	L 45							
700	土師器	羽釜	5.8	90%	L 173	185						
701	土師器	羽釜	18.0	5%(口)	L 69							
702	土師器	羽釜	15.8	20%(頸)	205							
41-703	瓦質	羽釜	29.4	10%	139							
704	瓦質	羽釜	20.8	10%	140							
705	瓦質	羽釜	20.5	30%(口)	L 68							
706	瓦質	消し壺	15.8	40%	12							
707	志野系	猪口	5.3	90%	L 54							
708	志野系	猪口	7.0	30%(口)	L 122							
709	美濃系	皿	12.0	30%(口)	151							
710	志野系	皿	12.2	20%(口)	L 55							
711	唐津系	椀	12.0	10%(口)	L 172							
712	美濃系	椀	12.0	10%(口)	L 34	196						
713	陶器	皿	8.8	90%	L 381							
714	唐津系	皿	13.0	95%	152							
715	美濃系	皿	11.2	50%	72							
716	美濃系	皿	8.8	30%	L 78	239						
717	唐津系	皿	8.8	50%	L 383							
718	美濃系	皿	10.8	50%	L 398							
719	志野系	皿	11.8	50%	L 404							
720	志野系	皿	12.4	60%	L 403							
721	志野系	皿	13.2	30%(口)	L 14	229						
722	志野系	皿	15.1	70%	L 156	234						
723	志野系	皿	13.8	80%	L 384	230						
724	志野系	皿	14.6	10%	L 405							
725	陶器	椀	12.8	70%	L 99							
726	陶器	猪口	6.4	20%	L 50							
727	美濃系	天目茶椀	11.5	10%(口)	203							
728	陶器	椀	9.8	30%(口)	L 125							
729	瀬戸系	椀	9.8	30%(口)	L 52							
730	美濃系	天目茶椀	-	-	136							
731	美濃系	天目茶椀	11.6	30%(口)	L 35							
732	陶器	椀	20.8	10%(口)	L 53							
733	陶器	椀	22.6	20%(口)	148							
734	志野系	鉢	13.9	20%	L 385							
735	陶器	小鉢	5.7	60%	186							
736	白磁	鉢	13.3	70%(口)	185							
42-737	唐津系	皿	11.0	50%(台)	253							
738	唐津系	皿	12.0	50%	54							
739	唐津系	皿	11.6	100%	D 6							
740	唐津系	皿	11.9	30%(口)	L 57							
741	唐津系	皿	11.9	100%	141							
742	唐津系	皿	11.6	50%	53							
743	唐津系	皿	14.0	40%	55							
744	唐津系	皿	11.9	70%	L 397							
745	唐津系	皿	12.2	50%(口)	48							
746	唐津系	皿	12.2	10%	L 396							
747	唐津系	皿	12.8	50%	61							
748	唐津系	皿	12.0	100%	D 5							
749	唐津系	皿	11.5	100%	142							
750	唐津系	皿	11.9	10%	L 46							
751	唐津系	皿	12.3	40%	76							
752	唐津系	皿	11.7	90%	L 98							
753	唐津系	皿	14.0	20%	L 399							
754	唐津系	皿	16.0	30%(口)	123							
755	唐津系	盤	24.2	30%	L 155							
756	唐津系	盤	28.8	50%(口)	L 154							
757	唐津系	盤	30.3	10%(口)	206							
758	唐津系	猪口	8.8	20%(口)	L 51							
759	唐津系	猪口	8.0	20%(口)	204							
760	唐津系	猪口	7.6	60%	L 374	208						
43-761	漆器	椀蓋	12.0	60%	L 299							
762	漆器	椀蓋	12.0	-	L 293							
763	漆器	椀蓋	8.0	50%	L 315							
764	漆器	椀	12.8	40%	L 300							
765	漆器	椀 (台)	6.60	-	L 291							
766	漆器	椀	13.5	-	L 292							
767	漆器	椀 (台)	5.80	-	L 296							
768	漆器	椀	6.0	-	L 297							
769	漆器	椀	6.0	-	L 295							

45-809	織部	鉢	—	50%	38	255	852	土師器	皿	6.8	50%	L 134	
810	織部	鉢	—	50%	L 419		853	土師器	皿	6.7	100%	91	165
811	織部	鉢	—	—	22		854	土師器	皿	7.4	60%	L 9	
812	土師器	羽釜	20.4	60% (口)	L 37	126	855	土師器	皿	10.0	40%	L 215	
813	瓦質土器	摺鉢	38.5	10% (口)	L 49		856	土師器	皿	10.0	50%	L 128	
814	瓦質土器	摺鉢	45.0	30% (口)	L 175		857	土師器	皿	9.8	50%	L 126	
46-816	志野系	皿	14.8	90%	D 48	236	858	土師器	皿	9.1	40%	L 203	
817	志野系	皿	11.4	90%	D 61	238	859	土師器	皿	10.3	30%	L 321	
818	美濃系	小椀	5.8	90%	D 63	210	860	土師器	皿	10.0	20%	L 237	
48-819	土師器	皿	5.5	95%	252		861	土師器	皿	10.4	30%	L 238	
820	土師器	皿	5.3	80%	L 334		862	土師器	皿	9.2	30%	L 227	
821	土師器	皿	5.6	100%	143		863	土師器	皿	10.0	50%	L 204	
822	土師器	皿	5.2	100%	24	168	864	土師器	皿	9.0	40%	L 127	
823	土師器	皿	5.2	90%	L 335		865	土師器	皿	9.9	50%	L 132	
824	土師器	皿	5.5	60%	L 322		866	土師器	皿	10.0	30%	L 228	
825	土師器	皿	5.4	100%	221		867	土師器	皿	10.1	50%	L 217	
826	土師器	皿	5.4	100%	109	171	868	土師器	皿	10.2	70%	L 193	
827	土師器	皿	5.6	100%	L 336		869	土師器	皿	9.9	30%	L 224	
828	土師器	皿	5.4	100%	222		870	土師器	皿	9.9	30%	L 286	
829	土師器	皿	5.1	50%	L 242		871	土師器	皿	10.4	50%	L 131	
830	土師器	皿	5.8	100%	220		872	土師器	皿	11.8	70%	L 347	
831	土師器	皿	5.5	70%	L 323		873	土師器	皿	10.2	40% (口)	L 202	
832	土師器	皿	4.9	40%	L 248		874	土師器	皿	11.0	60%	181	
833	土師器	皿	6.0	30%	L 253		875	土師器	皿	12.1	30%	L 241	
834	土師器	皿	5.0	95%	161		876	土師器	皿	11.7	40%	L 223	
835	土師器	皿	5.5	100%	162		877	土師器	皿	13.0	20%	L 324	
836	土師器	皿	5.2	100%	194		878	土師器	皿	10.9	40%	L 129	
837	土師器	皿	5.9	100%	219		879	土師器	皿	12.0	20%	L 326	
838	土師器	皿	5.7	80% (口)	192		880	土師器	皿	11.2	20%	L 10	
839	土師器	皿	5.3	100%	223		881	土師器	皿	13.0	20%	L 246	
840	土師器	皿	5.5	100%	164		882	土師器	皿	12.0	95%	L 346	
841	土師器	皿	5.4	50%	L 247		883	土師器	皿	14.2	20%	56	
842	土師器	皿	6.8	30%	L 254		49-884	土師器	皿	11.0	40%	L 325	
843	土師器	皿	6.8	50%	L 135		885	土師器	皿	10.0	20%	L 239	
844	土師器	皿	6.3	60%	L 11		886	土師器	皿	11.4	30%	L 358	
845	土師器	皿	6.9	100%	108		887	土師器	皿	12.0	40%	L 329	
846	土師器	皿	7.0	20%	L 255		888	土師器	皿	11.0	50%	L 332	
847	土師器	皿	6.9	40%	L 250		889	土師器	皿	11.2	30%	45	
848	土師器	皿	6.6	40%	L 252		890	土師器	皿	12.6	30% (口)	L 314	
849	土師器	皿	7.0	20%	L 243		891	土師器	皿	11.2	40%	10	
850	土師器	皿	6.8	40%	L 133		892	土師器	皿	12.0	20% (口)	57	
851	土師器	皿	6.6	30%	L 251		893	土師器	皿	12.0	30%	L 38	
							894	土師器	皿	11.8	80%	L 13	141
							895	土師器	皿	12.0	30%	L 225	

平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)発掘調査概要

896	土師器	皿	12.8	40%	250		
897	土師器	皿	12.4	30%	248		
898	土師器	皿	12.4	20%	42		
899	土師器	皿	12.5	70%	L 330		
900	土師器	皿	13.0	20%	L 324		
901	土師器	皿	12.2	30%	L 331		
902	土師器	皿	12.8	40%	183		
903	土師器	皿	12.5	30%	191		
904	土師器	皿	12.6	50%	114		
905	土師器	皿	12.8	50%(口)	L 21		
906	土師器	皿	11.4	20%	L 357		
907	土師器	皿	12.0	20%	L 328		
908	土師器	皿	6.1	20%(口)	17		
909	土師器	皿	12.2	30%	115		
910	土師器	皿	12.2	30%	190		
911	土師器	皿	12.6	50%	L 130		
912	土師器	皿	12.8	50%	L 327		
913	土師器	焼塩壺	6.7	70%	L 432		
914	土師器	焼塩壺	5.6	70%	L 341		
915	土師器	焼塩壺	5.3	100%	L 427		
916	土師器	焼塩壺	5.6	100%	L 425		
917	土師器	焼塩壺	5.4	100%	L 426		
918	土師器	焼塩壺	5.0	100%	L 424		
919	土師器	焼塩壺	5.5	100%	L 430		
920	土師器	焼塩壺	5.2	100%	L 429		
921	土師器	焼塩壺	5.3	95%	L 15		
922	土師器	焼塩壺	6.0	100%	18		
923	土師器	焼塩壺	5.6	100%	L 333		
924	土師器	焼塩壺	5.4	80%	L 16		
925	土師器	焼塩壺	5.3	90%	L 104		
926	土師器	焼塩壺	5.1	100%	L 103		
927	土師器	焼塩壺	5.1	95%	L 89		
928	土師器	小壺	2.2	100%	182		
929	土師器	小壺	2.4	100%	L 435		
930	土師器	小壺	2.2	100%	L 434		
931	土師器	羽釜	3.0	90%	193		
50-932	土師器	焙烙鍋	29.2	60%(口)	L 178		
933	土師器	焙烙鍋	26.9	90%(口)	L 229	128	
934	土師器	焙烙鍋	28.8	50%	L 443		
935	土師器	焙烙鍋	28.3	60%	L 464		
936	土師器	焙烙鍋	29.0	50%(口)	L 311		
937	土師器	焙烙鍋	29.8	30%(口)	L 313		
938	土師器	焙烙鍋	30.6	30%	104		
939	土師器	焙烙鍋	32.7	20%	112		
51-940	土師器	焙烙鍋	30.0	20%	113		
941	土師器	焙烙鍋	33.8	10%	37		
942	土師器	焙烙鍋	32.2	40%	105		
943	土師器	焙烙鍋	29.0	50%(口)	L 312		
944	須恵質	摺鉢	27.8	10%(口)	258		
52-945	美濃系	天目茶椀	11.0	30%	16		
946	美濃系	天目茶椀	11.1	90%	L 421		
947	美濃系	天目茶椀	10.8	70%	L 417		
948	美濃系	天目茶椀	11.1	30%(口)	L 101		
949	美濃系	天目茶椀	11.3	50%	L 459	191	

950	美濃系	天目茶椀	11.6	60%	L 338	189	988	唐津系	椀	11.2	20%(口)	59	
951	美濃系	天目茶椀	11.3	50%	L 87		989	唐津系	椀	11.1	90%	L 345	198
952	美濃系	天目茶椀	11.2	70%	L 452		990	唐津系	椀	9.7	50%	L 414	
953	美濃系	天目茶椀	10.4	50%	107		991	唐津系	猪口	7.2	100%	L 458	
954	美濃系	天目茶椀	10.8	30%	L 116		54-992	中国磁器	鉢	15.5	80%	L 436	242
955	唐津系	椀	9.8	60%	L 339		993	中国磁器	鉢	14.2	70%	L 423	212
956	唐津系	椀	10.6	90%	L 402		994	中国磁器	鉢	12.6	90%	106	237
957	唐津系	椀	11.7	80%	L 415		995	陶器	蓋	4.8	100%	L 337	
958	唐津系	椀	11.9	70%	L 416	199	996	華南三彩	盤	-	-	L 418	274
959	陶器	鉢	11.0	80%	L 441	202	997	中国磁器	椀	12.0	60%	L 462	
960	陶器	鉢	10.6	20%	L 440		998	中国磁器	椀	12.0	80%	L 445	211
961	陶器	鉢	11.1	90%	L 413	201	999	中国磁器	鉢	22.9	10%	94	
962	陶器	鉢	10.6	95%	L 412	203	1000	中国磁器	鉢	13.2	95%	L 433	244
963	志野系	皿	15.2	30%	L 406		1001	中国磁器	注口瓶(頸)	10.6	60%	L 451	250
964	志野系	皿	15.8	90%	L 407		1002	陶器	壺蓋	10.8	80%	L 123	
965	美濃系	鉢	7.8	50%	L 409		1003	陶器	摺鉢	30.6	50%	L 422	
966	美濃系	皿	9.2	50%(口)	L 121		1004	瓦質土器	摺鉢	36.0	10%	L 105	
967	美濃系	鉢	8.2	90%	L 408		1005	瓦質土器	摺鉢	39.8	95%	L 428	122
968	志野系	鉢	6.8	-	L 411	246	1006	瓦質土器	摺鉢	27.6	50%	L 437	
969	黄瀬戸	鉢	24.3	20%(口)	L 100		55-1007	備前	大甕	65.0	90%(口)	D 285	
53-970	唐津系	皿	12.2	90%	L 387	220	62-1050	土師器	皿	5.7	70%	125	
971	唐津系	皿	13.0	70%	L 393		1051	土師器	皿	10.3	20%	127	
972	唐津系	皿	12.8	70%	L 99		1052	土師器	皿	10.5	30%	126	
973	唐津系	皿	12.6	90%	L 389	224	1053	美濃系	茶椀	6.5	50%	124	
974	唐津系	皿	12.6	90%	L 388	219	1054	志野系	角皿	9.6	50%	129	235
975	唐津系	皿	14.5	70%	L 395		1055	土師器	皿	5.3	80%	83	
976	李氏朝鮮	白磁	16.5	70%	134	245	1056	土師器	皿	5.1	100%	170	
977	唐津系	皿	13.2	70%	L 394		1057	土師器	皿	5.7	70%	102	
978	唐津系	皿	12.3	100%	D 4	226	1058	土師器	皿	5.8	40%	169	
979	唐津系	皿	13.0	100%	L 390	223	1059	土師器	皿	5.8	100%	101	170
980	唐津系	皿	13.3	70%	L 391		1060	土師器	皿	6.1	40%	168	
981	唐津系	皿	14.0	70%	L 392	225	1061	土師器	皿	7.2	70%	74	
982	唐津系	皿	13.2	30%	20								
983	唐津系	皿	13.5	80%	L 340	221							
984	唐津系	深鉢	24.9	70%	L 453	251							
985	唐津系	椀	9.8	95%	L 439								
986	唐津系	椀	9.5	10%	L 457								
987	唐津系	椀	11.7	40%	L 442								

平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)発掘調査概要

1062	土師器	皿	12.0	20%	85		
1063	土師器	皿	12.3	30%	86		
1064	土師器	皿	12.2	30%	167		
1065	志野系	皿	11.4	40%	111		
1066	美濃系	茶碗	7.9	100%	100	209	
1067	陶器	皿	12.7	80%	110	222	
1068	土師器	塩壺	3.6	100%	172	181	
1069	無釉陶器	碗	6.6	(底)50%	68		
1070	須恵器	杯	10.2	20%	78		
1071	瓦質	鉢	26.2	20%(口)	84		
1073	土師器	皿	5.3	60%	270		
1074	土師器	皿	10.0	30%	269		
1075	土師器	皿	10.8	30%	158		
1076	陶器	茶碗	10.6	60%	97		
1077	瓦質	火舎	-	-	218		
1078	瓦質	火舎	-	-	217		
1079	土師器	皿	11.8	30%	159		
1080	土師器	皿	12.6	60%(口)	245		
1081	美濃系	茶碗	11.8	10%(口)	75		
1082	磁器	茶碗	10.4	20%(口)	77		
1083	陶器	播鉢	26.0	90%	229	124	
1084	土師器	皿	7.5	100%	119	157	
1085	土師器	皿	8.2	60%	118		
1086	土師器	皿	12.8	30%	117		
1087	土師器	皿	15.1	100%	122	134	
1088	土師器	皿	15.0	30%	120		
1089	土師器	皿	12.6	60%	103		
1090	土師器	皿	16.0	10%	116		
1091	土師器	皿	15.0	100%	121	135	
63-1092	染付	高杯	7.3	100%	240		
1093	唐津系	皿	11.4	60%	241		
1094	染付	茶碗	9.3	30%	43		
1095	染付	鉢	14.2	5%(口)	47		
1096	染付	壺	4.4	40%	46		
1097	染付	碗	10.2	60%(底)	51		
1098	土師器	皿	7.4	100%	4	154	
1099	土師器	皿	11.0	50%	3		
1100	土師器	皿	11.8	100%	2	143	
1101	土師器	皿	12.2	80%	39	148	
1102	土師器	行燈	9.1	80%	1		
1103	土器	塩壺	5.6	100%	5	175	
1104	土器	塩壺	3.3	100%	6		
1105	陶器	播鉢	42.6	80%(口)	67	123	
1106	染付	茶碗	9.0	30%(口)	31		
1107	土師器	皿	11.0	20%(口)	137		
1108	染付	皿	12.8	20%(口)	69		
1109	染付	碗	10.6	40%	71		
1110	染付	向付	7.5	60%	70		
1111	唐津系	皿	10.6	70%	344	241	
1112	土師器	塩壺	5.2	95%	343		
1113	土師器	塩壺	5.1	100%	342		
1114	信楽	銭瓶壺	10.6	50%		D609	
1115	染付	碗	18.6	20%		D485	
64-1116	土師器	皿	14.9	-		D159	103
1117	土師器	皿	15.2	50%		D200	
1118	土師器	杯	14.8	60%		D201	
1119	須恵器	杯蓋	15.5	50%		D483	20
1120	唐津系	碗	10.7	100%		D59	200
1121	土師器	皿	12.0	20%		D520	
1122	土師器	皿	8.3	60%(口)		D544	
1123	土師器	皿	7.0	70%(口)		D546	
1124	土師器	皿	7.0	50%		D547	
1125	土師器	皿	8.2	40%		D545	
1126	土師器	皿	8.0	100%		D519	
1127	土師器	皿	14.8	70%		D156	104
1128	土師器	皿	15.0	90%		D507	41
1129	土師器	皿	15.4	80%		D155	106
1130	土師器	皿	15.3	90%		D137	105
1131	須恵器	皿	12.0	20%		D520	
1132	土師器	皿	15.2	50%		D540	
1133	土師器	皿	6.8	100%		D455	162
1134	土師器	皿	8.0	80%		D454	159
1135	土師器	皿	8.2	90%		D444	
1136	土師器	皿	7.0	90%		D453	
1137	土師器	皿	14.6	100%		D457	136
1138	土師器	皿	14.8	100%		D458	138
1139	土師器	皿	14.8	60%		D459	
1140	土師器	皿	14.5	100%		D409	137
1141	土師器	皿	7.4	100%		D335	156
1142	土師器	皿	7.4	80%(口)		D336	
1143	土師器	皿	7.8	100%		D334	155
1144	土師器	皿	7.9	100%		D118	36
1145	土師器	皿	8.5	40%(口)		D337	
1146	土師器	皿	6.9	80%		D253	160
1147	土師器	皿	8.4	100%		D333	153

1148	土師器	皿	6.6	100%	D254	161			
1149	土師器	皿	7.8	90%	D252	158			
1150	土師器	皿	11.8	100%	D403	144			
1151	土師器	皿	14.6	50%(口)	D357				
1152	土師器	皿	16.2	50%(口)	D360				
1153	土師器	皿	14.3	50%(口)	D359				
1154	土師器	杯	15.0	50%	D195	133			
1155	土師器	皿	9.2	90%	D125	35			
1156	土師器	皿	14.6	60%(口)	D358				
1157	瓦器	椀	16.0	10%(口)	D379				
1158	弥生土器	底部片	4.5	5%	D500				
80-1162	土師器	皿	7.7	30%	D783				
1163	土師器	皿	9.8	20%	D784				
1164	土師器	皿	10.5	30%	D785				
1165	土師器	皿	13.8	20%	D782				
1166	陶器	皿	11.8	20%	D781				
1167	京焼	蓋	11.1	20%	D778				
1168	染付	小椀	7.3	20%	D779				
1169	染付	椀	9.0	20%	D780				
1170	陶器	鉢	22.0	10%	D777				
1171	土師器	皿	7.4	40%	D760				
1172	土師器	皿	9.2	30%	D762				
1173	土師器	皿	8.8	30%	D761				
1174	土師器	皿	11.0	50%	D759				
1175	伊万里	燈明皿	9.0	50%	D756				
1176	京焼	椀	9.0	50%	D755	275			
1177	瀬戸系	椀	12.6	70%	D753				
1178	美濃系	椀	9.1	50%	D754				
1179	伊万里	椀	10.4	40%	D751	262			
1180	伊万里	椀	11.0	40%	D748				
1181	伊万里	椀	11.2	10%	D749				
1182	伊万里	椀	8.2	50%	D750	261			
1183	伊万里	皿	9.4	100%	D752				
1184	伊万里	皿	9.8	80%	D757				
1185	土師器	皿	8.4	20%	D758				
1189	土師器	皿	5.0	90%	D793				
1190	土師器	皿	4.8	100%	D792				
1191	土師器	皿	5.5	100%	D805				
1192	土師器	皿	9.7	70%	D806				
1193	土師器	皿	7.5	50%(口)	D804				
1194	土師器	皿	7.0	100%	D796				
1195	土師器	皿	7.4	30%(口)	D801				
1196	土師器	皿	8.9	60%	D803				
1197	土師器	皿	8.8	80%	D807				
1198	土師器	皿	8.8	90%	D797				
1199	土師器	皿	8.8	10%	D795				
1200	土師器	皿	7.8	40%	D791				
1201	土師器	皿	9.7	20%	D789				
1202	土師器	皿	5.8	80%	D794	271			
1203	土師器	皿	8.6	30%	D790	272			
1204	土師器	皿	11.5	100%	D798				
81-1205	土師器(硬)	木葉皿	—	80%	D811				
1206	土師器(硬)	木葉皿	—	100%	D810				
1207	土師器	皿	9.4	80%	D800				
1208	土師器	皿	9.6	40%(口)	D802				
1209	土師器(硬)	椀	8.8	70%(口)	D809				
1210	伊万里	仏飯器	6.6	10%(口)	D816				
1211	美濃か	德利	2.1	100%	D818	253			
1212	須恵器	飾り蓋	4.1	50%(口)	D808				
1213	京焼	香盒蓋	4.0	100%	D813	263			
1214	京焼	香盒身	5.4	100%	D814	263			
1215	美濃か	行平鍋	7.6	30%	D815				
1216	瀬戸系	燈明皿	6.1	100%	D819	264			
1217	土師器	釣り鐘	5.9	50%	D812				
1218	磁器	皿	9.9	100%	D817	258			
1220	土師器	皿	6.5	50%	D747				
1221	土師器	皿	8.2	20%	D732				
1222	土師器	皿	7.3	40%	D773				
1223	土師器	皿	8.5	30%	D746				
1224	土師器	皿	7.8	55%	D774				
1225	土師器	皿	9.8	40%	D770				
1226	土師器	模型椀	2.5	100%	D745				
1227	瀬戸系	燈明皿	10.6	30%	D775				

平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)発掘調査概要

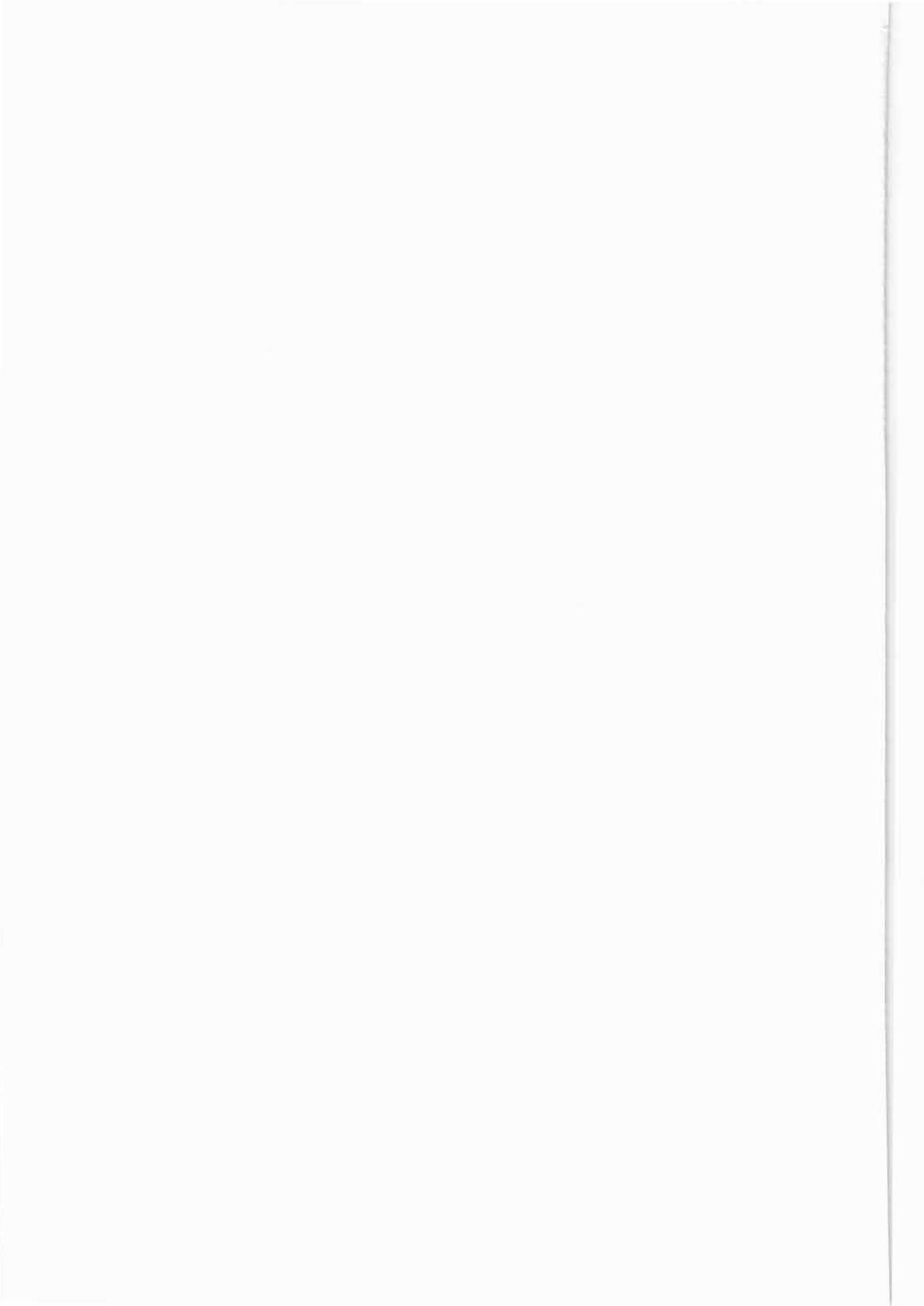
1228	京焼	燈明皿	10.0	20%	D716	
1229	美濃・瀬戸系	注口	16.4	30%(口)	D717	
1230	土師器(硬)	木葉皿	11.3	100%	D718	265
1231	肥前	椀	7.2	20%	D734	
1232	瀬戸系	椀	7.3	20%	D771	
1233	京焼	椀	9.9	20%	D740	
1234	唐津か	椀	12.0	30%	D741	
82-1235	肥前	蓋	13.6	30%	D736	
1236	伊万里	椀	8.4	20%(口)	D743	
1237	肥前	椀	10.4	20%	D776	
1238	肥前	椀	11.0	10%(口)	D735	
1239	伊万里	椀	10.2	30%	D739	
1240	中国製磁器	蓋	10.2	50%	D733	
1241	伊万里	椀	7.0	40%	D738	
1242	肥前	染付皿	13.8	50%(口)	D820	
1243	肥前	染付茶椀	10.0	90%(口)	D821	
1244	肥前	椀	10.5	20%(口)	D744	260
1245	中国赤絵	小皿	9.2	20%(口)	D742	
1246	伊万里	椀	10.2	30%	D739	
1247	美濃系	椀	9.7	50%	D772	
83-1248	土師器	皿	6.7	10%	D725	
1249	土師器	皿	11.1	30%	D726	
1250	土師器	皿	10.8	40%	D648	
1251	土師器	皿	10.2	30%	D649	
1252	土師器	皿	11.3	5%	D727	
1253	瀬戸か	天目茶椀	10.2	5%	D786	
1254	唐津系	段皿	15.2	20%(口)	D723	
1255	美濃系	天目茶椀	10.7	100%	D22	194
1256	瀬戸系	天目茶椀	10.2	20%	D646	
1257	美濃系	天目茶椀	12.0	100%	D23	193
1258	唐津系	天目茶椀	10.9	20%(口)	D721	
1259	唐津系	天目茶椀	10.8	30%(口)	D719	
1260	唐津系	天目茶椀	10.9	70%(口)	D720	
1261	絵唐津	皿	14.7	90%(口)	D724	
1262	志野系	椀	9.9	30%(口)	D722	
1263	唐津系	椀	10.9	100%	D24	197
1264	土師器	皿	18.8	50%	D650	
1266	土師器	皿	14.8	20%	D768	
1267	美濃系	皿	10.8	10%	D769	
84-1268	京焼か	德利(胴)	16.1	90%	D788	252
1269	京焼か	茶椀	7.8	50%(口)	D682	
1270	美濃か	鉢	39.0	10%	D681	
1271	土師器	皿	5.0	100%	D693	
1272	土師器	皿	6.3	100%	D663	
1273	土師器	皿	6.5	50%	D696	
1274	土師器	皿	11.8	10%	D728	
1275	土師器	皿	11.0	30%	D691	
1276	土師器	皿	10.7	30%	D690	
1277	土師器	皿	6.6	100%	D695	
1278	磁器	蓋	7.1	100%	D686	
1279	土師器	皿	10.8	30%	D683	
1280	土師器	皿	11.4	20%	D684	
1281	土師器	皿	6.4	50%	D697	
1282	伊万里	染付茶椀	9.1	60%	D661	259
1283	中国製	香炉	6.6	10%(口)	D662	
1284	土師器	燭台	9.9	100%(口)	D689	
1285	土師器	鉢	12.6	100%	D692	
1286	土師器	燭台	15.8	80%	D698	
1287	美濃焼	椀	5.0	80%	D729	
1288	信楽焼	播鉢	28.0	5%	D731	
1289	信楽焼	播鉢	29.5	5%	D685	
1290	陶器	播鉢	34.8	10%	D688	
85-1291	陶器	播鉢	5.6	50%(口)	D674	
1292	土師器	皿	9.6	30%(口)	D675	
1293	志野系	皿(台)	7.6	10%(口)	D672	
1294	京焼	椀	10.6	10%(口)	D678	
1295	伊万里	椀か(台)	4.4	40%(底)	D673	

1296	土師器	炮烙鍋	35.0	20% (口)	D671		87-1317	土師器	皿	11.6	10%	D767	
1297	土師器	皿	8.0	30%	D705		1318	土師器	皿	12.2	20%	D766	
1298	土師器	皿	8.0	30%	D706		1319	土師器	皿	5.6	100%	D676	
1299	土師器	皿	8.0	30%	D707		1320	土師器	皿	10.3	50%	D677	
1300	土師器	皿	16.6	10%	D708		1321	土師器	皿	13.4	10%	D679	
1301	土師器	皿	11.0	10%	D669		1322	瓦質	?鉢	22.4	—	D710	
1302	土師器	皿	13.0	10%	D670		1323	瓦質	火舎	—	—	D680	
1303	土師器	皿	6.0	100%	D711		1324	土師器	皿	8.2	40%	D667	
1304	土師器	皿	11.6	20% (口)	D712		1325	土師器	皿	9.8	20%	D655	
1305	土師器	皿	11.8	10% (口)	D713		1326	土師器	皿	11.4	20%	D651	
1306	須恵質	皿	11.6	20% (口)	D714		1327	土師器	皿	13.0	10%	D654	
1307	須恵質	杯	12.6	20%	D715		1328	土師器	皿	7.8	60%	D666	
1308	土師器	皿	5.1	100%	D699		1329	土師器	皿	10.0	30%	D652	
1309	土師器	皿	5.5	80%	D694		1330	土師器	皿	10.8	20%	D656	
1310	磁器	香盒蓋	4.9	100%	D700		1331	土師器	皿	18.0	20%	D664	
1311	瀬戸・美濃系	漫瓶	5.2	100%	D702	254	1332	土師器	皿	9.1	40%	D653	
1313	信楽	摺鉢	28.1	5%	D730		1333	土師器	皿	18.0	5%	D665	
1314	肥前系	鉢	15.0	100%	D703	257	1334	美濃系	天目茶碗	12.3	30% (口)	D658	
1315	みなと焼	播鉢	35.2	20% (口)	D704		1335	備前か	甕	42.2	10% (口)	D657	
							1336	土師器	皿	11.8	10% (口)	D660	
							1337	土師器	底部	7.6	20% (底)	D659	

注1：平安時代の器形についての細分は、本文に記述した。

注2：陶磁器類器種については、不統一な記述があり、本文との対照を必要とする部分がある。

圖 版



図版第1 平安京跡左京一条二坊十四町



(1) トレンチ空中写真 (上方が西)



(2) 南トレンチ空中写真 (安土・桃山時代)

図版第2 平安京跡左京一条二坊十四町



(1) 南トレンチ全景 (安土・桃山時代) (南から)



(2) 南トレンチ全景 (安土・桃山時代) (北から)

図版第3 平安京跡左京一条二坊十四町



(1) 南トレンチ全景（平安時代）（北西から）



(2) 南トレンチ全景（平安時代）（北東から）

図版第4 平安京跡左京一条二坊十四町



(1) 井戸231遺物出土状況（西から）



(2) 井戸231遺物出土状況（西から）



(1) 井戸231遺物出土状況（西から）



(2) 井戸231遺物出土状況（西から）

図版第6 平安京跡左京一条二坊十四町



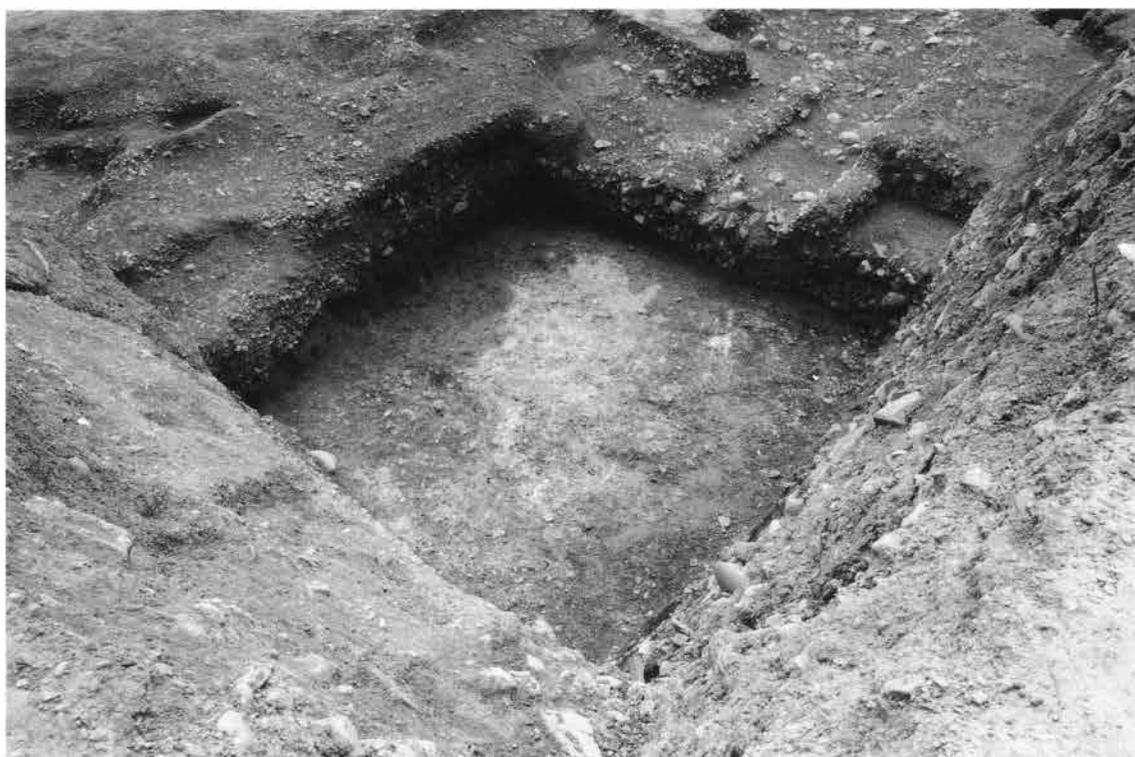
(1) 井戸231遺物出土状況（西から）



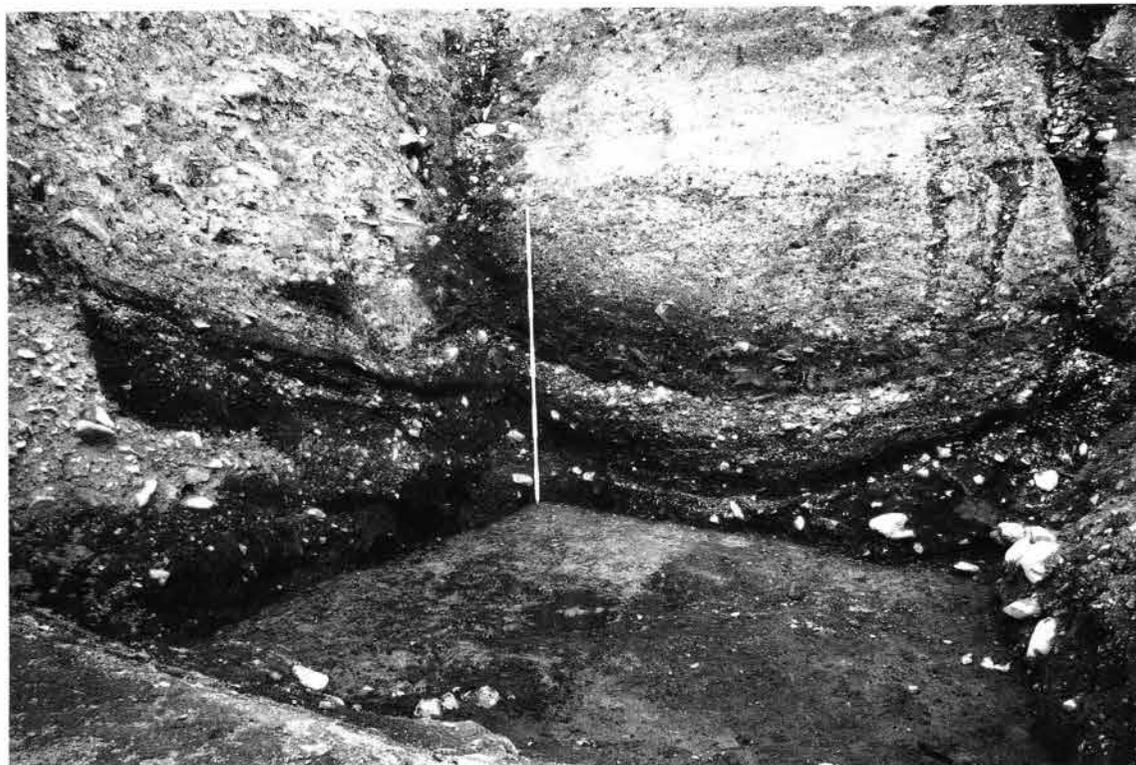
(2) 井戸231完掘状況（西から）



(1) 土坑8完掘状況（西から）



(2) 土坑8完掘状況（北西から）



(1) 土坑8土層堆積状況(東南から)



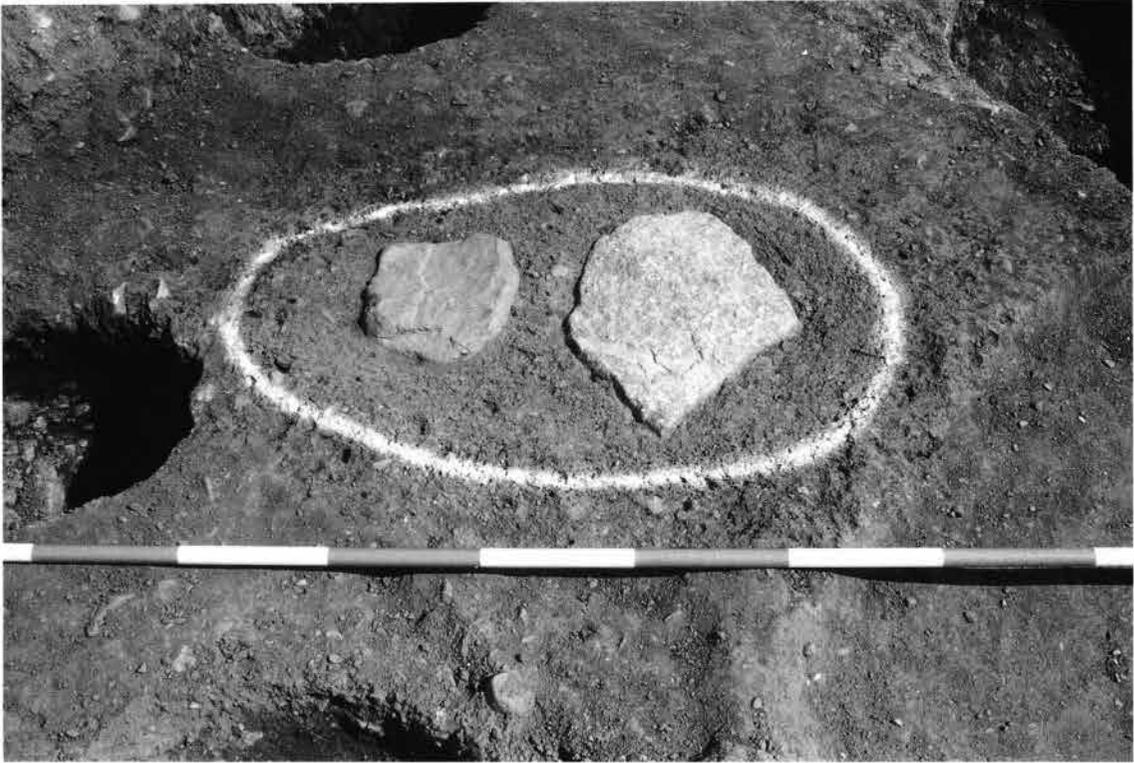
(2) 土坑8漆器・掘出土状況



(1) 土坑108瓦出土状況（東から）



(2) 土坑108瓦出土状況（北から）



(1) 土坑39・ピット120間根石坑検出状況（北から）



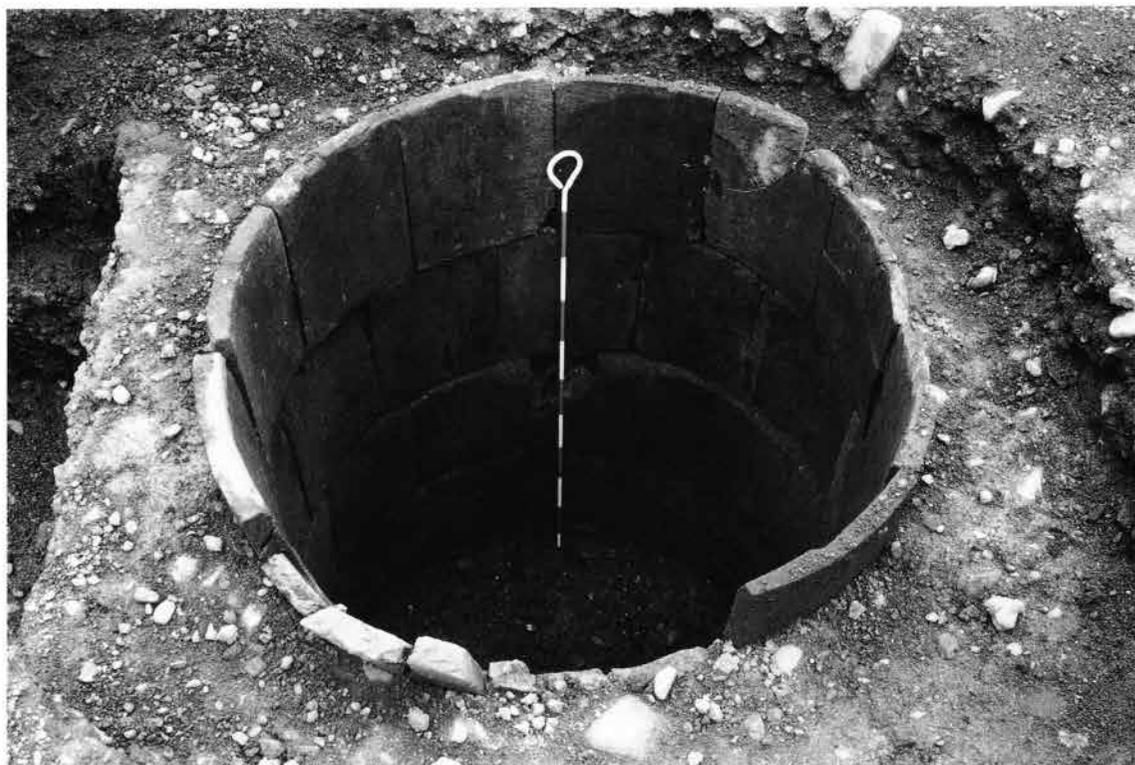
(2) ピット128完掘状況（西から）



(1) 南トレンチ完掘状況（北西から）



(2) 南トレンチ柱穴列検出状況（西から）



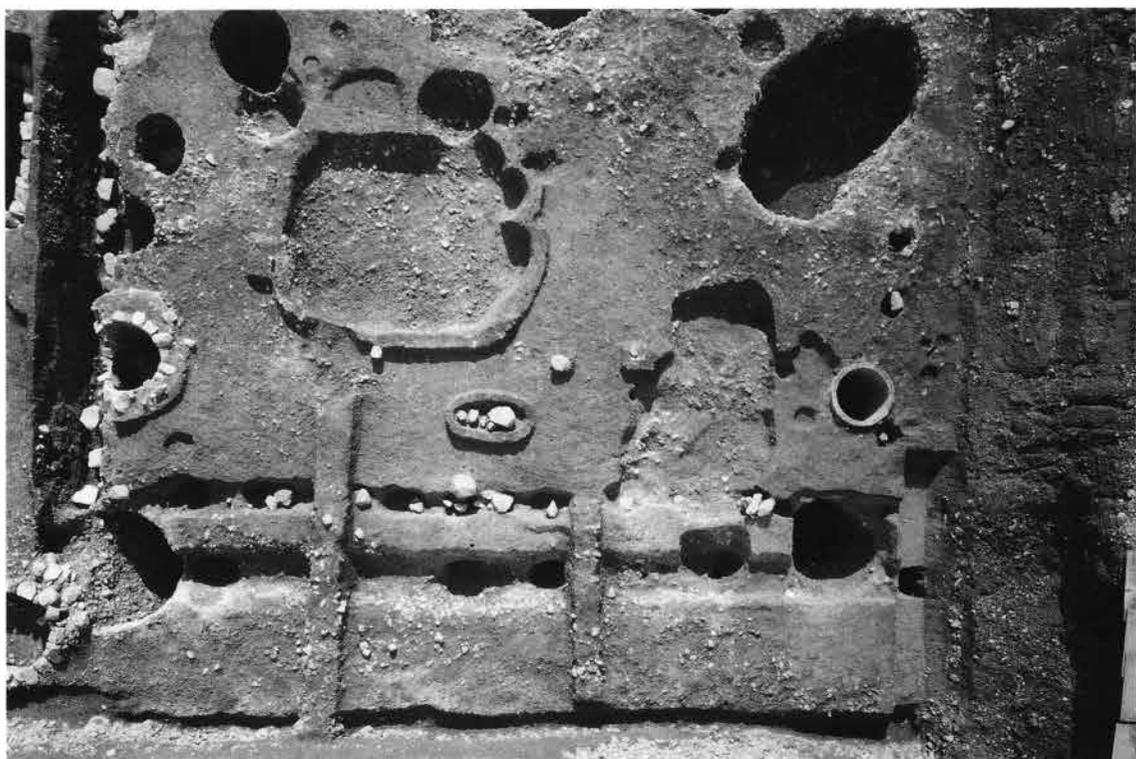
(1) 塙組井戸105完掘状況（西から）



(2) 安土・桃山時代遺構検出状況及び作業風景



(1) 北トレンチ空中写真 (上方が西)



(2) 溝361・400・411・415完掘状況 (上方が南)



(1) 漆喰遺構310北半検出状況（東から）



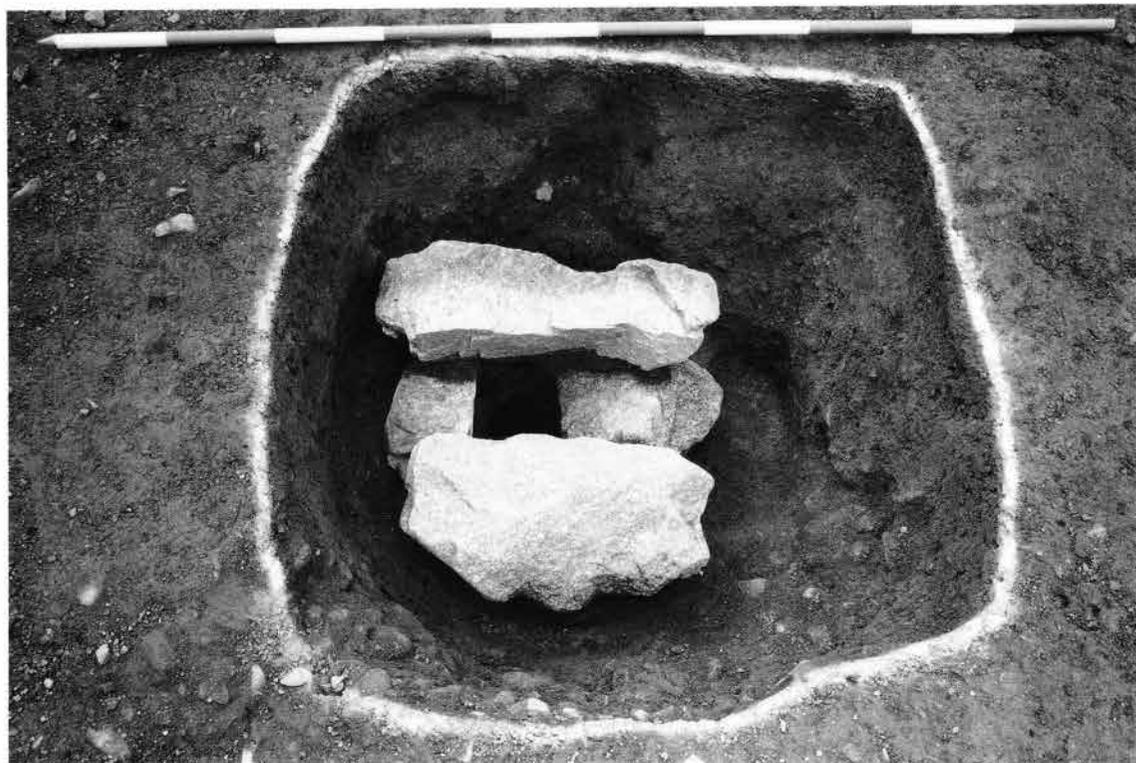
(2) 漆喰遺構310北半埋土堆積状況（東から）



(2) 漆喰遺構 310完掘状況 (北から)



(1) 漆喰遺構 310完掘状況 (南から)



(1) 柱穴333根石検出状況（北から）



(2) 柱穴333根石検出状況（西から）



(1) 井戸338・339、方形石組土坑379検出状況（東南から）



(2) 井戸338・339、方形石組土坑、土塀基礎361検出状況（北から）



(1) 井戸339完掘状況（西から）



(2) 井戸339断ち割り状況（東南から）



(1) 石室343完掘状況（東から）



(2) 石室343下段完掘状況（東から）



(1) 北トレンチ全景（北から）



(2) 土塀基礎360根石・土層堆積状況（北から）



(2) 土塀基礎 360・361根石検出状況（南から）



(1) 土塀基礎 360・361完掘状況（南から）



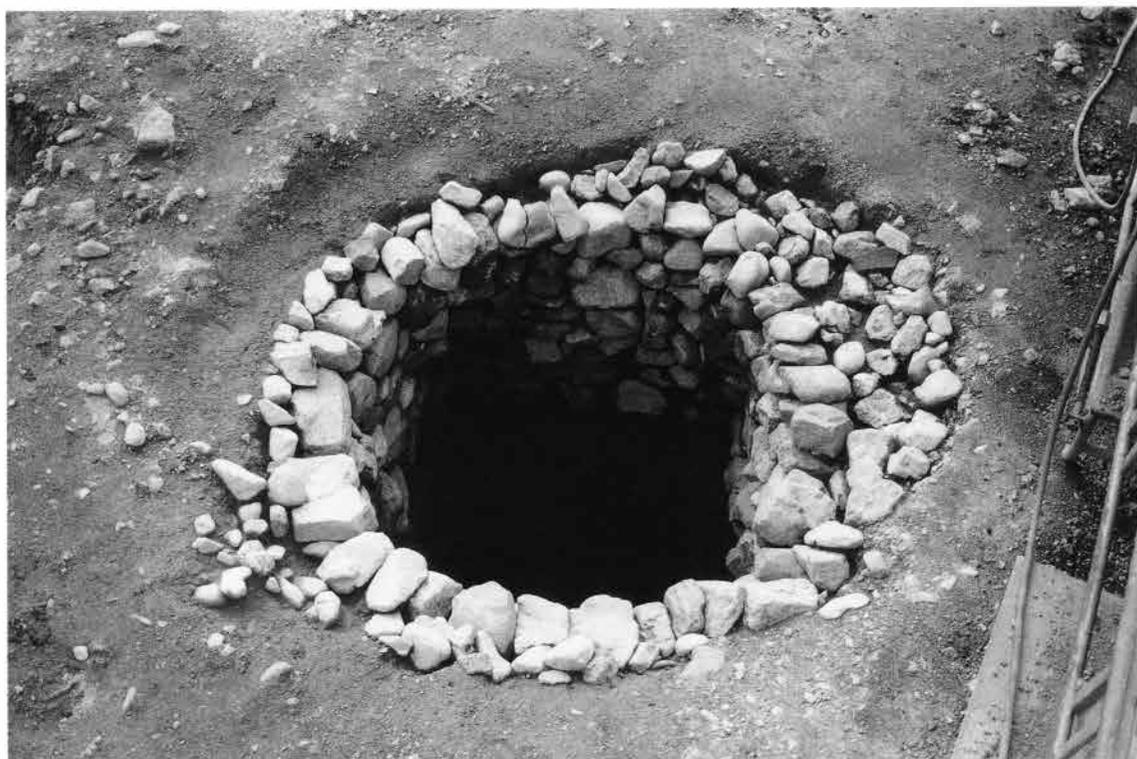
(1) 石室343・土塀基礎361完掘状況（北から）



(2) 土塀基礎360・361完掘状況（南から）



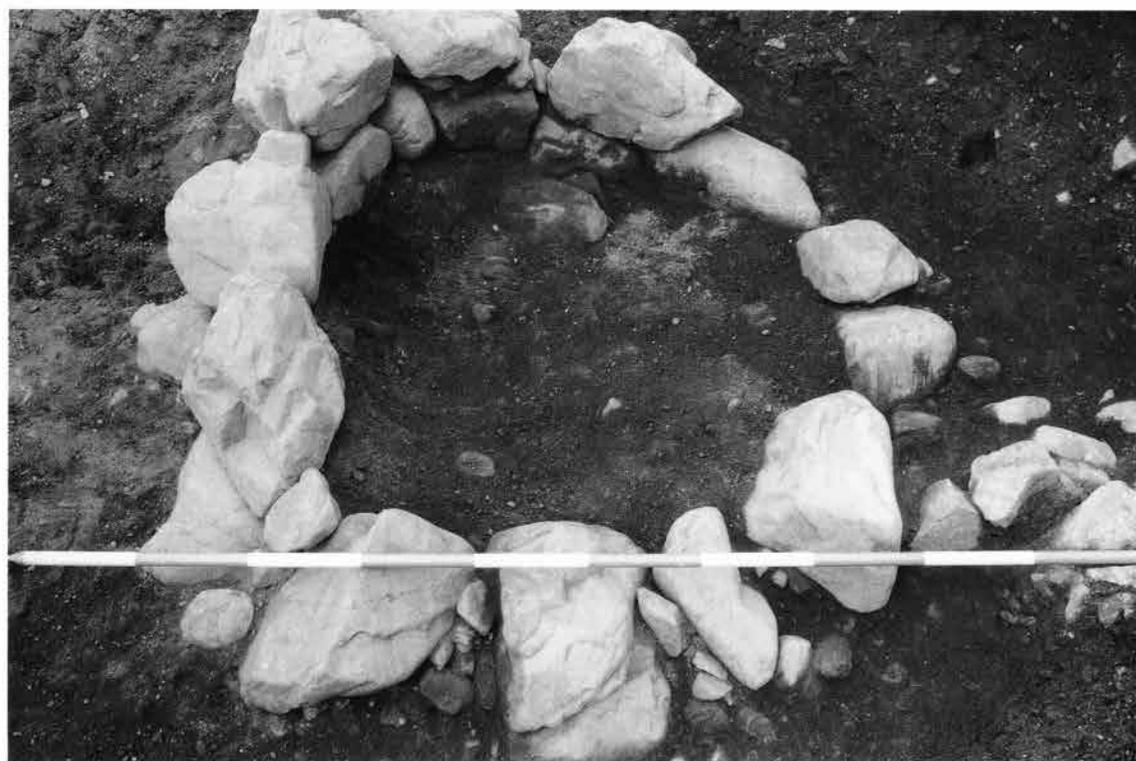
(1) 石室343・土塀基礎など空中写真



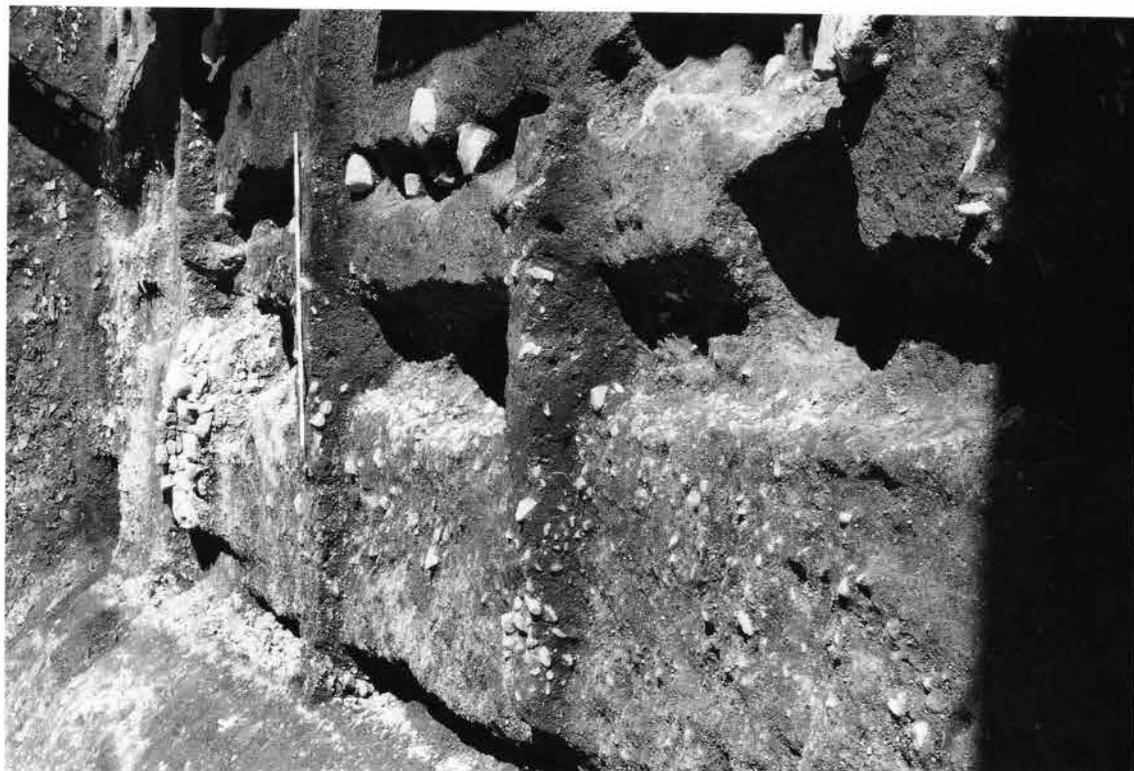
(2) 井戸313完掘状況(東から)



(1) 井戸374完掘状況（北から）



(2) 井戸380検出状況（西から）



(2) 溝 400・415完掘状況 (西から)



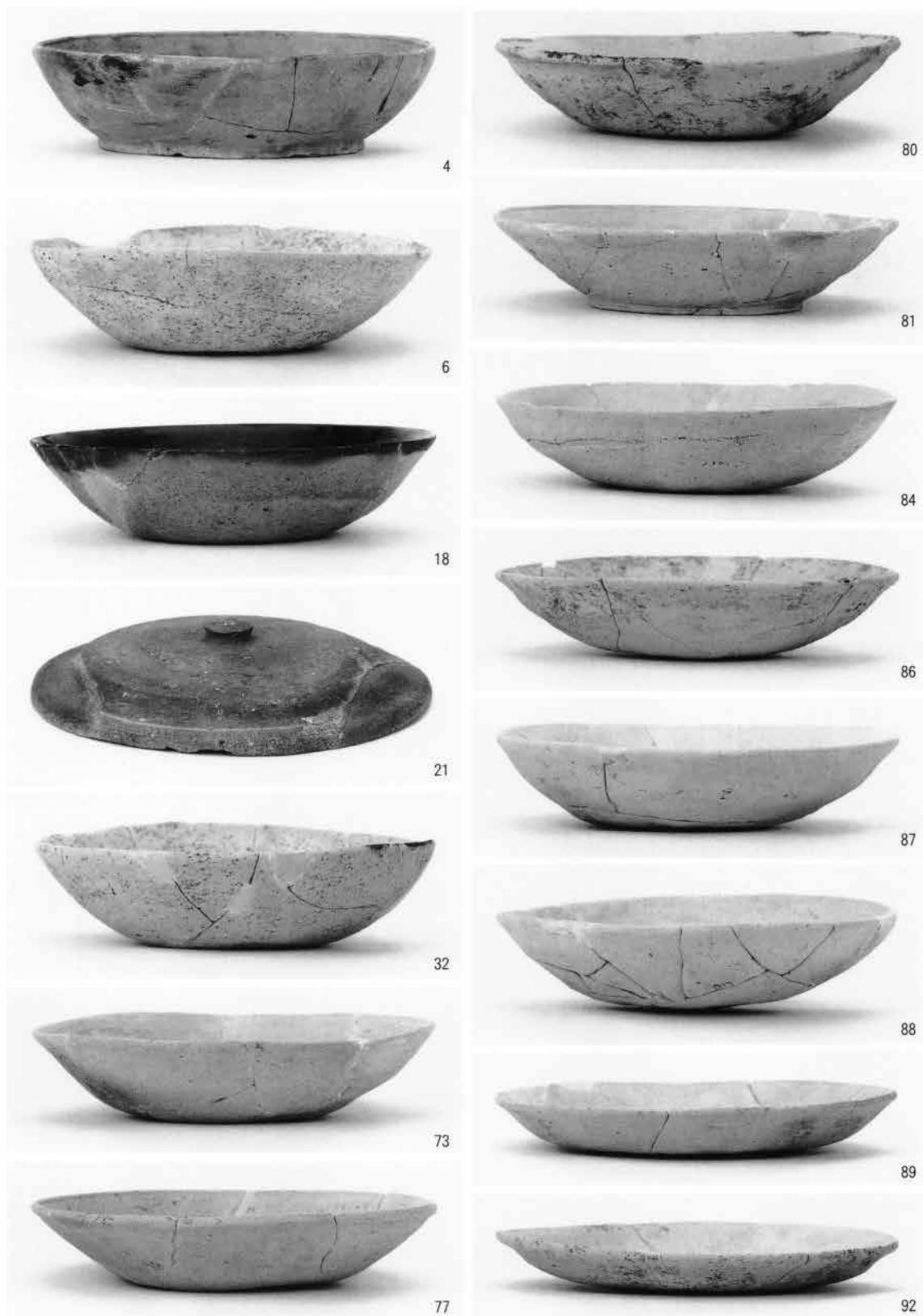
(1) 溝 400・415検出状況 (西から)



(1) 溝400・411・415完掘状況（西から）



(2) 溝400・415、土塀基礎361屈曲部状況（北から）







126



140



143



144



146



131



147



132



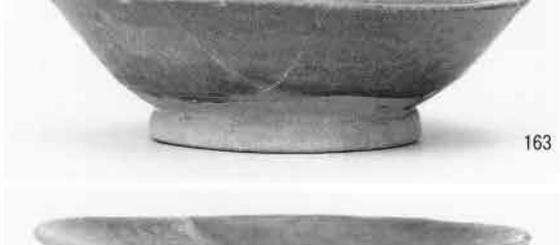
148



134



149





177



194



206



204



161



161

図版第32 平安京跡左京一条二坊十四町



208



241



211



259



254



197



197



395



344



202



345



346



223



284



329



340



233

図版第34 平安京跡左京一条二坊十四町



356



390



365



502



367



503



396



539



421



539



433



539



452



532



536



540



544



543



A区



A区



435



459



371



545



551



554



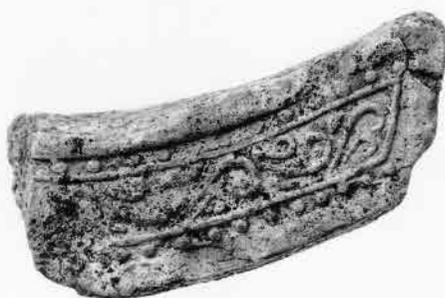
550



555



548



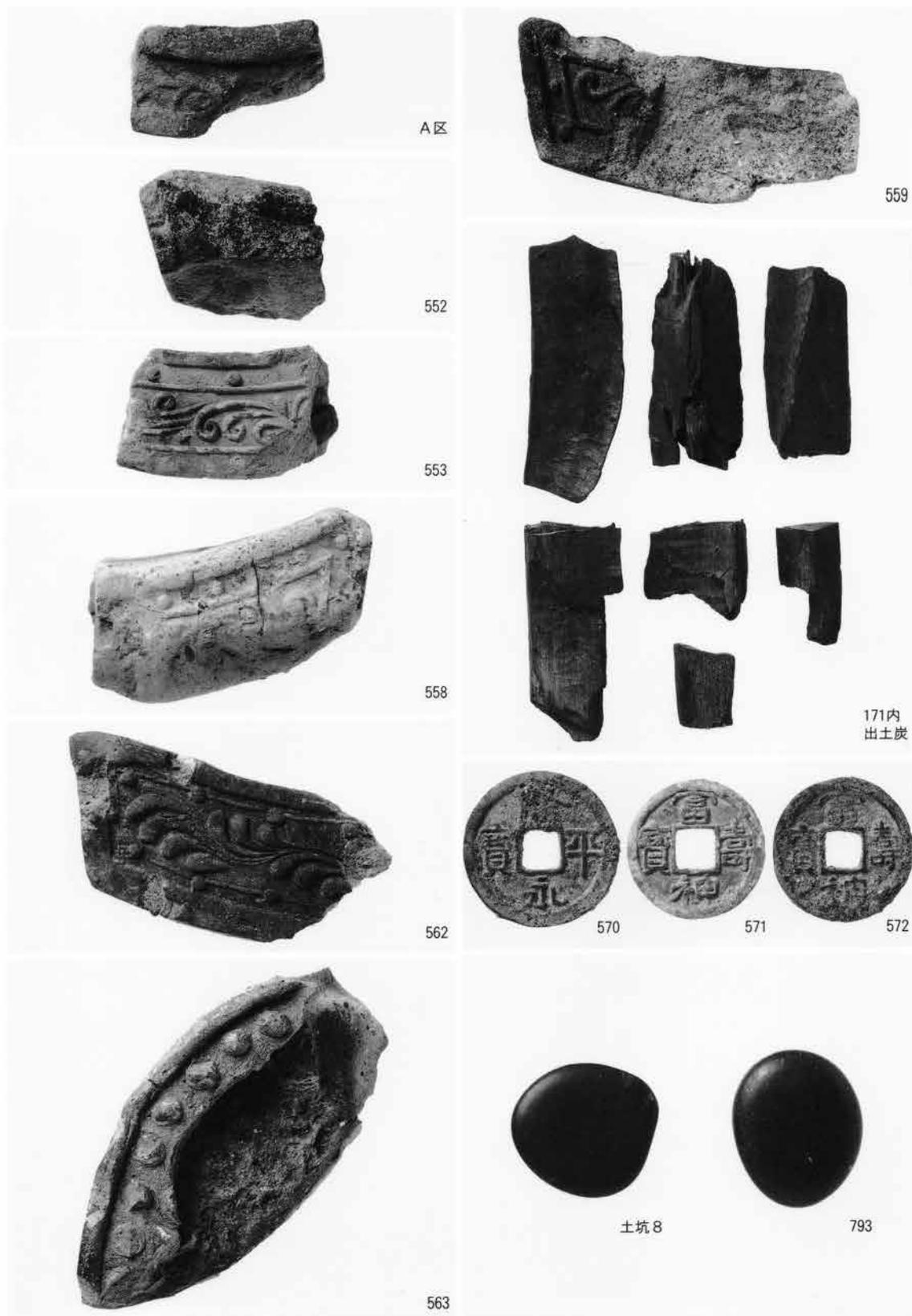
556



547



557





712



950



812



958



933



959



949



961



962



989



674  
677



700



478



638



648



672



697



894



739



741



745



748



749



752



714



818



970



760



974



716



978



723



981



721



983



722



1067



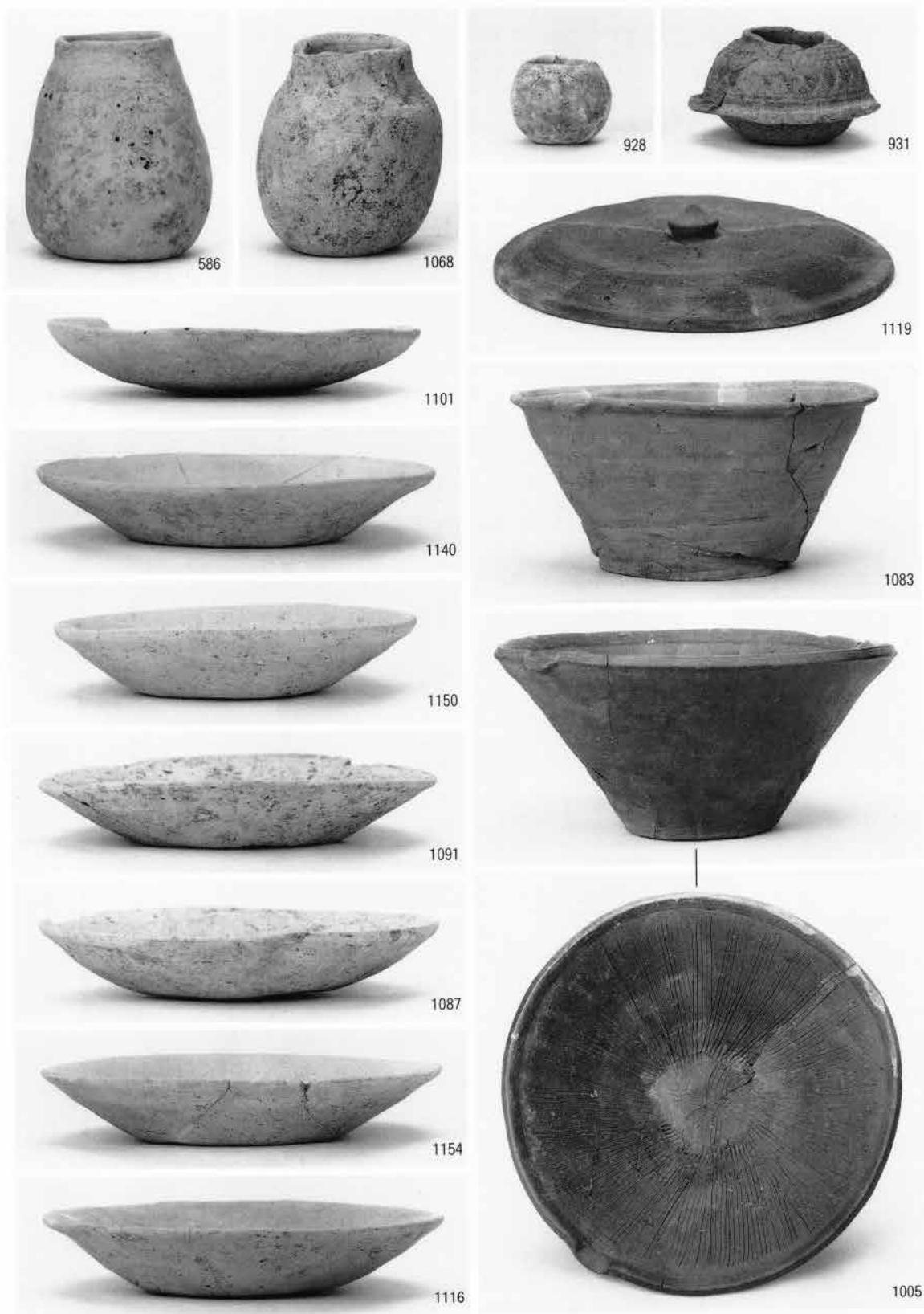
973



984



979



出土遺物(15)



1054



1066



1111



816



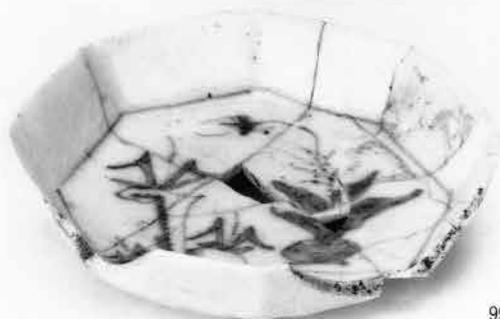
1110



817



1103



992



994



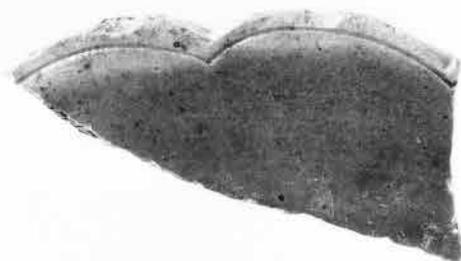
1105



出土遺物(17) 未記入は土坑8出土



708



996



991



948



813



968



1001



土抗109



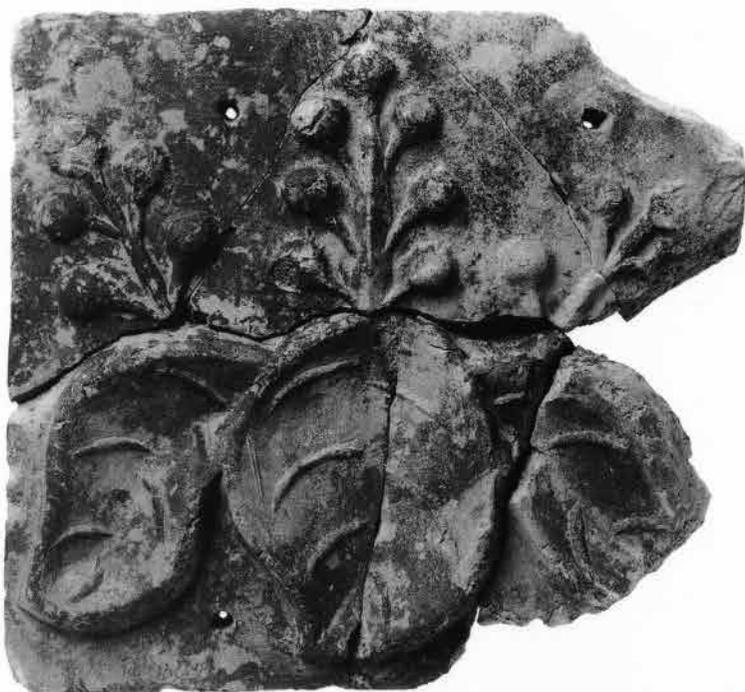
1014



1022



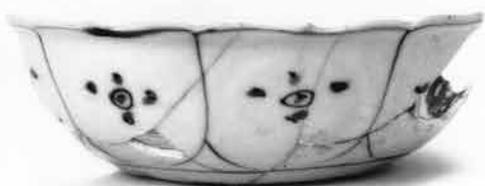
南トレンチ包含層



1039



998



993



1000



976



土抗42



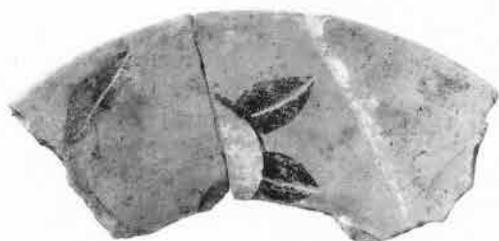
1268



1202



1176



1230



1203

1186

1187





1182



1218



1244



1211



1213  
1214



1216



1179



1282



1314



北トレン子  
包含層



北トレン子  
包含層



1311

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうあとさきょういちじょうさんほうじゅうよんちょう(さごく・しゅうごくし)							
書名	平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	63							
編著者名	小池 寛							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 向日市寺戸町南垣内40-3				TEL 075(933)3877			
発行年月日	西暦 1995 年 3 月 27 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょう あとさきょう いちじょう にはうじゅう よんちょう(さ ごく・しゅう ごくし) 平安京跡左京 一条二坊十四 町(左獄・囚獄 司)	きょうとしかみ ぎょうくにしの とういんどおり しもだちゅうり あがるにしおお じちょう149-1 京都市上京区西 洞院通下立売上 ル西大路町149-1	102				19931208 ～ 19940219 19940419 ～ 19941222	1,750	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安京跡左京 一条二坊十四 町(左獄・囚獄 司)	官衙	平安、安土・桃 山、江戸	井戸・建物跡・溝、 土坑・井戸・溝・建 物跡、井戸・土塀基 礎・溝・土坑		土師器、緑釉陶 器、須恵器、灰釉 陶器、瓦、陶磁 器、漆器、鉄器、 伏見人形			

京都府遺跡調査概報 第63冊

平成7年3月27日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター  
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社  
〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
Tel (075)441-3155 (代)